
御徒町フィーバー2ndStation

工場長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

御徒町フィーバー2ndStation

【Nコード】

N2507C

【作者名】

工場長

【あらすじ】

「はい、山手線の駅名です」そんな女子大生「おかちまち」さんの物語。大学生活二年目に突入！

プロローグ

大学に入学してからもうすぐ一年が経とうとしている。この一年は私にとって大きな変化があった年だったなあ……。

「親友」と呼べる人に出会えた。

何ヶ月もかけて一つの作品について私の考えを文章にまとめて人前で発表した。

ボクシングの試合を生で観戦した。

まあいろいろあったけど一番すごい出来事は自分の名前にポジティブになれたことよ。十八年と半年この名前がすごく嫌いだったけど……。やっとね、人並み程度に自分の名前に向き合えるようになりましたよ。

えっ、私の名前は何だった？ それはね……。

あっ、ちょうどいいや。私が言いたいところだけど、ホームに緑色のラインが入った電車が入ってきたので、ここの駅員さんに言ってもらいましょうか。

「次はー、御徒町ー御徒町。都営大江戸線はお乗換えです」

駅員さん、どうもありがとう。

これが私の名前です。

第一話 弥生の町を歩く

「三寒四温」と言うけれど……、「一寒五温」が本当ではないの？ と、思うくらい暖かい日が続く三月の谷中の町を私は友達二人と一緒に歩いていく。

私の名前は御徒真知。文京大学文学部一年生。自分の名前が山手線にある駅名と同じなため、小さい頃よりからかわれ続けていた。このため自分の名前に強いコンプレックスを持っていたのだけど、去年の秋の出来事をきっかけになんとか克服した……、と思っている。うん、克服した。

身長は百六十一センチメートル。髪は肩までの長さ。特技は「はったり」。友達からは「かつちゃん」と呼ばれている。

私の前を歩いている友達には椎名真智。私と同じ文京大学文学部一年生。西武池袋線にある駅名と同じだが、幸いにして名前についてからかわれたことはないらしい。これは彼女の実家が東京じゃなくて山形なのが大きいと思う。

身長は百五十センチメートル。髪は胸くらいまでの長さ。すごく可愛い外見だけど、実は格闘技（特にボクシング）が好きで、彼女は毎日体を鍛えている。酒に酔うともものすごく怖い、本当に怖い。私たちは「しいちゃん」と呼んでいる。

さらにその前を歩いている友達は伊井国遥。同じ文京大学文学部一年生。ダンスサークルに所属している。去年の夏、自分の将来についてお父さんと喧嘩したけど仲直りした。自慢しなくていいことを自信たっぷり宣言するという困った癖がある。

身長は百七十二センチメートル。髪型はうなじまでの長さのショートヘア。酒に酔うとたちが悪くなる。私たちは「はるちゃん」と呼んでいる。

私たちと違い普通の名前だけど、大学教授であるお父さんの名前は伊井国造郎と言う。

「相変わらず人が多いねー。この通りは」

はるちゃんが道行く人をよけながら呟く。私たちが歩いている谷中銀座は、商店街なのだが、その道幅は車が互いに通り過ぎるのがやっとの広さしかない。そのうえ道には看板とかテーブルなどが置かれていてからさらに狭く感じられる。

「ここはこの辺りに住んでいる人がお買い物に来るからねー」

しいちゃんがはるちゃんの後ろをとことと着いていく。はるちゃんが道を作ってくれているので、後ろの私たちは楽なものだ。

突然、はるちゃんが立ち止まったので、しいちゃんのはるちゃんの背中に頭をぶつけた。

「しいちゃん、大丈夫!？」

私はしいちゃんのおでこを優しく撫でる。

「もーう、はるちゃんどうして止まるのー？」

「お腹が空いた……」

はるちゃんの視線の先にはできたて熱々の揚げ物をケースの中一杯に並べたお肉屋さんがあった。

「コロッケが食べたい……」

気がつけばはるちゃんはコロッケを買おうとする人の列の一番後ろに並んでいた。

「はるちゃん、私たちの分もお願いねー」

ちょうど私も小腹が空いていたので、はるちゃんに声をかけるとはるちゃんは小さく右手を上げて応えた。

「さて、私たちはその間にコーヒーでも飲んでいますか」

「私はお腹空いていないよー」

「えー、一緒に食べようよー」

文句を言うしいちゃんを宥めて私は路上に白いテーブルと椅子が二組置かれただけの喫茶店へと彼女を引っ張る。

注文をしてから三分もしないでキンキンに冷えたアイスコーヒーが二つ、私たちの目の前に置かれた。暖かいというより暑いと感じ

る今日にちょうどいい。

「はい、しいちゃん。アイスコーヒーだよ」

と、私はしいちゃんの分のストローを彼女のコーヒーの中へと挿した。

「うん、ありがとー」

そう言うつとしいちゃんは可愛い笑顔でストローを口にした。口に入れたコーヒーを二三回嚙んで飲み込む。お腹を冷やして壊さないためらしい。牛乳を嚙んで飲むのと同じ理由だ。

「うちの店と同じくらい美味しいかな……」

しいちゃんはこの谷中銀座から歩いて五分くらいのところにある喫茶店、「御団子^{おだんご}」でアルバイトをしているのだ。

「しいちゃんは御団子がよっぽど好きなのね」

「そりゃそうだよ、自分が働いているお店だもん」

「買ってきたよー」

はるちゃんがビニール袋に入ったコロッケを私たちの前に差し出した。白い袋に触れると、出来立てのコロッケの熱が手に伝わるのを感じる。

「私が一番先に食べる!」

私はそう叫んで袋の中からコロッケを一つ取り出した。食べると塩気の利いたじゃがいもの柔らかい感触が口の中に広がる。この味と感触がたまらない。

「やっぱりこの町のコロッケは美味しいわ」

「あー、ずるいかっちゃんだけ先に食べてー」

私の手にあるコロッケを美味しそうに眺めるしいちゃん。さつきまでお腹は減っていないと言っていたのに。その様子を眺めていたはるちゃんが袋からコロッケを取り出してしいちゃんの左の手のひらに置く。うん? よく見るとコロッケではないぞ。

「そんなしいちゃんには、はい。鳥の竜田揚げ。今日だけの限定品なんだって」

「うわーい、ありがとー! はるちゃん」

喜びながら鳥の竜田揚げを頬張るしいちゃん。

「鳥の肉汁が口の中に染み出て美味しいー！」

「いえいえ、どういたしまして」

と笑顔で答えるはるちゃんが袋の中から取り出したのはまたしても鳥の竜田揚げ。

「はるちゃん……。私の分は？」

私はコロッケを持っていない左手の人差し指を口の下に当てて甘えるポーズをはるちゃんに見せた。はるちゃんは袋をさかさまにして上下に降った。袋の中からは茶色い揚げカスがパラパラとこぼれるのみだった。

「見ての通りもう売り切れよ」

はるちゃんが意地の悪い笑みを私に見せながら鳥の竜田揚げに

「う、うっ……ずるいよ二人とも……」

私は泣く泣く通常メニューのコロッケを口の中に押し込んだ。じやがいもの塩気がいつもよりも多く感じられるのは決して涙のせいではない。そう信じたい。

町の名物を堪能した私たちは不忍通りへと出た。上野の不忍池へ至るこの道は、私の家の前に面した道でもある。

「もうすぐ私たち二年生になるねー」

通りをうるさい音と排気ガスを出しながら流れる車を横目にはるちゃんが呟く。

「大学生生活の一年間なんてあつと言う間だったね」

先頭をゆっくりと歩くしいちゃんが振り向く。

「あつと言う間だったけど、いろんな事があつた一年間だったねー」私は二人の後ろを歩きながら大学入学からこれまでのことを思い出していた。十年ぶりに着物姿になった入学式、しいちゃんとの出会い、はるちゃんとの出会い、三人で一緒に見たボクシングの世界戦、そして。

「かつちゃん、信号もうすぐ赤になるよー」

後ろのほうでしいちゃんの声がして私は我に帰った。気がつけば私は交差点の横断歩道を半分ほど渡っていた。目の前の信号はすでに赤になっている。

(まずいな、しいちゃんたちのところへ戻ろうか……)

そう思っただけ向きを変えた私の隣で一人の女の子が　信号が変わるので急いでいたのだろう　思いつきり転んだ。

「大丈夫ですか」

私は女の子に手を差し伸べた。しいちゃんと同じくらいの髪の毛の長さで少々釣り目がちなその女の子は私の手を掴み

「あ……、どうもありがとうございます……」

と、ゆっくりと立ち上がろうとした。その時、歩道にいるしいちゃんから悲鳴が飛び出した。

「かっちゃん、危ない！」

何かが近づく気配を感じたので、その方向を見ると、大きな緑のトラックが私たちに向かって来ている。車の信号は青だからこっちは来るのは当然か、と納得している場合ではない。

「私は死なない！　好きな人はいないけど、私は死なない！」

私はそう絶叫すると、女の子を左脇に抱えて急いでしいちゃんとはるちゃんの待つ歩道へと走った。間一髪、私の背後でトラックが急ブレーキの音を上げながら通り過ぎる。

「かっちゃん、大丈夫!？」

しいちゃんが私の右腕を激しく掴む。

「うん、大丈夫だよ。ほら」

そう言いながら私は足元を見る。今立っているところが歩道であることを確認した瞬間、私の体は女の子を抱えたまま腰から崩れ落ちた。とっさに右手でしいちゃんの腰の辺りを掴む。

「しいちゃん、死ぬかと思った。死ぬかと思ったー」

「火事場の馬鹿力」とはまさにさっきのことだったのだろう。もう一度あんなことをやれと言われても絶対にできない。

「かっちゃん、道路では死なない、って叫んでいたのに……」

冷静に突っ込みを入れながらはるちゃんは女の子の肩を叩いた。

「おい、もう大丈夫だよー」

女の子の反応は無い。私の腕の中でぐったりとしている。

「トラックに驚いて気絶しちゃったみたいね」

そう言いながらはるちゃんは女の子を揺らす。やっぱり反応は無い。トラックが自分に突っ込んでくると知ったらそりゃあ驚くだろうな、やっぱり。

「私の家この交差点を渡ってすぐだから、うちへ運ぼう」

「気絶している女の子と腰を抜かしているかつちゃんをどうやってかつちゃんの家まで運ぶの？」

しいちゃんに言われて私ははっ、となった。腰に力が入らない。動けないのは私も同じであった。私は申し訳なさそうにしいちゃんとはるちゃんを見た。

「……二人で頑張って私たちを運んで……」

「もうう、やっぱりそう来ると思ったー」

文句を言いながらしいちゃんは私を背負った。さすがボクシング好き、普段から体を鍛えていることはある。

「はるちゃんは女の子のほうお願いね」

「うん分かった」

ダンスで体を鍛えているはるちゃんは軽々と女の子を背負った。

「よかった……この子軽いや」

私はしいちゃんの肩に顎を乗せた。しいちゃんの荒い息遣いが感じられる。

「しいちゃん……ごめんね、ありがとう……」

「かつちゃん話しかけないで、気が散るから」

よるめきながらもしいちゃんは私を背負い歩き続ける。

しいちゃんの頭越しに穏やかな春の光を浴びた私の住む町が見えた。

第二話 かわちゃん

「あらあら、真知ちゃん。どうしたの一体？」

しいちゃんが私の家のチャイムを押すと、中からものすごく目の細い女の人が出てきた。これが私のお母さん、御徒理沙おかちりさだ。

「実はですね……」

しいちゃんが事情を話す。お母さんは驚いている様子だが目が開かれることは無い。(本人は思いつきり開いているつもりなんだろうけど)

「まあ、トラックに？ それは大変ね。とりあえず横にさせないと」
そう言いながらお母さんは私たちを居間へと通し、素早い動きで居間に布団を二つ敷く。

「さあ、ここに真知ちゃんと女の子を寝かせて」

「はい」としいちゃんは私を背負ったまま腰を下ろす。その時、私の腰が居間の端へと追いやられていたちゃぶ台にぶつかった。

「痛いっ！」

痛さで思わず目から涙が滲み出てしまう。

「ああ、ごめんかつちゃん。痛かった？」

私は立ち上がってしいちゃんをちよつと睨む。

「痛かったよー、しいちゃん。もう少し後に気をつけてよー」

それを聞いたしいちゃんは謝るところか逆に可愛らしく微笑んだ。

「よかった、その様子だと腰が元に戻ったようだね」

しいちゃんに言われて私は腰を手で触りながら足を上げ下げしてみる。本当に、抜けた腰が元に戻った。

「ありがとう、しいちゃんのおかげだよ」

「どういたしまして、かつちゃん」

私としいちゃんがおかしなやり取りをしている間に女の子はすでに布団に横になり、額には濡れタオルを乗せられていた。お母さん

の姿は見当たらない。店に戻ったのだろうか。（私の家は和菓子屋を営んでいるのだ）

「ん……」

女の子の口元がかすかに動く。気がついた、と私が思う間もなく女の子は少々釣り目がちな目をパッチリ開け、上体を勢いよく起こした。

「ここは……」

辺りを見回す女の子にはるちゃんが事情を説明する。

「そうだった、私トラックに轢かれそうになって……、それで……あなたが助けてくれたんですか？ 本当にありがとうございます」と、はるちゃんの手を固く握り締めた。

「いやいや、助けたのは私じゃなくて、かつちゃんだから」

はるちゃんは女の子の両手を私の胸元へと移動させた。

「かつちゃんさん、ありがとうございます」

女の子は私の手をとって礼儀正しく頭を下げる。

「気絶したときはどうしようかと思っただけど、怪我が無くて本当によかったよ。ところであなたの名前は？」

私が尋ねると女の子は目を閉じてしばらく考え込んだ顔をしていたが、意を決したのか目を見開くと大きく叫んだ。

「私の名前は河原真値かわらまことです！」

「河原町！……」

私とはるちゃんはほぼ同時に驚きの声を上げた。しいちゃんは不思議そうな顔で両側の私たちを見つめる。

河原町とは、京都の河原町通りを中心とした繁華街のことである。京都の地名を東京に住む私とはるちゃんがなぜ知っているのかといえば、昨年MHKで放送された大時代劇ドラマ「桂小五郎かつらごろう」のせいである。主人公の桂小五郎が京都の河原町で新撰組や幕府の役人と追いかけてっこをしている様子がテレビで全国のお茶の間に流れたのだ。この番組の年間平均視聴率は三十パーセントを越えたらしい。

「あー、やっぱり河原町っていったー！」

女の子 河原真値 は、私とはるちゃんの膝を思いつきり叩いた。釣り上がり気味の目じりが一層釣り上がる。

「『まち』は『なんとか町』のまちじゃなくて、真実の『真』に値段の『値』と書いて『真値』なんです！」

真実の「真」に値段の「値」か……。私としいちゃんと同じく彼女が生まれる直前になにかご家族に事件でもあったのだろうか。聞いてみたいが人の古傷を触るのはあまりよくないことだ。

ちなみに私としいちゃんのことを話せば、私が生まれる直前に、お祖父ちゃんがしいちゃんのお父さんの信じる怪しい宗教に勧誘されそうになり大騒ぎになったのだ。

幸いお祖父ちゃんはその宗教に入らず、しいちゃんのお父さんはこの事件を機に怪しい宗教をやめる。そして二人はその事件の反省の意味を込めて生まれてくる子供に自分の願いを込めた名前をつけた。私が「真実を知る」で「真知まち」、しいちゃんが「真実の智慧ちえ」で「真智まち」。

私が昔のことに思いを馳せている間にも、真値さんは私とはるちゃんの膝に爪を立て左右に動かす。

「滋賀しがにいたところは友達からよく『河原町』、『河原町』とからかわれ続けていたんです。この春東京に出ることやつと『河原町』から解放されるかと思っていたのに……。あのテレビ局!!！」

真値さんの爪はちよつと尖っている。二人ともズボンを履いているからいいけど、素足だったらちよつと痛そうだぞ。

「まあまあ落ち着いて、この春東京に来たってことはどこかの学校に入学したの？」

唯一爪を立てられていないしいちゃんが真値さんの両手を優しく取って彼女の手元へ戻す。

「そうなんです、私はこの春から大学生なんです。みなさんに文京大学って知っていますか？ 私はその文京大学の文学部学生になるんです」

文京大学文学部の生徒……。私たちの後輩ではないか。

「えーっ、嘘っ！ 文京大学！？ 私たちの後輩じゃない、一浪していないよね？」

はるちゃんが感激の声を上げた。現役で入学したのならば、年は私たちの一つ下となる。

「一生懸命勉強したので、現役合格です。今年の夏、十九になります」

それを聞いたはるちゃんは真値ちゃん（年下だつてことが分かつたら「ちゃん」づけなのだ）に抱きついて髪を激しく撫でた。

「やったー、後輩だー。妹分だー！」

真値ちゃんは戸惑いの色を見せながらも健気に応える。

「よろしく願います、先輩！」

その様子を眺めていたしいちゃんが私に耳打ちをした。

「はるちゃんのあの抱きつきって、やっぱり明石先輩の影響なのかな……」

明石先輩とは、はるちゃんが所属しているダンスサークルの先輩、あかしまなみ明石真奈美さんのことである（なんでもこの春部長になったらしい）

。女子高生が好きで可愛い女子高生を見ると思わず抱きついてしまふのだ。

「同じサークルの先輩後輩だから、影響受けたんだろっね」

微笑ましく見守る私としいちゃんに気づいたはるちゃんは恥ずかしがることなく逆に私たちを責めた。

「ほら、二人とも何をばーっと見ているのよ。可愛い後輩が出来たのよ。喜びなさいよ」

いや、喜んでいるんだけどね、はるちゃん。

「そんな可愛い後輩、河原真値ちゃんに質問です」

はるちゃんが真値ちゃんを撫でていた右手を勢い良く上げる。私たちのリアクションは無視なの？ はるちゃん。

「ええと……なんでしよう、先輩」

「なんで真値ちゃんは『真値』と言う名前がつけられたの？ 何か

深い理由でもあったりして？」

「もう、はるちゃん」

しいちゃんが立ちひざの姿勢になってはるちゃんを咎める。先ほど私が同じ事を聞こうとしてやめた理由、「人の古傷を触るのは良くない」をしいちゃんも考えていたようだ。

「しいちゃん。ポジティブでしょ。ポジティブ」

はるちゃんはそう言ってしいちゃんをなだめる。「辛い過去もポジティブに生きる」という意味を略している。

しいちゃんが落ち着いたところで真値ちゃんは、はるちゃんの問題に迷うことなく答えた。

「なんでも私が生まれる直前にお父さんが株で失敗したらしくて……。それで私に『^{かち}真実の価値』という意味で『真値』となったそうです」

やはり事件は起こっていたか。と、私は真値ちゃんに気づかれなないようにため息をついた。

「ありがとう、真値ちゃん。ポジティブよ、ポジティブ」

「ええ、ありがとうございます……。先輩」

はるちゃんの「ポジティブ」の本当の意味が分からない真値ちゃんは戸惑いながらも頷いた。そんな真値ちゃんにしいちゃんが一つの提案をした。

「ところで、真値ちゃん。せっかく知り合っただし、もっと仲良くなるためにあだ名を決めようか。滋賀ではなんて呼ばれていたの？」

それを聞いた真値ちゃんは一瞬、目じりを一層釣り上げたが、すぐにもとの位置に戻して答えた。

「滋賀ではずっと『河原町』とかわからられていたんですけど、そうじゃない友達からは『かわちゃん』と呼ばれていました」

「『かわちゃん』か、いいね、今日からあなたは『かわちゃん』だよ」

「ありがとうございます、先輩」

真直ちゃん　かわちゃん　は、しいちゃんに向かつて礼儀正しく頭を下げた。両手をきちんと畳につけている。

「そう言えば……、私まだ先輩達の名前聞いていませんでしたね」
頭を上げたかわちゃんが私たちを見回す。うーん、来たかこの瞬間が。別に昔と違って自分の名前嫌いなわけじゃないけど、未だ身構えてしまう部分がある。

「それじゃあはるちゃんから、どうぞ」

私のはるちゃんの膝を叩くと、はるちゃんは嬉しそうに私を見た。「かつちゃんが、トリを勤めるのかー」

うん、そうだよ。トリだよ。でも決して笑いを狙っているわけじゃないからね。

はるちゃんときいちゃんが順番に名前を名乗る。かわちゃんの反応は至って普通だ。はるちゃんの名前は普通だからともかく、しいちゃんのとときの反応を見るに、「椎名町」しいなまちは滋賀生まれであるかわちゃんは知らないようだ。

そして、ついに私の番である。視界の端ではるちゃんときいちゃんが口の端をやや上に上げているのが見える。「御徒町」という山手線の駅名と同じ名前を持つ私の名前を聞いて彼女がどうという反応をするか、さらにそれを見て私がどう反応するか楽しみなのだろう。かつてしいちゃんが私の名前である「御徒真知」と聞いて「御徒町だ！」と言つ反応をしなかったと言つ前例がある。かわちゃんが「御徒町」と言つ駅があることを知らない可能性もある。

まあ「御徒町」と言われたらそのときだ、嫌がらず明るく答えようと私は、さらりとじ口を開いた。

「私の名前は御徒真知だよ」

それを聞いたかわちゃんは大きく開け、その口を両手で隠した後でこう叫んだ。

「御徒町　！　山手線だー！！」

「やっぱりそう来るか！！」

これが私たちの可愛い後輩である「かわちゃん」こと「河原真直」

との出会いであった。

第三話 馬鹿カップルじゃない！

月が変わって四月。私たちは二年生になった。何かと忙しい季節だが、二年目となれば四月の慌しさも慣れたものである。

今月は授業のお試し期間。私たち三人は一人ずつ異なる授業を受け、評価方法はテストかレポートか、毎回出席は取るのかなどの情報を集めるのだ。ここで下手に授業を選んでしまつては、後々苦労するからね。楽に単位が取れる授業を選んでおかないと。

だけど必須科目の一つである演習の科目は早々に決めなくてはならない。私たちは昨年と同じ石坂先生いしかかのゼミに入ることになった。

教室も昨年と同じ。私はいつも座っていた一番ドア側の前から二番目の席に座る。やがて授業の開始を告げるチャイムが鳴り、先生が教室に入る。

「私がこのクラスを担当する石坂です。それでは出席を取ります」
今年も来たか……、私の名前が公表される瞬間が。去年は先生に「御徒町」と言われてそのせいでみんなに密かに笑われて嫌な思いしたけど、今年の私は違うわよ、御徒町？ 山手線？ 大いに結構じゃないの！ かかつてきなさいよ！！

しかし私の気合は大いに裏切られることになる。名前の最初の文字が「お」に突入し、次こそ私の名前？ と気合を入れたその時だった。先生の口から驚くべき名前が出たのだ。

「大井けいばー」

（嘘っ、大井競馬だっつて！？）

私が驚いている横でしいちゃんが不思議そうな顔で私を見つめる。そうかしいちゃんは知らないか。

大井競馬とは東京都品川区にある地方競馬の競馬場おおいけいばしながわ 大井競馬

場ようのことである。春から秋にかけて開催する「ナイター競馬」
で有名な競馬場だ。仕事終わりのサラリーマンがよくそこで馬券を

買っらしい。

そんな競馬場と同じ名前を持つ生徒がこの部屋にいるのである。駅と競馬場の違いはあるが、私と同じ仲間じゃないか。

「先生、違います。『けいば』じゃなくて『けいま』です」

静かなるざわめきが広がる教室で大井競馬君は冷静に先生へ訂正を求める。

大井競馬君（じゃなくて『大井けいま』君か）は髪を上下ツーブロツクに分け、上は目まで届くくらいの長さ、下の部分はちょっと刈り上げている（上から伸びている髪のおかげで下は半分くらい隠れているけどね）。

服装は緑と基調としたシャツ。ズボンはここからは見えない。背はきつと高いと思う。

「ああ、そうかすまん。大井おおい景馬けいま」

「はい」

大井君は自分の名前が呼ばれたことに対して満足そうに返事をした。周囲のリアクションなど全く気にしていない。去年の私とは大違いだ。

「出席を続けるぞー。御徒真知」

「あつ、はい」

不意に先生が私の名前を呼ぶので、私はいつもより声が高くなっってしまった。

「大井競馬と御徒町か……」

先生が小さく呟く。私は勢いよく立ち上がると左手を差し出し先生に向かって叫んだ。

「いや、先生違うから！」

あれ、なんか低い声が混じっているぞ。私は顔を右に向け声の主を探す。大井景馬君が右手を差し出して立ち上がっているではないか。

「……そんなに勢いよく突っ込まなくてもいいだろう」

石坂先生が戸惑いながら私たちを見ると、教室中がどっと笑い声

に包まれた。

「もう、先生ったらなんであんなことを言うかな」

授業が終わり、先生が教室を出たのと同じにしいちゃんが机を軽く叩いた。

「まあ私は今年も言われると思ったけど。はるちゃん出るよー」

私は後ろに座っているはずのはるちゃんを見たが、姿が見えない。

「あれ、はるちゃん？」

私ははるちゃんの姿を探す。はるちゃんは教室の後ろのほうで大井君と何か話をしていた。

「おい、はるちゃん……」

小声で二人の会話に割って入る。はるちゃんは私の姿を見るや、頭をかきながら

「いや……御徒町さんと一緒にされて大変だったなあ……。ねえ大井君」

「あ……うん」

大井君は困りながら頷く。そういう会話はどうかと思うぞ、はるちゃん。

「大井君は昔から『大井競馬』って言われてきたの？」

荷物をかばんに入れたしいちゃんが会話に入る。

「うーん……。実家が東京じゃないんで、そんなに言われなかったかな。競馬を知っている人や親戚のおじさんには時々言われたけど……」

実家が東京だったら私のように毎日からかわれていたんだろうな。私たちは教室を出て、廊下を歩きながら話を続ける。

「まあ文句を言ってもきりが無いし、しょうがないと思っているけどね。だからさっき突っ込んだのはすごく久しぶりだったよ」

「久しぶりか……。だからあんなに勢いがある突っ込みだったのね」

はるちゃんが感心した声を上げると「あ、そうそう」と、私としいちゃんを見た。

「それでね、ちょっと変わった名前を持つもの同士、一緒に演習をしないかと言う話をしていたの。大井君去年は違うゼミにいたから、ここでは知り合いいないみたいだし」

「御徒町（真知）」「椎名町（真智）」「大井競馬（景馬）」「そして、伊井国造郎（お父さんの名前だけだね）」「まさにおかしな名前のドリームチームの結成……と言ったら大げさか。」

「そうだねー。人が多ければいろんな意見が聞けるし、私は賛成だよ」

「私も構わないよ。女だらけだけど、大井君がそれでよければ」

大井君は「そうだなあ……」と左手を顎に当てて考えていたが

「このゼミには一人も知り合いがいなかったから、一緒に演習やってくれるなら俺も助かるよ」

大井君はすぐに笑顔で答えてくれた。

「よっしゃ、ドリームチーム結成！」

嬉しさのあまり私はつい頭の中の妄想を口に出してしまった。

「かつちゃん、ドリームチームって何？」

しいちゃんが冷静に私に尋ねる。

「いや、なんでもないから……」

「演習の仲間から恋人同士に発展……ってことになったりして!？」隣でははるちゃんが別の妄想に耽っている。

「いや、悪いけどそうはならないと思うよ。なぜなら……」

「ダーリン!!」

大井君が冷静にはるちゃんの妄想をあっさりと斬る最中、どこからか聞いたことのあるような声が聞こえてくる。

次の瞬間大井君は後ろから何者かに激しく抱きつかれた。

「うわっ！」

私は自分が抱きつかれたわけでもないのに驚きの声を上げる。しかし当の本人である大井君は驚きもせず、抱きついてきた者の手を優しく掴む。

「人前で抱きつくなんて恥ずかしいだろ、真値」

えっ、まち？ 私？ しいちゃん？ それとも？

「いや、ダーリンの姿を見たら嬉しくなっちゃって」

と、大井君の背後から顔を出したのは、なんとかわちゃんだった。「かわちゃん!？」

「あー、先輩だー。こんにちはー」

私たちの姿を見たかわちゃんは、大井君から離れると丁寧にお辞儀をした。

「こんにちは、かわちゃん。かわちゃんと大井君は付き合っているんだね」

「そうなんです、二人は愛し合っているんです」

しいちゃんの質問にかわちゃんは大井君と腕を絡ませながら答える。

「一生懸命勉強して彼氏と同じ大学に入ったわけだ」

はるちゃんが少し呆れ気味に二人を見る。

「……あのな、君達勘違いをしているかもしれないが……」

大井君が慌てながら手を振る。二人は付き合っていないと言うことだろうか。しかし大井君から出た発言は私の想像を超えたものだった。

「俺たちは決して馬鹿カップルじゃないぞ。俺は確かに世界で一番真値を愛してはいるが、決して馬鹿カップルじゃないぞ」

大井君のとても恥ずかしい発言に聞いている私のほうが恥ずかしくなってしまうた。頬に熱を感じる、隣のしいちゃんの頬もほんのり赤い。

「そういう発言が馬鹿カップルじゃないかと思うんだけど」

はるちゃんが冷静に突っ込みを入れる。ここにいる五人の中で、一番恋愛に縁遠い彼女だから出来ることだろうか。

「いや、違う馬鹿カップルとは人前でキスを平気でするやつらだ。

俺にはそれができん！ だけど、俺は真値を愛している」

恥ずかしい発言に加えて「まち」「まち」って、なんだか私が言われているみたいでさらに恥ずかしいぞ。

「もしかわちゃんが大井君と結婚したら、『大井真値』になるんだねー」

しいちゃんが空気を変えようと、微笑ましく発言する。その発言の中に私はとんでもない事実があることに気がついた。

「そうなんですー。結婚したら『河原町』って言われなくてすむんです。」

「おかしな名前とさよならできるんだね」

「そうなんですよ、椎名先輩。私の夢は彼のお嫁さんになって、『河原町』とからかわれないことなんです」

かわちゃんは嬉しそうに答えながら、大井君とさらに密着する。

「おい真値、人前では恥ずかしい、言っているだろう。ほら次の授業行くぞ」

「分かったわよ、ダーリン。それじゃあ先輩たち、お疲れ様でした」階段を下りていく二人を微笑ましく見送るしいちゃん、一方落ち込んだ顔で見送る私とはるちゃん。

「ん、どうしたの？ 二人とも落ち込んだりして」

しいちゃんが頭に「？」を浮かべながら私たちを見る。

「いや……、運命ってすごく残酷だなあと思って……」

本当だ、運命とは何て残酷なんだろう。

「ひょっとしてかつちゃんも同じこと思っていた？」

「はるちゃんもそう？」

はるちゃんは大きく頷く。

「うん、私も分かった。さすがに私でもこのタイミングでこれは言えないと思った」

「だけど、いつかは気がつくことだよねー」

それを知ったときのかわちゃんを思い、私とはるちゃんは大きなため息をついた。

「もーう、二人ともどうしたの一体？」

しいちゃんが背を伸ばして私たちの顔を見る。私とはるちゃんはほぼ同時に同じ事を言った。

「あのね、しいちゃん。東京には『大井町』おおいまちと言う駅があるんだよ」
大井町、けいひんとうほく「京浜東北線」と「りんかい線」が通る駅で、品川しながわ
駅の隣に位置する。私の御徒町からは京浜東北線で二十分かかる。
つまりかわちゃんは結婚した後もちよっとおかしな名前の持ち主
のままなのだ。

「うーん、そうか……でも二人の愛があるからそんなの乗り越える
んじゃないのかなー」

私たちの説明を聞いたしいちゃんは二人が歩いていった廊下を見
つめた。

「二人の愛か……私には一度もなかった言葉だね」

はるちゃん、それはちよっと悲しいよ。

「それにしても初めて知ったよ。『大井町』なんて駅よく知ってい
るのね」

「そうだね、かつちゃんの鉄道オタクぶりには驚きだね」

しいちゃんとはるちゃんがにやけながら私を見る。だから私は「
鉄道オタク」じゃないって、東京の路線にちよっと詳しいだけだっ
て。本当に鉄道が好きな方に比べたら、「月とすっぽん」だって。

……ってちよっと待てよ。はるちゃんが私を見るのはおかしくない
か？

「ちよっと、はるちゃんも『大井町』知っていたでしょ！」

「もーう、かつちゃん。私『大井町』って初めて知ったよー」

「しいちゃんの真似するな！」

第四話 愛妻弁当

「やっと終わったー。食堂に行つてしいちゃんたちに会わないと……」
教授が部屋を出るのを見届けた私は物憂げな声を上げて席を立った。苦しかった時間からやっと解放された。

「この授業は取らないほうがいいわね……」

四月は授業のお試し期間である。授業の内容を聞いて生徒がこの授業を履修するかどうかを決める期間だ。私たちはそれぞれ別の授業を受けながら授業の情報を集め、最終的に受ける授業を決めることにしている。

私が今日聞いた授業は「はずれ」だった。教授の話がつまらなく無駄に長い、それだけでもすぐに部屋を出て行きたかったが、肝心の単位評価の仕方をまだ聞いていなかったたので、しょうがなく最後まで残ることになった。ひよっとしたら楽に単位が取れる授業かもしれないからね。

「授業の最後に毎回小テストって、やっていられますか」

最後の最後になって教授がようやく口にした言葉は、「単位取得の有無は毎回授業の最後に小テストを行つてその点数を元に評価する」というものだった。他の授業の勉強もやらなければいけないのにその授業一つに集中なんてできるわけがない。というか面倒くさい。

というわけで私はこの授業を受けない事にした。この時間はしいちゃんとはるちゃんが見てきた授業を受けるか、そうじゃなければ授業を一つも受けないことになる。まあ一年の時単位を多めに取つたから余裕はあるんだけどね。

「あつ、御徒先輩だー」

声のする方を振り向くと、明るい笑顔のかわちゃんが、彼氏である大井君と腕を絡ませながら元気よく手を振っている。

「おー、かわちゃん、大井君。二人ともこれからお昼ですか？」

「そうです、先輩も一緒にいかがですか」

誘ってくれたのは嬉しいが、ラブラブな二人の邪魔をしていいものか……、と私は戸惑う。

「俺たちのことなら大丈夫だよ」

私の心を読み取ったのか、大井君がかわちゃんから腕を離して言う。

「それじゃあお言葉に甘えて……。食堂でしいちゃんとはるちゃん
と待ち合わせしているんだけど、二人も一緒にいい？」

「椎名先輩も伊井国先輩も一緒ですか。大歓迎ですよ」

かわちゃんは。少々釣りが上がっている目を細めて笑った。

「あつ、かわちゃんも大井君も一緒だったのね」

食堂ではしいちゃんとはるちゃんがすでに席を取っていた。

「うん、そうだよ。ご飯持ってくるからちよつと待ってね」

そう言っただけなのに、「自動販売機へと向かう。昼の十二時を五分過ぎただけなのに、「とんかつ定食」がもう売り切れている。いつも売り切れな「とんかつ定食」、本当にあるのだろうか。

私はその「とんかつ定食」の隣にある「カツカレー」を買って四人の待つテーブルへと向かった。

「かわちゃんと大井君もお弁当なんだね」

いつもお昼ごはんは手作りのしいちゃんが、かわちゃんと大井君の前に置かれているお弁当を見て言う。よく見ると、お弁当の箱は違うけど、中に入っているメニューは同じ物だ。

「ひょっとして……、これはかわちゃんの愛妻弁当？」

はるちゃんがかわちゃんと大井君の顔をそれぞれ見ると、かわちゃんは満面の笑みで答えた。

「そうですよ、私がダーリンのために作った愛妻弁当です」

愛妻弁当なんて生まれて初めて見るわ。私は二つのエビピラフ弁当を眺める。

「まだ俺の妻じゃないだろう」

大井君は恥ずかしがることなく、かわちゃんの「妻」という言葉に突っ込みを入れる。

「でも将来は結婚するじゃない、そしたら私は『大井真値』よ」

明確な将来設計立てているかわちゃんを見ながら、私は「大井真値」に関する嫌なことを一つ思い出した。今「あの事実」を言うべきか……。

「ええと……、かわちゃん。そのことなんだけどね……」

はるちゃんが戸惑いながらかばんの中から生徒手帳を取り出した。その裏表紙をめくると、東京近郊の路線図が書かれている。

はるちゃんは、「あの事実」をかわちゃんに伝えるつもりだ。ここで言わなくても、いつかは知ることだから、せめて私たちの手で知らせようという優しさなのだろう。

はるちゃんに先を越されてしまった、と思いながら私ははるちゃんの仕草を見つめる。

「かわちゃん、ここ見て」

「えっ、御徒町駅ですか？」

いや、待ってはるちゃん。今示す駅はそこじゃないでしょう。

「ちよつと、はるちゃん。どこを指差しているのよ」

そんな私の突っ込みにも気にせず、はるちゃんは御徒町を示した指をすつと動かす。

「この御徒町駅を通っているのが京浜東北線なんだけど、これをすつと行くと……」

「たまち田町、品川、大井町……。えっ！ 大井町！？」

驚いたかわちゃんは、はるちゃんから生徒手帳を取り上げ、じつと「大井町」の文字を見つめる。

「結婚したら『大井町』か……」

大井君が横から生徒手帳を覗き込む。

「そつよ、つまりはそういうことなのよ」

はるちゃんがしつかりとした口調で言う。まるで悪い病気を患者

に宣告するお医者さんのようだ。

「だけど、二人の愛があればそんなの気にしなくて大丈夫だよ」
すかさずしいちゃんがフォローを入れる。

「かわちゃん、そうだよ。気にする必要は無いよ。ポジティブになるよ」

学生としても、「まち」としても後輩であるかわちゃんにも、私と同じように自分の名前にポジティブになってほしい、と私は願いを込めてかわちゃんの肩を叩いた。

「名前のためにダーリンと結婚できないのは嫌です！ 私、頑張ります」

とかわちゃんは生徒手帳を放り出して大井君に抱きついた。投げ飛ばされた生徒手帳は、しいちゃんが上手にキャッチしてはるちゃんへと返す。

「そうだよ、かわちゃん。頑張るんだ！」

「はい、頑張ります！！」

「頑張れ！」「頑張る！」のやりとりが何回か続いた後で、私たちはやっとお昼ご飯に手をつけた。

「まちー」

と、不意に名前を呼ばれたので、私は箸を動かす手を止め、顔を上げて「なあに」と応えた。

「なに？」

同時に別の方向から返事が聞こえる。驚いて声の主を見るとしいちゃんとかわちゃんだった。そうか、よく考えてみればそれも当然か、名前が同じ「まち」だからね。

「あ、いや……。悪い。こっちの『まち』だ」

大井君は戸惑いながら右隣に座るかわちゃんの肩を叩いた。

「あ、そうか。いや、つい返事しちゃって……」

私は慌てて手を振る

「家族からは『まち』って呼ばれていたからつい返事しちゃったよ」

しいちゃんは照れながら頭をかいた。

その三分後。

「まちー」

「なに？」

私は名前を呼ばれたので返事をする。同時に同じ言葉が違う高さで発せられる。返事したのはもちろん私としいちゃんと、かわちやんの三人だ。

「あ、いや……。『河原真値』のほう」

大井君が少々困りながら再びかわちちゃんの肩を叩く。私としいちゃんはまた謝る。よく考えれば分かることか。このメンバーの中で、大井君が「まち」と呼ぶのはかわちちゃんだけなのだから。

ところが私は三度大井君の

「まちー」

の言葉に

「なに？」

と返事をしてしまったのである。それはしいちゃんも同じであった。

「……ひよつとして二人ともわざとやっていない？」

大井君が笑顔のまま私としいちゃんを咎める。ちよつと口元がゆがんでいる。

「わざとじゃないよー」

私としいちゃんは同時に答える。私がアルトでしいちゃんがソプラノだ。

「下の名前が同じなのだから、間違えるのはしょうがないじゃない、ダーリン」

かわちちゃんが私たちを弁護する。

「いや……わざとじゃないならいいんだけど……」

大井君は口元をもとに戻すと、かわちちゃんと二人で話を始めた。

本当にわざとじゃないんだもん、それを疑うなんて……。それなら今度はわざとやっっちゃうぞー！

それから五分後。大井君の口から

「まちー」

と、言う言葉が飛び出した。

「なに？」

私はさっきと同じ口調で答える。わざとやるうとしたつもりが普通に返事をしてしまった。

……うん？ さっきより「なに？」が一人分多い気がするぞ？

「やっぱりわざとだろー！」

大井君は立ち上がったって私たちを指差す。

「わざとじゃないよー」

私としいちゃんは同時に弁解する。本当にわざとではないの（わざとやるうと思ったけどね）。そして、声がやっぱり一人分多いのに気がつく。

「嘘つけ！ なんで伊井国さんまで『まち』に反応する必要があるんだ！」

えっ！ はるちゃん？ 左隣にいるはるちゃんを見ると、はるちゃんは一生懸命首を横に振って弁解する。

「わざとじゃないもん」

「……本当にわざとじゃないんだな？ そうか、わざとじゃないならいいんだ……」

納得して大井君は席に座った。どう考えても納得できる状況ではないと思うのだけど……。本当に納得していいのか、大井君。

そして三分後。

「まちー」

との問いかけに

「なに？」

と、答える四人の女子大生がおりましたとき。

「絶対わざとだー！！」

「わざとじゃないもんー！！」

第五話 自治会室へ行く

五人で一緒にお昼ご飯を食べた翌日の午後。私としいちゃんとはるちゃんが大学内の喫茶店でのんびりとしているところに、かわちゃんと大井君がやってきた。

「よっ、ラブラブなお二人さん」

はるちゃんが手を上げて二人を空いている隣のテーブルへと案内する。

「御徒先輩、椎名先輩、伊井国先輩こんにちは」

かわちゃんは礼儀正しく私たち一人ひとりに丁寧に頭を下げた後で席に座る。

「三人ともどうも」

大井君は右手を上げて私たちに挨拶した後で席に座った。

「ねえダーリン。先輩達なら知っているんじゃない？」

かわちゃんが生クリームたっぷりのコーヒーを飲みながら私たちに視線を送る。

「うーん、それはどうだろう……。興味がなければ案外知らないかもよ……」

大井君は砂糖やミルクを混ぜぬままコーヒーを口にする。

「何、何？ 私たちが知っていることならなんでも教えてあげるよ」
アッサムティーを手にしたはるちゃんが楽しそうな顔をして身を乗り出す。かわちゃんはコップをテーブルに置くと、私達のほうへ体を向けた。

「この大学の自治会室じちかいしつに行きたいのです」

自治会とは学生の中から有志が集まって出来たものである。何をしているのかといえば、大学にあるサークルの管理・支援。文化祭や入学試験などの大学で起こるイベントの企画・協力。大学生活をよりよいものにするためにと大学へ校内規則の改正などの交渉事などを行っている。分かりやすく言えば、高校や中学校にあった生徒

会の大学版だ。

その自治会のための部屋が自治会室である。

「うーん、自治会室かー。私は分からないなあ……………」

マンゴーティーを手にながらしいちちゃんは首を横に振る。

「私も知らないや、ごめんね」

砂糖とミルクが入っているブレンドコーヒーを飲みながら私はかわちゃんに謝る。

「もーう、二人ともだめねえ……………。ところでかわちゃんは自治会室に何か用なの？」

はるちゃんが尋ねると、かわちゃんは黄色いカバンを開けながら満面の笑みで答えた。

「自治会に入会届を出すのです」

かわちゃんがカバンの中から取り出したのは、「入会届」と墨で書かれた白い封筒だった。そういう「なんとか届」って普通封筒に入れるものなのかな？

「真値は高校では生徒会長をやっていたんだよ」

「そうです、『清く正しく美しく』をテーマに高校をよりよいものにしようと頑張ったのです」

かわちゃんはそう言った後で鼻歌を歌い始めた。それは私が聞いたことの無い歌だった。しいちゃんとはるちゃんは、ぼかんとした顔でかわちゃんを見つめている。二人も聞いたことがないのだろう。

「あ…………これ俺達の高校の校歌だから、気にしないで」

大井君は冷静にかわちゃんの肩を叩いて鼻歌を止める。

「すいません、つい昔を思い出して…………。つまり大学でも同じようなことをしたいのです。それには自治会に入るのが一番じゃないですか」

「なるほど、かわちゃんはいずれは自治会長になりたいのね」

「そうです。だから一年のうちからいろんな役職に就きたいのです。どうやったら自治会長になるのかは分からないけど（自治会長なことを決める選挙が去年行われていたかどうかを私は知らない）きつ

と大変なことなんだろう。

「でも入学したばかりなのに自治会に入りたいたいなんてすごいよ、かわちゃん」

「ありがとうございます」

かわちゃんはしいちゃんに向かって丁寧に頭を下げた。

「そうだね、大学に入ったばかりなのにやりたいことが既に決まっ
つていて、実行に移そうとしているのはすごいことだよ」

大学でダンスをするという明確な目標があるはるちゃんが、笑顔で頷く。

「ところで伊井国先輩、伊井国先輩は自治会室がどこにあるか知っ
ているのですか？」

かわちゃんが期待の目ではるちゃんを見つめる。私としいちゃんに「だめねえ」と言ったはるちゃんの事だ。きつと知っているのだらう。

はるちゃんは自信満々の表情で立ち上がると右手を腰に当てた。
何か嫌な予感がする。

「私もどこにあるか知らないわよ」

「いや、はるちゃん。それ自慢にならないから」

はるちゃんには自慢にならないことを自慢する癖がある。さらに人に期待させるだけさせておいて突き落とすという困った癖がある。私はやはりそう来たか、とはるちゃんに突っ込みを入れた。

「気持ちは嬉しいが君は一年だろ？ 悪いことは言わない、勉強に集中しなさい」

十五分後、私たちは事務の人から自治会室の場所を教えられても
らい、自治会室へと足を踏み入れた。かわちゃんは中にいる会長の
姿を見るや、

「私を自治会に入れてください！」

と、カバンの中から「入会届」を出して会長の机に勢いよく叩き
つけた。本人は叩きつけるつもりはなかったのだらうが、結果とし

て叩きつける格好になってしまった。

会長は苦笑しながらかわちゃんの入会届を見る。そして出たのが先ほどのセリフだ。

「どうしてダメなんですか!? 一年生とかそんなの関係ないじゃないですか! 私を自治会に入れてください!」

かわちゃんは机に手を突いて身を乗り出す。

「会長さん、彼女本当に自治会に入りたいんです。なんとかかなりま……」

私がかわちゃんに助け舟を入れる。会長は笑いながら手を出して私の話を止めた。

「いいかい、河原さん。君は大学生なんだよ。大学生の本分は勉強に励むことだ。大学生活に慣れていない一年のうちには勉強に励むべきなんだ。それが本来の学生の姿とは思わないかね」

髪を茶色に染めている会長は大学生とはなんたるかについてしっかりと自分の考えを持っているようだ。笑いながらかわちゃんの勢いをさらりとかわす。

「じゃあサークルに入っている学生はどうなんですか、彼らもサークルをやめて勉強に励めと言っんですか?」

会長の顔から笑みが消え、眉間に少し皺がよるのが私にも見える。

「自治会をサークルと一緒にしないでもらえないかな」

「ちよつと! なにサークルを見下したような発言をしているのよ」

「はるちゃん、落ち着いて。落ち着いて!」

はるちゃんが怒鳴りながら会長の机へ詰め寄ろうとするのを、し
いちゃんがなんとか食い止めた。

「気を悪くしたのなら謝る。しかし河原さん、高校のとき生徒会長をやった君ならわかるだろ?」

じつとお互いを見るめる会長とかわちゃん。視線での会話が交わされているようだ。高校のときに生徒会に関わりの無かった私にとって自治会とサークルの違いがなんだか分からない。

「うっ、それを言われると……」

かわちゃんがちょっとたじろいたのを見て、大井君が彼女の肩を叩いた。

「真値、これで分かっただろ。自治会に入るのは二年になってからだ」

「ダーリン……」

人前を気にせず、少々涙声のかわちゃんは大井君に抱きつく。私たちはそれを照れながら見守る。

「えーと、そろそろ人が来るのだが……。いいかな？」

会長は抱き合っている二人を伺いながら軽く咳払いをした。慌てて二人は離れる。

「はっ、はい。どうもすみませんでした」

かわちゃんはご丁寧^ごに会長に向かって頭を下げた。

「えーと、会長さん。これだけは言っておきたいんだけど……」

真剣な表情の大井君が右手を会長の机の上に乗せた。かわちゃんの気持ちを会長に伝えたいんだろうか。

「俺たちは決して馬鹿カップルではないから。それだけは誤解しないでくれ」

大井君を見つめる会長の目が点になった。

「いちいちそう断りを入れるのが馬鹿カップル……」

「もーっ、はるちゃん」

小声で突っ込みを入れるはるちゃんの口をしいちゃんが押さえる。

「あー……うん、そうは思っていないから大丈夫だよ」

会長の言葉を聞くと大井君は表情をくずした。

「そうか、それならいいんです」

そのとき、ドアが音を立てて開き、髪^髪の短いTシャツ姿の大きな男の人が部屋の中に入ってきた。

「おう、待っていたぞ。高見^{たかみ}」

「かわちゃん、もう出よう。自治会の入会はまた別の機会にお願いするといいよ」

しいちゃんがかわちゃんの袖を引っ張る。かわちゃんは口をへの

字に曲げて不満そうな顔だったが、

「はい……、分かりました」

かわちゃんもは礼儀正しく会長にお辞儀したが、彼はそれに気づかず高見と呼んだ男の人と話している。

部屋を出ようとしたとき、会長のある一言が私達のそしてかわちゃんの耳に入った。

「実はお前に文化祭の実行委員長になつてほしいんだが……」

「文化祭実行委員!!」

かわちゃんは大声を上げると、高見と呼ばれた男の人の太い右腕を掴んだ。

「はい！ 委員長殿。私、文化祭実行委員になります！」

「こら、一年生は勉強に励めと言っているだろう!!」

かわちゃんは会長を睨みつけて意地悪そうに応える。

「あなたにお願いしているんじゃない。私は委員長にお願いしているのです」

かわちゃんの反応に会長は一瞬たじろいたが、すぐに体勢を立て直した。

「君がお願いしている彼はまだ文化祭実行委員長ではないよ」

「そうだよ、俺はまだ文化祭実行委員長をやるとは言っていない」

「そんな……」

はつきりとした高見さんの言葉にかわちゃんの顔がゆがんだ。高見さんはかわちゃんの反応を気にせず、会長のほうを見て、

「この子を実行委員に入れるのを了承するまで俺は委員長をやるとは言わない」

「おい、その子は一年生だぞ、分かっている……」

「それはお前の論理だろ？ 俺の論理とは関係ない」

会長の自説を高見さんは強い口調で押しとどめる。

「はい、会長。文化祭の実行委員と、自治会は別のものなので会長が全てを決めるものではないと思います」

私は手を上げて高見さんを支援する。自治会と文化祭実行委員が

どう違うのかはよく知らないけど、可愛い後輩のためにこのくらいの知ったかは必要でしょ。

「……ああ、もういい。文化祭の実行委員長は高見、お前だ。誰が委員になるかはお前が決めることだ」

会長はそう言うのと椅子をくるりと回し、私たちに背を向けた。

「やったね、かわちゃん。これで文化祭の実行委員になれるよ！」

私はかわちゃんの手を取って私の喜びの気持ちを素直に伝えた。

かわちゃんは丁寧に頭を下げて私にお礼を言う。のかと思っただが、かわちゃんの言葉は意外なものだった。

「はい、御徒先輩も、文化祭実行委員になれますよ」

えっ、私もなの？ 私はかわちゃんの手を握ったまま、そして口を開けたまま返す言葉がなかった。かわちゃんは気にせず目じりを下げて微笑む。

「ダーリンも、椎名先輩も、伊井国先輩も文化祭の実行委員ですよ」みんななもの？ 私は開けっ放しにしていた口を結んで周りを見回す。大井君の反応を見るに、自分がかわちゃんとともに何かの役職につくことは想像の範囲だったのだろう。

「いいじゃん、かわちゃん、しいちゃん。文化祭の実行委員やりなよ」

はるちゃんが自分の事は棚に上げて私たちをあおる。

「文化祭か……。一度何かそういう大きな事をやってみたかったんだよね……」

しいちゃんは目をうつとりさせている。すっかりやる気ではいるようだ。

「やる気があるのだったら、大歓迎だよ」

高見さんも私たちの実行委員入りを受け入れる構えを見せている。

「ほら、かわちゃんも実行委員やろうよ」

はるちゃんは楽しそうな表情を浮かべて私の頭を何度も叩く。

「大学生活を楽しくするために何か大きいことをやろうよ」

もうすでに実行委員になったつもりでいるしいちゃんが私の右手

を握り締めゆっくりと左右に振る。

確かに大学に入って何かやりたいと思っていたけど……。文化祭かあ。

第六話 かつちゃん防衛戦

「ねえかつちゃん、私と一緒に文化祭やろうよー」

しいちゃんが私の右腕を掴み、左右に振る。

「お願いです。御徒先輩、私を助けるためと思って一緒に文化祭やりましょう」

かわちゃんは私の左腕を掴み何度も何度も腰を直角に曲げる。まるで選挙のお願いをしている政治家さんのようだ。

ここで仮に私が断つてもしいちゃんとかわちゃんは文化祭の実行委員をやるだろう。二人が作るうとする文化祭、そこに私が何か手伝えることは無いだろうか。というか手伝いたい。

そんな理由で引き受けてもよいのかと言う不安はある。しかし私は自分の気持ちを含めみんなに伝えたかった。

「私でよければ……みんなのお手伝いするよ」

「やったー、ありがとう。かつちゃん！」

しいちゃんが背中から私に抱きつき何度も飛び跳ねる。

「ありがとうございます。御徒先輩」

かわちゃんはさつきと同じように何度も腰を直角に曲げる。まるで当選のお礼を有権者に行っている政治家さんのようだ。

「はるちゃんもやるでしょ？ 文化祭」

両腕を私の首筋に絡めたまま、しいちゃんのはるちゃんのほうを見る。はるちゃんは冷めた表情で一言。

「私はやらないよ」

その言葉を聞いたかわちゃんが素早くはるちゃんの正面に立ち、両肩をしっかりと掴んで

「伊井国先輩も一緒にやりましょうよ、みんなで文化祭りしましょうよ」

と、激しく叫ぶ。まるで選挙で苦戦を強いられている政治家のよう……、って政治家さんに例えるのはいい加減しつこいか。

「私にはダンスサークルという大切なものがあるから」

はるちゃんは会長のほうを見て彼に聞こえるほどの大きな声を出した。会長は右耳に指を入れて掃除をしている。

「そりゃあみんなと文化祭をやりたいというきもちはあるわよ、だけれど私はすでにサークル活動をしているの。これで文化祭の実行委員をやっていたらどっちも中途半端になってしまう。私、そういうのはいやだから」

会長の耳掃除をしている姿を見たはるちゃんは、さらに大きな声を出した。

「確かにはるちゃんの言うとおりだよ。はるちゃんはダンスサークルに専念するのがいいよ」

私は首に絡まるしいちゃんの腕を支えながらはるちゃんのほうを見る。

「そうか……残念だけでしょうがないね」

しいちゃんは私の背中ではしそうな声を上げる。

「うー、分かりました。伊井国先輩は参加しないということ……」

かわちゃんは力なくはるちゃんの肩から手を離れた。

「まあ実行委員にはなれないけど、ダンスサークルとして文化祭に協力することになると思うから、よろしくね」

はるちゃんは目を細めて私たちに向かって微笑んだ。

はるちゃんと自治会室で別れた私たちは文化祭実行委員のために用意されている部屋へと向かっている。部屋の名前は「文化祭室^{ぶんかさいしつ}」と言っらしい。

自治会から歩くこと三分。文化祭室の扉を開けると中は辺り一面白いもので覆われていた。

「……何、これ……？」

得体の知れない風景に私は足を一歩踏み出す勇気が出ない。

しいちゃんが私の足元に座り込み、じっと白いものを見つめる。

「これは埃だよ。かっちゃん」

「文化祭が終つてからこの時期まで誰も立ち入らないというから、埃がすっかりたまつてしまつたんだろうな」

高見さんが白いもの　埃を踏んで中へと入る。埃がふわりと私の目線の辺りまで舞う。

「だから文化祭実行委員の最初の仕事はこの部屋の掃除なんだそう
だ」

高見さんは掃除用具の入ったロッカーを開けると、数枚の雑巾とバケツを私達のほうへと投げた。

投げられた雑巾やバケツはしいちゃんが全て両手でしつかりと受け止めた。さすがはボクシング好き、毎日体を鍛えているだけはある。

しかし、雑巾はともかくとして、バケツを投げるなんてちょっと危なくない？

「はい、かつちゃん。ぼーっとしてないで水を入れてきて」
しいちゃんが雑巾を入れたバケツを私の胸にぼんと当てる。

バケツに水を入れて部屋に戻ると中の四人は掃除もせず楽しく何かを話していた。

「河原真値さんは、あだ名はかわちゃんなのよ」

「しいちゃん、一体何の話をしているの？」

「かつちゃん、みんなで自己紹介をしていたところなの」

しいちゃんに言われて私はそうか、と思つた。今ではこうして普通に話しているけど、私たちは高見さんに自分の名前を名乗つていなかったのだ。

「高見さんのフルネームは高見勝太たかみ かつたつて言つんですよ」

かわちゃんがそう言いながら私が手にするバケツから雑巾を二枚取る。

「年は一つ上だけど学年は俺たちと同じ二年生なんだ」

大井君がかわちゃんの手にする二枚の雑巾のうち一枚を手に取り机を拭き始める。なんでもお父さんが病に倒れて入院してしまつた

ため、大学を一年間休学し、父親に変わってマグロ漁船を操っていたのだそうだ。

「ええと、それで私以外自己紹介は終わったというわけね……」

「さすがかつちゃん。察しがいいじゃない」

しいちゃんが笑顔で雑巾を二枚取り、一枚を高見さんに渡す。

またきたか、この瞬間が。まあ今まで何度も自分の名前を名乗ってきたけど、やっぱり緊張するね。

私は唾を飲み込みと、息を大きく吸って大声で名乗る。

「私の名前は御徒真知です！」

私は高見さんの目をじつと見つめて彼の反応を待つ。何を言われとも大丈夫だ、さあ来なさい。

ところが高見さんの反応は私の想像を超えるものだった。

「うーん、『御徒真知』で『かつちゃん』か……。俺と同じだな……」

「御徒真知」に反応せず、「かつちゃん」で悩む高見さん。あれ？ 私、自分のあだ名は「かつちゃん」だって言っていないけど……

「かつちゃんがバケツに水を入れて行っている間にかつちゃんの名前とあだ名を教えたんだよ」

しいちゃんが私の足を一生懸命雑巾で拭きながら、私がいなかった間の事情を話す。それはもう少し先に言っただけだった。さっきの私の気合はなんだっただろう。

「えーと、『同じ』というのはどういことですか……」

「俺もあだ名が『かつちゃん』。名前が勝太だからね」

「そうそう、同じ文化祭実行委員の仲間同士、改まって『さん付け』で呼び合うのではなくて、お互いあだ名が呼び捨てで呼び合おうって決まったんだ」

大井君がロッカーから箸とちりとりを取り出す。

「ダーリンのあだ名は『けーま』ですよ」

「けーま」か、なんとも呼びやすいあだ名だな……。ちなみにし

「いちゃんのあだ名は今までどおり「しいちゃん」、かわちゃんのあだ名はこれも今までどおり「かわちゃん」と決まったらしい。」

「高見さんと御徒先輩のあだ名が同じならば、今どちらかのあだ名を新しく決めなければなりませんね」

「そうだね、でもどっちのあだ名を決めればいいんだらう……」

「しいちゃんが私と高見さんの顔を見回す。「かつちゃん」と呼ばれてまだ一年しか経っていないけど、私はこのあだ名を譲る気は無い。」

「言つとくけど、私は『かつちゃん』以外のあだ名は嫌だからね」
「だってしいちゃんが名づけてくれたあだ名だからね。」

「高見さんのあだ名は私が新しく作ります。それで文句は無いですね！」

先に「新しいあだ名」という既成事実を作ってしまったえばこつちのものだ、と私は思った。

「俺は十年間も『かつちゃん』というあだ名で呼ばれているから、それ以外のあだ名は考えられないよ」

「十年と一年か……。いや年の長さで勝ち負けが決まるわけが無い。十年も経てばテレビや自転車も古くなって買い替え時じゃないですか。それと同じであだ名も変えたほうがいいんですよ」

「自転車とテレビって普通十年も使えるかな？」

大井君ことけーまがちりとりと埃を入れながら首を傾げる。けーま、今はそんなことを話し合う時間ではないわよ。

その時かわちゃんが雑巾を持った右手を勢いよく上げた。

「それじゃあ二人で相手の新しいあだ名を作って、ナイスなあだ名を作った方が勝ちってことで」

「そうだね、互いに恨みっこ無しって事で」

私のあだ名「かつちゃん」の名付け親であるしいちゃんがあつさりとかわちゃんの提案に乗った。あだ名を名づけられた方と名づける方のあだ名に対する気持ちには温度差があるようだ。

だからと言って私は「かつちゃん」と言うあだ名を譲るわけには

いけないのである。だって「かつちゃん」以外のあだ名って他に「御徒町」しか無いのだから。

こうして「かつちゃん」の名をめぐって私と高見さんで、「あだ名名づけ対決」をすることになった。審査員はしいちゃんと、かわちゃんとけーまの三人。

先にあだ名を閃いたのは高見さんだった。素早く右手をきつちりと上げる。

「『かつちゃん』だから、かつちゃん、かつちゃん……かーちゃん、かあちゃん。『かあちゃん』、でどうだ。なんかお母ちゃんぽいし」

「かあちゃん」？ 「かあちゃん」って何よ。確かに人より負けん気は強いかもしれないけど、ちっとも「お母ちゃん」らしくないわよ。と、私は高見さん、そしてしいちゃんを見つめた。料理が上手と言う点では私よりしいちゃんの方が何倍もお母さんらしい。

「『かあちゃん』か……。御徒先輩に似合っていますね」

かわちゃんが「かあちゃん」に好印象を示している。いけない、このままでは「かつちゃん」が高見さんに取られてしまう。

しいちゃんとけーまが何も言っていない今のうちに、なんとか新しい彼のあだ名を考えないと……。えーと、高見さんだから、「たかみ」「たかみ」「たかみ」……。

そのとき、私の頭の中を一筋の稲妻が走った。私はその稲妻の中で光り輝く言葉を高見さんに向かって思いのままに叫んだ。

「うるさい！ タカビー！！」

高見さんことタカビーは、顔を少し赤くさせ、口を大きく開けて叫んだ。

「なんだ、『タカビー』って。高飛車か！？ 俺は高飛車じゃないぞ」

「高飛車だろうがそうじゃなからうが『タカビー』は『タカビー』なの！」

彼が高飛車かどうかは問題ではない。私が「かつちゃん」の名を守るかどうかの問題なのだ。

「『タカビー』か、いいね、面白いよかつちゃん」

雑巾をバケツの中に入れたしいちゃんがお腹を抱えながら私の意見を支持してくれた。

「私も、『かあちゃん』より『タカビー』のほうがぴったりだと思います」

かわちゃんが私に一票を入れてくれる。これで二対零。すでに過半数を達している。

「俺も『タカビー』に賛成」

けーまが雑巾を上げる。これで三対零、全会一致だ。まさに完勝。こうして一度は失いかけた「かつちゃん」の名は私の元へと戻ってきた。

「待て、俺は納得してないぞ」

タカビーが負けを認めていなく、雑巾をきつく絞りながら叫ぶ。雑巾からは水滴がいくつか床へと落ちていく。

「タカビー委員長。委員全員の意見です。諦めてください」

しいちゃんが、タカビーの雑巾から零れ落ちた水滴を、再びバケツから取り出した雑巾で拭きながらはつきりした声で言う。

「う……、それを言われると……」

「委員」と言う言葉が出たので、タカビーは雑巾を持つ両手の力を緩めた。

「そうですね、タカビー委員長。委員の意見です。従ってください」委員の総意には従うべきだ。委員長」

かわちゃんと、けーまが私の後押しをする。タカビーは左手で雑巾を机に叩きつけると、右手で頭を抱えながら呟いた。

「わかった……委員の意見ならしょうがない」

こうして、文化祭実行委員の活動はタカビー委員長、私、しいちゃん、かわちゃん、けーまの五人でスタートした。

「タカビー委員長、よろしくー」

「やっぱりにいらねー！」

第七話 女子大生も好き！

文化祭室の掃除を終えた私としいちゃんは、かわちゃんたちと別れてはるちゃんのいるダンスサークルの部室へと向かっていた。

「明日から実行委員の募集か……」

私は掃除のせいで疲労がたまった右肩を揉みながら呟く。

「てつきり五人で作るのかと思ったのに……」

「もう、かつちゃん。五人だけで文化祭が作れるわけ無いじゃない」

しいちゃんが目を細めて笑顔で答える。確かにしいちゃんの言うとおりだな。

これから私たち五人は実行委員の中心的存在である「文化祭実行理事会」の委員として一緒に文化祭を作ってくれるメンバーを募集しなければならぬ。十分な人数が集まってから本格的に文化祭作りがスタートするのだ。

私たちがはるちゃんのいるダンスサークルに向かうのは、はるちゃんに会うためのほかに、文化祭に興味がありそうな友達を紹介してもらおうという理由があつてのことなのだ。

ダンスサークルのちよつと黒ずんだ木製のドアが見えると私たちは素早くそのドアノブを回し部室の中を覗いたが、素早くその扉を閉めた。

「もう！ 入る前にノックするー！」

中からはるちゃんの恥じらい声が聞こえてくる。

「もう、部室にはちゃんと鍵をかけるー！」

しいちゃんが顔を赤くしながら反撃する。練習を終えたはるちゃんが、着替えのために胸をさらけ出していたのだ。

「それにしてもはるちゃんの胸、相変わらず綺麗だったな……」

私は以前にも見た彼女の胸を思い出していた。

「もう、かつちゃん何言っているのよー！」

しいちゃんの顔がますます赤くなった。

「もう入っていいよー」

はるちゃんの声と同時に中から扉が開かれた。

「おじゃましてーす」

私としいちゃんは声をそろえて部室の中へと入る。中にいたのははるちゃんの他にもう一人いた。髪が長いその人は私達の姿を見るや、嬉しそうな笑み（といってもこの人はいつも明るい笑顔なのだが）を浮かべて抱きついてきた。

「うわーっ、かつちゃんらしいちゃんだーっ！ 久しぶりー！！」

ダンスサークルの現部長、明石真奈美先輩の私たちを締め付ける力はかなり強い。そのまま私たちの背骨を折るほどの勢いだ。（悲しいことに私と明石先輩の胸はそんなにないたため、クッションの役割を果たすものなど無いのだ）視界の端にはるちゃんの笑顔が見える。それはまるでいたずらっ子が自分の仕掛けた落とし穴に人が落っこちたのを喜んでいるようだった。

私は声をなんとか絞り出して明石先輩の喜びの気持ちに答えた。

「あ、明石先輩……お久しぶりです」

「ほんとだよー、二人とも二年生になってからちっともここに来ないんだもん、物すごく寂しかったよー！」

「そ、それは……何よりです」

しいちゃんは息も絶え絶えに答える。

明石先輩の腕がやっとなら私たちから離れた。私としいちゃんはほぼ同じタイミングで咳き込む。私たちはやっと満足に取り入れられる空気を思いつきり吸い込んだ。

「いやー、久しぶりに見たけど二人ともかわいいねー」

明石先輩は左手で私の頭を、右手でしいちゃんの頭を撫でる。そんな明石先輩の私たちへの扱いに私はふとした疑問を浮かべた。明石先輩は女子高生好きでかわいい女子高生を見つけると思わず抱きついてしまう困った癖がある。以前私の妹である真耶まがその被害に遭った。

「明石先輩……、私たちは女子大生ですよ……」

咳のせいで目から出てくる涙を拭きながら私は心に浮かんだ疑問を明石先輩にぶつけた。

「なあに？ 女子高生好きの私が女子大生であるあなたたちに抱きつくのはおかしいってこと？」

明るい笑顔を私に向ける明石先輩にしいちゃんが答える。

「ええ、そういうことです」

しいちゃんも私と同じことを考えていたようだ。

「いやいやいやいや」と明石先輩は再び私としいちゃんの頭を撫でた。

「私ももう三年生、年で言ったら二十一なわけですよ。二つ下の子まで大学生になってしまうのです。それに気がついたとき、ふと思っただですよ」

そこまで言った明石先輩は、右手の人差し指を下唇に当てた。

「女子大生もありかな、って」

顔は笑っているがよく見ると眼は笑っておらず、するどい光を私たちへ放っている。本気だ。

「私なんかそのおかげで毎日会うたびに抱きつかれているんだから私たちが抱きつかれている間、お茶の用意をしていたはるちゃんが湯飲みを四人分こたつの上に置いた。」

「いやー、だつてはるちゃんかわいいじゃない」

明石先輩がはるちゃんの頭を優しく撫でる。

「私でかわいいと抱きつくなら明石先輩はこの大学で何人の女の子に抱きつかなければいけないのですか。目にする女の子全てに抱きついていたらそれだけで日が暮れてしまいますよ」

「はるちゃん、自分を卑下しない。これでもものすごく厳選しているんだから」

はるちゃんが明石先輩の手をとろうとしたが、先輩はそれを払って再びはるちゃんの頭を撫でる。確かにはるちゃんは明石先輩の厳選に耐えうるかわいさを持っている。しいちゃんももちろんだ。

そして、私も……そうなのか？

四人で暖かいお茶を飲み始めたとき、紺色のスーツに身を包んだダンスサークルの前部長、浅野あきのいのり先輩が入ってきた。彼女はその名前ゆえに幼いころは「朝のお祈り」と同級生にからかわれた経験がある。

「浅野先輩、どうしたんですか？ そのスーツ姿は」

私が尋ねると、浅野先輩はよくぞ尋ねてくれたと言わんばかりに胸を張って見せた。

「就職活動よ。今日は面接を二社受けてきたの」

そうか、浅野先輩は今年四年生だ、と私は思った。浅野先輩は左手でVサインを作り、大きく前へと伸ばしていた。

「その後家から電話があつて、一社内定もらつたつて！」

「せんぱーい、おめでとーございまーす！」

明石先輩が喜びの声とともに浅野先輩に飛びつく。浅野先輩の背中が強かたに部室の壁に打ち付けられる音がした。

「ま、真奈美。い、痛いつて！ ありがとう」

浅野先輩が口を引きつらせて明石先輩にお礼を言う。きっと本当に痛いのだろう。怪我をしていなければいいけれど。

「明石先輩から見れば、浅野先輩も『かわいい女子大生』に入るのね」

しいちゃんが浅野先輩を気遣う視線を向けながら、小声で私とはるちゃんに呟く。

「浅野先輩の場合、『かわいい』と言うより、『かっこいい』んじゃない……」

浅野先輩の髪型ははるちゃんのそれより短く、耳がはつきりに見えるほどだ。涼しげな顔立ちとダンスで鍛えられたシャープな体系は、私から見れば「かっこいい」が相応しい。というか明石先輩、女子大生なら年下でも年上でもいいのか。

「そ……、そういうわけだから、き……今日は私のおごりよ。みんな

なでとんかつを食べに行くわよ」

浅野先輩の両手が明石先輩から逃れようと激しく壁をなぞる。しかし、明石先輩の抱きつく力はそんなものでは屈しない。それどころか、浅野先輩の「おごり」という発言に、

「うわーっ、先輩！　ありがとうございまーす！」

とはるちゃんが喜びの声を上げて明石先輩もろとも浅野先輩に抱きついてきた。

「痛いっ！」

浅野先輩の悲鳴が再び部室の中、そして開けっ放しのドアを抜けて廊下に響き渡る。

「しいちゃんも一緒に抱きつこうよ」

楽しそうな三人（一人は明らかに痛がっているのだが）を見て。なんだか仲間はずれな気分になったので、私はしいちゃんを誘ってみた。

「えー、でも浅野先輩がかわいそうだよ」

しいちゃんがもつともな意見を言ったので、私は抱きつくの諦めることにした。

「二人ともいい加減離れなさい！　とんかつおごってあげないわよ」

圧迫に耐えながらも浅野先輩が精一杯の大声を上げると、はるちゃんも明石先輩は、現金にもあつさり離れた。浅野先輩は口から風船の空気が抜けたときのような音を出して腰から崩れ落ちた。

「うわー浅野先輩、しっかりしてくださいー！」

第八話 理由を尋ねて

五月の連休が明け、文化祭実行委員の募集も本格化してきた。この月の内に委員として充分機能できるほどの人数を集めないと十月末に予定されている文化祭の実施がスケジュール的に危険な状態になってしまう。

チラシ配りや入り口の呼びかけなどをしてメンバーは私たちを入れて現在二十人。自治会の会長曰く、文化祭に必要な人数は最低でも四十ということだが、その半数が仲間に入った。

この調子で行けば残り二十人は五月中に集まるという見通しがたつて一安心いききたいところだが、私には大きな問題が残されていた。それは私が呼びかけて実行委員に入ったメンバーは一人もいないということだ。他のみんなは最低一人か二人は入れているというのに。

「はあ、今日もゼロ人だったか……」

授業の合間に一号館一階の掲示板前で呼びかけをしていた私は手ごたえの無さのため息をついた。その横ではしいちゃんが男子学生に時折笑顔を交えながら一生懸命文化祭の説明をしている。

「……そういうわけだから、もし時間があるようだったら一緒に作ろうねー」

そう言っていてしいちゃんは手を振って男子学生と別れた。そして私のほづを見る。

「さてかっちゃん。教室に行つてはるちゃんたちと合流しようよ」
「つまらなそうな視線をしいちゃんに向ける私を見て、彼女は私の左袖を強く引つ張る。」

「もーっ、そんな顔しないで授業行くよ」

「しいちゃんはどうしてそんなにメンバーの募集が上手いのよ……」

「えー、別に特別な話をしているわけではないよ」

そう言うときしいちゃんは瞳を上に向けて「うーん」と考え込んだ。「変わった話じゃないけど、『なぜ自分が文化祭を作りたいのか』を話しているかな」

「なぜ作りたいか？」

「そう、街角で見る選挙演説を思い出してみよ。候補者の人って『自分が議員になったらこうします』って話と『なぜ立候補したか』という話をするので、自分に一票入れてもらうようにお願いするわけよ」

文化祭から選挙というスケールの大きな話になってしまった。私はやっと二十歳、つまり選挙権を得たばかりなので、あまり選挙と言うものに関心を持っていないから選挙演説など気にしていない。「文化祭もそうだと思うのよ。『こんな文化祭を作る』というのと『なぜ文化祭実行委員になったか』という二つの話が大切だと私は思うのね。その話をするので、共感を得るといっか。『自分もやってみよう』という気にさせるとか……」

二つの話か……。よく考えてみると二つとも同じ事を言っているような気がするな。

「『こんな文化祭を作りたいから実行委員になった』ということもあるんじゃない？」

私がふと思った疑問をそのまましいちゃんに投げかけると、しいちゃんは驚かずいつものかわいい笑顔を見せた。

「そうだね、二つとも同じになってしまうこともあるね。まあ『どんなものを作りたいか』というビジョンと、『なぜ作りたいたのか』その理由をはつきりさせることが必要ってことよ」

「しいちゃんはどうして文化祭を作りたいって思ったのよ」

私が尋ねると、しいちゃんは瞳を輝かせてすぐに口を開いた。

「文化祭は大学の年中行事の中で一番の大きなイベントでしょ。これが楽しみで大学生活送っている人いるかもしれないし。そういう人を少しでも増やしたいと思ったからだよ」

しいちゃんの瞳がさらに輝く。

「それにねー。こういう大きなことみんなで長時間かけて楽しみながらやるって大学時代が最後でしょー。一度そういうこととしてみたかったんだよねー」

瞳をますます輝かせるしいちゃんの話を聞きながら、私たちは教室へと着いた。

「かわちゃんは どうして文化祭を作りたいと思ったの？」

授業中に先生の目を盗みながら私は小声で隣のかわちゃんに尋ねる。かわちゃんは一瞬目を大きく見開いたがすぐに答えた。

「文化祭はその名の通り大学の文化を内外に示すイベントよ。『のびのびと楽しく学ぶ』というこの大学のモットーを私は自分の手で皆に知らしめたいの」

みんなであだ名を決めて以来、順応性がいいかわちゃんは私たちにすっかり敬語を使わなくなっている。「なんでそんなことを聞くの？」と言うかわちゃんの心の声が聞こえたような気がした。

「文化祭実行委員会に入った理由」 私の理由はしいちゃんとかわちゃんに比べたらとても人に言えたものじゃないよ。だって「大学のため」とか「学生のため」とかではなくて「友達のために」なんだもん。

授業が終わり私はみんなと別れて一人図書室へ向かっていた。たまたま私一人で受ける授業が休講だったので、とりあえず勉強しようと思ったのだ。

「かつちゃんー！」

明るい陽気な掛け声が聞こえた直後、私は後ろから激しく抱きつかれた。こんなことをするのはこの大学では一人しかいない（はずだ）。

「いやー、かつちゃんはかわいいねー」

顔は見えないけど、私の頭を優しく撫でる明石先輩はきつといつもの明るい笑顔なのだろう。そんな笑顔に対して私は口を小さく開

いてため息をつく。

「うん、どうした？ この前より力弱くしているけど息苦しい？」

「いや、明石先輩。そういうわけではないんです……」

力を弱くしたと言っていているが明石先輩の力は十分強い。まあそんなことは置いといて、私は先ほどからの悩みを明石先輩に話した。

「そうね……図書館に行つて『大学の歴史』とか『文化祭の歴史』関係の本を探してみたらどう？ 大学や文化祭のことを知ったら自然に理由なんて見つかると思うけど……」

明石先輩は両手を私の胸の辺りでクロスさせながら答える。傍から見たら私の胸を触っていると誤解をされるかもしれないのだが、先輩はそんなことは全く気にしない。

「『文化祭の歴史』ですか……。そういう本ありますかね……」

「あるかどうかは分からないけど、探してみないうちに諦めるのはどうかと思うよ」

明石先輩は軽く片手でピアノを弾くような仕草で私の胸を触った。今度こそ本当に触った。悲鳴を上げたいところだけど、恥ずかしい思いをするのはたぶん私だけなので、声を胃の中へと収め、我慢した。

「そうですね……。図書館に行つて探してみます」

「そうだよ、まずは『文化祭の歴史』はなくても『大学の歴史』は確実にあるだろうから、それを参考にするんだよ」

明石先輩の両腕が私の視界から消え、押さえつけていた力が軽くなつていく。やっと解放された私は、後ろを振り返つたが、すでに明石先輩は私に背を向け歩き出していた。

「明石先輩、ありがとうございます。あとメンバー募集の件よろしくお願いします！」

私は明石先輩の背中に向かって先ほど上げたかった悲鳴の分まで含めて叫んだ。明石先輩は右ひじを肩に対して直角に上げて手を振つて応えた。二年生になつて初めてダンスサークルの部室を訪れたあの日、私としいちゃんはダンスサークルの方々に、文化祭実行委

員の募集の協力をお願いしていたのだ。

明石先輩の右手の動きを確認した私は先輩に背を向け、図書館へと歩き出した。

「文京大学文化祭の歴史」は前後編と二冊あった。私は二冊とも借りていつもしいちゃんとはるちゃんに行く喫茶店で読む。前後編と別れているけど一冊一冊の厚さはそれほどない。

序文を読むと、文京大学文化祭は一九四〇年大学設立五十周年を記念して「文化祭」という名称で開催されたのが始まり。太平洋戦争で一時中断されるも、戦後になって現在のような学外の方も入場できるという形式で復活したという。

「うーん、序文だけでも覚えることがいっぱいだ……」

文学部なので本を読むということは決して嫌いではないが、文字が多すぎて全部読むのに少々時間がかかりそうだ。

アイスコーヒーのストローの先を歯でかじりながらページをめくる。またしても文字がびっしりのページが私の視界に広がる。

ページ一面に広がる文字と格闘して三十分ぐらい経ったその時、私の前の席に一人の女性が座った。

その女性の髪は栗色で肩までの長さ。眠そうな感じの目、唇は下が厚く、口を閉じたときに結ばれる線の右側（私から見て）にあるほくろが少しセクシーに見える。

体つきも胸が大きく出ている（少なくとも私が今まで会って来た人たちより大きい）。それでいて太っているわけではなく、私と同じくらいの体の線なのだ。

（うわーっ、セクシーな女の子ー）

私が見とれているとその女の子は眠そうな目を私に向けて「御徒真知さんですね」

と、私の名前を言い出したではないか。驚きで本を支えていた右手を離れた。表紙がテーブルを叩く音が小さく鳴る。

「はい、ええと……確かに私は御徒真知ですけど、山手線の御徒町

じゃなくて、山手線じゃないほうの『おかちまち』です……」

動揺ゆえに私はわけの分からないことを口走ってしまった。だって今まで生きていて見ず知らずの人にいきなり正しい名前を言われることなんて無いんだもん。

「分かっています。御徒真知さん。私は社会学部二年の真田さなだ亜由美あゆみです」

淡々とした口調で、真田さんは私に挨拶をした。

「社会学部って事は明石先輩と同じ学部か……」

「そうですね、私は明石真奈美先輩の後輩になります。御徒さんのことは明石先輩から聞きました。」

明石先輩の同じ学部の後輩ならば、彼女も先輩の抱きつきの被害にあっているのだろう。

「やっぱりあなたも明石先輩に強い力で抱きつかれたりしているの？」

私がそう尋ねると、彼女は眠そうな顔を困ったような表情にして話しはじめた。

「そうですねですよ、一緒の授業で会った時に『亜由美セクシー！』って抱きついてきて、時には胸をちよつと揉まれたりして大変なんですよ」

真田さんは自分の両手で自分の胸を揉む仕草をしながら（実際には胸には触れていないけど）その時の状況を熱心に語っていたが、眠そうな目を一瞬大きく見開かせた後で、眠そうな表情（これがいつもの表情なのだろう）に切り替えた。

「そういう話をしに来たのではありません。大学の文化祭の件を話しに来たのです」

「えっ、文化祭実行委員に入ってくるの？」

私は喜びのあまり口元を緩めながら叫んだ。ところが真田さんは左手の手のひらを私の目の前に差し出して、「落ち着いてください」となだめた。

「入ろうと思っていますが、それには条件が一つあります」

「条件？ 大丈夫だよ、なんでもするよー」

実行委員のメンバーを未だ一人も入れていない私は、死ぬ以外のことなら本当になんでもする気であった。

真田さんは淡々とした口調で驚くべき条件を告げた。

「なんでもするのであれば、今すぐここで裸になってください」

「えっ！？」

は、裸！？

第九話 セクシー亜由美

「なんでもするのであれば、今すぐここで裸になってください」
「えっ!？」

私の体が動きを止めた。だが口元だけは痙攣している。真田さんは眠そうな目を輝かせて続ける。

「かわいいあなたの体がどうなっているか見てみたいのです」

なんでもすると言ったけど、それはちよつと勘弁して欲しい。できれば別のお願いでほしいが、真田さんは真顔なので（眠そうだけど）私には脱ぐ以外の選択肢は無いようだ。

その時授業を終えたしいちゃんがコーヒを持って私達の席にやってきました。

「どうしたの、かつちゃん。顔が固くなっているよ」

しいちゃんは私の顔につられたのか眉間に皺が見える。私の隣のテーブルにコーヒを置くと、私たちのテーブルへとくつつける。

「この子が文化祭実行委員に興味があると言っただけ……」

「へー、そうなんだー。私彼女と同じ文化祭実行委員の椎名真智です。よろしくね」

しいちゃんは私の話を最後まで聞かずに真田さんに右手を差し伸べる。真田さんはしいちゃんの右手を握ることで応えた。

「社会学部二年の真田亜由美です。よろしくお願ひします」

「えっ、亜由美!？」

お店のカウンターのほうからはるちゃんの嬉しそうな声が飛び込んできくる。

「うわーっ、亜由美ちゃんだー! セクシー!！」

はるちゃんは大急ぎでコーヒをしいちゃんの座ったテーブルに置くと、真田さんの左手をしっかりと掴む。

「はるちゃんと真田さんはもう会ったことがあるんだね」

私は話題を裸からそらそうと、はるちゃんの顔を見て微笑む。は

るちゃんはその意図を知ってか知らずか私に微笑を返した。

「そう、明石先輩の紹介でね。一緒に統計学の授業を受けているんだ」

「なるほど、それでセクシーと言うのはなんなの？ はるちゃん」
しいちゃんも話に乗ってきた。このまま話題が逸れれば私が裸にならずにすむ。

「明石先輩が亜由美ちゃんを呼ぶときいつも『セクシー』を付けるのよ。胸が大きいからだと思うけど」

確かに真田さんの胸は私が今まで知り合いになった女子学生の中では一番大きい。(たまたま私含めて胸の小さい人にしか会っていないだけだと思うけどね)

「それじゃあ真田さんは今日から『セクシー亜由美』だね」

私は真田さんのあだ名を勝手に名づける。

「もーう、かつちゃん。変な名前をつけない」

私の隣に座るしいちゃんが、ちよつと頬を膨らませた。

「そうです、私を呼ぶときは亜由美で結構です。っとそんな話をしているのではなくて……、御徒さん。何をしていますか、脱がないのですか？」

せつかく話を逸らし続けていたのに亜由美(本人がそう呼んでくれと言ったので、そうする)は話を元に戻してしまった。

「えー何、かつちゃんヌードになるの？」

はるちゃんが身を乗り出して左腕を亜由美の肩に乗せる。

「そうです、私が実行委員に入る代わりに御徒さんがここでヌードを披露するのです」

そう言っただけで亜由美は胸をそらす。ただでさえ大きい胸がさらに大きく見える。

「えーと、やっぱり脱がなくてはいけませんか……」

私はシャツのボタンに手をかけながら、亜由美の目をじっと見つめる。

亜由美の目が閉じられ微笑みの表情になった。

「冗談ですよ、裸にならなくて結構です」

「あ、じよ冗談……そうだよー」

私は大きく息を吐いて姿勢を直す。よかった、脱がなくて。

「ほんとだよ、もーう私もハラハラしちゃったよ」

しいちゃんも隣で大きく肩を落とした。

「えーっ、つまんない！ 私は冗談でも見たいよ」

はるちゃんも、それは冗談と言わないのでは……。

「冗談でもそういうことを言ってしまうのは明石先輩の影響なのでしょうが……」

亜由美は小さくため息をつく

「うん、そうだと思うよ」

しょっちゅう明石先輩に会う人は、私の斜め向かいに座っているはるちゃんもそうだけど、大なり小なり彼女の影響をどこかで受けてしまいうらしい。

「いや、そういう話をしているのではなくて、私が実行委員に入る条件の話です」

自分で話を反らせた亜由美は自分で修正をした。

死ぬことと裸になることと、明石先輩に二十四時間抱きつかれる以外なら（二十四時間は明石先輩も嫌だろうな）どんな条件でも私は受け入れる気でいる。

「あなたが文化祭実行委員に入った理由を教えてください」

「えっ!？」

私の体が口元の痙攣がさつきよりも強くなった。実行委員に入った理由 それは大学生生活うんぬんではなく友達のために入ったのであり、とてもまともな理由とは言えない。

「どうしたのですか？ まさか理由が無いとか」

「り……理由はあるわよ」

明石先輩はきつと私が実行委員に入った理由について悩んでいることを知ったうえでこの子を私に送ってきたのだろう。意地悪と言うかなんというか……。とにかく人に話せる理由を考えなくては。

私は亜由美に気づかれないうちにしいちゃんに視線で助けを求め
るが彼女は楽しそうな微笑を浮かべるだけで視線には応えようと
しない。うう、しいちゃんの意地悪。

続いてはるちゃんに視線を移す。はるちゃんはノートを大きく広
げ、そこには赤いペンで「私の書いたとおりに話して」と書いてあ
る。よし、はるちゃんの助けを借りようか。

「え、えーと……。今年は成年だから私もやるぞ、って感じかな…
…」

「今年は成年ではないですよ」

亜由美が冷静に突っ込みを入れる。

確かに今年は成年ではないし、よくよく考えてみたら私も含めて
成年生まれの人はここにはいない。いったい成年はどこから来たの
だろう。……ってのはるちゃんがノートに書いたとおりに読んだらそ
うなってしまったのではないか。

「もう、はるちゃんもかつちゃんもふざげない」

さっきまで微笑んでいたしいちゃんの視線が鋭く光る。ふざけて
いたつもりではないが、まずい状況だ。はるちゃんはノートに「自
分で考えて！」と書いている。

「ご、ごめん間違えた。今年は成年じゃなくて……」

はるちゃんの力を借りずに（考えてみれば文化祭実行委員ではな
いはるちゃんに助けを求めるなんてどうかしていた）自分の力でや
ってみようと、私は慌てて口を開いた。

「こ、今年は文化祭が復活してちょうど六十年目の節目なので……、
学生の大学生活を……」

「分かりました、もういいです」

亜由美は私の言葉を遮り立ち上がった。

「それはあなた自身の言葉ではない、どこから借りてきた言葉で
すね。それでは納得できません」

彼女は私に背を向け店の外へ出ようとする。せっかくメンバーを
入れるチャンスだったのに……。私はこのままあの子を立ち去らせ

たら今後誰も実行委員に入れられないような気がした。

だからって、どうする？ 実行委員に入った本当の理由を話す？ 呆れられるかもしれないけど、このまま立ち去られるよりはましだと、私は覚悟を決めて大声を上げた。

「待って、分かった。本当のことを言うから、お願いだから座って」
亜由美は眠そうな目をこすりながら席に戻る。

「それじゃあ本当の理由を聞かせてもらいましょうか」
私は唾を飲み込むとゆっくりと実行委員に入った理由を話しはじめた。後で考えたら私はそのとき、自分の名前を名乗るときより緊張していたと思う。

私が文化祭の実行委員に入った理由は大学がどうのとか、文化祭がどうのとかいうことじゃないの。私の大切な友達が実行委員にいるから入ったの。

その友達は私が自分の名前を好きになるきっかけを与えてくれた子なの。今まで同級生から「御徒町」「御徒町」とからかわれて続けて嫌だったこの「御徒真知」という名前を好きになれるようになってくれたの。

私はその友達にとっても感謝している。

そんな彼女が文化祭を作りたいと言ったの。私はその彼女の手伝いをしたいと思ったの。「御徒真知」と言う名前を好きにさせてくれたお礼として。

彼女の他にも実行委員にはすごい子がいるんだよ。まだ一年生なのにいずれは大学を自分の色に染めたい。と考えている女の子だっているし、

他にもいっぱいすごいこと考えている人が文化祭を作っているの、だから私はその人たちのお手伝いをしたいの。だから私は文化祭実行委員に入ったの。

私が話している間、亜由美は眠そうな目で私の目をしっかりと見

ていた。私が話し終わると彼女はしつかりと握り締めていた私の右手を取った。

「ありがとうございます。自分の言葉で話されて納得が이었습니다」

「え、それじゃあ……」

「はい、文化祭実行委員に入らせていただきます。御徒さん、どうぞよろしく願います」

亜由美は丁寧に頭を下げた。私は周りの迷惑も顧みずに喜びの声を上げる。

「うわーっ、やったー。ありがとうー！」

というわけで、真田亜由美こと亜由美が文化祭実行委員になりました。

第十話 谷中の將軍、再び

亜由美が実行委員会に入ってから一週間が経った。メンバーはどんどん増え始め、会長が言った最低ラインの四十人を突破した。

五月に入り生活スタイルが確定したので、空いている時間を使って文化祭を作ろうと思った学生が増えたのだ、とのタカビーの分析。メンバーの募集はまだ続けるが、文化祭りも本格スタートと言うことで、四十数人の実行委員を役割ごとに三つのグループに分けることになった。

一つ目は文化祭のパンフレットを作成する出版グループ。けーまが代表を務める。

二つ目は文化祭を学内や周辺地域にアピールし、文化祭当日は雑務（ゴミ捨てとか案内とか）を行う総務・広報グループ。これには仕切り好きのかわちゃんが代表。

最後は文化祭の企画を作りや大学のサークルの出店などを管理するイベントグループ。私としいちゃんが代表です。

「これより、『東京とともに六十年』文京大学文化祭第一回イベントミーティングを開催します」

二十人の学生達の前で私は高らかと今年の文化祭のテーマを告げた。大学創立は明治二十年代だが、文化祭は始まってから今年で六十年だ。

そして翌日。

「芸人さんは大丈夫として、この人は本当に呼べるのー？」
かわちゃんが怪訝そうな顔を私たちに向ける。

昨日私たちイベントグループは最初の議題として、文化祭の目玉として大学に来てもらう有名人を話し合い、お笑いコンビ一組とスポーツ選手一人を呼ぶことに決定した。

「現役のスポート選手が文化祭に来るなんてあまり聞いたことが無

いな」

タカビーがその人の写真を片手に口をへの字に曲げる。

「どうしてこの人たちを呼ぶことに決まったの？」

けーまの問いにしいちゃんは答える。

「三人ともこの大学とご近所にゆかりのある人たちだよ。今回のテーマに相応しい人だと思うんだけど……」

話の途中で扉を開かれる音が文化祭室の中に響いた。亜由美が中の様子を気にせず私のいる部屋の奥まで靴の音を立てて入ってくる。「アポイントが取れました。今日、この後ジムに来て大丈夫かどうかです」

「えっ、今日会えるって!? しいちゃん、亜由美早速行くよ!」

話の途中であるが、ジムに行くほうが優先だ。私はしいちゃんと亜由美の手をとって廊下へと歩き出す。

「ジムということは、スポーツ選手のほうか……。いい結果を期待しているぜ」

タカビーの声に私は満面の笑顔で答えた。

「絶対大丈夫だから。みんな期待して待っていて」

なぜこんな自信満々の発言をするかって? それは今から会うスポーツ選手は私の知り合いだからよ!

「……半分冗談だと思っていたけど、本当に来たか」

「はい、予告どおり本当に来てしまいました」

「鯉ヶ崎ボクシングジム」と、書かれた黄色いTシャツと赤いハーフパンツに身を包んだ、町田まじだイラケン選手が困った表情を浮かべているのを私は明るい笑顔で見つめる。大学の文化祭に呼ぶことが決まったスポーツ選手とは、ボクシング世界ミドル級チャンピオン、町田イラケン選手のことだったのだ。彼はかつて文京大学に所属していたわけではないが、ジムの合宿のときはうちの大学の施設を使っているのだ、そういう意味では大学に縁のある人物である。

イラケン選手とは知り合ってから約一年の中である。去年の秋、

しいちゃんとはるちゃんの三人でリングの側で見た。チャウワ・スケベニンゲンとの試合は記憶に新しい。

イラケン選手はその名前がある大物時代劇俳優に似ていることから「ボクシング界の将軍」と呼ばれている。昔はその名前にコンプレックスを感じていたが、時代劇俳優と対面してからは自分の名前に誇りを持てるようになっていた。

「事前から出演交渉をしていたのですか……？」

「もう、かつちゃん一人でするい、そういう話は私も居るときにしてよー」

「あはは、しいちゃんごめん」

イラケン選手と私は時々朝に近くの谷中やなかれいえん霊園で会っている。決してデートをしているわけではない。イラケン選手と私はそんな仲ではない。イラケン選手はジムへの通勤(?)のため、私はおばあちゃんの代理として飼い犬であるペルの散歩のため谷中霊園を利用しているのだ。

その時はイラケン選手に文化祭の話をした、そしてつい勢いで「イラケン選手に文化祭で試合をやってもらいますからね」

と言ってしまったのだ。

イラケン選手も

「それまでチャンピオンでいられるように頑張る」

と、快諾してくれた。二人とも冗談半分で言い交わしたそのやりとりが、今こうして現実のものになるうとしている。頭の中にはイラケン選手が私達の大学で試合をしている姿さえイメージしている。「いや申し訳ないのだけど、大学で試合はできないな」

頭の中で風船のように膨らんでいたイメージが音を立てて崩れ粉となってしまった。ちなみにその粉にはアスベストは混じっていない。

「どうして、試合が出来ないんですか。ボクシング協会の許可がないのですか？」

頭の中を舞う粉を振り払いながらも私はイラケン選手に食い下が

る。

「かつちゃん、普通に考えて大学の体育館で世界戦をやるにはちょっと無理があるよ。チケット管理や観客席の設置、選手の控え室とケア、報道陣への対応……と、文化祭どころじゃなくなっちゃうよ」「理由はほとんど椎名さんに言われてしまったな……」

うつつ、味方であるはずのしいちゃんにとどめをさされてしまうとは……。

「そんなあ、試合ができないんだっいたらイラケン選手を文化祭に呼ぶ意味が……ひゃあっ！」

突然何者かにお尻を触られ、私はまぬけな声を上げる。

「いきなりどうしたの？ かつちゃん」

隣にいるしいちゃんが少し慌てたような声を上げる。

「イラケン選手を文化祭に呼ぶことを提案したあなたが身も蓋もなくなってしまうようなことを言わないで下さい」

背後から亜由美の冷ややかな、そして低くて小さな声が聞こえる。「え……、と試合ができないのなら、イラケン選手にどのような形で大学に来てもらうか今から考えようかな……。と……」

「大丈夫よ、かつちゃん。私がいくつか考えてきたから」

しいちゃんはカバンの中からプリントを四枚取り出し、私たちに一枚ずつ渡す。

「へえ、それじゃあ椎名さんの意見を伺おうかな。まあ応接室が空いているからそこで座って話そう」

そういえばずっとリングの側で立ち話だったもんな。今の時間はイラケン選手と私たちしかいないけど、練習場で文化祭の話をし続けるのはあまりよいことではないだろう。

「えっ、ほんとですか！ イラケン選手に私の意見を聞いてもらえるなんて幸せです」

しいちゃんの顔だけではなく周りの空気までもが幸せそうな雰囲気にも包まれる。イラケン選手と知り合って一年経っているのに、しいちゃんのイラケン選手への接し方は憧れのアイドルに出会えたよ

うな新鮮な感動がまだ残っている。

そのためかしいちちゃんとイラケン選手の間にはまだ一定の距離があるような気がする。

そんなことを考えながら私たちはイラケン選手の案内で応接室へと通された。三人がけの黒い革のソファアが二つ、木目があざやかなテーブルを挟んで向かい合うように置かれている。練習場の汗臭いスポーツマンの雰囲気とは違い、スーツ姿の男性のような部屋の様子に私は少し体が固くなるのを感じた。

「さあ、そこに座って」

部屋の中央にあるソファアに、奥のほうから亜由美、しいちゃん私の順で座る。

「……なるほど、一つ目はトークショー。二つ目はボクシング部を交えてのボクシング教室、そして三つ目は……」

イラケン選手が楽しそうな顔を浮かべてしいちゃんが渡したプリントを眺める。

「三つ目は腹打木久蔵選手と公開スパarrings……?」

腹打木久蔵選手とは、イラケン選手の事務の後輩で、日本ミドル級の現チャンピオンである。ボディーブローを得意とし、実家はラーメン屋さんとのこと。

「しいちゃん、試合は無理があるって自分で言ったじゃない」

「スパarringsは試合じゃなくて練習だから、大丈夫かと……」

しいちゃんの頭の中にもボクシングをするイラケン選手の姿があったようだ。

「そんなに長いラウンドじゃなければ自分としては大丈夫だよ。」

えっ、今大丈夫だって言った!?

「ほんとですか、イラケン選手! ありがとうございます!」

しいちゃんと私は立ち上がり何度も頭を下げる。本当にイラケン選手がうちの大学に来るんだ!

「二人ともやったね、イラケン選手が文化祭に来てくれるよ」

ジムを出て三崎坂さんざきかを下りながら、私はしいちゃんと亜由美に笑顔
を向けた。

「ほんとだね、来てもらえるかどうか予想がつかなかったからドキ
ドキしたよ。あー、イラケン選手のボクシング姿がうちの大学で見
られるんだー」

しいちゃんは再び幸せな雰囲気を取りまわす。

「喜ぶのはまだ早いですよ」

後ろを歩く亜由美が落ち着いた声で私達の喜びに水を差した。

「これから出演料の交渉をしないといけないし……、内容をしっか
りつめないと、参加してらった選手達に失礼なことになってしま
います」

「亜由美は嬉しくないのー？」

いつもの淡々とした口調の亜由美のほうを振り向いて私は少し文
句を言った。

「嬉しいですよ。でも三人全員が喜びに浸るのはちょっと危ないか
なー、と……」

私としいちゃんとはるちゃんの三人だったらもう大喜びで、道行
く人など気にしないくらい勢いなんだろうな。

「いやー、そうなのかもしれないけど、もうちょっと喜ばうよ……」

「ほら御徒さん、前危ない」

亜由美に促されるように前を向くと、目の前の小道に入ろうとす
る車が！

「えっ……うひゃあっ！」

私は後ろから誰かに抱きすくめられてそし横倒しになる。車はそ
んな私達を気にせずに小道へと入っていった。あのまま歩いてい
たらきつと車にぶつかっていたらと思うと背筋に冷たいものが走
る。

「かっちゃん、亜由美大丈夫！？」

しいちゃんが慌てて私達の前にしゃがみ込む。しいちゃんが目の

前にいるということは、私を抱きしめているのはやはり亜由美か。

「あ、うん。大丈夫だよ。亜由美のおかげで事故に遭わずにすんだよ。ありがとう」

「だから三人喜んでいたら危ないといったじゃないですか……」

そう言いながら亜由美は私から離れ上体を起こす。私を見つめる眠そうな目と、口元のほくろが……セクシー。

「……なんだか私が御徒さんを襲っているみたいですね」

くすりとみせず、亜由美が淡々とした口調でとんでもないことを言う。まあ彼女にとってはこれが普通なんだろう、と私はそれに乗っかって

「いやん、恥ずかしい！」

顔を両手で覆い恥じらいの姿勢を見せる。

「もう、二人とも通りでそんなこと言い合うなんて私が恥ずかしいよ……」

しいちゃんが頬を少し赤く染めながら両手を私たちに差し出す。

しいちゃんの力を借りて私たちは立ち上がり、服についた砂や埃を払い落とす。

「ところで、亜由美。かつちゃんを倒しちゃったのは勢いで、それともわざと？」

「いや、最初は倒す気はなかったのですが、御徒さんの抱き心地がよかったので、つい……」

「つい……、って襲う気あったんじゃない」

私は半ば呆れながら亜由美を見る。

「私が悪くはないのです。これもみんな明石先輩の……」

「なんでも明石先輩のせいにはしない！」

第十一話 突撃！隣の文化祭

「突撃！ 隣のぶんかさーい！！」
と、勢いよく叫んで右腕を上げたのは六人の中で私一人だけだった。

「みんなノリが悪いなー。もう一度行くよー」

私は腰につけた右ひじに力を入れる。しかし

「いや、もう一度それをやられてもやらないから」

このけーまの一言に力が抜けてしまった。

「というか誰かの真似なの？ それ」

かわちゃんはこれの元ネタを知らないらしい。

「隣と言ってもうちの大学から歩いて十五分もするだろ」

タカビーがもつともな意見を言う。

「それにここに来る途中女子大があったので、正確には隣の隣ですね」

亜由美がいつもの冷ややかな声を私に向ける。

「もうっ、見ているこっちが恥ずかしいよかつちゃん」

とどめのしいちゃんの一言。私の一発ギャグ（オリジナルじゃないけど）は全員のブーイングの中に消えた。

私たち理事会のメンバー五人と、亜由美を含めた六人は今文京大学から歩いて十五分、二十分離れたところにある東都大学（とうと）の正門前に来ている。

歴史・レベルともに日本一のこの大学になぜ私たちが来ているのかというと、秋に行われる私達の大学の文化祭の参考のため、東都大学の文化祭を見に来たのだ。文化祭と言えば秋のイメージがあるけど、この大学は毎年五月に文化祭を行っている。さすが日本一の大学と言っべきか。

「この広い大学を六人全員固まってだと回りきれないと思うので、ここから二人ずつに分かれて行動したいと思います」

誰が決めたわけでもなく私がグループ分けの合図を出す。

「私とダーリンは誰がなんと言おうと一緒にです！」

「じゃあかつちゃん、私と一緒に行こうか」

一瞬にして三つのグループが決まった。かわちゃんとけーま、私としいちゃん。そしてタカビーと亜由美。

「……私、この人あまり知らないんですけど」

亜由美が淡々とタカビーの顔を見る。

「そんなこと言うなよ。俺も君の事あまり知らないけど」

タカビーが困った笑みを浮かべながら返す。

「まあまあ二人ともここで知り合いになればいいじゃん」

私は二人の肩を軽く叩く。

「そうだよ、これが恋の始まりになるかもしれないし！」

かわちゃんがけーまの腕を強く握り締めて二人の仲をアピールする。

「恋の始まり……」

亜由美とタカビーが互いの顔をじつと見る。そして小さく「うーん」と声を漏らして悩み始めた。二人ともものすごく低い声、まるで冷蔵庫のようだ。

「そ、それじゃあ東都大学文化祭、はりきって楽しみましょー」

「さて、しいちゃんまずはどこへ行きましょーか」

パンフレットを開きながら私はしいちゃんに声をかける。

「そうだねー、まずはいろいろ出店を見て回ろうよ。どんなメニューが出ているか、参考になると思うんだ」

広い東都大学の通路の両側をたくさんのお店がひしめいている。狭くなった通路をたくさんのお店が行きかう。今日は文化祭の日なので、お年寄りからベビーカーに乗せられた赤ん坊まで道行く人の顔は様々だ。

お客を呼び止めようと自分の店をアピールする学生達の声や歩く人々の話し声。様々な音が三百六十度の方向から私達の耳に入る。

る。

「鳥の唐揚げいかがですかー！」

「次どこ見に行くー」

「冷たいカキ氷でーす！」

「ママー、いちご食べたーい」

「キャベツと豚肉いっぱい焼きそばどうでしょー！」

人ごみを掻き分けながら私は屋台のメニューに目を向ける。

「うーん、どれもおいしそうだな……」

しいちゃんは時折爪先立ちになって屋台の様子を眺める。

「やっぱり屋台の定番と言っべきメニューが多いね。かつちゃん買っっていく？」

鮮やかな緑色の長針と短針を持つ腕時計を眺める。時刻は十時三十分をちよつと過ぎたばかり、お昼ごはんを食べるには早すぎる。

「いや、まだ時間的にいいような……。何か変わった屋台があったらそれを買おうよ」

「うん、そうだね。まだお腹空いていないし」

人にもまれながら歩くこと五分。噴水の向こう側に大きな薄茶色の建物が見えた。

「これは図書館だね。入り口の前の広場でイベントをやるらしいよ」
パンフレットを片手にしいちゃんが解説する。

「今はダンスの時間だね」

ダンス……、私はふとはるちゃんの顔を思い出した。

「かつちゃん、今はるちゃんのこと考えていたでしょ」

しいちゃんが私の顔を覗き込む。

「まあダンスと言ったらはるちゃんだからね。私もはるちゃんのことを考えていたよ。あと明石先輩と浅野先輩のことも」

あー、いつも明るい笑顔のちよつとスケベな部長さんと、最近就職先を決めた頼れるお姉さんか。

「彼女達は今頃ダンスの練習でもしているのかな」

「そうだね、文化祭実行委員の仕事じゃなくてただの遊びだったら

はるちゃんも誘っていたんだけどね」

歩くにつれ薄茶色の図書館が私達の視界を占めていく。その下のほうにたくさん人の背中、その隙間からはダンスを踊る男子学生の姿。

おそろく白い服を着ているであろう男達は時折「そいや！ そいや！」と声を張り上げる。

人ごみの手前にある噴水に目をやると、つい先ほどまでダンスをしていたのであろう、赤いユニフォーム姿に身を包んだ女の子達が汗を拭いて、つてあれば……。

「はるちゃん!？」

「そうだ、はるちゃんだ」

はるちゃんは声に気づいたのか、こちらを向き私たちの姿を確認すると、「おーい」と手を上げる。私たちは小走りではるちゃんに駆け寄る。

「わー、すごい偶然、二人ともどうしてここに来たの？」

はるちゃんは喜びのあまり先ほど汗を拭いていたスポーツタオルを放り出してしまった。

「うちの大学の文化祭の参考になればと思って来たの」

しいちゃんははるちゃんの投げたタオルを空中でキャッチしながら答える。

「それよりはるちゃんは どうしてここで踊っていたの？」

「そうだよ、はるちゃん。ここは東都大学だよ」

はるちゃんは、右手を腰に当てて得意げな顔で、

「確かに、ここは東都大学。私たちが所属している文京大学じゃないわね」

その後で厭らしい笑みを浮かべ、

「それでもここで私たちが踊れるのは明石先輩と浅野先輩がここの関係者に放ったお色気戦法のおかげ……、かな？」

お色気戦法って……。なんだかくの一みいだな。

「確かに、二人とも綺麗だからね」

しいちゃんが笑顔でうなづく。私から見ると、浅野先輩はカッコよさの中に綺麗さと色気があり、明石先輩は明るく元気なかわいさの中に色気を感じる。

「こら、遙。それじゃあ答えになっていないでしょ」

はるちゃんの頭を軽く手のひらで叩いたのは、「ISSEI」と大きく青で書かれた白いTシャツと水色のジーンズ姿の浅野先輩だ。「うわー、かっちゃんとしいちゃんだ。かわいいー！」

明石先輩もつられてやってきた。今にも私たちに抱きつかんという気合を見せている。

「明石先輩、ここで抱きつくのはやめてください」

「分かっているわよかっちゃん、私もそれくらいの分別はついているから」

と言う明石先輩だが、その目は大好きなビーフジャーキーを目の前にした私の飼い犬のペルと同じ光を放っている。本能がそうさせているのだろうか？ とにかく彼女に隙を見せるわけにはいかない。「ところで、なぜここでダンスをしていたのか、ということなんです……」

しいちゃんが浅野先輩を見上げて話を戻す。

「あ、そうそうその事」

浅野先輩曰く、先輩達が所属しているダンスサークルには自大学の中だけでなく他大学ダンスサークルとのつながりもあり、その縁で文化祭に呼ばれることもあるとのこと。

「私は就職活動のせいで練習できる時間が無かったから今日はマネージャーとしての参加なの」

なるほど、文化祭で他の大学のサークルを呼ぶという方法もあるのか……。

ところではるちゃんはこの後暇なのだろうか？ せっかく、会ったのだから一緒に回りたい。

「はるちゃん、よかつたら一緒に文化祭回ろうよ。『文化祭とサークルの関係』について聞きたい話もあるし」

他のメンバーとの手前、文化祭関連の話もしておかないとただの遊びになってしまうじゃない。まあただ遊ぶだけのつもりはないけれどね。

「え、いいの？ 先輩、次の出番までまだ時間があるからいいですよね」

「いいわよー。時間になったらちゃんと戻ってきなさいね」

「せんぱーい、私も三人と一緒にいきたいよお」

私たちに飛びつこうとする明石先輩のこめかみを浅野先輩が強く抑える。

「あなたは部長としての仕事をしなさい。他のサークルへの挨拶周りに済んでいないでしょ」

「うう、前が真っ暗で見えないよお」

手のひらを思いつきり前へ広げて前に進もうとしている明石先輩を見ながらはるちゃんが部長の仕事について解説する。

「東都大学外のダンスサークルでこの文化祭に来ているのは私たちだけじゃないから、これを機会に知り合いを増やそうってことなのよ」

部長の仕事は大変だなあ。

というわけで、私たちの文化祭めぐりにはるちゃんが加わった。

第十二話 突撃！隣の文化祭（二）

「ダンスしていたから小腹が空いたよー。せつかくの文化祭だから何か食べようよー」

はるちゃんが、鉄板の上で跳ねる油の音に足を止める。

「えーっ、お昼にはまだ早いよ、はるちゃん」

まだ十一時になるかならないかではないか。

「一つのを三人で分け合えばお腹は一杯にならないでしょ。多くの種類を食べれば文化祭の参考になるんじゃない？」

「なるほど、一人前を三人で食べればいいのか」

「そうだね、それならいろんなものが食べられるね」

「よし、それじゃあ焼きそばを買おうよ。すいませーん、焼きそば一つ下さい」

はるちゃんは焼きそばの屋台を見つけると人をするりと交わしながら屋台の方へと歩く。あの身のこなしはダンスをやっているからかな。

「ほらー、しいちゃんかつちゃんも来なよ。ここの焼きそばすごく美味しそうだよ」

私たちが追いついたとき、すでにはるちゃんはパックに入った焼きそばを手にしていた。

「ああ、割り箸は三本をお願いします」

と笑顔で答えるはるちゃんだったが、

「……って私たちは決して貧乏ではないからね、勘違いしないでよ！」

といきなり右手に腰を当てて店員に叫びだした。

「ちよつと、はるちゃん何店員さんを威嚇しているのよ！ すいません、ただのボケですから」

私にはるちゃんの前に出て店員さんに謝る。

「だってー、あの店員『何で三本なんだ』って顔をしていたのよ。」

失礼しちゃう」

「そうだね、せっかく美味しい焼きそばなのに、それじゃあ残念だね」

しいちゃんは早くも焼きそばをすすっている。

「ほんとよ、焼きそばはおいしいのに」

はるちゃんは勢いよく音を立てて焼きそばをすすする。まるで店員への不満を焼きそばにぶつけているようだ。

私たちは他の屋台のメニューも分け合って食べた。オムレツと焼きそばが合わさったオムソバ、焼き飯と焼きそばを合わせたそばめし。かけそば、もりそば、そばまんじゅう……ってそばばかり。

食べ終わった皿や割り箸は数十メートルごとに設置されているゴミ袋へ捨てる。ゴミ袋の種類はただ「燃えるゴミ」と「燃えないゴミ」の二種類に分かれているのではなく、「割り箸、串」、「再利用パック、紙皿」、「カン」、「ビン」、「ペットボトル」と細かく分類されている。

「このゴミの処理の仕方は参考になるね」

ゴミをまとめていく実行委員の姿を、しいちゃんが携帯電話につけられたカメラで写真に撮っていく。

屋台を歩いているうちに、目の前に大きな真白い壁が現れた。レングを積み重ねたものに画用紙を一面に貼り付けたもので、高さはしいちゃん（身長一四七センチメートル）の倍はありそうだ。幅は……はるちゃん（身長一七一センチメートル）二人分かな。その壁の前には脚立やら小さな台やらが並べられている。

「これは一体何……？ カンヴァス？」

私が見上げている隣でしいちゃんがパンフレットに目を通す。

「美術部主催のお絵かきコーナーだつて。みんながそれぞれ好きな絵をこの壁に描いて、それらをまとめて一つの作品にするらしいよ」

よく見ると、壁の隣には会議室でよく見られる長いテーブルが二つ。その上には様々な色の絵の具と筆が置かれている。

大きな紙にみんなで絵を描く、今日は幸い晴れているけど、雨が降っていたらきつと紙が濡れてしまつて絵を描くどころではなくなつてしまつたらうな。

「文化祭がスタートしてまだ時間が経っていないから、誰も絵を描いていないんだね」

唯一壁の右端の下の方に、自由を謳歌する二羽の七面鳥の絵が描かれている。

「それじゃあ、あの七面鳥の隣に何か絵を描こうか。どうせなら三人で協力して一つの絵を描こう！」

はるちゃんが張り切つて絵筆を手に取る。しいちゃんもゆつくりと絵筆を取つた。私は気乗りしないまま絵筆を取つた。

「それじゃあかつちゃんからスタート！」

「えっ！ 私から!？」

「かつちゃん、頑張つてー」

しいちゃんが微笑ましい顔で声援を送る。

二人がなんだかノリノリなので、しょうがないから絵を描こうと私は壁に絵筆を近づける。といつても何を描いたらいいのか……と私は身近にあるものを頭の中へ総動員する。

すると頭の中に一頭の茶色い犬が……。そうだペルだ、ペルを描こう。私は絵筆を茶色の絵の具の缶に入れ、白の壁に力強く茶色の線を引きいた。

そして五分後……。

「なに……それ？」

「その絵は動物かな」

私たちの目に表れたのは、茶色のとげとげした物体だった。ペル犬のつもりで描いたのだが、描いた本人が見ても犬の形をしていない。足らしいものが五本ある。あ、よく見たらそのうちの一本は鼻だ。

実は私は絵を描くことが大の苦手なのだ。通信簿の美術の成績は技術ではなく、関心態度で点を稼いで三を取つたのがやっとだ。

「いや、これは動物ではないんだ……」

私は顔を赤くしながら、謎の物体を茶色で塗りつぶす。すると大きな茶色の円ができた。これは一体なんだろう、もう思ったことを言うしかない。

「み、味噌……」

「味噌!？」

はるちゃんが疑いの目を私に向ける。

「えー、味噌はないよ、かつちゃん」

しいちゃんが小さく文句を言う。そうだよ。いくらなんでも味噌はないよね。私は茶色の丸い物体を黒の丸で囲み、その円の両端から線を一本ずつ下に引いた。

「み、味噌汁の鍋!」

これが精一杯だ。私は鍋の部分を緑色に塗って、力強く絵の完成を叫ぶと、はるちゃんの右肩を叩いた。

「はるちゃん、パス!」

「よっしや、まかせて。私はこう見えても美術の成績は五だったんだから」

そういうと、はるちゃんはしいちゃんの顔を見て。

「しいちゃんにモデルになってほしいな」

「えー、私がモデルになるの？ 恥ずかしいよ」

しいちゃんの頬がほんのり赤く染まる。

「いいからいいから、七面鳥の絵の前に立って」

はるちゃんに誘われてしいちゃんは手をもじもじさせながら七面鳥の前に立つ。

はるちゃんは絵筆を手にとると、しいちゃんを見ながら小さな茶色い円を描いた。そして右手を腰に当てて

「味噌!」

と叫んだ。

「ちよつと、はるちゃん! しいちゃんを立たせた意味が無いじゃない!」

「かつちゃんの言うとおりでよ。それともこの味噌が私だと言いたいの？」

しいちゃんが味噌か、なんかすごくパンチが効いていそうだ。

「嘘よ、これからが本番よ」

はるちゃんはそう言うと、黒の絵筆を手に取り、様々な線を描き始めた。やがてその線がしいちゃんの顔になる。

「味噌汁を作っているしいちゃん」

さすが美術が五を取ったはるちゃんだ。彼女は見事にしいちゃんの頭部と、手、味噌がのった「おたま」と味噌を溶かそうとする箸を完成させた。

「さあ、残った体の部分と、味噌汁の具はしいちゃんが描いて」

「すごいよ、私にそっくり……。ありがとうはるちゃん」

しいちゃんのはるちゃんから絵筆を受け取ると、まだ描かれていない自分の体を描き始めた。

そして十分後……。 「台所で味噌汁を作るしいちゃん」の絵が完成した。しいちゃんも絵を描くのが得意だったようで、はるちゃんのそれと匹敵している。私の無様な味噌汁から、よくぞここまで描いてくれた。と、私は二人に感謝した。

「お味噌汁の具は定番のわかめと豆腐にしたんだ」

しいちゃんが私の描いたお味噌汁の絵を指差した。

「そうね、まさに定番の味噌汁ね。だけど何かが足りないな……。もう一つ具を付け足そう」

そう言って、はるちゃんは絵筆を白い絵の具の缶に入れると、味噌汁の絵に白い物体を付け足していった。

「はるちゃん、その白い物体は何？」

「鳥肉よ、と・り・に・く」

ああ、鶏肉か。味噌汁の中に入れるなんてあまり聞いたこと無いけど。

「鳥と言っても鶏じゃないわよ。他の鳥の肉よ」

はるちゃんの目がなんだか楽しそうだ。

「他の鳥？」

はるちゃんは絵筆を私たちの描いた絵の隣にある七面鳥の絵に向けた。

「し、七面鳥の肉？」

私としいちゃんが驚きの声を上げる。いつものことながら私がアルトで、しいちゃんがソプラノだ。

「そうよ、七面鳥よ。哀れこの二羽の七面鳥は、せつかく檻から逃げて自由になれたのに、しいちゃんに捕まって味噌汁の具になったのよ」

「もう、はるちゃん。せつかくいい絵が描けたのに、そんな変な話を作らないでよ」

しいちゃんが七面鳥の肉を味噌汁で潰していった。

「だってこのコーナーのコンセプトって、いろんな人が描いた絵を合わせて一つのアートにするんでしょ？ 七面鳥の絵とこの絵に関連性を持たせるのなら、彼らを味噌汁の中へ入れてあげないと……」

「そんなかわいそうな関連付けはいらないの！」

「やっぱり、しいちゃんだから銃や投げ縄は使わず素手で捕まえるんだよね」

私の頭の中には自由を謳歌していた二羽の七面鳥がしいちゃんの放つパンチに倒れていく姿が流れている。続けて倒れた七面鳥の足を掴み自宅へと引きずる、たくましいしいちゃんの姿が映し出された。

そして七面鳥の毛をむしってぶつ切りにして……。って残酷だな、私は自分自身の想像に背筋を寒くさせた。

「もう、かつちゃんまで！」

しいちゃんは七面鳥の絵に何かを書こうとしたが、手を止めて私とはるちゃんの方を見る。

「この二羽の七面鳥は、私の作ったお味噌汁が食べられることを喜んでいるの、そういうことなの！」

「分かったよ、しいちゃん。しいちゃんの言うとおりだよ」

これ以上しいちゃんに逆らったら、しいちゃんのパンチに倒れるのは七面鳥ではなくて私たちになってしまう。

そして足を掴まれ、自宅へと引きずられ……。……ものすごく怖いことが起こりそうなので、想像はこのへんでやめておこう。

「そんなことより味噌汁の絵を描いていたら、お腹が空いてきちゃったよ」

はるちゃん、さっきまでいっぱいそばを食べていたじゃない……。……と思っていた私だったが、不思議なことにお腹が空いてきた。味噌汁は別腹なのだろうか、そんなのは聞いたこと無いけど。

十二時を告げる鐘の音が、私の空腹感をさらに増していくのであった。

第十三話 突撃！隣の文化祭（三）

午後二時 午後の出番が近付いたはるちゃんと別れ、彼女の元気なダンスを見た私としいちゃんは、赤門あかもんの前へと急いだ。赤門とは、江戸時代この土地を屋敷地にしていた加賀前田家かがまえだが、徳川將軍の姫君を嫁に迎え入れるために作られた門だと言われている。

ここで三つの組に別れていた実行委員のメンバーが一旦集まり、文化祭を回るグループを変えるのだ。

赤門の前ではすでに四人が待つていた。

「ごめん、ちよつと遅れちゃった」

「大丈夫だよ。私たちも来たばかりだから」

「それじゃあ回るグループを決めようか」

「じゃあグッチョッパーで決めよう。グッチョッパー」

グッチョッパーとはじゃんけんで使うグー、チョキ、パーの三種類のうちどれか一つを出し、同じ種類を出した人とグループを決めるものである。

そしてその結果は……。

「ダーリンと私の愛は強いのです」

前半戦に続き、かわちゃんとけーまが再びグループを組む。

「私は亜由美と一緒にだね」

しいちゃんが亜由美とグループを組む。

と言うわけで私と組むのはタカビーだ。

「タカビーかあ……」

「なんだその顔は、俺と組むのは不満だというのか」

タカビーが私の顔を見下ろす。ちよつと口がへの字になっている。

「いやいや、そういうつもりで言ったわけじゃないけれど」

「それじゃあ後半戦スタートするよー」

かわちゃんが力強く右手を突き上げた。

午前中よりもお客の数が増えたような気がする。それだけではなく、お客を呼び止める屋台の店員さんの元気も大きくなっている。

「なあ、御徒真知」

タカビーが私を呼び捨てにする。お互いあだ名で呼び合おう、って決めたのに呼び捨てとはどういうことだ。無視してやろう。

「……」

「おーい、御徒町」

「御徒町じゃなくて、御徒真知だつて」

自分の名前は好きになつたとはいえ「御徒町」と呼ばれるのは心外だ。

「なんだ、やつぱり聞こえているんじゃないか」

タカビーが私の頭をポンポンと叩く。うっ、ちよつと馬鹿にされている感じ。

「実行委員同士仲良しになるためにあだ名で呼び合おう、って決めたあだ名がどうして私をフルネームで呼ぶのよ。『かつちゃん』と呼びなさいよ」

「それはちよつと抵抗がある……なぜならお前も知つてのとおり俺はずつと『かつちゃん』と呼ばれていたからだ」

私とタカビーのあだ名は同じ「かつちゃん」だった。そこで私たちは「互いの新しいあだ名を考える」勝負をして、勝った私が「かつちゃん」と呼ばれ、負けたタカビーは今の「タカビー」というあだ名をつけられることになった。

「お前は自分のあだ名を自分で言えるのか？俺は恥ずかしいぞ」
タカビーの目が真剣だ、本当に恥ずかしいのだろう。

「……そんなに恥ずかしいなら、何か別の呼び方を考えなさいよ。自ら決めた『あだ名ルール』を破るのはよくないわよ」

楽しんでるのならともかく、本当に嫌がっている人に対して名前関係でからかいたくはない。

「それじゃあ『かあちゃん』で」

「『かあちゃん』……!?!」

先月あやうく私がタカビーよりつけられそうになったあだ名だ。

「お前が『かつちゃん』を取ったんだから、ちよっとくらいいいだろ。今から俺はお前を『かあちゃん』と呼ぶ」

なんだか納得しがたいけど納得してしまふ論理だ。

「うーん、気に入ってないけど、徐々に慣れるようにするわ」

「かつちゃん」の名は私が取ったのだし勝者の余裕というのを少しは見せておかないと。

「ところでどうして私を呼んだの?」

「あ、それぞれ」

と、タカビーは辺りを見回して。

「外を歩いてもあまり参考にはならん、建物の中に入ろうぜ。午前、亜由美と歩いたときもそうしていたんだ」

「外は参考にならない、ってどうして?」

屋台が参考にならないと言うのだろうか。

「いいかかあちゃんよ、俺達の大学は敷地がこの大学よりはるかに狭い。それもこのような通りや広場だけではなくほとんどが校舎などの建物だ」

確かに言われたとおりで我が文京大学は、敷地が東都大学と比べはるかに狭い。建物も空へ地下へと伸びることで、敷地の狭さを補っているという感じだ。庭はこの大学からしたら庭と呼べる広さではないだろう。

「だからなるべく中でやっている出し物を多く見たいんだ」

「なるほど大学の広さか……。それは気づかなかつたな」

午前中は三人で外の屋台をめぐり回ってそばばかり食べていたな。タカビーは薄い黄色の校舎を指差す。

「ここへはまだ入っていないんだ。かあちゃん行こうぜ」

「それじゃあ」

行こうかとうちゃん、と危つく言いそうになって私は口を抑えた。

建物の中はどこか古錆びている。窓を通して差す光は外のそれとは違い、何か薄い膜を通して見ている気がする。

「建物はうちの大学のほうが頑丈そうだね」

「新しいものが多いからな」

多くの学生の手垢がついて黒光りしている木の手すりを触りながら階段を一段ずつ上る。二階では紙と何本かの鉛筆を持った女子学生が私たちを迎えた。

「今から映画研究会製作の映画を上映します。今回上映する映画はコメディです。時間は十分と短いので、気軽に入ってくださいーい」

「タカビー、映画だってよ。どうする？」

「そんなに時間も取られないようだし、入ってみるか」

私たちは鉛筆とアンケート用紙をもらい、教室へと入った。席に着いて数秒もしないうちに映画は始まった。

「浴槽戦隊、バスレンジャイ！」

のテロップに続いて画面に映し出されたのは、とある銭湯の男湯。雄大な富士山の絵を背におじいちゃんたちがのんびりと日ごろの疲れを癒している。

カメラを向けられているのにおじいちゃんたちは全くお構いなし。その証拠に時々小さなモザイクが画面に映し出される。

そんなおじいちゃんたちののどかな風景の中に異様な物体が！長い細い黒い物体と、茶色い物体。くねくねした細い黒い物体と茶色の物体が一体ずつ浴槽の中でゆらゆらしているのだ。

彼らは口々に「ケー、ケー」と叫んでいる。こいつらが敵なのだろうか？

「待てー！！」

との叫び声とともに、男湯の扉が開かれる。現れたのは頭に木でできた桶を載せて、目を青いマスクで隠す他は何の装飾も無い青の

全身タイトの男だ。

「浴槽戦隊、バスレンジャイ！」

戦隊つて……一人しかないじゃん。

「おのれ、シヨツケーまたお風呂場の排水溝を詰まらせているな！」

あのゆらゆらしている物体は「シヨツケー」と言うのか、「シヨツケー」「しよっ毛ー」つまり毛か……。

「ケー、ケー！」

シヨツケーたちがバスレンジャイに襲い掛かる。

「バスレンジャイパンチ！」

くねくねした（縮れ毛かくせつ毛なのだろう）黒が当たってもいないのに倒れる。

「バスレンジャイキック！」

長細い茶色が当たってもいないのに画面外へ去る。

「ええいもう面倒だ！ バスレンジャーイジユゲムジユゲムパイポパイポー！」

バスレンジャイはくるくる回り始める。残った二人のシヨツケーは「ケー、ケー」と泣き（？）叫びながら扉を開け男湯から去って行く。それにしても長くて覚えにくい技名だなー。

これでお風呂場に平和が訪れたかと思ったらそうではなかった。

浴槽のほうへ振り向いたバスレンジャイは、肩を激しく動かした。

「お、お前はクラドスポリウム・トリコイデス！」

「説明しよう、クラドスポリウム・トリコイデスとは簡単に言ってしまうえばお風呂場で見られる黒かびのことである」

とのナレーションとともに画面が浴槽へと向けられる、気持ちよさそうに目を閉じているおじいちゃん二人に挟まれるようにして黒い物体がのんびりと手足を伸ばして浴槽に浸かっている。クラドスポリウム・トリコイデスとはこいつのことだろう。頭には蛇のような突起が出ている。

「ふふふ、この風呂場全体を我の力で黒く染めて見せるわ！」

風呂場中黒カビだらけにするなんて、恐ろしいことを言っている

のだが、その声は気の抜けた高い声なので、怖いどころか思わず噴出してしまふ。

「そんなことはさせんぞ、バスレンジャー……ジヨ！」

さつきとは違って短い技名だ。バスレンジャーが右手を突き出すと、辺り一面に風呂桶が飛び交いクラドスポリウム・トリコイデスに襲い掛かる。

「う、うわっ。痛い、痛いカビー！」

クラドスポリウム・トリコイデスに当たった桶の一つが跳ね返って右隣のおじいちゃんに当たった。しかしおじいちゃんは痛がらずじっと目を瞑っている。大丈夫なのか？

そのうちバスレンジャー自らが手を使ってクラドスポリウム・トリコイデスに向かって桶を投げだした。こうなってしまったら技も何もあつたものじゃない。

「く、くそ覚えているでござす！ 逃げるぜよ！」

語尾を統一させないままクラドスポリウム・トリコイデスは歩いて（しかもバスレンジャーの目の前を通り過ぎて）男湯を立ち去っていった。

「正義は勝つのだ、世界の風呂場はこのバスレンジャーが守る！」

左手を高々と上げて決め台詞を放ったバスレンジャーの前を白いタオルである部分を隠したおじいちゃんが通り過ぎていった。

「なんかいろいろ自由な映画だったねー」

「うちの大学にも映画研究会はあるけど、ああいつの作るのかな…」

アンケートに答えを書きながら私とタカビーは映画のシーンを思い浮かべる。

「必ずしもそうとは限らないんじゃない？ この研究会も『今回はコメディ』って言っていたから普通の作品も作っていると思うけど……」

教室の外から先ほどの女子学生の声が聞こえる。

「次回の上映はシリアスな恋愛です。上映時間は十五分を予定しています」

「次はシリアスだってよ、どうする？」

「十五分ぐらいというなら……。見ていくか？」

「そうね」

こうして私とタカビーはシリアスな恋愛映画を見ることになった。なんかはたから見たらデートしているみたいだけど、二人の間には決してそんな気持ちは無いのであった。

第十四話 突撃！隣の文化祭（四）

「結局一時間も映画見ていたね」

時刻は午後三時半を回ったところ、まだ私たちは東都大学の薄い黄色の校舎に居る。その二階にある映画研究会の教室を出た私はタカビーを見上げる。

「ぬるいギャグ作品と、真面目な作品が交互に上映されているのがなんと……。絶妙な組み合わせと言うか……」

そんな組み合わせにはまってしまった私たちは、ついつい計四本の作品を見ることになってしまったのだ。

「次はどこへ行くの？ 行き先はタカビーに任せるけど」

「とりあえず、まだこの建物にはいようと思うけど……」

タカビーがパンフレットを広げて階段を見る。そしてそのまま階段を上った。私はタカビーの後を追う。

三階へ上ると白衣を着た男子大生が私たちを見るなり声をかけた。

「『人間科学研究会』です。体力測定をしていきますか？ 難しい機械を使わずに測定できますよ」

「体力測定か……まぐるで鍛えた俺の力を見せてやるよ」

タカビーは意気高々に扉に手をかける。しかし私の知り合いにはしいちゃんや、イラケン選手など体力に自信のある人たちが多いからな。そんじょそこの力じゃ驚きはしない。

タカビーが扉を開けた瞬間、頭の横を何かが通り過ぎた。その直後後ろから何かが大きく弾んだ音が響く。

「何……？」

後ろを向くと、何かボール状のものが転がっていた。その上下には白いゴムひものようなものがついている。

「ボー、ボールか？」

そう呟くタカビーの顔を見て私は息を飲んだ。タカビーの頬に一本の血の線が走っている。

「大変、タカビー血が出ているよ」

私は財布からバンソウコを取り出して、タカビーに渡す。

「血……、さっきのか？」

どうやら本人は傷ついたことに気づいていなかったようだ。

「どうしてー、どうしてあんなに飛ぶのー？」

部屋の中から聞き覚えのある声が、もしや……。

「やっぱりいいちゃんだー」

中にいたのはいいちゃんと亜由美だった。彼女達の前を白いゴムひものようなものが垂れ下がっている。部屋の外に転がっているボールについているものと同じだ。

「あ、かつちゃんだ。ボールがそっちへ飛んでいったけど、大丈夫だった」

いいちゃんが私に駆け寄り、私の足元まで転がっていたボールを拾う。

「いや、私は大丈夫なんだけど、タカビーがね」

「直撃していたら洒落にならなかったかもしれない」

タカビーは既にバンソウコを貼りおえていた。

「え、タカビー怪我？ 大丈夫？」

いいちゃんが背を一生懸命伸ばして、タカビーのバンソウコをさわる。

「まあほんのかすり傷だから大丈夫だよ」

「そう、それならいいけど……」

私はいいちゃんが手にしている、ボールを軽く叩く。

「ところでこのボールは何なの？」

「ああ、これはね」

「パンチ力測定に使うボールです。殴ったときのゴムの伸びた長さでパンチ力を測るんですって」

いいちゃんに代わって亜由美が部屋の中から答える。

「測定だから、思いつきり力を込めたら壊れちゃったみたい」

「みたい、じゃないですよ。この後測定できないじゃないですか。」

ほんとにすいません」

亜由美が部員一人ひとりに頭を下げる。部員さんは「い、いえ……」と苦笑する。まさか女性に壊されるとは思ってもいなかっただろう。

そもそも体力測定用の器具を壊すなんて、しいちゃんのパンチ力はどれだけのものなんだ。

「ほ、他のところ行こうか、タカビー」

「そ、そうだな。ここは二人がすでに見ていることだし」

しいちゃんの力のすごさを見せ付けられて、タカビーは先ほどの意気込みを殺がれてしまったようだ。

薄い黄色の校舎を出たときには時刻は四時の手前であった。

「あの向かいの建物にも入ってないや」

タカビーが指差す先はこの大学には珍しい鉄筋コンクリート製の建物だった。

「あの建物は新しそうね」

目の前の通りを行きかう人避けながらコンクリートの建物の中に入る。

中は先ほどの建物と違い、差す光が太陽からそのまま届いたかのようなまぶしさを受ける。

「茨城県サークルです。茨城の名産品が食べられます。アンコウせんべい、梅干、納豆」

納豆と聞いた私は素早くその部屋の前を通り過ぎた。

「おい、かあちゃん待てよ」

タカビーが私の後を追いかける。鉄道部の部室の前で私はタカビーに追いつかれた。

「どうした、いきなり早歩きなんて」

「別に、ちよつと歩きたかっただけよ」

「ふうん」とタカビーは私の顔と茨城県サークルの看板を交互に興味深そうに見る。

「梅干が嫌いなのか」

「梅干は嫌いじゃないわよ」

かと言って好きでもないが。タカビーは私の右足を見て指差した。
「かあちゃん、納豆踏んでる」

「え、納豆？ くさっー！ いやっー！」

私は右足を上げて壁につけると、上下に激しくこすり付ける。納豆なんて大嫌い！

「いや、それは嘘なんだけどな」
「嘘ー？」

私は目を細めてタカビーのほうを見る。タカビーはしてやったり、とにやにや笑っている。

「納豆が嫌いなんだな」

私は壁につけていた右足をそのままタカビーに向ける。ジーンズをはいているので、パンツが見られる心配はしなくてよい。

「蹴るぞー」

「冗談だって、そんなに怒るなって……。あ」

笑顔で私の足を掴んだタカビーだったが、私の靴底を見て小さく声を上げる。

「どうしたの、タカビー」

「いや、ほんとになんか踏んでいると思ってな……。……ちよつと臭うぞ」

ちよつと臭うって本当に私は納豆を踏んでしまったのではないか？

「タカビー、靴洗ってー！」

私は靴を脱いでタカビーに差し出す。

「なんで俺がお前の靴を洗わなきゃいけないのだよ。自分で洗えばいいだろ」

こうして私は泣く泣く女子トイレで靴底を洗うことになってしまった。でも全然納豆臭くなかったけどな、嘘だったら本当にタカビーを蹴ってやるうか。

靴底をティッシュで丁寧に拭いた私は靴を履いて、トイレを出る。

「おい、御徒町」

私の姿を見るやタカビーが笑顔で私を呼ぶ。

「その呼び方はルール違反だって言ったでしょ」

私はタカビーを睨みつける。

「まあそう睨むなって、御徒町駅を発見したのだ」

「は、御徒町駅？」

「まあ来れば分かるって」

タカビーは私の腕を取ると、「鉄道研究会」と看板のある部屋へと引つ張った。

ほんとだ、御徒町駅だ。

私の下を緑色のラインを引いた山手線の模型電車が走る。それは上野駅うえのを発車し、数秒後には御徒町駅に到着する。私はその中間で座っているのだ。

「この模型よくできているだろう」

「ほんと、よくぞここまで、と感心しちゃうよ」

上野駅や御徒町駅だけではなく、駒込駅こまごめや五反田駅ごたんだなど、山手線に属する全ての駅が一つの教室に小さいながらも再現されている。

「どうした、御徒町駅に会えて嬉しいのか？」

タカビーが私の右隣にしゃがんで御徒町駅をなでる。

「嬉しいってわけじゃないけど……」

正直簡単には説明することはできない。ただ確かなことは「御徒町駅」と聞いても、もう嫌な気持ちにならないことだろう。私がこうして「御徒町駅」の模型を見ているのは、自分の名前をもっと好きになるために「御徒町駅」に関わっていきたいということだろうか。

山手線が私の前を通り過ぎていく。

「はい、ちよつとどいてください」

鉄道研究会の人だろうか、私の前にあるレールの横にもう一本レールをつけていく。レールは御徒町駅の前を通過し、上野駅を経て

田端^{たはた}駅までつなぐ。

やがて田端駅から青いラインを引いた電車が走り出した。うわあ、京浜東北線だ。

やがけ京浜東北線の電車は、御徒町駅に停車する。それと同時に山手線の電車が御徒町駅のホームに入る。この模型、本当によくできているなあ。

「おい、かあちゃん」

「なあに、タカビー？」

私は勢いよくタカビーのほうを振り向く。タカビーは私の顔を見ると、ぽんぽんと私の頭を叩いた。

「顔がにやけているぞ」

私は自分の頬を両手で包んでみる。だいぶ緩んでいる。やはり私は御徒町駅のことか……。

「お前は鉄道がそんなに好きなのか？」

「違うわよ、私は別に鉄道が好きじゃないわよ」

地下鉄の通風孔から聞こえてくる電車の通過音で楽しんだり、ビルとビルとの間からちらつと一瞬見える電車の姿に興奮したりなんてしてないわよ。

「それじゃあなんでそんなに喜んでいるんだ？」

「そ、それは……」

御徒町駅のことを好きだからかな？ でもそうだもしてもそんなこと言えるわけがないじゃない、恥ずかしい。

「もう、どうでもいいでしょそんなこと。次の部屋行くわよ！」

私は立ち上がって鉄道研究会の部屋を出た。

「おい、待てよかあちゃん」

タカビーの声が後ろから聞こえるが、私は気にせずどんどん歩きたいには建物の外へ出てしまった。

時間は四時半を過ぎた頃、一日目の仕入れ分が無くなったせいか早くも店を閉めている屋台がちらほら見える。

「一日目の終わりまであと一時間半か……」

タカビーが追いついたのを確認して私は彼に聞こえるように呟いた。

「そうだな、あとぐるっと一回りしたら終わりだろうな」

「そういえば、私気になるのが一つあるんだ。ベートベン作曲『運命』の演奏。クラシック音楽が無料で聞けるんだって」

私が目を輝かせてタカビーのほうを見ると、タカビーはパンフレットを開いてページをめくり……。そして叫んだ。

「おい、演奏開始まであと五分しかないぞ！」

「え、嘘！ それじゃあ急がないと」

行きかう人の流れを交わしながら、私たちは演奏会場へと急いだ。

第十五話 選ばれし者

六月が近付いて来るにしたがって、肌を刺す太陽の光が強くなってきた。そんな光が降り注ぐ中を私としいちゃんとはるちゃんは、大学の地下一階にある食堂へと向かっている。

「東都大学の文化祭楽しかったね」

私が真ん中を歩くしいちゃんに声をかけると、しいちゃんは可愛く微笑んだ。

「そうだね、私たちもあんなすごい文化祭が作れるといいね」

「私もあんな舞台でもう一度踊れたらなー」

しいちゃんの向こう側ではるちゃんが呟く。背の高いはるちゃんの顔に視界を合わせると、間を歩く背の小さいしいちゃんの姿は見えなくなる。

「うーん、でもこの大学は外の敷地が狭いからなー」

確かにうちの大学は建物ばかりだ。

「逆に建物が多いことを活かす企画を考えないとね」

螺旋階段を下りると、食堂の入り口が見えてきた。食堂は地下一階にあるけど隣が吹き抜けのテラスになっているのでまぶしい光が中まで入り自然光でも充分明るい。

「またとんかつ定食売り切れてるー!」

食堂が朝の十時からやっているという点を割り引いても売切れすぎだろう。初めから無いのならメニューに載せなければいいのに。

「こら、落ち着きなさいかつちゃん。とんかつ定食が無ければカツカレーを食べればいいじゃない」

「はるちゃん、あんたはどこぞの国の女王様か。革命起こすぞ」

と、はるちゃんに文句を言いながらも、私はしょうがなくカツカレーを買った。はるちゃんはエビピラフを買う。

「ねえかつちゃん、私思うんだけど、カツカレーもとんかつ定食も

同じとんかつを使っているんでしょ？ とんかつ定食が食べられなくてもカツカレーで充分だと思っただけど……」

「ああん、もうはるちゃんは分かっているじゃない」

サクサクしたとんかつの衣と水気のあるキャベツの千切りを同時に口の中に入れ、衣と豚肉、ソース、キャベツで送る味の四重奏を楽しむのがとんかつ定食の醍醐味ではないか。カレーでは衣がカレールーになじんでしまい、どうしてもカレーの味が勝ってしまう。

「と、言うわけよ」

「私にはどれもそれぞれの味があっというと思うんだけどな……」

トレイにカツカレーを載せてしいちゃんの待つ席へ向かうと、席にはしいちゃんの他にもう一人、その人が食べているものは……。

「と、とんかつ定食」

私の目の前には「幻のメニュー」もしくは「存在しないメニュー」なはずのとんかつ定食が置かれていた。いつも売り切れなこの定食を食べる選ばれし者は誰であろう自治会の会長さんではないか。緑色のワイシャツを第二ボタンから開けている。

学生から選ばれし（といっても私はその選挙のことを知らなかったのだが）者が「幻のメニュー」を食べる。その一方で一般学生の私はカツカレー……。格差というものはこうしてできるのであるうか。深刻な社会問題だ。革命を起こすべきだ。

「どうした、このとんかつに何か問題でもあるのか？」

会長は私とはるちゃんを見て不思議そうに尋ねる。

「じつは会長さんが食べているとんかつ定食、いつも私たちが来るときは売り切れていて、本当にメニューとして存在するかどうか疑問に思っていたところなんです」

「そうだったのか、このとんかつ定食はいつも在庫が少ないからな。今日は俺が最後の一品だったようだ」

とんかつがそんなに減っていないところを見ると、私と会長がこの食堂に来たのはほんの僅かな差だったようだ。くそう、とんかつ定食……。

「会長さんはいつもとんかつ定食を食べているのですか？」

しいちゃんが自分で作ったタコさんウィンナーをフォークに刺しながら会長さんに尋ねる。

「いつもではないが、とんかつ定食が食べたいときは必ずとんかつ定食を注文しているな」

必ず、と言うことはとんかつ定食勝率百パーセントということか……。選ばれし人間は違うな。

「会長さん、ここのとんかつ定食は美味しいですか？」

いつもとんかつ定食を食べられるくせに、まずいと言ったら承知しないぞ。

会長は箸を置くと、ふつと口元に優しい笑みを浮かべた。

「まあ美味しい部類に入るな。豚とんでんねん殿念の味には適わないが……」

「ああ、豚殿念のとんかつは美味しいですね、会長」

はるちゃんが唾を飲み込み笑顔で応える。きつと頭の中に豚殿念のとんかつが浮かんでいるのだろう。

豚殿念とはこの大学の近くにあるとんかつ屋さんで、こここの学生の間では評判のお店である。はるちゃんも先輩とよく通っているらしい。

私としいちゃんは、先日浅野先輩のおごりで初めてそのお店のとんかつを食べた。肉が普通のとんかつより分厚くて、そのくせ口の中に入れると柔らかい肉の感触とともに肉汁がじわりと口の中に染み出してくる。衣も口の中でサクサクと音を立てるのが楽しい。今まで食べたとんかつの中で一番美味しいとんかつだったと言っても過言ではない。

「私もこの前初めて食べたんですけど、あそこはほんとに美味しいですよ」

しいちゃんも豚殿念のとんかつを思い出したのだろう。左手を頬に当てて、嬉しそうな表情を見せる。

「三人とも、静かに」

不意にはるちゃんがテーブルを二回小さく叩いた。直後に食堂の

おばさんがモップを片手に私たちの横を通り過ぎる。危うくデリカシーの無い行為をするところであった、と私たちはほっと胸を撫で下ろした。とんかつの話題はこれで終わりとなった。

「そういえば、私たち会長さんの名前聞いて無かったですね」

しいちゃんが尋ねると、とんかつを噛んでいる会長の口が一瞬だけが止まった。私はそれを見逃さなかった。きっと名前に何かあるに違いない。こういうときは彼と同じくおかしな名前を持つ（と私がそう思っている）自分から先に名乗ったほうが相手を安心させるものだ。

「ええと、私の名前はですね、御徒……」

「知っている」

と、会長は箸を置くと私、しいちゃん、はるちゃんの順に手を差し出し

「御徒真知さん、椎名真智さん、伊井国遙さん、だろう」

自己紹介はしていなかったものの、何度か会っているので名前を覚えてしまったのだろう。（というかはるちゃんとは一回しか会っていないはずである）さすがは会長だ。選ばれし者はやっぱり違うな。（私は選んでいないけどね）

「そ、そうです。その通りです。略してかつちゃん、しいちゃん、はるちゃんです」

「そしていよいよ俺の出番と言うわけか……」

会長が両手をテーブルについて座りなおす。そして私たちをしっかりと見てついに自分の名前を告げた。

「俺の名前はあねがこうじ姉小路よりつな頼綱と言っ」

「姉小路」

私としいちゃんが同時に声を上げる。いつもの事ながら私がアルト、しいちゃんがソプラノでお送りいたします。

姉小路と聞けば、なにやらお金持ちのイメージが頭の中に浮かぶ。ほら、家の敷地が東京ドームの何倍分もあって、（当然この大学よ

りも広くて)その庭には薔薇や百合の花が敷き詰められていて、愛犬のシェパードやラブラドル・レトリバーが楽しそうに走り回っていて……。家の中は何でもスイッチ一つで動いてご飯は有名レストランのシェフが出張して作る……。ああ、なんてリッチな生活なんだろう。

「……何を想像しているかは大体予想はつくが、残念なことに俺の家庭は普通のサラリーマンだぞ」

「そうですか、残念です」

会長の言葉に私は一瞬にしてその想像を消し去った。これで本当にお金持ちだったら革命ものだ。私はあやうくトランプの「三」を四枚用意して革命を起こすところであった。

「姉小路頼綱……」

はるちゃんは会長のフルネームを何度も呟いている。

「おや、君はちよつと違うことを考えているようだな」

「そうなの、はるちゃん？」

しいちゃんが声をかけるとはるちゃんは、はっと我に帰った。そして私としいちゃんを見るなり、私たちを咎めるように口を開いた。

「姉小路頼綱と言えば飛驒ひでたの戦国大名に決まっているじゃないの！」

「そう飛驒、今の岐阜県ぎふ。姉小路と聞いて大方二人のような考えをするんだけど、君のように戦国大名を思い浮かべる人はなかなかいないんだ」

会長は笑みを浮かべる。はるちゃんの想像がよほど嬉しいのだから。

「まあマイナーな戦国大名だからね。知っている人はそんなにいないと思うんだ」

それを知っていたはるちゃんはさすが日本史教授の娘である。

「テレビゲームにもよく登場するのに、そんなに有名ではないんですよね。弱小大名扱いだからかな？」

「そうそう、大体ゲーム開始からすぐに武田たけだか上杉うえすぎに滅ぼされるんだよな。たまに山国のせいかな誰にも気づかれずに終盤まで生き残っ

ていることもあるけど」

上杉……、確かしいちゃんの実家のある米沢は上杉で有名だな。

「それでもいざ攻めてみたら弱小大名だけにあっけなく負けちゃうんですよね」

はるちゃんと姉小路会長の間で話が弾んでいるが、私にはついていけない。

「かつちゃん、歴史ゲームってやったことある？」

はるちゃんと姉小路会長を見ながらしいちゃんが私に小声で呟く。そう言えば去年もこんなシーンがあったな。その時は話に夢中になつていたのはしいちゃんだったが。

「ちよつとはやったことあるけど、誰が出ていたかなんて覚えていないよ」

話が弾む会長の前で、残されたとんかつの衣がしつとりとし始めている。もつたいたいけど会長の変わりに私が食べるといってお行儀の悪いことはできない。

とんかつ定食に選ばれし人間はこういう贅沢なこともできるのか、と私は冷めかけたカツカレーを口にした。

第十六話 勝手に胸のランキング

「私、しいちゃんのようにバイトをしようかと思うんだー」

六月に入り、梅雨の足音がそろそろ聞こえてきそうな今日この頃。梅雨の予行演習でもいえそうな灰色の雨雲を見つめてはるちゃんが呟いた。

「はるちゃん、何か欲しいものでもあるの？」

マンガーターを片手にしいちゃんがはるちゃんを見る。はるちゃんの家は実家なので、アルバイトをしなくても家賃や生活費には困らないはずだ。

「そうじゃなくて、文化祭のためにお金を稼ごうと思って」

はるちゃんはその髪と同じくらいの黒さのコーヒーをすすする。

「文化祭のために？」

「そう、二人が作る文化祭で私たちも何かイベントをするからさ、そのための資金よ。例えば屋台にするなら食材や食器を用意しなくちゃいけないでしょ？ 普段徴収している部費じゃ足りないから毎年部員がアルバイトをして稼いでいるんだって。一年生はまだ活動に慣れていないからということ、アルバイトする必要はなかったけど、私も二年生だからね」

そうか、実行委員を務める私たちだけじゃなく、参加するサークルの側もいろいろ準備が必要なんだ、と私はミルクで白くにごったコーヒーをすすする。

「そう言えばはるちゃんのサークルは去年は焼きそばの屋台を出していたね」

私は二本の鉄べらを両手に持ち、麺と具材を焼けた鉄板の上で優雅に操っていた浅野先輩の姿を思い出した。そしてセーラ服の女の子を見つめるや必ずと言っていいほど自分の屋台へ引きずり込もうとした明石先輩の姿も。

「あと、『ダンスで解決！ お悩み相談室』ね」

進路や友達関係などの悩みなど、踊って忘れてしまおう、というコンセプトのもと、一号館にある教室の一つを借りて行った企画である。はるちゃんの話では、一応お客の悩みは聞いたけれど、最終的にどんな悩みでも強引に踊りで解決したのだという。まあ私といちゃん楽しかったのによしとするか。

「あれ、なんでああいう企画ができたか知ってる？」

「コーヒーを飲み終えたはるちゃんが綺麗な笑顔を私に見せる。

「うん？ 何か秘密でもあるのかな」

しいちゃんが食いつくと、はるちゃんは「それはね……」と身を乗り出した。私も身を乗り出してはるちゃんの顔へと近付く。

「明石先輩が進路に悩む女子高生にたくさん会いたくて持ち込んだ企画なのよ」

私の頭の中には悩める女子高生の相談を受ける明石先輩の姿が……。悩める女子高生の肩をそっと抱きしめ、まずは人生の先輩らしく悩みに答えて、そしてダンスサークルだからダンスを教えて、そしてその後は……。一体何を教える？ ほにやららとかふにやららとか教えちゃう？ 駄目です明石先輩、それって犯罪です……。

「女子高生が好きな明石先輩が考えそうなことだね」

しいちゃんの声に私ははっと我に帰った。危なかった、もう少しで危ない妄想をするところだった。

「だけど蓋を開けてみたら自分が相談役のときは女子高生があんまり来なかったんで、明石先輩思いつきり落ち込んだのよ」

「うふふ、落ち込んだときの明石先輩想像できちゃう」

しいちゃん言葉に助けられて、私の頭の中には悲しみにくれる明石先輩の姿が……。って、明石先輩の妄想はやめておこう。今日は変な方向に行きそうだ。

「もちろん今年も面白い企画を考えているところよ」

「楽しみにしているよ、はるちゃん。アルバイトかー。はるちゃんと遊ぶ時間が少なくなっちゃうのは残念だなー」

しいちゃんがちょっと悲しそうな顔をする。

「二人ともこれからますます文化祭の準備の時間に取られるんだからおあいこだよ。椎名町駅の南口にある大きな本屋さんにいるから、もし学校終わりに暇があつたら足を運んでみてよ」

そう言つてはるちゃんは首を傾げた。

「いや、二人の家と方向が全然違うから椎名町に来る用事はないか……それじゃあ一回も来なかつたら明石先輩の楽しいお仕置きを受けるつてことで」

私としいちゃんのカップを持つ手が止まった。二人の飲み物がカップの中で小さな波を立てる。

「行く、是非行かせて頂きます」

「遊びに行くから大丈夫だよ」

明石先輩にとつては楽しいことかもしれないけど、私たちにとつては痛いような気持ちいいような……、微妙なことをされるに決まっている。絶対一度は足を運ばなくては。

「ところで今日は実行委員のメンバーとしいちゃんの家でお泊りするんでしょ。いいなー」

そう言つてはるちゃんは口を尖らせる。

「ただのみんなでお泊り会じゃないから、文化祭の打合せで理事会全員集まつてミーティングをするのよ」

メンバーはこの前東都大学の文化祭に行った六人。亜由美は実行委員途中参加だが、私たちの補佐役として理事会の一員に入ることになった。口調は相変わらずの敬語だが、最近やつと「あだ名ルール」を受け入れて、私を「かつちゃん」を呼ぶようになっていた。

今日の谷中の商店街はなんだか賑やかだ。「初夏の地域感謝祭」として各店がポイント二倍とか、十パーセント値引きなどの様々なサービスを行っている。

商店街イベント恒例の福引ももちろんある。日暮里^{ひぐり}駅へと向かう階段の下の広場では「バスレンジャーヒーローショー」が行われているらしい。つて言うかバスレンジャーつてあのバスレンジャー……

…？

「東都大学がこのイベントに協力しているらしいよ。ご近所だからだね」

しいちゃんが渡したチラシには東都大学の大讲堂の写真が載っていた。東都大学が協力しているということは、ヒーローショーに出ているのは、やはり私が映画で見たバスレンジャーなのだろう。

バスレンジャーは見ぬまま、商店街で夕飯の材料を買って、みんなで作って食べて、その後はみんなで銭湯に行く。文化祭の話はまだしない。ミーティングをしながらご飯の心配をするより、全部スツキリさせてからのほうが話に集中できるってものでしょ。

私たち四人は女風呂へと入る。風呂場には誰もおらず、壁に描かれた富士山と海に浮かぶ帆掛け舟の絵が私たちを迎えてくれた。

「こうしてみんなでお風呂に入るのは気持ちがいいですねー」

亜由美が頭に手ぬぐいを載せ、目を閉じて気持ちよさそうに口を開く。「セクシー亜由美」と言われているだけあって、胸が……お尻が……大きい。服を通して見るよりも大きいのではないかな？

「こうしてみんなで入ると修学旅行みたいー」

かわちゃんは浴槽の端に頭を乗っけて全身を伸ばす。かわちゃんの体（というか胸だ）は……。まだ一年生だからね、年下だからね、私より小さくて当然か……。

「近くに住んでいるけどここに来たのは初めてだよ。みんなのおかげかな」

しいちゃんは浴槽の端に顎を乗せて目を閉じる。しいちゃんの体は……、うつ伏せの形になっているからよく見えないけど、私と同じくらい？ いや、私よりちょっと小さいかな。うん。

亜由美、私、しいちゃん、かわちゃん……。と頭の中で勝手に「胸の大ききランキング」を作っている私。そんな中かわちゃんが声を上げた。

「ねえちよっと、誰か覗いていない？ ほら、あの入り口のところ。確かに湯気の向こうの風呂場の入り口がちよっと空いている。そ

こから誰かが私たちを見ているようだ。何者であるかは、入り口の引き戸が曇りガラスのためよくは分からない。なにか黒い塊のように見えるけど……。

「覗きかな、それともただの恥ずかしがり屋さんかな……」

しいちゃんがいつでもパンチが撃てるように両手をしっかりと構える。

「それにしても動きが不審すぎませんか？ まあ男が堂々とあんな形で女湯に居られるとも思えませんけど……」

「男湯だと思って入って見たら女湯だった、ってオチかもしれないよ」

いずれにせよこのままじっと見ているのはよくないことだ。私は入り口の向こう側の人に向かって声を上げた。

「ここは女湯ですよー、女性だったら恥ずかしがらずにどうぞー。男だったら早く向こうへ行ってくださいー」

私の言葉がきっかけとなったのか、その人は引き戸を思い切り開けた。

「あっ！」

「いやー！」

「え、何！？」

「お、お前は！」

第十七話 中の人

現れたのは手足の生えた黒い物体　頭には蛇のような突起が付いておりそこには目と口が付いている。私はかつてこの物体を見たことがある。そう、こいつの名前は

「お、お前はクラドスポリウム・トリコイデス！」

我ながらよくぞこんな覚えにくい名前を覚えていたものだ。クラドスポリウム・トリコイデスとはお風呂場に居る黒かびのことである。

「えっ、かつちゃん。あの物体と知り合いなの？」

「いやいやしいちゃん。知り合いなわけではないですよ」

名前を知っているからって知り合いにされてはたまらない。

クラドスポリウム・トリコイデスは私たちを指差し、気の抜けるような高い声で叫んだ。

「ふはははははっ、よくぞ名前を知っていたな。と言いたところだが、私の名前はいにくクラドスポリウム・トリコイデスではない。クラドスポリウム・トリコイデス・レディーだ！」

「ただレディーが付いただけで、名前は同じじゃない！
かわちゃんの言うとおりだ。」

「中の人が女性だからレディーなんじゃないですか」
なるほど、中の人が男だったら痴漢行為になるな。

「『中の人』と言うな！　中の人などいるわけないだろ！　お前黒かびをナメているのか？　まずはお前を真っ黒にしてやる！」

クラドスポリウム・トリコイデス（長いのでレディーは省略）は、亜由美を指差すと、私たちに向かってきた。一步一步を確かにゆっくり、ゆっくりと。よくみると足に黒のゴム長靴を履いているではないか。

歩きながらテーマ曲まで歌い始めた。

トリコイデスは風呂好きだー
いつも風呂場は真っ黒さ
タイルの隙間、シャワーのノズルー
今日もムツシムシ、カビー！

悪者が私たちを真っ黒にしようとこちらへ向かってきているのだが、誰一人逃げようとしない。逆に胸を見られないように、首までお湯に浸かってクラドスポリウム・トリコイデスを眺めている。

「ちよつと、なんでそんなにゆっくりなのよ」

あまりにもゆっくりなので、私はしびれを切らしてしまった。

「ふははははっ、風呂場で走ってはいけないと、親に教えられていなかったのか？」

正論だけど、悪者が言うことだろうか？

やつとのこと亜由美の前にたどり着くと、長靴を脱いでゆっくりと浴槽へと入る。

「ん……、よいしょ」

ざぶん、と大きな音とともに、お湯がこぼれていく。手足を大字に伸ばすクラドスポリウム・トリコイデス。顔は見えないけど、中の人はきつと気持ちがいいのだろう。

「さて、ゆっくり浸かったところで、お前を真っ黒にしてやる。ふははははっ」

不意をついてクラドスポリウム・トリコイデスがいきなり亜由美に抱きついてきた。

「ちよつと、うわっ、本当に抱きついてきた！」

敬語を使わない亜由美なんて、なんてレアなシーンなんだ！

「ふははははっ、セクシーな体つきだけあって、胸がふっくらとして……」

おや、声がだんだん低くなってきたぞ。

クラドスポリウム・トリコイデスは右手で「ちよつと待った」のポーズをとると、右手を自らの体の中に入れた。中から「プシュー」

とスプレーを吹き付けたような音がする。

「ふははははっ、セクシーな体つきだけあって、胸がふつくらとしているな」

あ、声が元に戻った。

「あんた今ヘリウムガスを吸っていたでしょ」

かわちゃんが突っ込みを入れる。クラドスポリウム・トリコイデスは右手を左右に振って笑い出した。

「ヘリウムガスなどあるわけないだろう、もともと我はこの声だぞ、お前黒かびをナメているのか？ お前も真っ黒にしてやる」

クラドスポリウム・トリコイデスは左腕で亜由美を抱きしめながら右手でかわちゃんの肩を掴む。

「いやっ、この黒いの！ 助けてー」

かわちゃんがクラドスポリウム・トリコイデスを何度も殴るが、痛がらずに腕の中へとかわちゃんを引き込む。かわちゃんの拳が当たるたびに、クラドスポリウム・トリコイデスに染み込んだお湯が勢いよく飛び出す。

「ふははははっ、両手に花とはまさにこのことだな、ふははははっ」

「こっとなったらしいちゃん、しいちゃんの出番だよ」

私はしいちゃんの肩を叩いた。

「えっ、私!？」

「しいちゃんの強烈な右ストレートをあいつに食らわしてやるのよ」かつてプロボクサーの右拳に怪我をさせ、パンチ力測定器具を破壊したしいちゃんのパンチなら中の人にダメージを与えることができるはずだ。

「ま、待つのだ。暴力はいけないぞ、暴力は。ふははははっ」

クラドスポリウム・トリコイデスの中の人には明らかに動揺している。笑ってはいるがその声は震えている。中的人是しいちゃんのパンチ力の恐ろしさを知っているのだろうか。

「しいちゃん、時には暴力も必要なのよ。躊躇しないで殴っちゃいなよ」

「やるしかないのかな……」

しいちゃんはクラドスポリウム・トリコイデスに向き合つと素早くパンチを撃つ体勢に構えた。腰を浮かしては落とす。立つか立たないか悩んでいるようだ。

「ま、待つのだ。かわいい女の子がそんな乱暴なことをしてはいけないのだ。ふははははっ」

「だけど、あなたは悪い人でしょう。悪い人は退治しないと……」
しいちゃんの右拳が強く握られる。座りながらパンチを打つ気のようにだ。

「待てーい！」

そのとき、風呂場の入り口が大きな音を立てて開かれた。頭に木製の風呂桶を乗せ、顔にはピンクの眼鏡マスク、そしてピンクの全身タイツ……。この人はもしかして？

「バスレンジャー・レディー参上！」

やはりバスレンジャーか。しかも女湯だからバスレンジャー・レディーか。背の高いレディーだ。あ、よく見たらピンクのゴム長靴を履いてる。

「おお、待っていたぞバスレンジャー・レディー。今日こそ貴様を倒すときだ。ふははははっ」

口では倒すと言っているけど。クラドスポリウム・トリコイデスの中の人は正義の味方の登場に正直ほっとしているだろう。

「なにを言うか、倒されるのは貴様のほうだ、とうっ！」

と、正義の味方らしく叫んだのはいいものの、バスレンジャー・レディーは飛ぶわけでもなく、走るわけでもなく、ゆっくりゆっくりと歩いてこちらへ向かってくる。

「ちよっとー、もう少し早く来なさいよー」

かわちゃんがクラドスポリウム・トリコイデスの右腕から逃れようともがきながら文句を言う。

「正義の味方がお風呂場で走るわけにはいかないのだ！」

バスレンジャー（長いのでレディーは省略）は正義の味方なため

か、公共のルールを遵守しようとしている。

「正義の味方なんだから、か弱い市民を守るのが先でしょう、もういいわよ。しいちゃん、クラドスポリウム・トリコイデスを思いっきり殴っちゃって！」

「そうだね、私たちの力で二人を助けるのが一番だね。大丈夫です、本気は出しませんから」

しいちゃんは立ち上がると、右手を構える。今度は立って打つ気だ、裸を見られることなんて気にもしていない。

「そうですよ、全身タイトの正義のヒロインなんて当てにならないですよ」

亜由美は結構ひどいことを言うな。

「ま、待て一般市民が我と戦って勝てると思うのか。ふははははっ、はぐっつ！」

両脇に亜由美とかわちゃんを抱えているので全く無防備な状態のクラドスポリウム・トリコイデスの腹部をしいちゃんの右ストレートが直撃した。その隙を突いて亜由美が浴槽から上がり、かわちゃんはしいちゃんの右側（壁側）を横切って私のところへやって来た。クラドスポリウム・トリコイデスは仰向けになって浴槽に浮かぶ水に浮かぶなんてこの着ぐるみは一体どういう素材でできているんだろう？ それにしても本当に手加減したかどうかはともかく、しいちゃんのパンチ力は相変わらずすごいな。

「大丈夫、かわちゃん。亜由美？」

「こわかったよー。なんか本気で抱きついて来るんだもん」

「私は大丈夫ですよ。……ところで残念ながらあなたの出番は無いようですよ」

亜由美はやつと浴槽の淵へとたどり着いたバスレンジャーを見て慰めの言葉をかける。

「うっむ、今回は一般市民の勇氣ある行動によって解決されたわけだな……」

その言葉に反応したのか

「我はまだ倒されたわけではないぞ！……うぐっ、げほっ」

クラドスポリウム・トリコイデスは激しい水音を立てて起き上がったものの、激しく咳き込んでいる。

「着ぐるみだからダメージはそんなに与えないだろうと思ったんだけど……、やっぱり強すぎましたか？」

しいちゃんは自らが殴った場所を優しく撫でる。

「着ぐるみのおかげで命拾いしたね、中の人」

「な、中の人などいないと言っているではないか……、がはっ……、もういい、我は帰るぞ」

よろよろになりながらクラドスポリウム・トリコイデスは浴槽の淵へと手をかけ、上がろうとしたが、

「うっ、染み込んだお湯が重くて体が持ち上がらない……」

声がだんだん中の人本来のものへと変わっていく。動揺しているのか、ヘリウムガスを吸って元の声に戻すことを忘れてしまうようだ。うん？ この声、どこかで聞いたことあるな……。

「いっそのこと脱いじゃえばいいじゃない。自分で脱げないのなら私が開けるわよ」

クラドスポリウム・トリコイデスの背中にファスナーが付いていることを確認した私はチャックに手をかける。

「脱ぐとはなんだ脱ぐとは……、我は何も着ていないぞ、これが裸だ」

バスレンジャーと亜由美がクラドスポリウム・トリコイデスの手を取り引き上げる。浴槽にいる私たちは後ろから背中を押す。五人の力が一つになって、クラドスポリウム・トリコイデスを浴槽から救い出すことに成功した！！

「おお、助かったぞ……」

クラドスポリウム・トリコイデスの体中からお湯が噴出す。一体どのくらい染み込んでいたんだ。

「中の人、お腹はもう大丈夫ですか？」

しいちゃんはまだ自分のパンチが強過ぎたことを気にしているよ

うだ。

「中の人などいないといっているだろう。ええい、今日のところはこれで引き下がるが、次こそ全員真っ黒にしてやる、覚えている！
ふははははっ」

助けられた相手に失礼な言葉を吐きながら、そしてお湯を辺りへこぼしながらクラウドスポリウム・トリコイデスは歩いて風呂場を去って行った。登場時よりも歩くスピードが遅いのは、中に染み込んだお湯が重いのと、しいちゃんのパンチのダメージのせいだろう。
「さて、敵は去ったことだし私も帰るわよ、みんなどうもありがとう！
う！とうっ！」

声は勢いよかったけど、バスレンジャーも歩きながら風呂場を後にした。

「ありがとうバスレンジャー！」

あなたの声も聞いたことのあるような声だったわ！！

「ところで、なんでこのお風呂場にやってきたんだろう？」

「商店街が企画したのでしょうか。バスレンジャーだけにお風呂場でもヒーローショーをと……」

はた迷惑な商店街だな。

第十八話 眠い日

「ね、眠い……」

「眠いねー」

空はどんよりと曇り、溜めている水分の重さに耐え切れなくなった雲が、今にも水を吐き出すんじゃないか、と思ってしまうくらいの空模様である。

空に対してそんな風に思ってしまうのは、私自身が空と同じくどんよりとした気分だからだろう。なぜなら私としいちゃんは昨日はほとんど寝ていないのだ。

「文化祭の話し合いで眠れなかったの？」

十分な睡眠を取ったであろうはるちゃんが、私たちの顔を見る。

「今までの報告をするだけで、午前三時……それからこれからのことを話し合って朝八時……。今思えば、なぜそんなに長く時間がかかったのか……」

しかも報告ではタカビーに企画グループの進行の遅さを突っ込まれてばかり。

朝ごはんを食べたら八時半、一限目の授業を取っている人は学校へ行く時間だ。

「お菓子食べたりとか、テレビ見たりとかしていて、だらだら続けていたからだと思うよ……」

なるほど、思い出してみればしいちゃんの言うとおりだな。

「今度からきつちりとメリハリをつけないとね」

人の家で夜通しミーティングなんて初めての経験だったからどうしていいのか、分からない部分もあったけど、今後は気をつけないと。

「みんな今日は体調が悪いのか……」

はるちゃんがつまらなそうに口を尖らせる。

「みんなって……、他に誰か体調悪い人があるのー」

しいちゃんが目をしばしばさせながら尋ねる。眠いせいか語尾がなんだか投げやりだ。

「さつき明石先輩に会ったんだけど、昨日からお腹の調子が悪いんだって」

「お腹痛いのー？ 最近流行の機能性胃腸障害かなー」

しいちゃん、流行って風邪じゃないんだから、それにちょっと古いし。

「と言うわけで、私としいちゃんは次の授業寝るので、はるちゃんノートよろしくね」

私はしいちゃんの左肩に手を載せて力なくはるちゃんに告げる。

「別に寝るのは構わないけど、鼾とかよだれとか目立つようなことは絶対ダメだからね。かつちゃん」

「えっ、私鼾かくの？」

私は大きく目を見開いてはるちゃんを見る。はるちゃんは私を見つめると明るく微笑んで、

「驚いたでしょ？ その様子なら目が覚めたみたいね」

「ちょっと、嘘だと言うのー!？」

「私だけ授業聞いているの嫌だもーん」

はるちゃんはそう言っただけで教室へと素早く入る。私もはるちゃんの後を追いかけてようと思っただけ……。

「ちょっと、しいちゃん、私に寄りかかって寝ないでー!」

私の腕にしいちゃんが頭をくっつけて眠っている。私の腕としいちゃんの頭との角度は三十度くらい？ こんな不安定な姿勢で眠れるなんてどれだけ眠いんだ。

眠いのは私としいちゃんだけではなかった。

教室では先に入っていたかわちゃんとけーまが互いに頭をくっつけて仲良く寝ていたのだ。

「寝ているときまで仲のいいお二人だこと……」

はるちゃんが隣に座っても二人は気がつかない。反対側の隣には、

しいちゃんが目を瞑ったまま座り、その隣に私が座る。

「おい、馬鹿カップルー。もうすぐ授業が始まるぞー」

はるちゃんが周りに聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと、けーまははっ、と大きく目を見開きはるちゃんを見ると

「馬鹿カップルじゃ無いといっているだろう！」

と、はるちゃんに抗議した。かわちゃんはまだ目覚めず、けーまの左肩に頭をくっつけ安らかな寝息を立てている。

「よし、起きたわね。かつちゃん、けーま。授業を受けるわよ。一列に四人も眠っていていや嫌でも教授の目に止まるでしょ」

しいちゃんとかわちゃんは寝てもいいのか……。しいちゃんは机に突っ伏して安らかな寝息を立てている。

やがてチャイムが教室中に響き、がっしりとした体格のパンチパーマの先生が入ってきた。

こげ茶色の板の上に黒い木目が走っている。どうやら私は寝ていたようだ。口を尖らせれば机にキスできるほど私の顔と机は接近していた。

「かつちゃん寝るなー」

はるちゃんが寝ているしいちゃんの背中越しに私の後頭部を掴む。私はあやうく机に頭をぶつけそうになった。

「ちよっとー、はるちゃん。危ないじゃないのよー」

私のはるちゃんの手を払い、顔を上げるとはるちゃんは、手を振って見せた。

「ほーら、これでまた目が覚めた」

はるちゃん……。寝ているのは私だけじゃないよ。

「どうして私だけ起こしてしいちゃんは起こさないのよ」

「しいちゃんを無理やり起こすものなら何されるか分からないじゃない」

ああ、納得。反射的にパンチをもらいそうだからな。

「けーまは眠くないのー？」

私のはるちゃんの向こう側にいるけーまに声をかける。彼は思いっきり目を開いて教授の話の話を聞いている。

「うんー？ これを飲んだら目が覚めたよ」

けーまがバツクから取り出したのは茶色の小瓶。ラベルには「タウリンマックス！」と青文字で書かれている。

「栄養ドリンク飲むなんてなんだかおじさんな感じがするなー」

はるちゃんがビンを取ってラベルに書かれている成分表を眺める。「いやそれはおじさんじゃなくても飲むから。若くても徹夜で辛かったら飲むから」

けーまがはるちゃんからビンを素早く奪う。その勢いで、けーまの左肩に寄り添って眠っていたかわちゃんの頭が机の上に落ちる。しかし彼女は目を覚まさない。

「お、おい。真値、大丈夫か？」

「私は大丈夫だよー」

「いや、かつちゃんには言っていないから
ちえっ、騙されなかったか。」

かわちゃんは口をもぞもぞ動かしながら気持ちよさそうに眠っている。

「ま、かわちゃんは置いておいて。若けりゃ徹夜なんか大丈夫ですよ。若いうちにはどんどん無茶すべきだよー」

「そんなはるちゃんは徹夜しても平気なの？」

私が尋ねるとはるちゃんは自信満々の顔で私に顔を向けた。あ、嫌な予感がする。

「そんな体に悪いことするわけないでしょー！」

はるちゃん……。徹夜の経験が無いのはいいことだけど、今の話の流れとして自信満々に言うことじゃないよ……。。

「結局おまえは何が言いたいんだ！」

けーまが私の心の突っ込みをそのまま表に出した。

「とにかく、若いんだから栄養ドリンクに頼らず、自分の体に頼りなさいってことよ。若いんだから自分で回復する力はあるでしょ」

なんか聞いているうちにはるちゃんが世話好きのおばさんのように見えてくるな……。

「それでも眠いのは眠いんだよ、時にはこういうものも必要なんだ」
「けーまの声を聞いてしいちゃんが突然目を覚ました。」

「そうだね……、化粧水を頬に塗るのは必要だよね……。」

しいちゃんは寝ぼけて全く違う話をしている。しかし私たちの年を考えたたらそろそろ無関係な話ではないのだけど……。

「そんなことないよ……。かつちゃんは化粧しなくても充分綺麗だよー」

しいちゃんが私の心を読んだのか、目を薄く開けながら答える。

「そんなことよりしいちゃん。いい若者が栄養ドリンクに頼る現状をどう思いますか？」

はるちゃんがしいちゃんの目を覚まそうと、しいちゃんに問いかける。

「栄養ドリンク？ ファイトが一発からだの中に入るのならいいんじゃないのかな？」

しいちゃんの上体が徐々に机から離れていく。お、眠気から解放されるのか？ かわちゃんは相変わらずすやすやと、机に顔を横向けて眠っている。涎がちよつと垂れているぞ。

「ファイトー！ と叫んで得意の右ストレートと放つのね、しいちゃん」

私は右手を控えめに突き上げる。（授業中だからね）

「そうそう、それで大岩を砕いて……って。もう、かつちゃん……」

珍しくしいちゃんがノリツッコミをしたが、眠いせいか「もうに勢いが無い。」

「分かった分かった。眠いのなら寝なさいしいちゃん。よしよし」

しいちゃんの頭を優しく撫でると、しいちゃんは再び目を閉じて

「うーん」と机に顔をくっつけた。

「しいちゃんとかわちゃんの分も授業聞いておかないとね」

私は気合を入れて前を向く。

「でもずっとしゃべっていたから教授の話あんまり耳に入っていないよ」

う……、はるちゃん。痛いところ付くなあ……。

「俺はちゃんとノート取っていたから後で写してあげるよ」

「ほんとですか？ けーさま様」

はるちゃんが目を輝かせながらけーまのほうを向く。

「その代わり二度と馬鹿カップルなんて言うなよ。事実俺たちは馬鹿カップルじゃないんだから」

けーまが目を細めてはるちゃんのほうを見てあまり説得力の無いことを言う。

「分かったわ、馬鹿カップルと言わないように善処して前進するように努力して対処するわ」

はるちゃんはまるで国会議員の答弁のような答えを返す。きつと約束は守らないつもりだろう。

こうして眠気と戦いながら一日の授業は終わった。（しいちゃんとかわちゃんはずっと寝ていたけど）。

「やっと今日の授業が終ったね」

「うん、これで堂々と眠れるねー」

しいちゃん……。あれだけ眠っていたのにまだ眠いの？ 私は逆に目が覚めちゃったけど……」

「あー、いた……」

そんな私たちに声をかけたのは、いつも眠そうな顔の亜由美だ。彼女も昨夜は徹夜していたから、今日はきつと本当に眠いと思う。

「二人とも授業は終わりですか？ それじゃあ行きますよ」

「え、行くつてどこへ？」

亜由美は小さくあくびをして、右目の涙をこすりながら答える。

「一号館の六階にある教室を借りました。そこで文化祭出展希望サクルとの面談を行います」

徹夜明けでも、眠くても亜由美は自分の役割をそつなくこなす。

だから文化祭の理事会に途中参加できたんだけどね。

「ええっ、これから!？」

「そうですね、一週間前から言っていないませんでした？」

そう言つと亜由美は階段のほうへと歩き出した。

「ちょっと、亜由美。私たちはその六階のどこの教室か分からないよ!！」

私は亜由美を追いかけようとした。しかし……。

「うわーっ、しいちゃん寝ないでー!！」

爪先立ちになり顎を私の肩に乗せて眠るしいちゃんに動きを阻まれるのであった。

第十九話 眠いけど、面接

「はい、しいちゃん真ん中の椅子に座って」

眠気に襲われてまともに歩くこともおぼつかないしいちゃんを導いて、私は亜由美が確保した六階の教室にたどり着いた。左から亜由美、しいちゃん、私の順に座る。

「届出を出した順に今日は十五のサークル、部活と面談します。面談の内容は……」

そこまで言って亜由美は目を閉じ、顔を机へと傾けたが、

「面談の内容は、出し物の大まかな内容とコンセプトについてです」と、頬を右手で軽く叩きながら用意したプリントを渡した。亜由美も眠いのだ。

私も眠いのだが、はるちゃんに二度も眠気覚ましをくらい、さらにしいちゃんが心配なせいかあまり眠くない。

最初に入ってきたのは髪の毛全体をまるで竹箒のように上に尖らせた、サングラス姿の男子学生だった。頭が派手な割には、服は緑のシャツにジーパンとインパクトが無い。

「毎度おなじみ鉄道倶楽部でございます。私部長の林田和義はやしだ かずよしと申します」

いや、あなたと会ったのは今日が初めてだから。

「ほら、しいちゃん起きて。面接始めるよ」

私がいしいちゃんの肩を揺らすと、しいちゃんは薄く目を開けて林田部長に尋ねた。

「鉄道倶楽部は今年、何をするつもりなのですかー？」

しいちゃんの質問に林田部長はサングラスの奥の目を光らせた。

「今年は『東京とともに六十年』のテーマに合わせて上映会をやるうかと」

上映会？ 鉄道に関する映画でも製作するのだろうか？

「東京を走る山手線から見える風景をずっと流し続けます。我々は

それを見ながら酒でも飲んだり、つまみを食べたり、鉄道について語り合ったりしようというわけですな」

「ちよつと、待ってください。酒を飲みながら、って言いましたね？」

亜由美が身を乗り出し眠そうな眼を（いつもだけど）鋭く林田部長に向ける。

「はい、カッブ酒なんか電車の旅っぽくって丁度いいかと」

「文化祭には子どもや未成年の方も来るのですよ。お酒が出るのはあまり感心しません」

確かに大人っぽい中学生や高校生がお酒を飲む可能性が出てくるな。って私たちも去年未成年なのにお酒飲んでいたな。

「んなこたあー気にしない」

林田部長は箸頭と右手を思いつきりふった。

「入り口でちゃんと年齢確認もするんで大丈夫でしょう」

居酒屋でもそういつたチエツクをするお店が最近増えている。

「まあ……、ちゃんとそれができるならこちらとしては何も言いませんけど……」

「そんなに心配なら実行委員の誰かが時々見回りに行って確認すればいいじゃない」

私がそう言うと、亜由美は「まあ、それなら……」と背もたれに背を預けた。

「鉄道と言えば……、かつちゃんも鉄道オタクさんだよな」

いきなりしいちゃんが私に微笑みだした。

「え……！？」

「違つわよ、私は鉄道マニアじゃないわ！ 東京の大学生がみんな知っていることを知っているだけよ」

東京近郊の駅名や路線なんて学生手帳の裏面に載っているじゃない。私が知っているのはその程度。鉄道マニアの方とは知識量に差がありすぎる。

「ほう、鉄道が好き。じゃあこの問題に答えられますか？」

林田部長は私の言い訳を聞かずにサングラスの奥の瞳を光らせる。「な、何よ。難しい問題なんて答えられないわよ」

「山手線内に唯一ある踏切は何駅と何駅の間にあるでしょうか？」

そんな問題答えられるわけ無い。山手線の駅名は全て答えられるけど、山手線を電車に乗って一周したことなんて一度もないからだ。「え、えーと……。目黒と五反田の間？」

私は通過したことがない駅を適当に答える。それを聞いた林田部長は

「素人が……」

と鼻で笑った。

鼻で笑われたのは悔しいが、鉄道マニアの方に鉄道マニアじゃないと認められたのはちよつと嬉しい。でもなぜか心に少し寂しさを覚える。

「なーんだかつちゃんは鉄道マニアじゃないのか……」

しいちゃんは残念そうに目を閉じた。

続いてやってきたのは髪をポマードで固めてオールバックで鼻の下に貴族のような髭を生やした男子学生である。

この顔どこかで見たことあるな……。確かスペインの画家だったかな……。えーとピカソじゃなくて、誰だっけ？ ダリだっけ？

「茶道部部长、古屋佐助でございます」

古屋部長はパイプ椅子に正座すると私たちに頭を下げた。

「いや、正座なんてしないで普通に座ってください……」

そんな姿勢では不安定ではないか。

「このほうが落ち着くのでございます」

背筋を伸ばして私たちを鋭く見つめる。

「あ、それならどうぞご自由に……」

「ところで茶道部は今回どのような企画を考えているのですか」

亜由美がペンで何かを書きながら尋ねる。

「四号館の屋上を貸し切りにし、そこで野点をしようかと思えます」

「えっ、のだ？」

それまで小さな寝息を立てていたしいちゃんが突然目を開ける。

「いや、しいちゃんのめじゃなくて野点だから。屋上でピアノを弾くんじゃなくて、茶の湯をするのよ」

屋上でピアノを弾くなんてどんな茶道部だ。しいちゃんは再び眠りの世界へと入る。

「そう野点。屋上で茶をたててお客に振舞うのでございます」

「でも……毎年部室でお茶をたてていたのにどうして今回は屋上なんかでするんですか？」

「今年のテーマに合わせて、東京の景色を見ながらお茶を振舞おうと思ひまして……」

そう言いながら古屋部長は体の前にかがめる。

「幸いこの周囲には高いビルもありません。東京の風景を見ながら温かいお茶を飲むというのは、まさに数寄すきのきわみ……」

ほらほらそんなに体を前に出すと……。

ガタンと音を立てて椅子が前に傾く。当然そこに正座している古屋部長は前へと倒れるわけで……。

「げひいいいいいい！！」

哀れ古屋部長は思いつきり顔を床に叩きつけられるのであった！。

「次の方どうぞー」

私の声に促されて入ってきたのは背の高くて短髪の男子学生。だけれど初対面だけどなんだか頼りなさそう。私たちを見ておどおどしているし……、緊張しているのかな？

「そんなに緊張しないで座ってください」

「は、はい……」

亜由美の淡々とした言葉に反応して彼は椅子に座る。

「あ、あの……さっきの人鼻血を出していたんですけど、何かあったんですか？ それに床にも血が落ちていますし……」

「ああ、あの人ですか」

亜由美が半ば呆れたような声で事情を話す。

「そ、そうだったんですか……。てつきりあなたたちの誰かに殴られたのかと思いました……」

おどおどしている割にはなかなか結構なことを言ってくれるな、この人。ほっと胸を撫で下ろす仕草を見るにたぶん悪意は無いのだからうけどチャレンジャーだと私は思う。

「そんなわけがないじゃないですか。……まあこの真ん中で寝ている人が殴ったら鼻血ぐらいじゃすまないと思いますけどね……」

亜由美がしいちゃんの頭を優しくなでる。しいちゃんは「うーんと小さな声を上げて体を正面から右向きに変えた。

「えっ、そんな……」

可愛そうに、彼はガタガタ震えているぞ。

「大丈夫だって、しいちゃんが怒ることなんて滅多に無いからあなたは殴られないわよ」

「そ、そうですか……。よかった……。あ、忘れていましたいません。男子バスケット部の部長を務めます、成瀬守なるせ まもるです」

姿勢を正しくきりっとした視線を私たちに送る成瀬部長。この頼りなさそうな人が部長か……。

「それで、男子バスケットは今年何を企画するのですか？」

「体育館のコートを半面借りまして、そこで Dank コンテストを行いたいと思います」

「 Dank コンテスト？」

私の問いに成瀬部長は笑顔で頷いた。

「はい、みんなに Dank シュートを打ってもらい、その優雅さ、カッコよさで勝負を決めたいと思います。 Dank というのはボールから手を離さずにそのままゴールに入れるシュートのことです。両手でリングに掴まったり、片手で叩きつけるように打ってもオッケーです」

Dank コンテストか……。面白そうだけど一つ問題がなあ……。でもそれって、参加者が限られませんか？ 背の高いジャンプ力の

ある方じゃないとダンクシュートなんて決められないでしょう？ 私たちみたいに身長のない女性はただ見るだけと言うんですか？」
亜由美に先に言われてしまった。

「その心配はありません。このダンクシュートは二人一組でも三人一組でも大丈夫です」

「と、いいますと？」

「要はボールがゴールに入るときまで手を離さなければよいのです。みんなで力を合わせてダンクシュートを打てばいい。極端な話二人で肩車をしてゴールにボールを置くだけでも充分このコンテストでは成立するのです」

熱心に自分の企画を語りだす成瀬部長。入ってきたときはなんだか頼りなかったが、自分の考えについて語っている彼を見ていると、話に引き込まれるというか……、なんだか頼もしそうだ。

「体力じゃなくてとんちで勝負！ ということだね」

しいちゃん我突然目を開けて頷く。「とんち」って、室町時代のお坊さんじゃないんだから……。

「そうですね、体力よりも知力や発想力を使ったほうが優勝できるかもしれません」

発想力か……。例えば小学生のクラス三十人で龍の仮想をして口からバスケットボールを吐き出させるとか……。二人で「ししおどし」の仮想をして「コン！」と音が鳴るタイミングでボールをゴールに叩き込むとか……。おいおい、これじゃあダンクコンテストじゃなくて仮想大賞だぞ。十五点以上で合格かい？

まあさっきの二人よりはまともなキャラだったな、成瀬部長は。

「まあ三人も面接すると疲れるねー」

私は机に手を伸ばしだらける。

「まだあと十二人と面接するんですけど」

「えっ！ まだそんなにいるの!？」

私の大声にしいちゃんは目を覚まして。

「よーし、二人とも一緒に頑張ろう」

と呑気に声を上げるのであった。

第二十話 眠いけど、まだまだ面接

二時間後

「お疲れ様です。今日はあと三人ですよ」

「えー、まだ三人もいるのー？」

私としいちゃんと亜由美はまだ文化祭に参加するグループの代表との面接を続けている。三人目終了時にやっと目覚めて本気を出したしいちゃんだが、再び眠気モードだ

「しいちゃん、あと三人だよ。もう少し我慢しようよ」

私はしいちゃんの肩を優しくゆする。激しくやるものならしいちゃんの強烈なパンチをくらいかねない。

「そっかー、最後の三人くらいしっかりやらないと……」

そう言いながらしいちゃんは顔を起こして机に置かれたプリントに目を通した。が……。

「うーん……」

と、時々目を瞑っては首を揺らすのであった。

「そういえばなんで私たち三人が面接官なんだろう？」

イベント担当の実行委員は私たちの他に三十人もいるのに。

「はいはい、休憩時間終わり。次の人呼びますよー」

亜由美がしいちゃんの目の前で手を叩いて彼女を起こす。

「はい、次の人どうぞー」

入ってきたのは明石先輩だった。いつもは私たちを見ると満面の笑みを浮かべて飛びつくはずだが、今日はちょっと疲れた顔を浮かべ、右手でお腹を押さえている。

「明石先輩今日は元気ないですねー」

しいちゃんが空ろな目を明石先輩に向ける。明石先輩はしいちゃんを見て一瞬怯えたような表情をしたが、すぐにいつもの笑顔に戻り、

「昨日ねー、バイトしていたら腹筋を痛めちゃって……」

「アルバイトですか？ 何をやっていたんですか？」

亜由美が尋ねると明石先輩は首を横に振って

「いくら仲のよいあなた達でもそれは言えないよ。秘密だよ」

秘密のアルバイト……。

「街の掃除人でもしているのですか？」

街の悪人どもを掃除する仕事でもしているのだろうか……。満月の
が照らす夜の街に踊る明石先輩の姿が想像できる。しかしそれで
腹筋を痛めたのならちよつとマヌケだな。

「そんな危ないことはしないよー。みんなが楽しめるバイトだよ。

その内容を話したら夢が壊れちゃうでしょ」

「黒かび……」

亜由美が小さく呟くと、明石先輩の笑みがちよつと引きつった。

亜由美は一体何を言ったのだろう？

「そんなことより三人とも私が考えた企画の話聞いてよ」

明石先輩は再びいつもの笑みを取り返す。そうだった、企画の話
をしないと。

「今年、我がダンスサークルが考えた企画は……。『真奈美と踊る

う女子学生！』です」

「それは却下します！」

私と亜由美は同時に声を上げた。私、亜由美の順に声が低くなる。
ちなみにしいちゃんは……。寝ている。

「なんでよー、ダンスサークルなんだから、踊る企画を入れてもい
いじゃない」

「踊ることより可愛い女子学生を集めたいのが目的に決まっていま
す！」

「だめー？」

「だめです！」

私と亜由美の拒絶を聞いた明石先輩はぷい、と顔を背け席を立つ
た。

「いいわよ、そこまで言うんだったら今年は普通に焼きそばの屋台

出して、舞台上で踊るだけにしますー！」

「あ、明石先輩、ちよつと待って……」

私の制止も聞かず明石先輩は部屋を出てしまった。

「うーん、明石先輩帰っちゃったの……」

しいちゃんが呑気に私に尋ねる。

「そう、明石先輩を怒らせちゃったみたい……」

「大丈夫ですよ、あのくらいで怒ったりめげたりする人じゃないですから」

……ということは、まだまだ「女の子を集める」企画を持ち出す気が……。

次に入ってきたのは坊主頭の似合う水色の着物の男子学生だ。茶道部の古屋部長と同じく椅子の上に正座をしてお辞儀する。

「ええ……私、文京大学落語研究会会長。文京亭行楽ぶんきやうていと申します……」

文京亭行楽というのはたぶん本名ではないだろう。

「それで……行楽さんが考えた企画は一体なんでしょう？」

私の質問に行楽さんはやつと頭を上げた。

「お客様参加型の大喜利を行おうかと思えます」

大喜利か……、日曜日の夕方に落語家さんたちがやったり、たまにバラエティで芸人さんたちがやったりするあれね。

「例えばどんな問題がでるんですかー？」

薄目のしいちゃんの質問に行楽さんはよくぞ聞いてくれたとばかりに目を光らせると、一冊のスケッチブックを私たちに見せた。そこには「さんま」という文字が一文字ずつ赤丸で囲まれている。

「秋と言えば食欲の秋、食欲の秋と言えばさんまでございます。そこでみなさんに、『さ』『ん』『ま』ではじまる五・七・五の川柳を答えてもらいたいと思います」

ちよつと待って、さんまって「ん」がついているじゃない……。

「『ん』が付いている時点でダメだと思っんですけど」

ああ、また亜由美に先を越されてしまった。
行楽さんは再びよくぞ聞いたとばかりに目を光らせ、

寒いねと

んなずく君に

まじ惚れる

……行楽です

と得意気な表情を私たちに見せた。褒めてもらいたいのだろうか。しかし残念なことに私たちは彼に与える座布団を持っていない。仮にあつたとしても「うなずく」を「んなずく」と強引に読んでいるあたり与えられないけどね。

しいちゃんが素早く手を上げたのはその時だった。

さからうと

ンゴツとするぞ

マジパンチ

……しいちゃんです。

そう言つて可愛く笑うしいちゃん。……しいちゃん怖いよしいちゃん。しいちゃんは酔っているときだけではなく、眠気を我慢しているときも怖いんだなあ。

「この勝負はしいちゃんの勝ちですね」

亜由美が冷静に二人に勝敗を告げた。しいちゃんの負け、なんて言ったら殴られかねないとも思ったのだろうか。

「もぉー、なんでー！」

行楽さんはちよつとおかまの人っぽい声で叫ぶと席を立ち、教室を出て行った。

「あ……、まだ大喜利やっていいとも悪いとも言っていないのに……」

私は呆れ顔で彼が座っていた椅子を眺める。

「まあ大喜利なら問題もないでしょう。いいんじゃないですか」
亜由美が早くも次の人のプリントに目を配る。

「いよいよ最後の人だね」

しいちゃんが両手を伸ばして上体を軽く右へ曲げる。

「次の人どうぞー」

入ってきたのは白衣に身を包んだ眼鏡姿の男子学生だ。

「大豆食品研究会所長の大豆孝夫おおす たかおと申します」

大豆部長の横には青いスポーツバックが入っている。

「大豆食品研究会は今年は何をするのですか？」

私が尋ねると彼はスポーツバックから白い何かを取り出した。

「毎年のように大豆で出来る食品をお客に振舞います。お三方も食べてみてください」

と、私たちの机に置かれたのは真っ白な豆腐だ。ごく丁寧に割り箸や醤油の小瓶も置かれている。

「食べていいんですか？」

「はい、我が大豆食品研究会の手作りの味を堪能してください」

お言葉に甘えて豆腐を箸でつまみ口に入れる。大豆の濃い味とほのかな甘味が口の中に広がっていく。

「おいしー、大学生の手作りとは思えない……」

私は目を閉じて口の中に広がる味をさらに感じさせる。

「ほんとだね。私でもこれは作れないなー」

眠いはずのしいちゃんはしっかりと豆腐を食べている。しいちゃん
んは豆腐づくりの経験もあるようだ。

「醤油との相性がいいですね。塩気と大豆の風味がなんとも……」

亜由美は更に醤油を一、二滴垂らした。

「どうです、美味しいでしょう？」

大豆部長は眼鏡の奥に笑顔を見せる。

「ええ、これなら文化祭に出しても恥ずかしくありません」
豆腐をたிரらげた私は満足げに頷いた。

「続いてはこちらです……」

と、大豆部長が机の上に置いたのは、白いパック。さらに小さい袋に入った茶色いたれのようなもの。これってもしかして……。

「納豆を食していただきたいと思います」

「ぎゃーっ！」

私は奇声を上げて椅子から飛び上がると壁に貼り付いた。

「な、納豆。私は嫌よ納豆」

「そういえばかつちゃんは納豆が大嫌いだったね」

しいちゃんはパックを開けて中の納豆をこねくり回している。

「こんなに美味しいもの嫌いだなんてもつたいない……」

亜由美は早くも納豆を口に入れていている。亜由美、絶対私にキスしないでね。(って食べなくてもキスはしていないけど)

「我が大豆食品研究会の作った納豆をそこらへんのスーパーで売っている納豆と一緒にしないで頂きたい」

大豆部長が眼鏡の奥で怒っている。怒られたって嫌いなものは嫌いなもの！

「かつちゃん、何事もチャレンジだよ。自分の名前を好きになったかつちゃんだから、納豆もきつと好きになるよ」

いつの間にかしいちゃんが私の背後に回っている。とうかしいちゃん、私の名前と納豆を同レベルに扱わないでもらいたいな。

「亜由美ー、かつちゃんに納豆食べさせてあげてー」

しいちゃんは私の後ろから手を回すと、私の胸の辺りでがっちりと組んだ。これで私は両手の自由を失った。

「はい、今こねているのでちょっと待ってくださいー」

亜由美が箸を回しながら私に近付いてくる。それに従い、納豆の腐った臭いが私の鼻にどんどん入ってくる。

「ほらかつちゃん口を開けなさいよ。納豆が食べられないじゃない」
私は口を思いつきり閉じて首を思いつきり左右に振る。納豆なんて誰が食べるものか。

そうしている間に亜由美が納豆をたっぷりつけた箸を私の口先ま

で持ってくる。箸からパツクまでを白い糸が繋いでいる。気持ち悪い……。

「口を開けないとこの納豆かつちゃんの髪にくっつきますよ」

あ、亜由美……！ あなたは一体なんという選択を私に迫るのだ。納豆を食べるか髪につけるかなんて私にとっては何地獄の選択ではないか。

しかし悩んでいるわけには行かない。決断のときは迫られている。私は観念して口を開いた。髪につけられて臭いが残るよりは食べたほうが数十倍もマシだ。

「かつちゃんはお利口でちゅねー、残さず食べるんでちゅよー」

亜由美の口調が赤ん坊をあやすお母さんのものに代わっている。

これって赤ちゃんプレイなの？

そんなことを考えている私の口について納豆が入る……！

……こ、これは、腐ったコーヒー牛乳やー！！

第二十一話 真知、愚痴を言う

七月に入り梅雨真つ盛り、今日も大粒の雨が文京大学のキャンパスを濡らしている。窓を叩く雨粒を見て私は一つため息をつく。

「うん、どうしたのかつちゃん。ため息なんかついちゃって」

しいちゃんが私の顔を覗き込む。

「しいちゃん……、さっきの会議で何か感じることも無かった？」

「さっきの会議」とは文化祭実行委員イベント担当グループの会議のことである。

「みんなからの発言が少なかったですね。私たちが提案する意見には賛成してくれるのですが……」

亜由美が私の代弁をしてくれた。

「『ミス文京大学』の話だってみんな私たち三人が考えたでしょう？ みんな決まったことはやってくれるけど、企画を考えることはしてくれていないじゃない……」

この前の参加希望サークルの面接だつて私たち三人が全てやったんだから。

「私はみんな頑張っていると思うな。『ミス文京大学』だつて企画が決定したらみんな候補者募集に動いているし」

しいちゃんが言っている視線の先にはイベント担当グループの一人（えーと、名前は高尾君たかおだったかな）が綺麗な女子大生にチラシを配っている。たぶん「ミス文京大学」の募集をしているのだろう。

「ほら、彼だつて一生懸命声をかけているでしょ」

「見ようによつてはキャッチセールスにも見えますけどね」

亜由美が冷静に彼を見つめて言う。

「もーう、キャッチセールスなんか大学の構内でやっているわけ無いじゃない。『ミス文京大学』の募集だつて。ほら、みんな頑張っているじゃない……」

しいちゃんが朗らかな笑みを彼に向けた。

うーん、しいちゃんが甘いのか、私わがままなのか……。

今日の食堂は太陽の光が差さないせいか、いつもより暗く見える。しかしいつもと変わらないものもある。

「またー、とんかつ定食売り切れー！」

いつものことだけど、この事実を受け入れるには物すごく力がある。

「そんなに怒らなくても……カツカレーがあるじゃないですか」

亜由美が半ば呆れ顔でカツカレーと書かれたボタンを指差す。

「ふっふっふ、とんかつとカツカレーじゃ天と地、月とすっぽんの差があるのよ。亜由美」

私は不気味な笑みを浮かべながら醤油ラーメンのボタンを押す。

ラーメンをトレイに乗つけてしいちゃんが先にいる席に向かうとはるちゃんも来ていた。そして姉小路会長も……。当然のように彼の前にはとんかつ定食が並べられている。

「ちっ……、ブルジョワめ！」

舌打ちしながら私はしいちゃんの右となりに座った。左となりに亜由美が座る。しいちゃんの正面には姉小路会長。私から見るとの右となりにはるちゃんという席順だ。

「かつちゃん、会長の家は普通のサラリーマンだって言っているでしょう」

「とんかつ定食一つで差別と思われるのは困るな」

はるちゃんと会長が同時に私をなだめる。歴史ゲームで話が合っ

て以来この二人は仲がいいようだ。

「ところで三人ともまた明石先輩が提案した企画却下したんだってー？」

はるちゃんがエビフライを箸に持ちながら意地悪そうな笑顔で尋ねる。

「そう、『女の子の女の子による女の子のためのカフェ』だなんて、アメリカ大統領みたいな子と言っているけど、実態は女の子集める

のが目的なのが見え見えなんだもん。却下しちゃったよ」

私たちの却下を受けた明石先輩は、笑顔を崩すことは無かったけど、立ち去るときの挙動はいつもより力みが入っていたような気がするな。

「明石先輩ねー、部屋ではマジな顔していたよー。『私を本気にさせたらどうなるかかつちゃんたちに教えてあげなきゃ』って」

本気になった明石先輩……可愛い女の子に抱きつく力二割増しか可愛い女の子センサーの感度三十パーセント増とかそんな感じになるのかな……。

「彼女も本気の顔をするところがあるのだな」

とんかつを一切れを胃の中に押し込んだ会長が呟く。

「会長、明石先輩を知っているのですか？」

羨ましそうにとんかつを眺めながら私が尋ねる。

「ああ、サークルや部の代表者とは定期的に顔を合わせるからな。彼女は俺に会うときはいつも笑顔だ」

まああの笑顔が明石先輩だからな。

「そう、私もあまり見たこと無いもん。明石先輩のマジ顔」

今度は一体何を考えているのやら……。

「ところではるちゃん、『ミス文京大学』に参加する気あるー？」

背も高く綺麗なはるちゃん（胸は無いけど）なら「ミス文京大学」の候補としても充分だ。

「ないよー」

あっさりと拒否されてしまった。

「私は文化祭でダンスをするの。ミスコンとかに出てダンスの時間を奪われるようなことになったら嫌だもん」

はるちゃんはダンスに熱心なんだなあ。綺麗なのにもつたいない。しかしはるちゃんのダンスサークルにはまだまだ綺麗な人はいる。

「当然明石先輩や浅野先輩も出る気は無いわよ」

うーん、先に釘を刺されてしまったか……。

「まあまあかつちゃん、かつちゃんが焦らなくてもみんなが候補者

を探してくれるよ」

しいちゃんが小さなメンチカツ刺したフォークを持ちながら私を励ます。

「みんなちゃんと探してくれるかな……」

私はラーメンをすすりながら肩を落とした。

「なんだなんだ、まるで仲間を信頼していないような言い方だな」

会長がとんかつの一切れを箸で二つに割る。

「かつちゃんは前から物事をネガティブに考える癖があるみたいなんですよ」

はるちゃんが答える。別に私はネガティブじゃないよ……。確かに去年は名前にネガティブだったけど……。

「かつちゃんは今、人の上に立つ者の苦勞を味わっているんだと思います」

亜由美が眠そうな目を私に向ける。人の上に立っている……。まあ立っているか。

「人の上に立つ苦勞はそんな簡単に味わえるものじゃないぞ」

「会長も人の上に立つ者の苦勞を味わっているのですか？」

はるちゃんがキャベツの千切りを口に入れながら会長に尋ねる。

「まあ……、サークルからもつと部屋をよくしてほしいとか、予算をもつ少し欲しいとか……、大変なものだよ」

そこまで言って会長は半分に切ったとんかつの一切れを口にした。「それでも、他の役員のおかげでなんとか無事に乗り切れているけどね」

「会長には信頼できる部下がいていいなあ……」

「明からに周りの人を信頼していない言い方だな」

「もう、私も信じていないって事ー！」

しいちゃんが私の顔を見ながら肩を叩く。かなり痛い。

「裸の付き合いをした仲だというのに……ショックです」

亜由美は右目の瞼を押さえて泣いている（ふりをしている）。

「違っって、二人は信頼しているって」

「じゃあ誰が信頼できないって言うのー？」

はるちゃんが意地悪そうな顔で私の顔を覗き込む。

「別にー、信頼してないわけじゃないけどー、なんだかー……」

「なんだか私たち三人だけが頑張っているような気がして」

と、私は朝の谷中霊園でペルと戯れている町田イラケン選手に愚痴をこぼす。

イラケン選手とはたまに私がペルの散歩を担当するときはこの谷中霊園で会い、近況を話し合う仲になっている。イラケン選手の大ファンであるしいちゃんが聞いたら羨ましがらるだろうな。

「自分の意見を持っていないというか……。私としいちゃんと亜由美の意見にははい従うだけというか、自分たちからこんな企画はどう？ って持ってきて欲しいんです。まだ文化祭まで時間はあるのだから……」

「他のグループはどういう状況なんだい？」

イラケン選手はペルの頬を横に引っ張りながら尋ねる。

「けーまたちの広報部はパンフレットのスポンサーを探していて、近くの商店街を歩き回っています。あと文化祭に参加するグループを載せるページのレイアウトをみんな考えていたり……。かわちやんたちはゴミの収集方法やゴミ箱の設置位置について話し合っているみたいです」

私も座ってペルの頬を引っ張る。

「二人とも『みんな意欲的に発言してくれるから助かる』って言っているんですよ。私にはそういう実感が湧いてこないんです」

「集団にはいろいろな形がある。二人がいるグループはそういう形で、真知さんのグループはそれとは違う形ということなんだろうな。トップの指示に的確に動いている、そういう集団の形なんじゃないのかな？」

イラケン選手がペルの頬を離す。ゆっくりと伸びた頬が元に戻っていく。

「うーん、私たちに頼りっぱなしって気がするのですが……。この前も『ミス文京大学』の候補を探すときに、『どんな子に声をかければいいでしょう?』って聞いてきたんですよ? そんなの自分で考える、って話ですよ」

「声をかけられる人はそう思うけど、本当に声をかけられない人はそう聞いてもおかしくないんじゃないのかな?」

「そうですかね……」

私はペルのわき腹をよしよし、と撫でる。

「それに七月に入ってテストや課題提出期間が近くなったから、活動は控えたいと言うメンバーも出てくるし……テストや課題があるのは私たちだって同じなのに不公平ですよ」

「その人は自分の頑張れる範囲でやっていこうとしているのだと思うな。同じ大学生でも環境や状況は人それぞれだと思っただ。真知さんたちはそんな環境も状況も違う人たちをまとめていかなければいけない。愚痴の言うのもいいけど、もう少し文化祭を一緒に作る仲間としてメンバーを信頼しないと」

「信頼しないと」と言われても……。確かにイラケン選手の意見には理解できる部分もあるけど……。

しいちゃん、亜由美やかわちゃんたちは大丈夫として、同じイベント企画グループの人たちにはいまいち物足りなさを感じる私なのであった。

第二十二話 ライラと世直し

「あー、もうイライラする！」

私は窓の枠に両手をつけてスッキリとしない灰色の空に向かって叫んだ。といっても天気に対してイライラしているわけではない。相手はイベント企画チームの人たちである。

大学の文化祭に呼ぶ芸能人に大学の近くに実家を持つお笑いコンビを呼ぶことになったのは既に話したことだが、その前座の人をどうするか問題になっているのだ。

きっかけは

「そもそもコンビ一組で一時間も持つわけ無いだろ」

タカビーに突っ込まれてしまったことにある。私としてはそのコンビ一組でトークショーやったり、ネタをやってもらったりして一時間持たせようと思っていたのだが……。結局はあと二組ほどお笑いコンビを呼ぶことが決定した（その方が企画はしやすいということで、管理とかギャラの問題は面倒になるかもしれないけど……。）。幸い文化祭までまだ四ヶ月あるので、間に合うのだけど……。

「どうしてその人選を私たち三人がやらなきゃいけないのよー！」

誰を呼ぶかでイベント企画チームのみんなで話し合おうって提案したのに、結局は私としいちゃんと亜由美にその決定権をゆだねられてしまったのだ。

というわけで、私は文化祭室（文化祭実行委員の部室）の窓から空に向かって叫んでいるのである。

「かつちゃん、そんなに叫んだって天気は晴れないし、芸人さんは誰だか決まらないよー」

しいちゃんが私を見ながら「タレント名鑑」のページをめくる。

「やっぱりテーマ『東京とともに六十年』に沿って東京出身の芸人さんじゃないといけないんですよね」

「そうよ、そこがこだわりよー！」

私は振り向いて亜由美に叫ぶ。メイン以外の人も東京出身で揃えたい、それは譲れない。

「最近テレビに出ているのは関西から進出しているコンビが多いみたいですけどね」

「あれは事務所が関西にあるだけで、出身が全員関西とは限らないでしょ」

東京からはるばる大阪に渡ってそこで芸人として修行を積んでいく……。そんな芸人さんがいてもいいじゃないか。

いてもいいじゃないかと思っただけど、そんな簡単に見つかるわけも無く一時間が経過。。

「うー！ いなーい！！」

再び私は空に向かって大きく叫んだ。

「そういえば昨日明石先輩がですね」

亜由美が私の叫びを無視してしいちゃんに話しかける。

「明石先輩？ また女の子襲っていたとか！？」

「いや、それはほぼ毎日のことなんで今さらそんなことは問題じゃないんですけど」

その考えはどうなんだろう……。って私も今さらそんなことでは驚かないけど。

私が席に戻ったのを確認して亜由美が話を続ける。

「一つ教室を借りてそこへ女の子達を集めて何か話し合っていたみたいなんですよ。たぶん教室は会長の許可を得たんでしょうね」

一つの教室に女の子を集めるなんて、明石先輩ついに楽園を作ってしまったか。

「またとんでもない企画でも考えているのかな」

しいちゃんが「タレント名鑑」を閉じて小さくため息をつく。また可愛い女の子を集めるための企画を考えて私たちを困らせるつもりだろう。

「あー、もう！ どこもかしこも問題ばかりー！！」

私は三度空に向かって叫ぶ。

「今日はもうこの辺にしておこうか」

「かつちゃんもストレスが溜まっているみたいですね。特に最近は何かにつけてイライラしてばっか」

「何かいい解消法があればいいのだけど……」

「と言うわけで、みんなでカラオケに行きたいと思います」

亜由美が小さく右手でガッツポーズを上げた。

「オー！」

と、それに続いたのはしいちゃんとはるちゃんとかわちゃん。そして明石先輩と浅野先輩の五人だ。

「カラオケで思いつきり叫んだ後で、かつちゃんの大好きなとんかつをみんなで食べて、かつちゃんのストレスを思いつきり発散させましょう」

うーん、私のためにこんなに集まってくれてなんて感激だなあ……

「本当は男どもも呼びたかったのですが……」

「ダーリンはパンフレットのスポンサー探して今頃文京区中ぶんきょうを歩きまわっているわ」

かわちゃんが寂しそうに呟く。

「会長はタカビーと何か話があるみたい」

はるちゃんがつまらなそうに口を尖らせる。

「まあまあいいじゃない、むさい男が混じるより、可愛い女の子達に囲まれたほうがストレスも解消するわよ」

明石先輩……それで解消するのは私のストレスではなくて明石先輩のストレスでしょう。しかも明石先輩は私のストレスの一因を担っている。昨日女の子を集めて何を話していたのかは気になるところだけど、そんな話をしたらストレス解消どころじゃなくなると思うので、知らないフリをしようっと。

……ところで明石先輩はいつも明るい笑顔だけど、ストレスを感じることがあるのだろうか？

そんなことを思いながら歩いているうちにカラオケボックスにたどり着いた。平日の夜のためか待ち時間無しで入ることができた。左から順に浅野先輩、明石先輩、はるちゃん、私、しいちゃん、亜由美、かわちゃんと座る。自然と学年の順になってしまった。

最初に頼んだドリンクが机の上に並べられたのを確認すると……。「さてー、最初は誰が歌いますか？」

明石先輩がマイクを右手に持ち私たちを一人ずつ指していく。

「それじゃあ一番年下の私が歌います！」

かわちゃんが左手でマイクを奪い取った。そして右手で素早くリモコンにコードを打ち込む。

曲が流れ、歌詞が画面の下に現れると、かわちゃんは勢いよく「ダーリン！」と歌いだした。

彼への愛情と愛が世界を救うことを主題とした歌。サビの歌いだしは必ず「ダーリン」。かわちゃんは選曲もバカップル……いやいや、ラブがいつぱいなのだなあ。

「かわちゃん、なかなかのバカップルぶりよかったよー」

明石先輩がかわちゃんの頭を優しく撫でながら、マイクを取る。

「だから、バカップルじゃないですー」

かわちゃんが明石先輩を軽く睨みながら席に座る。いや、私もなかなかのバカップルぶりだったと思うよ。

「それじゃあ次は誰が歌うー？　しいちゃん、行ってみるー？」

明石先輩がマイクでしいちゃんを指すと、しいちゃんはちよつと戸惑った表情を見せた。

「え……と、明石先輩。自分が好きな歌を歌えばいいんですよ」

「そうだよー、自分の歌いたい歌を歌いなさい」

「周りが歌っている歌の雰囲気とか歌の流れとか気にせず歌ってもいいんですよ」

「当たり前だよ、人を気にしながら歌を歌っていたらストレスなんて解消しないよ」

「それじゃあ……遠慮なく私の十八番の歌を歌いたいと思います」

今のやりとりに「歌」という漢字は何回出てきたのだろう……。そんなことを考えているうちに、しいちゃんが選曲した歌が流れ出した。うん……。？　これっておじさんグループが歌っている歌だよね……。ほら、ちょっと額が頭のとっぺんまであって、鼻の下に髭を生やしているあの人の……。

しいちゃんは周りの「はてな」な気持ちを気にせず、腹の底から普段の会話のトーンよりも数倍も低い声で歌い始めた。

テレビにはリングの中で闘う二人のボクサーが映し出されている。しいちゃんがこれを選曲したのはこれが理由だったの？　聞いてくるうちに歌詞もボクサーをイメージした歌であることが分かってきた。歌詞の中で主人公とされるボクサーはボコボコにされて負けてしまうのである。

そんなボクサー好きにとっては感動モノだろうと思う歌を気持ちよく歌うしいちゃん。私の視界の隅でしいちゃんの髪の毛がだんだん薄くなってきた、額になって、鼻の下に髭を生やして……えええっ！

驚いてしいちゃんのほうを見る。よかった、普通のしいちゃんだ。しいちゃんは最後の掛け声（ある意味この歌のサビと言っても過言ではないだろう）までしっかりと歌いきった。その表情は恍惚としている。

「……しいちゃん、いやー自分の世界に入りきっていたよー。よかったよー」

明石先輩はいつもの笑顔に感心さを加えながらマイクを取る。

「それじゃあ続いては私が行かせて頂きます」

亜由美が手を上げてリモコンにコードを打ち込む。

それは軽快なスカの音楽とともに流れる全て英語の歌だった。かつて、イラケン選手が試合のときの入場行進曲としていたバンドが作った歌である。亜由美は目を閉じて歌詞を見ることなく歌い続ける。

言葉遣いは正しい敬語だけどこか眠さを感じるいつもの亜由美

とは違うはきはきとした歌声。声の違いもそうだけど、よくここまで英語ができるものだと感心してしまった。

「亜由美、ワンダフル！ セクシー！」

英語の歌を歌っていたせいかわ明石先輩が英語で褒める。そして抱きしめる。

「うわっ、なんで私だけそんなリアクションなんですかー！」

「亜由美がセクシーだからに決まっているじゃない」

セクシーは絶対歌とは関係ないよな。ただ抱きつきたかっただけなんだろう。

「離してくださいよ、離さないと黒かびの……モゴモゴッ」

「あーん、亜由美ったらおいたはいけませんよー」

亜由美が何か言おうとしたところを明石先輩が亜由美の口を右手で抑える。いつものにつこり笑顔だけど、口の端がちょっと釣りあがっていたな。

「男性の歌が出たところで、私も男の歌を歌いますか」

「浅野先輩が立ち上がると、明石先輩からマイクを取った。」

浅野先輩はどちらかというカラオケでは男性の歌を歌うってイメージがあるから納得だな。

流れてきたのは激しいエレキギターとドラムの音だった。歌詞が出ると同時に浅野先輩は思いっきり絶叫する。まるで断末魔のようだ。私がイメージしていたのより斜め上を行っている。

聞くにせつかくいい大学に入ったのにろくな仕事に付かないなんて無駄遣いだ、と男の人を叱る歌らしい。大学四年生の人が聞いたら思わず自分の事かと焦ってしまっただろう。ちなみに浅野先輩はめでたく二社から内定をもらい、優越感に浸れる立場にある。

「ムダ遣い〜！」と叫ぶ浅野先輩の大きく見開かれた目はどこか別の世界へ行ってしまったている。サビの部分ではそんな男達へのお仕置きとして電気アンマをかける。一体どんな歌だ。

「浅野先輩はこういう歌が好きなの？」

私のはるちゃんに小声で尋ねると、はるちゃんは小さく頷き。

「浅野先輩はビジュアル系やデスメタル、ハードロック系のダークな歌をいつも歌っているよ」

浅野先輩……、フルネームは「浅野いのり」。そんな聖なる印象を受ける名前を持っているけど、彼女が朝に祈ることとは案外ブラックで恐ろしいものかもしれない。

第二十三話 キスして桜島

「じゃあ次は私が歌う！」

はるちゃんは手を伸ばして明石先輩からマイクを取った。流れてきたのは去年はるちゃんと出会ったばかりのときに彼女が踊っていた曲だ。

右手でマイクを持ち、左手を滑らかに動かす。私の頭の中に、華麗にこの曲で踊っていたはるちゃんの姿。背後に華麗な揚羽蝶が見える。が浮かんだ。

「遙はこの歌に限らず、この人の曲ならなんでも歌えるんだから」
明石先輩がウーロン茶の入ったストローを口にしながら私に話しかける。

歌い終わったはるちゃん表情は、踊りを終えたときのように清々しいものだった。

「いいねー遙、輝いているよー。そのうちもっともっと輝けるようになるよー」

「ありがとうございます！」

はるちゃんは礼儀正しく明石先輩に頭を下げながらマイクを彼女に渡した。

「さて、そろそろ主役が歌いますか……？」

明石先輩がマイクを私の膝の上に置いた。

「え……？ 私ですか」

「かつちゃんまだ歌っていないじゃない」

かわちゃんが私を見ながらメロンソーダの上に載っているアイスクリームを食べる。

「うーん、今までの流れから考えると普通の歌で恐縮なんですけど……」

と、私はコードを入力して曲が流れるのを待つ。

エレクトーンの音が部屋の中に響く。

「あー、これ私が次歌おうと思っていたのにー」

ラブラブな歌専門（？）のかわちゃんがスプーンを片手にブーイングをする。

「ごめんねー、これ私も歌いたかったから」

そして私は将来彼氏にするであろう「愛してるのサイン」を何にするか考えながら、歌うのであった。

「かつちゃんは『愛してるのサイン』の相手はもういるのー？」

私からマイクを取りながら明石先輩がいつもの笑顔で尋ねる。

「いやー、残念ながらまだいませんよー」

この名前だからって彼氏なんて出来るわけが無い、とは少しも思っていない。けど今は彼氏を探すより友達と遊んでいたい。

「えーと、次は私の番だねー」

明石先輩がリモコンの「スタート」ボタンを押すと曲が流れ始めた。曲に合わせて明石先輩がリズムを取り始める。歌詞が表示されるや否や、彼女は目を瞑って歌い始めた。歌詞を見ないで歌えるなんてかなり数をこなしているのだろう。

明るい笑顔で「キスして！」と叫ぶ明石先輩。そんな彼女の顔を見ているとつい私は顔を近づけたくなる……って危ない危ない。

明石先輩は最後の歌詞を歌いきると、すぐに演奏を取り消してマイクを置いた。いつもの笑顔がさらに活きのよいものになっている。まるで風呂上りにコーヒー牛乳を飲んで幸せなき分を味わっている人のような。

「明石先輩は今まで何回キスしたのですか？」

かわちゃんが明石先輩を見て大胆な質問をする。あれだけサビの部分に「キスして！」が入っていたので、気になったのだろう。

明石先輩は先ほどの表情を変えることなく首をちよつと傾げる。

「うーん、キスにもいろいろ種類があるじゃない、どこにするかとか……。例えば頬とか唇とか額とかあるじゃない？」

「そりゃあさつき明石先輩が歌っていた歌の中にあつた『唇』に決まっているじゃないですか」

「唇かあ……」

そう言いながら明石先輩は左手の人差し指を自分の下唇に当てて目を瞑った。今まで唇にキスした回数を数えているのだろうか？

「人にキスの回数を聞くときは、自分から言うのが礼儀と言うものでしょう！」

はるちゃんがかわちゃんを右手で鋭く指差した。かわちゃんの質問の姿勢に意義があるようだ。ちなみにはるちゃんは今までキスはおろか恋をしたことすら無い。

「な、なんでそんな展開になるのよ！」

かわちゃんが顔を真っ赤にさせてテーブルを叩く。メロンソーダがちよっぴりコップの中から飛び出した。

「もーう、かわちゃん。テーブル強く叩きすぎだよ……」

しいちゃんがティッシュでこぼれたメロンソーダをふき取る。どうやら自分のウーロン茶もこぼれてしまったようだ。

「明石先輩にそんな恐ろしい質問をすること自体がおかしいんですよ」

亜由美ははるちゃんの側につく。恐ろしい質問って……、亜由美はこの質問の答えを知っているのだろうか。

明石先輩の目がやっと開かれた。彼女は笑顔を消してかわちゃんを暫くじっと見るめる。

「ど、どうしたんですか……。一体……」

明石先輩の真剣な眼差しにかわちゃんはたじろぐ。

「女の子も数に入れるか入れないかかなり回数が変わっちゃうんだけど」

さらりと恐ろしいことを言うと、明石先輩はいつもの笑顔に戻った。「女の子も数に入れる」って、女の子にもキス（しかも唇に！）しているのか。私たちも近い将来唇を奪われるのだろうか。

「はい、誰も入れないなら次の曲行くわよー」

浅野先輩が空気を換えようとリモコンを片手にコードを打ち込んだ。次の曲は私たちのご先祖様の恩人である、西郷さん

西郷隆さいこうた

かもり

盛　の故郷の山をテーマにした歌のようだ。

「ところで、はるちゃんは明石先輩にキスされたことはあるの？」

しいちゃんが明石先輩に聞こえないようにしいちゃんに尋ねる。

はるちゃんが亜由美をちらりと見て答える。

「私はまだ頬にキスどまりだけど、亜由美は何度も唇にキスをされたことがあるよ」

いずれは私にもキスを迫るのか。と、浅野先輩の歌に合いの手を入れる明石先輩をみて微妙な気持ちになった。明石先輩は優しいお姉さんでいいんだけど、女性だからね……。抱き付かれるのは慣れたけど、キスをするのはちよつと嫌だな。

「よし、最後は逢、いつものあれを歌いなさいよ」

浅野先輩がマイクをはるちゃんに渡す。

「えー、あれですか？　しいちゃんやかっちゃんには分かるかな…

…」

と、はるちゃんは遠慮がちに私たちを見る。

「サークルでカラオケやるときにいつも歌うじゃない、さあ曲を流すわよ。」

「分かりました、はるかいきまーす」

はるちゃんの歌は最初はゆっくりしたものだ。どうやら歌詞の人はドブネズミのようになりたいらしい。ドブネズミって汚いだけで美しいとは思えないのだけど……。

そのうちはるちゃんは絶叫し、マイク片手に勢いよくジャンプを始めた。気が付いたら浅野先輩も明石先輩も亜由美もサビの一言を叫んで飛び跳ねている。亜由美に至っては顔の前に両腕でバツ印を掲げている。

「ほらかっちゃんもしいちゃんも次サビの部分が来たら一緒にジャンプするのよ」

明石先輩が私の手を取り引つ張る。

「とりあえず叫んで飛べばいいんですか？」

しいちゃんも私と一緒に立ち上がる。

「そう、とにかく叫んで飛ぶ。ほら、もう来た」

なんだか訳が分からぬまま私としいちゃんはサビの一言を叫びながら飛び続けた。飛んでいるうちになんだか激しい楽しさ体中から湧き上がってくる。

「ね、こうして歌いながら飛んでいると嫌なこともスツキリするでしょ」

浅野先輩が笑顔で飛びながら私たちにもうひとつあったマイクを向けた。

カラオケも終わり私たち六人はとんかつ屋の「豚殿念」へと向かう。先客はいるものの、こ混雑していなかったため、待ち時間無しで六人全員が一つのテーブルに座ることが出来た。

隣のテーブルにはタカビーと姉小路会長が向かい合ってお茶を飲んでいる。お茶しかないのを見ると、店に入ったのは私たちとあまり差は無いみたい。

「あれー、会長とタカビーもとんかつですかー」

はるちゃんが楽しそうな表情で、二人から一番近い席に座った。

「ああ、高見から最近の文化祭の状況を聞いていたんだ。自治会の会長として文化祭の進捗は聞いておくべきことだからな」

「へー、そうなんですかー」

私ははるちゃんの向かい側に座る。

「時にかっちゃんよ、最近何かとストレスを感じているらしいが一体どうしたと言うのだ？」

タカビーの呼びかけがきっかけとなり、私はイライラはすっかり収まったものの、事後報告としてとんかつを食べながら今までしいちゃんやイラケン選手に愚痴っていた内容を話した。

「みんなもつと頑張っしてほしいよ！」

私の話の締めくくりのセリフを聞き、それまで「うんうん」と頷いて聞いていたタカビーの目が一瞬釣りあがったような気がした。

「はー、とんかつ美味しかったー。みんなほんとに私はお金払わなくていいの?」

「いいんですよ、今日はかつちゃんのストレス解消の日なんですから」

亜由美が小銭を財布の中に入れてチャックを閉める。

「今日は私のためにこういうことしてくれてありがとうございます
た」

私は周りのみんな一人ひとりに頭を下げる。

「こういう雰囲気の中で言うのもなんなんだが……」

と、店から出てきたタカビーが口を挟んだ。

「やい、御徒真知よ」

「そういう呼び方は反則だって言っているでしょ」

私はタカビーを睨む。しかし、タカビーのほうがもっと鋭く私を睨んでいた。

「さつき『みんな頑張って』って言っていたよ……」

「ええ、言ったわよ。『みんなもっと頑張ってほしい』って……」

「お前はそう言えるほど頑張っているのか?」

タカビーの質問に私はムキになって答える。

「頑張っているわよ! この前だって全く寝ていないのに面接したし、ミスコンの企画だったて私としいちゃんと亜由美で考えたんだしー!」

「お前が何をやるうが関係ない。それよりもなぜお前が『みんな頑張って』と言ったのか俺にはそれが理解できない」

店の看板が時折点滅する。その光に照らされるタカビーの顔と口調はいつもの穏やかなものと違い厳しいものになっていた。

第二十四話 頑張つてと頑張ろう

「どうして私が怒られなきゃいけないわけー!？」

私は思いつきりしいちゃんのベッドに腰を下ろした。そして仰向けに倒れる。天井にはイラケン選手のポスターが貼つてある。

みんなでカラオケを歌って好きなとんかつを食べてせっかく最近溜まっていたストレスが解消したというのに、タカビーになぜか真剣に怒られてしまった。

なんだか訳が分からないままはるちゃんとともにしいちゃんの家にお泊りに来たが、落ち着くごとにタカビーのセリフ一つ一つが思い出されてきて腹が立ってきた。

「なぜお前は『頑張つて』って言えるんだ」

「なによ、私は頑張っているからみんなも頑張つてって言ったのに、なんでそんなことで私が怒られなきゃいけないのよ。おまけに『おまえはそれほど頑張っているのか?』だって? 何を言っているのよ、あいつは」

「まあまあかつちゃん落ち着いてよ」

しいちゃんが私の右隣に座って私の腰の辺りを叩く。

「でも私……タカビーの言っていることも分かる気がするな」

「なによー、しいちゃんは私の味方じゃないの」

私は起き上がってしいちゃんを見る。しいちゃんの目はいつもと違い、私に対して厳しい。

「確にかつちゃんは頑張っている。だけどかつちゃんが思っているほど、みんな頑張っているんだよ。タカビーはかつちゃんがみんなのことを見下したようなこと言ったから怒っているの」

頑張っているって? 面倒なことはみんな私たちに任せるくせに。しいちゃんの言うとおりだよ。みんな忙しい中文化祭の仕事頑張

っているんじゃない。それに文句を言うのはかつちゃんのわがまま
つてものだと思うな」

はるちゃんが水滴がついた缶のオレンジジュース口にしながら私
のほうを見る。

「はるちゃんまでタカビーの味方するのー？ もう信じられない！」
私はベッドを降りると缶ジュースが三本置かれている小さなテー
ブルを強く叩いた。ジュースの缶が音を立てて揺れる。

「忙しくなるのが覚悟の上で文化祭の実行委員になったんじゃない。
それをテストがあるからとかバイトがあるからとか言っただけでもない
委員がいるのはおかしいよ。私はそんな人たちと一緒に扱われた
くない！」

しいちゃんが私の右隣に座り、缶ジュースを綺麗に整頓する。

「確にかつちゃんの言う何もしない人もいるけど、そういう人も
まとめて一緒にイベントを企画していくのが私たちの仕事じゃない」
そういう仕事私たちにたくさん来ているからイライラしている
んじゃない。

「あー、もういい。この話はやめやめー！」

私は両手を大きく振って話を中断させる。

「確かにこれ以上話したらかつちゃん爆発しちゃうもんね」

はるちゃんが私の腕にぶつかからないように缶ジュースを避難させ
る。

「かつちゃんも今は分からなくてもそのうち分かるよ……。タカビ
ーが怒っている意味が」

「しいちゃんは分かっているというの？」

私が見ると、しいちゃんは「うーん」と首を傾げて
「ぴったりって訳じゃないと思うけど、大体は合っていると思うん
だ……。これは人に教えてもらうより、かつちゃん自身が理解しな
いといけないことだから……」

なんだか分からないけど、そのうち理解することにするよ。それ
で私のストレスが解消されるならね。

私は再びしいちゃんのベットに仰向けに寝た。ポスターのイラスト選手と目が合う。

「ところで、はるちゃん。亜由美から昨日明石先輩が教室に女の子を集めていた、って話を聞いたんだけど、何か知っている？」

しいちゃんは枕元から格闘家のぬいぐるみを取り出した。そして優しく抱きしめる。

そう言えばカラオケに行く前に亜由美がそんなことを言っていたな。教室で女の子を集めるなんて明石先輩にとってはまさに天国だっただろう。

「うーん、知っていることは知っているけど、まだはつきりしたところじゃないので、これは明石先輩本人から聞いたほうがいいと思うな……」

はるちゃんは飲み終えたジュースの缶をゴミ箱へ投げようと構えたが

「ダメ、はるちゃん。缶は専用のゴミ箱があるからこの部屋のゴミ箱には捨てないで」

と、しいちゃんに止められた。はるちゃんは口を尖らせて缶をテーブルの上に置く。

「でもまあ二人が困るようなことじゃないから安心してよ。むしろ喜ぶくらいかな」

そう言っではるちゃんは缶ジュースを倒さないように慎重にテーブルを部屋の隅へと運ぶ。これから私とはるちゃんが寝るための布団を敷くのだ。

「まあ私たちのためになることならいいんだけど……」

押入れから青の敷布団を取り出す。それをさっきまでテーブルのあったところへ広げると、私は方角を確認する。

「南はあつちね！」

御徒家の者はかつて徳川家が住んでいた場所と西郷さんの故郷の方向へ足を向けて寝られないのだ。自然と足が向けられる方角は北から西に限られる（東京にいる場合ね）。

「明日明石先輩に直接聞いてみるか……」

枕を南において私は仰向けに倒れる。天井にはイラケン選手の後輩で、現日本チャンピオンの腹打木久扇……じゃない、腹打木久蔵さんのポスターが貼られている。

「話し戻して悪いけど、タカビーに大学であつたらどうするの？」
はるちゃんが隣に寝転んで私を見る。その表情はいつもの楽しそうなものではなく、どこか心配気である。

「避けるのは逃げているみたいで嫌だから、堂々とするわ」

次の日、私は大学の構内を珍しく一人で歩いていた。私だけが受ける授業が休講になっていたからである。

他の授業を受けているしいちゃんとはるちゃんはお昼に合流することにして、私はぶらぶらと大学の中を歩く。「ミス文京大学」の候補になりそうな可愛い、綺麗な女子学生を探すことも忘れない。

そんなそばから綺麗な女の人発見。髪は耳まで伸ばしていて薄茶色でさらさらのストレート、背ははるちゃんと同じくらいかな。しかも胸が大きい。鼻筋がすらっとしていて目がパツチリ開いている。おまけに青い。日本人じゃないのかな？

彼女の視線は女子トイレのほうに向けられている。友達がトイレに入っているのを待っているのだろうか？ ならば声をかけるのは今がチャンスだ。

「あ、あの」

私はとりあえず日本語で話しかけてみた。

「はい、私ですか？」

相手はにっこりと微笑んで答えてくれた。よかった、日本語通じた。

「今、秋の文化祭で行われる、『ミス文京大学』の候補者を募集しているんですが、よかったらそれに参加してみませんか？」

日本語が通じたのに安心した私は一気に自分の言いたいことを伝える。

「へー、『ミス文京大学』かー、今年もやるんだー」
お、なかなかいい反応だぞ。

「ダメよ、かつちゃん。ヘレンちゃんは私のものよ」
女子トイレから現れたのは明石先輩だった。ハンカチでしっかりと拭いた右手をカレンさんの左肩に乗せる。

「私のものってどういうことですか？」

明石先輩の魔の手にやられてしまったのだろうか？

「ヘレンちゃんは私と一緒に文化祭で踊ってくれるんだもんねー」
ああ、ダンスの意味か……。と私は安心した。

「ヘレンちゃんも私と同じく女の子だけのダンスサークルの部長さんなのよ」

「はい、経済学部三年の石川いしかわヘレンと言います。日本とアメリカのハーフです」

石川先輩は、はきはきとした声で私に挨拶をした。

「ここであかつちゃんに問題です」

明石先輩が石川先輩の肩に置いた手をぐっと強める。

「ここ文京大学には私やヘレンちゃんが部長を務める女の子だけのダンスサークルが幾つあるでしょうか？」

うーん、いきなりそんな質問をされても分からないな……。問題にするぐらいだから三つとか四つじゃないのだからうけど。

「三、二、一……ブーツ！ 正解は八つです」

明石先輩は楽しそうに口を尖らせる。八つか、結構多いな……。

「それで、その質問と『ミス文京大学』に何か関係があるんですか？」

「いや、ミスコンとは関係ないんだけどね。今年の文化祭は八つのサークルが一つのチームになって、ダンスを披露することに決めたのよ。場所は文長記念ホールぶんちやんきんねん。空いているでしょ？」

文長とは我が文京大学の創設者である井上文長いのつえぶんちやんのことである。彼を記念して建てられたホールは、四百人の生徒を収容できる大きさだ。

「ダンスサークルのみんなが集まって一緒にダンスを踊る。全うな企画でしょ。これならかつちゃんたちが断る理由はないでしょ」

明石先輩が昨日女の子達を集めていたのはこれが理由だったのか……。

「いつもは違う活動をしている私たちだけど、年に一度の文化祭だもん、みんなで一つになるのもいいかなーと思ってね。他のサークルのみんなも賛成してくれたし」

石川先輩は、明石先輩の右手が彼女の頬を撫でているのを気づいていないようだ。

「そうですね……。あとで正式に企画書を文化祭室までに出してもらえませんか？ 文長ホルルの利用申請書も忘れずお願いします」
「了解ー。そういうの去年も書いているから得意だよ」

明石先輩は得意げな顔で石川先輩のおでこや髪を撫で回す。

「こら、真奈美。私の頭を撫でない」

あ、やっと明石先輩の魔の手が伸びていることに気づいたようだ。
「へーレンー！」

不意に私の後ろから大声が響いてきた。振り向くとちょっと小太りの目玉のとても大きい男の人が私たちに向かって突進してくる。

「あ、彼だ。それじゃあ真奈美。これからデートしに行くねー」

「おーう、文化祭お互い頑張ろうねー！」
「うん、頑張ろう！」

石川先輩は明石先輩の差し出した右手を勢いよく握ると、突進してくる目玉のとても大きい彼氏に向かって歩き出した。

「さて、ここで問題です」

と、明石先輩は石川先輩を見送りながら私の左肩を強く掴んだ。

「さつき、私とヘレンは何と言ったでしょう？」

今度の質問はすぐに答えることができた。

「えーと、『頑張ろう』ですか……」

明石先輩は笑顔で私に抱きつき、頬を摺り寄せてきた。

「ピンポーン！ 正解、答えは『頑張ろう』です。決して『頑張っ

て』ではないのです」

「頑張ろう」と「頑張つて」を今なぜここで比較するのだろうか……。と、私は明石先輩の滑らかな頬を感じるのであった。

第二十五話 頑張つてと頑張ろう(二)

「『頑張つて』と『頑張ろう』ねえ……」

明石先輩の言葉を何度も呟きながら、私はしいちゃんとはるちゃんの間で待つてあるう食堂へと向かった。灰色のぶ厚い雲の下にあるキヤンパスにお昼を知らせる鐘が鳴り響く。

とんかつ定食が売り切れていることを受け入れた私は、チャーハンをトレーの上に乗せてしいちゃんとはるちゃんの姿を探す。しかしまだ来ていないようだ。

しょうがないと適当に座る席を探していると、姉小路会長を発見。今日のメニューはなんとハンバーグ定食だ。私は会長の前に無言で立ち止まる。

「……とんかつじゃないのがそんなに珍しいのか……？」

「いや、別にそういうわけでは」

私は会長が食べるハンバーグを眺めながら彼の左隣に座る。間もなくしいちゃんとはるちゃんが亜由美を連れてやってきた。

「会長さん、今日はハンバーグですかー」

はるちゃんが私と同じく珍しそうにハンバーグを眺め、会長の右隣へ座る。

「だから俺はいつもとんかつを食べているわけではない」

会長は困った顔を浮かべはるちゃんを見る。

「とんかつ定食を食べようと思ったたら売切れていたって事じゃないですか」

亜由美が会長の正面に座る。

「今日はたまたまハンバーグが食べたかったのだ」

「そつだよ、会長さんもたまにはとんかつ以外のものを食べたい時だつてあるよ……」

会長の側についたしいちゃんが私の正面に座る。

「ところで、はるちゃん。ついさつき明石先輩に会ったんだけどさ」

はるちゃんは立ち上がって目を輝かせて私を見る。

「なにになに？ 明石先輩何か言っていた!？」

おそらくはるちゃんはこれから私が話すことは既に知っているのだろう。

「なんでも文京大学にある女子ダンスサークル合同で一つのダンスユニットを作るらしいね」

「正確には八つのダンスサークルのメンバーをミックスしていくつものダンスチームを作るのよ。それらのダンスを文長ホールで披露しようって話」

はるちゃんが私の説明に補足する。

「文長ホールの利用申請はもう出しているんですか」

亜由美が事務的にはるちゃんに訪ねる。

「いやー、これから書くって明石先輩は言っていたよ。文長ホールは私たちが企画しているお笑い以外、まだ使うサークルもないし。これからでも間に合うよ」

はるちゃんに代わり私が答える。

「前にはるちゃんから『明石先輩が本気になった』と聞いたときはどうなるかと思っただけど……、ちゃんとしたダンスの企画でよかったー」

しいちゃんが弁当の箸を止めて安堵の息を吐く。

「ダンスサークルは決まったとして、これからまだまだ他のサークルから大きい企画の話が来るかもしれないぞ」

会長が私たちを見回しながら軽く脅す。

「はい、気をつけまーす」

はるちゃん、あなたは実行委員じゃないでしょう。

「そう言えば明石先輩が最後にこんなこと言っていたんだけど……。『頑張つて』と『頑張ろう』は違うって……。昨日タカビーが怒っていた事と何か関係があるのかな?」

「そりゃあ明石先輩もタカビーがかっちゃんに怒った現場にいましたからね。無関係とは言えないでしょう」

亜由美がフォークで麺を巻きながら答える。

「『頑張って』は相手だけが頑張る。悪く言えば『私は関係ないけど』と突き放すことだな。まあ前後の言い方で印象は変わってくるが……。一方の『頑張ろう』は私もあなたも『一緒に頑張る』と言う気持ちが入っているな」

会長はハンバーグを食べながら淡々と答える。

「高見は御徒さんが『私は頑張っているからあなたたちも頑張りなさいよ!』という感じで言ったから怒ったんだろうな」

「だって実際みんなそうなんだもん、しょうがないじゃない」

グリーンピースを全く気にせず、私はレンゲに乗ったチャーハンを頬張る。

「だからかつちゃん、私たちはみんなと一緒に企画をするのが仕事なんだってば。みんなを突き放しちゃダメだよ」

しいちゃんがちよつと怒った口調になっている。「もう」が無いところを見ると、本気で言っているようだ。

「それならかつちゃん、一度言ってみればいいじゃない」

はるちゃんはエビフライから尻尾を箸で丁寧に切り離しながら、楽しい表情を私に向ける。

「何を言うの?」

「みんな一緒に頑張ろう! って、ここで言ってみてよ」

「そうだよ、かつちゃん。言ってみなよ」

しいちゃんは左手で箸を力強く握り締める。

なんか二人とも真剣なので、何を頑張るか分からないけど、とりあえず言ってみますか。

「えーと、皆さん。いろいろ立場があると思いますが、とにかくみんな一緒に頑張りましょう!」

私は力なくレンゲを持った右手を上げた。レンゲにはご飯粒が二つ付いている。

「おー、頑張ろー!」

亜由美がトマトソースの付いたフォークを持った右手を上げる。

「どうよ、かつちゃん。言ってみて何か変わったことあった？」
はるちゃんが立ち上がってわくわくしながら私に尋ねる。

「いや、別にどうってことは……」

「もうう、かつちゃん。ちよっとは感動とかしてみなさいよー」
はるちゃんがつまらなさそうに口を尖らせて座る。

「もうう、はるちゃん。私の真似をしないでよー」

「まあ、今言っても何も感じないかもしれませんが、タカビーヤイ
ベント企画のみんなに試しにでもいいんで言ってみたら何か変わる
と思いますよ」

試しに言ってみるねえ……。私は言おうか言うまいか考えながら
残ったチャーハンを口の中にしまいこんだ。

午後の授業を二つ終えて廊下を歩いていると、エレベーターホー
ルに高尾君の姿を見つけた。髪型はスポーツ刈りの少し背の低い男
子学生である。

次の授業の無い私は暫く彼の様子を眺める。エレベーターに乗る
うとする女子学生にチラシ片手に声をかけてはずっと断られ続けて
いる。

「かつちゃん、見ていないで一緒に募集をしようよ」

しいちゃんが私の袖を強く引つ張る。

「もう少し様子を見てから……」

「もうう、何もつたいつけているのよー」

そんな言い合いをしているうちに高尾君が一人の女性を呼び止め
た。あれは石川先輩だ。チラシを受け取り高尾君の話をつんふん、
と聞いている。一見好感触に見えるが、石川先輩は文化祭でダンス
をするので、参加しないことは明石先輩から聞いている。（本人か
ら直接聞いてはいないけどね）

それでも高尾君の話を知っているのは少し興味があるからなのだ
ろうか。だとしたらチャンスだ。

「へレーン!!!」

開かれたエレベーターの中から大きな叫び声が聞こえた。声の主はちよつと小太りで目玉の大きい男子学生。確か石川先輩の彼氏だ。彼氏さんはその体系からはちよつと想像できない素早さで石川先輩の側まで来ると、高尾君の胸ぐらをいきなりつかんだ。

「お前、人の彼女なにナンパしているんじゃ、このボケ！」

石川先輩が彼を止めようとしても聞く耳を持たないようだ。

「大変、高尾君がナンパと勘違いされているよ！」

「そろそろあたし達の出番だね」

最悪腕力勝負になったとしてもしいちゃんなら誰にも負けない、と私は高尾君のところへ駆け寄った。

「高尾君、いったいどうしたの？」

高尾君は息苦しそうに私たちのほうを見ると震える声で答えた。

「『ミス文京大学』の募集をしようとの女性に声をかけていたら彼氏の人にナンパと勘違いされているのです」

「そうなのよ、かつちゃん。私はただ話を聞いていただけなのに、この人が勝手に勘違いして……。ほら、いいかげん離しなさいよ、靖史^{やすし}！」

それまであわあわしていた石川先輩は私の顔を見るとほつと、安堵の表情を浮かべた。そして彼氏　靖史さん　の腕を激しく掴む。

「『ミス文京大学』……？　なんだナンパじゃないんか、まぎらわしい……」

靖史さんは持ち上げていた高倉君を廊下へと下ろし、そのまま手を離れた。高倉君は「はへーっ」と力なく廊下に座り込んだ。

「『ミス文京大学』ってあれか？　ヘレンが大学一番の美女になれるっていうことか」

靖史さんは大きな目玉を私に向けて尋ねる。話すときの口がとんがっついてちよつと峭っぱい。

「えっと、そうなるかもしれないってことです。私は『ミス文京大学コンテスト』の責任者の御徒真知です。隣にいるのは私と同じく

責任者の一人である椎名真智です」

「御徒町と椎名町……、どちらも駅の名前さんか」

「おお、この人は珍しくどっちも知っていたようだ。」

「靖史、人の名前でもからかわない」

石川先輩が靖史さんの胸板を手の甲で叩く。いわゆるツッコミというやつだな、これは。

「ああ、悪い悪い。俺は経済学部三年の西川靖史だ。にしかわ やすしヘレンの彼氏をさせてもらっています」

先ほどの乱暴口調とは打って変わって、靖史さん 西川先輩は丁寧に私たちに頭を下げた。

「あ、いいえこちらこそ初めまして……」

私たちもつられて頭を下げる。下げるとまだ廊下に座り込んでいる高尾君の姿が、情けないなあ。

「大学一番の美女になれるんだったら、ヘレン、参加しな」

「う、うん……」

目玉を大きく開かせて迫る西川先輩に石川先輩はちょっと困った表情を浮かべた。

「石川先輩は文化祭でダンスを踊るので、それとバッティングしなにか心配なんですよね」

私は石川先輩の気持ちを代弁した。

「そうなのよ……、私にとってはダンスのほうを優先させたいからね……」

「無理にとは言いません。ダンスをしているうちに時間が取れるよ。うだと分かってからでもいいので、一応考えてもらえませんか……」

私は廊下に落ちていたチラシを拾い、石川先輩に渡す。

「私からもお願いします。お時間が合うようでしたら是非！」

しいちゃんは精一杯の力で頭を下げた。

「ほら、高尾君。あなたからも」

私に言われて高尾君は、はっと立ち上がり、腰を直角に折って頭を下げた。

「お願いします！」

石川先輩は私たちの顔をしばらく眺めていたが……。

「時間が取れるかどうかは真奈美と相談してみるよ。だからあなたたちもバツティングだけは絶対避けてね」

と、前向きな回答をしてくれた。私たち三人は一斉に頭を上げる。「ありがとうございます。時間は上手く調整しますので、そちらの企画の情報も教えてください」

「分かった、お互い時間が被らないように情報交換しよう！」

私と石川先輩は固く右手で握手を交わした。

「とりあえず『候補者の候補者』を一人獲得できました……」

私は西川先輩と石川先輩の立ち去る背中を眺めながら力なく呟いた。

「ダンスと時間がぶつからなければ石川先輩はきっと参加してくれるよ」

しいちゃんの前向きな笑顔を私に向ける。

「とりあえず、今日はよかったね。高尾君」

私が高尾君を見ると、彼はまだ残っているチラシを力強く握り締めて

「いえ、今日はまだまだ時間があります。二部学生（夜間大学の学生）も含めてどんどん声をかけていきます」

先ほど西川先輩に襲われていたときの情けなさとは違い、頼もしそうな表情を見せる。

「私も手伝うよ、この後授業ないし」

私は高尾君の持つチラシを半分手に取った。

「ありがとうございます、御徒先輩！」

先輩……、そうか彼は一年生だったか。一年生にして文化祭を作るうたなんて、すごいやる気だな。

私は一年のときは文化祭を作るうたなんてこれっぽちも思っていなかった。

「私も今日はバイトが無いから手伝うよ。部室からチラシとって来るね」

しいちゃんは勢いよく四号館へ続く廊下を駆けていった。

しいちゃんの姿が見えなくなると私は高倉君に向かって呟いた。

「高倉君……頑張ろう」

「はい、一緒に頑張りますよ、御徒先輩！」

亜由美の言うとおりで、実際言ってみると気持ちが変わるのが分かる。彼となら一緒に文化祭を作れるような気がした。

結局この日はだれも立候補してくれなかったけど、充実した一日だったなあ。

第二十六話 頑張つてと頑張ろう(三)

人が二百人くらい入れる七月の教室に入り、しいちゃんとはるちゃんと一緒に空いている席を探していると、黒板からだいぶ離れた席に私たちに向かって手を振っている人がいる。誰かと思ったらタカビーだった。

「うっ……タカビー……」

豚殿念の前で怒られて以来、彼とは会ってはいなかった。決して避けていたわけではなく偶然である。というか自分を怒った相手を避けるという行為はあまり好きじゃない。

「タカビーの隣ちょうど三人分空いているじゃん。座ろう、座ろう」
はるちゃんが私の悩みを無視してさっさとタカビーのところへ行ってしまった。

「ほら、かつちゃんも行くよ」

仕方が無いので私はしいちゃんに促されてはるちゃんの後を追った。はるちゃんはなぜかタカビーから席を二人分開けて通路側に座っている。

「私の隣はしいちゃん、そしてその隣はかつちゃんね」

はるちゃんが勝手に席順を指示した。つまり、私はしいちゃんとタカビーの間に座ることになるのだ。

「はるちゃん……、私がタカビーの隣に座るの？」

タカビーに気づかれないうちに、私は小声ではるちゃんに席の交換を求める。

「何を言っているのよ。逃げるのは嫌だから避けたくない、って言うていたのはかつちゃんじゃない。仲の悪さは話し合いで解決って、昔の偉い人が言っていたでしょ」

確かに言っただけど、いきなり隣に座るのはな……。しかも後半の昔の偉い人の言葉。誰もが言いそうな微妙な言葉だなあ！。

だからと言って逃げるわけには行かないので、私はお尻で椅子を

叩きつける勢いでタカビーの隣に座った。

「『ミス文京大学』の話、聞いたぞ。夜まで立候補者の呼びかけをしていたそうじゃないか」

この前高尾君と一緒に「ミス文京大学」の候補者を探していたことを言っているのだろう。しかし誰から聞いたのか。

「うん……、一緒に頑張ろう」って高尾君に言ったよ。私が思っていたより彼、真剣で一生懸命だったから」

私は素直にその時思った自分の気持ちをタカビーに伝えた。一年生はまだ大学生活が安定しておらず、後々のことを考えたら単位を多くとらなければいけない時期だ。かわちゃんが以前自治会入りを希望して断られたのもそれが理由である。

その一年生のうちから文化祭を作ろうと思っっている高尾君の意思に私は思わず感心してしまったのだ。

「……他のイベント企画のみんなにも同じように『一緒に頑張ろう』って言えるか？」

「うん……たぶん……」

高尾君には感心したが、他のみんなにも言える自身はまだ無い。でもタカビーが怒ったのは私が悪かったというのは今までのしいちゃんや明石先輩との会話で感じていることだ。

「たぶんじゃなくて、必ず言えよ。仲間なんだから」

この前の怒ったときとは違う、優しい口調でタカビーは私に諭した。

「そうだね……仲間だもんね」

次のミーティングでは開始早々「一緒に頑張ろう」と宣言しよう、と私は思った。きっと私の中で何かが変わるかもしれない。

「ところで話は変わるのだが……」

タカビーが私だけじゃなくしいちゃん、はるちゃんのほうにも視線を向ける。

「うん、どうしたの？タカビー」

しいちゃんが、机に顔をくっつけそうになるまで、頭を下げてタ

カビーを見る。

「その……申し訳ないのだが、この授業のノートを全部写させてくれないか？ この時間中に全部済ませるから……」

この授業のノートって十回分もあるじゃない！

「タカビー、ひよっとしてこの授業一度も受けていないとか……」
はるちゃんが背筋を伸ばしてタカビーのほうを見る。タカビーはとんでもない、と手を振って。

「いや、さすがにそれはないが、六月に入ってから一度も受けていないな。今日は来週行われるテストについて何か聞けるかと思って来たのだ」

「六月からってことは六回分ね。いくら出席取らない授業だからと言って、一ヶ月も来ないのはどうかと思うよ」

去年ははるちゃんが私としいちゃんのノートを一生懸命写していた。そのころのはるちゃんは、この大学の教授であるお父さんと将来の進路のことでもめて、サボタージユを決め込んでいた。

しかし私としいちゃんが受けていた授業とはるちゃんが受けていた授業がほとんど同じだったおかげで、はるちゃんは単位を落としたのは一つだけである。

「六回分のノートを写すことくらいどうってことないだろう。それよりも姉小路のほうがもっとすごかったぞ」

「えっ、会長さんも授業をサボったことがあったの？」

はるちゃんが目を輝かせながら声をあげる。

「ああ、あいつは一年生のとき一年で三回しかでなかった授業があったんだ。一回目は最初の授業。あとの二回は前期と後期のテスト。それだけで単位を取った」

「三回だけ出席して単位が取れるなんて、会長にはノートを全部写してくれる優しい友達がいたのね」

私が去年のはるちゃんと私たちの関係を思い出しながら言つと、タカビーは首を横に振った。

「いや、その授業には彼にノートを移してくれる友達は一人もいな

かった。彼はテストの三十分前に教室に来て、近くの生徒にテストの問題を聞いた。それだけだ」

「それだけで単位が取れるほど簡単な授業だったの？」

しいちゃんが小さく驚きの声を上げる。テスト前の三十分だけで単位を取れるなんていったいどういう授業なんだ。

「あいつが言うにテストの問題は前期後期両方とも『最近の日本社会の問題について思うところを述べよ』だったそうだ。それなら授業に出なくても、毎日新聞読んだりニュースを見ていたら分かることだろう」

「しいちゃん、かつちゃん。私たちも来年その授業を受けようよ。タカビー、その教授と授業名を教えてください」

はるちゃんが授業中であることも気にせずに、腰を上げてちよつと大きな声でタカビーに尋ねる。しかしタカビーは哀れむような目ではるちゃんを見た。

「残念ながらその教授は、もう定年で大学を去った。だから今その授業はもう無い」

「なーんだ、せっかく楽が出来ると思ったのに……」

はるちゃんがつまらなさそうに口を尖らせながら腰を降ろす。ダンスサークルをやっているはるちゃんは楽に単位が取れる授業を一つでも多く受けたいと必死である。

「それよりもすぐ授業が始まるぞ、今までのノート俺に貸してくれ」

そう言って左手を出す。文化祭実行委員長の威厳がまるで感じられない。まあもとからあまり威厳と言うものは感じられなかったけど……。

「授業中なんだから、先生にばれないように写しなさいよ」

私ははるちゃんときいちゃんからノートを集め、自分の分とあわせてタカビーに渡す。

「大丈夫だって、先生から見たら真面目にノートを取っている先生にしか見えないから」

タカビーはシャーペンを取り出すと、一斉に自分のノートに私たちのノートの内容を写す。凄いスピードだ。もしかしたらこういうの慣れているのかもしれない。

「タカビー……今までもこうして友達からノートを写して単位を取っていたでしょ？」

「よく分かったな」

タカビーは私を見ずにノートに鉛筆を走らせながら答える。

「そりゃあね、その手馴れた手付きを見れば」

「ほらほら、かつちゃん先生が来たよ」

しいちゃんの注意を聞いて前を向くと、少しおでこの広い教授が教壇に上がるところだった。

「ほい、ありがとうございます」

授業が終るチャイムが鳴ると同時に、タカビーが私たちのノートを返す。タカビーの左ひじの下に、彼が書いたノートの束が敷かれている。

「えっ、ほんとにこの九十分で全部写したの？」

私は驚きながらノートを受け取る。授業六回分のノート三人分合計十八枚はあつたであろうノートである。

「全て写したわけではない。大切そうなところだけを書き写した。全部なんか書いていられないからな」

「そうだよねー、いくらなんでも全部は写せないよねー、要領がいよいよタカビーは」

はるちゃんは納得の表情で自分のノートをカバンにしまった。

「もうう、タカビー。後期はちゃんと授業受けなさいよ。私たちがあてにして欠席しちゃダメだよ」

「文化祭が終るまでは当分欠席が続きそうだなー」

タカビーは書いたノートをカバンにしまって立ち上がる。

「もうう、文化祭を言い訳にしない！ 忙しいの覚悟の上で文化祭実行委員やっているんですよ！」

「分かっているよ。これからテスト期間、それが終われば夏休みだけど、その夏休みが終わったら、俺たちはますます忙しくて授業に出る暇なんか無くなるってことだよ」

すでにタカビーは私たちに背を向け教室の出口へと向かっている。「授業が出られなくなるか……。はるちゃん、そのときはノートや代返よろしくね」

「うーん、文化祭が近付くと私もダンスで忙しくなるからな……。」「そんなしいちゃんとはるちゃんのやりとりを聞きながら私は立ち上がるとタカビーに向かって叫んだ。

「タカビー！」

「なんだーかつちゃんよー」

タカビーはゆるやかな動きで振り返る。

「これから忙しくなるけどお互い頑張ろう！」

「おう、頑張ろう！」

タカビーは右手を高く上げると、教室を出て行った。

第二十七話　しいちゃんが巨大化する？

七月のテスト期間も終わりいよいよ夏休みに突入！　私は梅雨晴れの真つ青な空の下のキャンパスの中を妹の真耶まやと一緒に歩いている。今日は大学のオープンキャンパスの日なのだ。

オープンキャンパスとは、この大学の入学を希望する高校生のために、大学の施設やサークルの活動を公開して、大学に入る気持ちをさらに強めようという入学促進のためのイベントだ。

妹の真耶は私と同じ文京大学を希望しているため、姉でありこの大学の現役学生である私が大学の中を案内しているのだ。妹の他にあともう一人私が案内中の女の子がいるのだが、彼女は興味のあるサークルの部室に行っているため、ちよつとだけ別行動を取っている。

「ここがお姉ちゃんのいる大学かー」

真耶はものすごく細い目（母親似）を大学の中庭に向ける。自分が憧れている大学に入れてきつと喜んでいるのだろう。

「あつ、かつちゃんだ。かつちゃん、大変だー！」

大学の中庭から物すごく聞きなれた声が聞こえる。明石先輩だ。こつちへ向かって走ってくる。

「大変、大変。大変なことが起こったよ」

口では慌てながら、明石先輩はいきなり妹に抱きついてきた。

「ち、ちよつと、お姉ちゃん助けて！」

いきなり抱き疲れて驚く真耶だけど、その細い目は決して大きく開かれることは無い。

「明石先輩……、どさくさにまぎれてなに私の妹を襲っているんですか」

「いや、久々に真耶ちゃんに会ったから嬉しくなっちゃって」

そういえば明石先輩と真耶って去年のしいちゃんの誕生日以来会っていないかったっけ。

「いい加減、離してくれませんか。それに、何をそんなに慌てているのですか？」

「そうそう、それぞれ」

明石先輩は真耶を解放すると、「聞いて驚かないですよ」と、いつもの笑顔を私に向けた。この人、驚いているときも笑顔だ。

「しいちゃんが巨大化した！」

「は!？」

私と真耶は同時に目を丸くする。あ、でも真耶は目が細いから丸くなったのはあくまでも私の想像ね。

「さつき四号館を歩いていたら、しいちゃんを見かけたの。顔も髪型も仕草もしいちゃんそのものだったから声をかけようと思ったら、いつものしいちゃんじゃないの。身長が大きい。しいちゃんが巨大化しちゃったの」

明石先輩は発見した巨大化しいちゃんの高さを両手で表現した。

明石先輩自身の身長よりはるかに高い。いくらなんでもそんな人いるわけない。

「きつとこの大学のどこかに巨大化できる『赤いきのこ』が出てくるブロックがあるんだよ」

明石先輩……きのこの次は火の玉をだせる花が出てくるんですか？

「しいちゃんならこの大学にいないはずです。彼女は今『御団子』でアルバイト中ですから」

「それじゃあ、しいちゃんが『緑のきのこ』を食べて、もう一人増えたんだ!」

いやいや、明石先輩。そんなきのこはゲームの中だけですから。

という私は明石先輩の言う「巨大化しいちゃん」の正体を知っている。そう、その子は……。

「御徒せんぱーい、お待たせしましたー」

私に声をかけたのは、目はパツチリ大きく、髪はさらさらの黒いストレートヘアの女の子。背は私より高いがはるちゃんほどではない。本人曰く一六八センチメートルあるとか。そう、まさしく大きい。

いいいちゃんである。

「うわっ、出た！ 巨大化しいちゃんだ！」

驚いた明石先輩は私に抱きついて頬をすり寄せる。

「明石先輩、落ち着いてください。あと、どさくさにまぎれて頬をすりすりするはやめてください」

ちえっ、と舌打ちしながら明石先輩は顔を離した、しかし両腕は私の体をがっちり掴んでいる。

「あの子はしいちゃんの妹さんです。お父さんに似て身長が大きいんです」

既に勘のいい人は分かったであろう。明石先輩が「巨大化しいちゃん」と言った女の子。そして、私が真耶と一緒に大学を案内している女の子とは、しいちゃんの妹なのだ。

「御徒先輩……女性の方が趣味なのですか？」

しいちゃんの妹さんは、私と明石先輩の様子を見て、少し顔を青くしている。かなり引いているな。

「そんな……お姉ちゃんにそんな趣味があつたなんて……」

おいおい、真耶も引いているぞ。

「違う、私にはそんな趣味は無い」

「私もそんな趣味は無いわよ。ただ、かわいい女子高生と女子大生が好きなだけよ」

明石先輩……それを「そんな趣味」と言うのです。

「そうですか、それなら安心しました……」

しいちゃんの妹さんはほっとした表情を浮かべる。

「結衣ちゃん。この人が明石先輩。しいちゃんから話は聞いているでしょ」

しいちゃんの妹 結衣ちゃん は私の話を聞くと、「ああ」

と納得の表情を浮かべて。

「明石先輩、いつもお姉ちゃんがお世話になっています。私、椎名真智の妹で、椎名結衣と言います」

と、元気な声を上げた。

「そうかー、しいちゃんの妹かー。どうりでかわいいと思ったー」

明石先輩は私から離れると、両腕を結衣ちゃんへ絡めようとしたが、「はっ」と何かを思い出した表情を浮かべると、手を引き

「結衣ちゃんもボクシングが好きなの？」

と、おどおどしながら尋ねた。ここ最近、明石先輩はしいちゃんに抱きつくことはしていない。しいちゃんが怒ってパンチすると思っっているのだろう。それまでは平気で抱きついてきたのに、一体何が明石先輩を怖がらせているのか。

「私、ボクシングには興味ありません」

「そうか、よかったー」

ボクシングに興味が無いことを知るや、明石先輩は結衣ちゃんに抱きついた。そして頭をなでなでする。

「うわー、髪がサラサラで気持ちいいー」

「私が好きなのはキックボクシングです」

「キックボクシング……」

そう言いながら明石先輩はゆっくりと結衣ちゃんから離れていった。

「得意技は右のローキックです。試してみますか？」

結衣ちゃんは右ひざを上げて明石先輩の前に出す。危うい、スカートからパンツが見えそうだぞ。

「い、いや……遠慮しておくよ。たぶん痛いんでしょ？」

結衣ちゃんは当然という顔で頷いた。

「この前、駅のホームで私のお尻を触ってきた痴漢にローキックをお見舞いしたら、一発でダウンしました。自力で立ち上がれなくなつたので、私と駅員が抱えて駅長室へと連行しました」

さすがはしいちゃんの妹だ。きつと彼女も毎日体を鍛えているのだらう。そういえば去年しいちゃんの実家へお泊りに行ったとき、姉妹でスクワットしていたっけ。

「明石先輩、次結衣ちゃんに抱きつくものならローキックをお見舞いされますよ」

私がそう言うと、明石先輩は私に抱きついてきた。

「うん、痛い思いはしいちゃんの右ボディで充分だよ……」

うん？　しいちゃんの右ボディで充分？

「明石先輩、しいちゃんに右ボディをもらったことがあるのですか……？」

私が尋ねると、明石先輩は勢いよく私から離れ、首を横に振る。

「いや、そんなことはないよ。しいちゃんから右ボディなんてもらったことはない。かつちゃんの聞き間違いだよきつと」

聞き間違いか……、しいちゃんが明石先輩にパンチをするわけが無いものな。

「でも私も聞いたよ。お姉ちゃん。聞き間違いじゃないよ」

「私も聞きました」

真耶や結衣ちゃんまで聞いていたということは、明石先輩はやはりしいちゃんに右ボディをお見舞いされたということになる。それはいつのことなのだろう……。

「と、とにかく三人とも聞き間違いだから、しいちゃんのパンチの恐ろしさはかつちゃん、よく分かっているでしょ？　私は遙からその話を聞いて、怖いなーと思っただけよ」

うーん、怪しい。何かを隠しているな……。

「私の事はともかく、かつちゃんはどうして今日こんな可愛い女子高生を二人も連れて歩いているの？」

上手い具合に明石先輩は話を別の方向へ持っていく。

「今日は大学のオープンキャンパスだから、二人を案内しているんですよ」

「私たち、来年この大学を受験するんです」

真耶と結衣ちゃんが同時に叫ぶ。どっちも声が高いから、どっちがアルトでソプラノだか区別が付かない。

「へえー、そうなんだー。二人が入ったとき私は四年生だよー。よろしくねー」

と、明石先輩は二人の頭をこねくり回すように撫でる。ただし、

結衣ちゃんとの間には微妙な間を空けている。キックが飛んでくるのを恐れのことだろうか。

「今のこの間合いならローが入ります」

結衣ちゃんが笑顔で明石先輩に告げると、明石先輩は素早く結衣ちゃんに密接した。

「こ、これならローキックが入らないでしょう」

「あー、そういう時はですね……」

と、結衣ちゃんは明石先輩の首を両腕で優しく包み、自ら引き寄せる。

「ゆ……、結衣ちゃん？」 私と真耶はドキドキしながら身体を近づける二人を眺める。

「結衣ちゃんの香り、いい匂いがするねー」

明石先輩は幸せな笑みを浮かべている。可愛い女子高生に抱き寄せられている。そう思っているのか、顔がとろけそつだ。

ところが一方の結衣ちゃんは冷静だ。

「相手をなるべく自分に引き寄せて、ボディに膝蹴り。これが有効なんです」

それを聞いた明石先輩は、結衣ちゃんから離れると、お腹を抱えてうずくまった。

「お腹痛い」

「どうしたんですか、明石先輩。何か悪い物でも食べましたか？」

明石先輩は、元氣無く首を横に振る。（笑顔はそのままなだけど）

「違う、昔受けた古傷が何か痛くなって……」

お腹に古傷ってお腹撃たれて

「なんじゃこりゃああ！」みたいな出来事でもあったのだろうか？
腹に古傷を持つなんて、普通に暮らしていれば無いことであろう。
「帰ってもいいですか？」

明石先輩は、私たちの返事も聞かずに私たちに背中を向けて歩きだした。一体明石先輩の身に何があったのだろうか。

そんなことを考えながら、私はお腹をさすっているために丸くなっている明石先輩の背中を見送るのであった。

第二十八話 お船登場

八月の最初の週に入り、私としいちゃんと実行委員会のメンバーは東京都文京区の千石せんごくにある、かわちゃんの家にお邪魔している。

以前しいちゃんの家でやったように、実行委員会のこれまでの進捗状況やこれからの課題について話し合おうというのだ。しかもお酒付きで。

昨年 of 今頃、人生初めての合コンに参加したしいちゃんがかなり危険な人になったことを覚えている人はいるだろうか？ あの時の私しいちゃん（とはるちゃん）が心配でとても合コンどころではなかった。さらにはしいちゃんにもう少して唇を奪われる（幸いにしてファーストキスではなかったが）ところであった。

あの時の悪夢が蘇るといふのか……。

「もー、かわちゃんとけーまは一体何をしているのかしら？ 買い物に出かけて一時間も経っているじゃない」

私はイライラしながらベランダへと出る。かわちゃんの家のベランダは無駄に広い。畳にして六畳分はあるんじゃないかと思う。かわちゃんの部屋は四階建てビルの四階に当るので、ベランダと言うよりビルの屋上と言うべきか。

ベランダに出るとひんやりとした風が私の耳元の髪を揺らした。

視線の先には遠く黄色や赤の光が聳え立っている。かわちゃんが言うには新宿のビル街だそうだ。

「きつと二人でいちゃいちゃしながら買い物しているんだよ。ひよつとしたら俺たちがいることを忘れているのかもしれない」

タカビーが退屈そうに体を伸ばす。かわちゃんの家はワンルームだが、斜めに広いので背の高いタカビーが十分寝転べる。

「しかし……、これでは一向に飲み会が始まりませんね……」

いやいや、亜由美。飲み会の前にミーティングでしょ。

「お酒を飲んで和やかな雰囲気になればミーティングも軽やかに進

むというもんですよ、かつちゃん」

亜由美が私の心の突っ込みを聞いていたかのように反応する。

「しょうがない、先にやつちゃおうか」

しいちゃんがバツクの中からビンを一本取り出した。それはしいちゃんの地元米沢よねざわの銘酒「お船せん」だった。昨年しいちゃんがこれを飲んで酔っ払ってしまったことはまだ私の記憶に残っている。

「し、しいちゃん。そのお酒一体どこで手に入れたの？」

しいちゃんは普段お酒を自ら買って飲むということはしない。酒癖が悪い彼女にとってはいろんな意味で幸いなことである。だけど今日はお酒を持参している。一体どういうことだろうか？

「結衣が実家から持ってきたんだよー。私このお酒が好きなのを知っていてお土産につて」

しいちゃんはとろけるような笑顔で「お船」のビンに頼ずりする。

「よっしや、つまみも何も無いけど、やりますか」

タカビーが紙コップの袋を開けて一つずつ私たちに回す。食べるものは何も無いけど、紙コップだけは用意されていたんだな。

「それじゃあ注ぎますよー。日本酒が嫌いな人は今のうちに言っってくださいねー」

亜由美が「お船」の栓を開いて紙コップの四分の一の高さまで注いでいく。私は時折お父さんやお祖父ちゃんが飲んでいる日本酒を盗み飲んでいたので、日本酒は平気だ。

……つて私の心配をしている場合ではない。

「ダメ！ しいちゃんはお酒を飲んじゃダメ！」

私はしいちゃんの前にある紙コップを取り上げた。

「ちよつとー、かつちゃん何するのよー。私の好きなお酒なのにー」
しいちゃんが背筋を一生懸命伸ばして、紙コップを取り戻そうとする。だけど、背が小さいので、その手は私のひじの辺りまでしか届かない。

「しいちゃんは酔っ払ったら人に迷惑をかけるんだから」

「私は迷惑はかけないもん！ 今まで物を壊したことはないし、人

を殴ったことないもん」

あれだけ暴れておいてしいちゃんの言うとおりなのは正直奇跡である。しいちゃんの運動神経の良さがそうさせているのだろう。

「しいちゃん、そんなにムキになるなって。俺の飲ませてやるから、タカビーが自分の手にした紙コップをしいちゃんの口元へと持ってきた。しいちゃんはそれを両手で受け取ると一気に飲み干して

「ぶはーっ！」

と、大きな息を吐いた。

「おー、なかなかやるな。さすが自分が好きな酒だけあるな」

タカビーが感心した顔で「お船」を注ぎ、再びしいちゃんへ渡す。

「ダメー！ しいちゃんペース早過ぎー！」

私はしいちゃんが手にしている紙コップを奪おうとしたけど

「まあまあいいじゃないですか。お酒を飲んで楽しくなるのもチームの団結力が高まるということだ」

と、亜由美にその腕を取られてしまった。

「違うんだって、亜由美。しいちゃんはお酒を飲むと危険なの！」

「危険じゃないもん！ さっきと同じこと言わせないでよ！」

そう言いながらしいちゃんは二杯目を飲み干した。もう顔が真っ赤だ。

あーあー、もう知らない、と

「そうだね、私が間違っていたよ。しいちゃん」

責任はタカビーと亜由美に取ってもらおうと、私はしいちゃんから離れて座ると、しいちゃんから取り上げた「お船」を一気に飲み込んだ。

「お酒を飲んで危険なのはかつちゃんのほうだよー」

しいちゃんが「とろん」とした目で私を指差す。昨年合コンで酔いつぶれたしいちゃんとはるちゃんはその時の記憶が無いため、自分の都合の良い記憶で補完している。

「あー、じゃあかつちゃんのお酒のペースをきちんと監視しておかないと……」

亜由美がしいちゃんの作り上げた記憶をすっかり信じてしまったようだ。ええい、もうこうなったらどうにでもなれだ。

「それにしても亜由美はかわいいよねー」

しいちゃんが亜由美の肩に手をかける。三杯目を終了した彼女は首まで真っ赤になっっている。このペースは去年のそれより明らかに早い。これが駅伝だったら区間新記録ものだ。十五人抜きだ。

「え、そ、そうですか……」

亜由美が顔を赤くさせてしいちゃんを見る。亜由美はまだお酒を飲んでいないので、顔の赤さは照れから来ている。

「亜由美、ギューツ、ってしていい？」

「ぎ、ギューツ、ですか？」

亜由美が目を丸くしてしいちゃんを見る。

「そう、明石先輩みたいにギューツて抱きつくの。亜由美セクシーだからさあ。抱きついたら気持ちいいんだろうなって」

「え、ええ。確かに私は抱き心地がいいですよ」

「おいおい亜由美、認めるのかい。」

「それじゃあギューツしようよ、ギューツ」

「え……」

亜由美の返事を聞かずにしいちゃんは両腕を亜由美の首に絡めた。そして体を密着させる。見ている私の鼓動が早まっているのは決してお酒のせいだけではない。

この部屋の白一点（紅一点の逆だから白一点？）であるタカビーはこういうのに慣れていないせいとか、トイレへと逃げてしまった。

しいちゃんと亜由美はそんな私たちを気にせずに抱き合っている。しかし、しいちゃんはそれだけで済む人間ではなかった。

「首相撲くひまもっ」

と、亜由美の首に絡めた両腕を思いつきり左右に揺らし始めたのだ。

「うわあああつ、目が、目がー」

亜由美は、青い宝石から放たれた激しい光に目をやられた人のよ

うなセリフを吐いてしいちゃんから逃れようとするが。しいちゃん
の力に適うわけが無い。

「うふふ、接近しすぎる場合はこうやって、相手のスタミナを奪う
のが有効な手段とされているんだよー」

ああ、またしいちゃんが格闘技の世界に入っている。

しいちゃんが離れると亜由美は右手を床について、両肩を落と
した。そして左手をこめかみに当てて

「す、すごい目が……回る……」

お酒が入っていたらもつとひどいことになっていただろう。

「かつちゃんもやろうよ、首相撲」

しいちゃんが満面の真つ赤な笑みを浮かべて私を見つめる。

「い、いや……私は腰が痛いので遠慮するよ……」

「かつちゃん、『腰が痛い』なんて嘘をつかないでください。それ
仮病でしょ」

亜由美が自分以外の犠牲者を求めている。私の嘘を激しく指摘し
た。

「け、仮病じゃないよ。本当に腰の調子が今日は悪いのよ。そんな
に首相撲がしたかったら、タカビーとすればいいじゃない」

「んー、呼んだかー？」

自分の名前を呼ばれてタカビーがトイレの扉を開けて首を出した。
しいちゃんと亜由美が抱き合っていないのを確認すると、トイレか
ら出て私の右隣に立つ。

「しいちゃんが、タカビーと首相撲したって」

「うん、首相撲？ いいだろう、かかってこいやー！」

タカビーはなぜか語尾を強めてしいちゃんを手招きした。しいち
ゃんは立ち上がるとふらふらとタカビーのところへとたどり着いた。
そして、両腕を彼の首に絡めようとしたが……。

「えーん、届かないよー」

背の小さいしいちゃんの両手は、タカビーの首に巻きつくどころ
ではなかった。背を伸ばしてなんとか首筋にタッチできるのが精一

杯である。

「しいちゃん、身長差がある者との接近戦に使える技を見せてくださいよ！」

亜由美はどうしてもタカビーに酷い目に遭ってもらいたいらしい。気がつけば顔が少々赤い。今注がれているのは二杯目だろうか。

「うーん、こういう場合はね……」

と、しいちゃんは右腕を大きく後ろへ引いて激しく前に突き出した。しいちゃんのボディブローがタカビーのわき腹に突き刺さる！？……と思っただけ、しいちゃんの拳はタカビーのわき腹にちよつと触れる程度の距離で止まった。酔っついても距離間隔は正確である。このおかげでしいちゃんは酔っついても誰かも怪我させることは一度も無かった。

しかし見ているこつちとしては心臓に悪いのは変わらない。

「しいちゃん、なんで寸止めするんですかー。ちゃんと当ててくださいよー」

亜由美もお酒は弱いようだ。しかしですます口調に変わりはない。

「亜由美……。お前は俺が悶絶する姿が見たいのか」

「私だけ被害を受けるなんて不公平ですー」

亜由美は首相撲で目を回されるといふ実害を受けているからな。

「そうだね、亜由美に迷惑かけちゃったね。ごめんね亜由美」

しいちゃんはふらふらと歩きながら、亜由美の側まで寄って、ペタンと座り込む。そして亜由美の頭を優しくなでる。

「亜由美の髪ってさらさらしていて撫でがいがあるね」

「ありがとうございますー」

礼儀正しく頭を下げる亜由美の首をしいちゃんの両腕が再び捉えた。

「首相撲ー」

「うわあああつ、目が、目がー」

今度はお酒が入っているから、物すごく目が回るぞー。

それにしてもかわちゃんときーま……。いつになったら帰ってく

るのだから？

第二十九話 さらわれたかわちゃん

「かわちゃんたちおそーい！」

首相撲を延々と繰り広げるしいちゃんたちを前に私は「お船」を一杯飲んで叫んだ。買い物に出かけてからもう一時間半経っている。確かに遅すぎるな。一体何があったんだろう」

タカビーが退屈そうに目覚まし時計のベルを鳴らしては止める。

「タカビー、しいちゃんと亜由美はこのままにして二人でかわちゃんたちを探しに行こう」

「ちよつと待つて、私も一緒に連れて行ってくださーい」

頭を左右に振られながら亜由美が私へと手を伸ばす。

「今のしいちゃんを外に出すわけには行かないわ。だからといってこの家に一人きりするわけにもいかないし……。災難だと思つて亜由美はここに残つて」

「そんなあ……」

「私が災難つてどうということよー、かつちゃん」

しいちゃんのとろんとした瞳が私に向けられる。さっさとこの部屋を出ないと私が次のターゲットにされてしまう。

「はいはい、しいちゃんは亜由美と遊んでいて。私とタカビーはかわちゃんとけーまを探しに行くから」

「というわけで、仲良くやつてくれ」

タカビーはゆっくりと立ち上がると、玄関へと向かった。

「ち、ちよつとー、二人きりにしないでくださいー」

「首相撲ー」

亜由美の悲鳴としいちゃんの声を背に私とタカビーはかわちゃんの部屋を出た。

「探すと言つてもどこを探すんだ？」

道路に出たタカビーが私に尋ねる。

「たぶん巢鴨駅すがもの辺りにいると思うんだ。あそこスーパーが二軒あるでしょ」

「確かにあるな」

タカビーは毎日の通学に巢鴨駅を利用しているので周囲の地理詳しい。私は搜索の方向性は決めて、後は彼に任せることにした。

巢鴨駅はかわちゃんの家から北へ歩いて十分ほどのところにある山手線とえいみだと都営三田線の駅だ。

巢鴨駅から文京大学へはここから南へ二十分歩くか、三田線に乗って二駅目で降りることで行ける。タカビーの話では節約と運動を兼ねて歩いている学生が多いようだ。そういえばはるちゃんも歩いて通う学生の一人である。

かわちゃんとけーまを探しながら巢鴨駅の南口広場に到着するとけーまを発見。少しイライラしているのか頭をかいている。

「ちよつと、けーまいつまで買い物しているのよ」

私が声をかけるとけーまは頭をかくのをやめ、

「あー、悪い。正直みんながいること忘れて喫茶店でデートしてた」

と、悪びれも無く言った。

「それでー、今もデートの真っ最中ですかー？」

私が呆れながら尋ねる。

「いや……、みんながいることに気づいて買い物をして帰ろうと思っただ。そしたら……」

と、けーまは駅前のパチンコ店を指差した。正確に言えば店の前ある赤いカーテンを背景にした特設の小さなステージを指差した。

ステージの上には「お楽しみヒーローショー」と書かれた白い看板が掲げられている。

そのステージに立っている三人を見て私は頭を抱えた。

「あ、あいつら……」

一人はかわちゃん。これは別に何の問題も無い。もう一人は頭に気の風呂桶をつけ、ピンクの全身タイツに身を包んでいる。そう、

バスレンジャーだ。ピンクだから正確にはバスレンジャーレディー
か。

バスレンジャーがいるということは、当然敵役のクラドスポリウ
ム・トリコイデス（おそらくレディーの方だろう）もステージの上
にいる。この二人を見るのは東都大学の五月祭から数えて三度目だ。
ちなみにクラドスポリウム・トリコイデスとはお風呂場によく見ら
れる黒かびのことである。

「それで……なぜかわちゃんがステージの上にいるわけ？」

「……それは俺が聞きたい」

ヒーローシヨーと言えば、悪役が観客の中から小さな子どもをス
テージの上へとさらい、そこを正義のヒーローに成敗されのが普通
だろう。

ところがこのクラドスポリウム・トリコイデス。前のほうに小さ
な子ども達がいるのにそれを無視して後ろのほうにいるかわちゃん
を抱きかかえてステージの上へと行ってしまったのだ。クラドスポ
リウム・トリコイデスの中の人は小さな子どもが嫌いなのだろうか、
それとも女子大生が好きなのだろうか？

「バスレンジャーとか言うやつがステージに現れて、やっと解放さ
れるかと思っただけで、そこからまた長くて長くて……」

けーまがそうため息をつくそばからバスレンジャーが叫ぶ。

「クラドスポリウム・トリコイデスよ、この技を食らえ！ バスレ
ンジャー・ソラミミアワーハイワレテミレバタシカニキコエルヨ・
クイスギタヒトニハゴチニナリマス！」

なんて長い技名なのだろう。そんなに長い名前を持つ技なのに、
その実態はただのストレートパンチだ。しいちゃんのそれに比べた
らかわいいものだ。

「く、バスレンジャーめ、バスレンジャー・ソラミミアワーハイワ
レテミレバ……」

クラドスポリウム・トリコイデスがそんなかわいいパンチにも痛
がり、さらにその技名を正確に言うため、さらに時間がかかる。

「もうこんなやりとりが四回も繰り返されているんだ。あの黒かびが出す技もムダに長い。さらに変なところに芸が細かくて、出す技の名前一つ一つがみんな違う名前なんだ」

あまりにも技の名前が長すぎるため、二人とも最初の技で受けたダメージはすっかり回復しているというナレーションがご丁寧に私たちの耳に入る。これじゃあいつまでたっても勝負がつかない。

「ええい、これでは勝負がつかない、会場のみんな！ 私に力を分けてくれ」

バスレンジャーがヒーローショーにお決まりのセリフを吐いて両手を観客席に差し出す。

「おおお、来てる、来ているぞ。みんなのパワーが私に来ているぞ。これでアナウンサーの試験に合格できそうだ」

いやいや、バスレンジャーレディーさん。あなたの目的は目の前の敵を倒すことであり、アナウンサーになることじゃないでしょう。

「よし、クラドスポリウム・トリコイデスよ。みんなのパワーが集まったこの技を食らえ、バスレンジャー寿限無じゅげむ、寿限無 五劫ごこうの擦り切れ 海砂利水魚かいじやりすいぎょの……」

出たー、長すぎる名前として一番有名なこの名前が。バスレンジャーレディーはその名前の全てを噛むことなく言い切ると、ドロップキックをクラドスポリウム・トリコイデスの頭部に食らわせた。

「く、効いた、効いたぞ。お前のバスレンジャー、寿限無……」

クラドスポリウム・トリコイデスも噛むことなくその名前を言い切ると、「覚えていろよー」と捨て台詞を吐いて退場した。バスレンジャーレディーといい、クラドスポリウム・トリコイデスといい、中の人は相当練習したんだろうな。

「巢鴨のみんな、ありがとう！ 巢鴨の街のお風呂場はこれで安泰です！ バスレンジャー……！」

バスレンジャーは大きく手を振りながらステージを後にした。ステージには戸惑いの顔を浮かべたかわちゃん一人が残された。

「これは……ヒーローショーとして成立しているのか？」

戸惑うかわちゃんを見ながらタカビーが呆れた声を上げる。

「さらわれた良い子のお友達。ありがとうございました。そばの階段から降りてください」

ナレーションの方が淡々とかわちゃんに退場を促すと、かわちゃんはステージから飛び降りて、私たちのところへ一直線に駆け寄ってきた。大きすぎる良い子のお友達の退場である。

「ダーリン、恥ずかしかったよー！」

かわちゃんはけーまに抱きつくとその胸に顔をうずめた。私は今の状態を見られるほうがよっぽど恥ずかしいのでは……、と心の中で突っ込んだ。というか、見ているこっちがなんだか恥ずかしい。

「はいはい、人前で抱きつくのはその辺にしておいて、家に帰るよー」

私は、両手を激しく合わせて二人を離した。ほっっておいたらずっと抱きついていると思えたからだ。

「そうだね、買い物もすんだことだし帰ろうか」

かわちゃんがけーまの手をとって、家路へと着く。

買い物の帰りに「クラドスポリウム・トリコイデスにさらわれる」と言う災難にあったかわちゃん。家に帰ってさらなる災難に遭遇しようとはかわちゃんは思ってもいなかっただろう。

私はすでに想像していたことなただけだね。

第三十話 雪子さん

私たちを忘れてデートにかまけていたかわちゃんとかけーまを連れて、かわちゃんの家に入ると、すっかり酔っ払ってしまったしいちやんと亜由美が私たちを迎えてくれた。

「長かったですねー。待っていたんですよー」

亜由美が私の左ひざをしっかりと掴む。彼女は酔っ払っても敬語だ。

「ずーっと、待っていたんですよ」

本当に待っていたんだろう。しいちゃんと二人きりだったからな。ずっと首相撲とかよく知らないボクシングの話とかされていたんだろう。ちよっと同情。

「かわちゃん、待っていたよー。焦がれるほどにー」

しいちゃんがよるめきながらかわちゃんに両手を伸ばす。

「しいちゃん、こんなに酔っ払っちゃってー、ごめんねー」

かわちゃんがしっかりとしいちゃんを受け止めた。当然のことながらしいちゃんの両腕はかわちゃんの首の後ろに回っている。あーあ……。

「首相撲ー」

「うわあああつ、ちよっと、しいちゃん、しいちゃん!」

かわちゃんの首がしいちゃんの腕にこねくり回されている様を目にしながら私たちは折りたたみ式のテーブルを立てて、かわちゃんとかけーまがかつたおつまみを紙皿へと載せていく。

「かわちゃんはしいちゃんの相手をしているから……。料理は俺が作るか」

タカビーがスーパーの袋の中から豚肉のパックと大根を取り出す。そして冷蔵庫を開けて中を見る。

「嘘、タカビー料理できるの?」

「一人暮らししているんだ。できてもおかしくないだろう」

タカビーはそう言って冷蔵庫の中から調味料をいくつか取り出すと、キッチンへと出た。

本来であれば料理を作るのは料理好きのしいちゃんの役割なのだが、彼女はそれどころじゃなくなっている。というか、今の彼女に刃物なぞ持たせたら……と思うと私は背筋に寒気が走った。きつと誰かの頭上の壁に包丁が突き刺さっていたり、誰かの指と指の間を素早く包丁で刺していくといった光景が見られるのだろう。

「見ていないで私を助けてよ、みんなー」

首を回されながらかわちゃんが悲鳴を上げる。すかさずしいちゃんのを腕を掴んだのは彼氏であるけーまだ。

「おい、しいちゃんそのへんにしないか」

瞬間、しいちゃんはけーまの両腕を掴むとけーまの右足を素早く払った。床に倒れるけーま。そのおなかの上にしいちゃんが乗っかる。

「マウントポジションー」

よく見ると、しいちゃんの両膝がけーまの両腕を抑えている。

「うふふ、これで上から殴りかかったらけーまボッコボコだよ」

しいちゃんはゆっくりとけーまの顔に向かって拳を振り下ろす。

その拳はけーまの顔に触れる直前で正確に止まる。

「かつちゃん。しいちゃんを何とかしてよ。一番長い付き合いでしょ」

かわちゃんが私の肩を掴んで揺らす。長い付き合いと言われてもなー。

「こういう時は……。無駄な抵抗をせずに大人しくしているのが一番だよ」

なぜならしいちゃんは今まで何かを壊したことも誰かを怪我させたことも無いのだから。

「けーまにはかわいそうだけど、私たちは夕食の準備をしよう」

「買い物に時間をかけすぎた罰ですよー」

首相撲で酔いが回っているためか、ぐったりと床に横たわっている

る亜由美が声を上げる。

「うっ……ダーリンごめんなさい……」

かわちゃんが少々涙声でキッチンに向かう。

「おい、お前らひどすぎるぞ」

けーまの助けを求める声が聞こえる。

「大丈夫だよ、けーま。そのままの姿勢でいれば怪我はすることないから」

私はけーまに生き延びるためのアドバイスを与えてキッチンへの扉を開けた。

「うふふ、けーまボッコボコ」

そんなことを言っている間にもしいちゃんの拳は寸分の狂いも無く正確に動き続ける。微笑みながらパンチを繰り返すしいちゃん。きつと彼女の頭の中ではけーまの顔は無残な形に変わっているのだらう。

キッチンに入った私はかわちゃんに声をかける。

「ところでかわちゃん、かわちゃんのベランダって無駄に広いよね。夏だし外は涼しいからあそこにテーブルを出してみんなで飲むというのはどうだらう」

ちよつとしたビアホールになる、と私は想像して楽しくなった。

「私もそれを考えたんだけど、前の住人が一度それをやって、近所から苦情が来たんだって。だからベランダでお酒を飲むのは禁止されているのよ」

うっむ、すでに誰かがやっていたか……。と、私は扉のほうを向いた。しいちゃんの笑い声が聞こえる。あの様子しいちゃんならベランダで飲むものなら充分苦情の対象になりそうだ。

タカビーが調理した「豚肉のしょうが焼き」を持って部屋に戻ってきたときは、しいちゃんはけーまを殴ることに飽きたのか、部屋の真ん中でまた一人で「お船」をちびちびと飲んでいた。

亜由美はまだぐったりと横たわっている。それでもお酒は飲みた

いらしく、しいちゃんの隣でつまみを食べながらかわちゃんときー
まが買ってきたカクテルを飲んでいる。

そしてしいちゃんに殴られ（寸止めだけど）続けていたけーまは
しいちゃんから離れた部屋の隅で小さくなつてビールを飲んでいた。
その視線はしいちゃんの拳動を捕らえて離さない。彼女に動きがあ
ればいつでも対応できるように少しお尻を浮かせているのが見えた。
三人ともテーブルがあることを忘れていいのか、それぞれのコップ
や缶は床に直置きだった。

「はい、みんなー。ご飯と豚肉のしょうが焼きだよー」

私が声をかけるとしいちゃんと亜由美は行儀よく正座をした。

「かつちゃん待つてたよー」

しいちゃんがその姿勢のまま私に両腕を伸ばす。私は立っている
ので、彼女の腕は私の首に届かない。首相撲なんて誰がさせるもの
か。

しいちゃんは無視してかわちゃんとともにテーブルの上に料理（
ご飯、大根のお味噌汁、豚肉のしょうが焼き）と各人の取り皿を並
べていく。先ほどまで置いてあったつまみはテーブルの隅に追いや
る。

「よーし、これで全部だな」

タカビーが大根のサラダを持ってキッチンから出てきた。テーブ
ルの真ん中にどん、と勢いよくサラダの入った木のボールを置く。

「もう酔っ払っている人もいるけど、改めて乾杯！」

「それで、石川先輩は『ミス文京大学』に参加することになったの
？」

大根サラダを頬張りながら、かわちゃんが尋ねる。

「うん、ダンスと時間が被らないように調整つけたから」

企画者の中で唯一正常な私が答える。

明石先輩らダンスサークルの人と話し合った結果、ダンスは最終
日の午後一時から。そして

「ミス文京大学」の発表は最終日の午後六時、文化祭の大トリを飾ることとなった。

「最終日は午前には町田イラケンの公開スパーリングで昼にダンス、最後にミスコンか。盛り沢山だな」

タカビー……、実行委員長のあなたがそんなこと言っちゃダメでしょ。これからさらに各サークルからの企画が入って来るんだから……。

「そついえば昔、と言っても二年前だけど、ミスコンで事件があったって聞いたな」

タカビーが豚肉を箸で挟みながら思い出したように呟く。

二年前と言えば、私が高校三年生、つまり文京大学に入る前だ。その時文京大学にいたのは、この中ではタカビーしかない。

「なにそれ、かなりヤバイ事？」

企画者としては聞き捨てならない呟きである。

「ああ、ヤバイと言えばヤバイかな」

タカビーは箸につまんでいた豚肉を口に入れてよく噛み、飲み込んでから事件について話し始めた。彼が豚肉を食べている時間は私には非常に長く感じた。

「まあ俺はその時は実行委員やっていたわけじゃないから姉小路からのまた聞きになるんだけど……」

大学のミスコンテストと言えば当然その大学に在籍している女子学生から選ばれる。そしてその候補者ならばある程度自身の容姿について噂になっっているはずだ。候補者が他薦または実行委員会からの依頼で立候補するパターンが多いのはこのためだと思う。

ところがその年のミス文京大学は、誰も知らなかった人物が選ばれたと言うのだ。自らコンテストに立候補した彼女についての噂は全く無く、前評判で言えば無印のダークホースが

「ミス文京大学」に選ばれたことになる。

しかしコンテストの当日に現れた彼女はタカビー曰く、絶世の美女と言っても過言ではないほど綺麗だったと言う。彼女は他の候補

者に圧倒的な大差をつけて「ミス文京大学」に選ばれた。彼女の名前は田原雪子（たばらゆきこ）と言っらしい。

それが、彼女　雪子さん　が文京大学に現れた最後の日だった。

雪子さんは賞品であるビール券一年分とともに消えてしまったのだ。

そんな話をしながら、タカビーは自らが作った豚のしょうが焼きを食べ続ける。

「彼女の消息については様々な説が出た。『別の大学生説』、『女装した男説』果ては『在籍中に悲運の死を遂げた女子学生の亡霊説』まで飛び出した。結局彼女の正体は分からないまま、今に至るってわけだ」

タカビーはそう言い終わると、何枚目かの豚肉を口にした。

「女子学生の亡霊なんてあり得ません、非常識です！」

突然、私の左隣でぐったりしていた亜由美が声を上げた。ちゃんと話は聞いていたようだ。

「じゃあー、亜由美は『雪子さん』の正体は誰だと思っのー？」

しいちゃんが紙コップを口に加えながら、亜由美の左肩に腕を乗せる。この子も話は聞いていたようだ。

タカビーが楽しそうに豚肉を食べながら、亜由美としいちゃんを見る。

亜由美は大真面目な顔で（でも顔色は真っ赤だけど）叫んだ。

「『雪子さん』は、その日のうちに火星人にさらわれてしまったのです！」

瞬間、しいちゃんと亜由美を除く全員の頭に、大きな「はてな」マークが浮かんだ。

「火星人にさらわれた、となったら大事じゃないか、警察とかマスコミとか動くんじゃないか？」

けーまが最もな意見を言う。しかし、今の亜由美にこの正論は通らなかった。

「そうです、本来ならそうなるはずです。しかし私たちの知らない所で警察も、マスコミも、火星人と裏で話がついちゃっているのです。いわゆる談合社会です。深刻な社会問題です」

一見、現代社会に潜む闇を鋭く言っているようだが、実はとんでもないことを言っている。これが酔った亜由美か……。

「私も火星人がさらっていったと思うよー」

しいちゃんが先ほど肩に乗せていた腕を首に乗せる。

「そうですよね、火星人ですよね」

「そうだよ、気が合うね。亜由美ー」

素晴らしいながらしいちゃんと亜由美は抱き合った。そして

「首相撲ー」

「うわあああつ、目が、目がー」

お決まりの展開。

そんな二人の様子をタカビーは豚のしょうが焼きを食べながら楽しんでる……。って

「ちよつと、タカビーいくら自分が作ったからと言っても、豚のしょうが焼き食べすぎじゃない!？」

気づけば豚のしょうが焼きは皿に三分の一ほどしか残っていない、ほとんどタカビーが食べてしまった。私なんかまだ一口も食べていない。

「うるさい、この世は弱肉強食なんだよ!」

タカビーがなんだか訳の分からない言い訳を放った。

「違います、談合社会ですよー」

頭を回されながら亜由美が反論する。

結局こんな調子でこの日もまともな話し合いになりませんでしたとわ。

第三十話 雪子さん（後書き）

今回のお話のネタは、昨年の雑草生産者さんとのコラボ企画のお話とリンクしていますが、その作品を見ていなくても問題はありません。

「どうしても『雪子さん』の正体が知りたい！」

という方は、雑草生産者さんの「御徒町寄生中」をご覧ください。

雑草生産者さんご協力ありがとうございました。

第三十一話 日本最強の姉妹喧嘩

太陽の光が眩しい千駄木の町を私はしいちゃんを背負って歩いている。時刻は午前九時半。しいちゃんは昨夜お酒を飲みすぎて寝てしまい、かわちゃんがアルバイトに出かける時間にも起きなかったのだ。

巣鴨駅まではタカビーが背負ってくれたけど、そこからは私としいちゃん二人きりなので、日暮里駅からは私が背負っている。しいちゃんは昨夜の大暴れ（それでも怪我人や壊したものはなかったけど）とは違って変わってすやすやと安らかな寝息を立てている。

私が向かう先はしいちゃんの家ではなく自分の家だ。しいちゃんの妹の結衣ちゃんが、私の家にお泊りしているので、結衣ちゃんになんとかしてもらおうと考えているのだ。

私が玄関を開けると、中からお母さんが出てきた。

「お母さん……、ご飯二人分ある……」

私は今にも力尽きそうな声を出す。いくらしいちゃんが小さいからと言って、駅から十分も背負って歩くのはかなりの運動だ。

「電話入れてくれたから用意してあるわよ」

そう言ってお母さんは私としいちゃんを居間へと案内する。居間には真耶と結衣ちゃんがちよつと遅めの朝ご飯を食べていた。

「ちよつと、お姉ちゃん。何やっているのよ!？」

しいちゃんの姿に驚いた結衣ちゃんがお茶碗を片手に立ち上がり、しいちゃんを揺らす。

「んー、あー、何で結衣がここにいるのー?」

まだ寝ぼけ眼のしいちゃんは、突然の妹の登場に驚いている。

「というかここは一体どこなのー? かわちゃんの家じゃないのー?」

ずっと寝ていたからまだかわちゃんの家だと思っているのか。

「しいちゃん、ここは私の家だよ。起きたのならそろそろ降りてく

れないかつ！ な……」

もう体力の限界だ。私はしいちゃんを背負いながら畳の上に尻餅をついた。

「もーう、かつちゃん危ないじゃない！」

その衝動でしいちゃんは完全に目が覚めたようだ。ゆっくりと私から離れると、「おじゃまします」と丁寧に見事に頭を下げた。

「あ、いいえ。お構いなく……」

お味噌汁をすすりながら真耶も丁寧に頭を下げる。

「ほら、しいちゃん。目が覚めたことだし、一緒にうちで朝ご飯食べよう」

「家まで背負ってもらった上に朝ご飯まで頂けるなんて、なんだか申し訳ないな」

そう呟きながらちやぶ台の前に正座するしいちゃん。完全に酔いは醒め、いつものものしいちゃんに戻ったようだ。

お母さんが私としいちゃんのご飯とお味噌汁とちやぶ台の上に置くと、私としいちゃんは同時に「いただきます」と頭を下げた。いつものことながら、私がアルトで、しいちゃんがソプラノである。

「そういえばかつちゃん、もうすぐイラケン選手の試合だね」

鮭の塩焼きを箸で切りながらしいちゃんが嬉しそうに声を上げる。

「あー、そう言えばイラケン選手そんなこと言っていたな！。相手は誰だっけ？」

お味噌汁をすすりながら、私は一昨日、イラケン選手が試合について話していたことを記憶の中から手繰り寄せようとしている。えーと確か相手は……。

「スケベニンゲンだよ。去年の試合以来一年ぶりの闘いだね」

そうだ、チャウワスケベニンゲンだ。と私は頬に力を入れて、お味噌汁を噴出しそうに鳴るのを抑えた。「ちやうわ、すけべ人間」ではない。「チャウワ・スケベニンゲン」対出身のボクシング選手である。

去年の九月、イラケン選手はチャウワ・スケベニンゲンに勝利し、ボクシングの世界チャンピオンになった。

イラケン選手はその後チャンピオンの座を三度防衛し、現在も世界チャンピオンである。私らしいちゃん、そしてはるちゃんはすべての試合をリングの側で観戦した。

今まで見たイラケン選手の四回の闘いの中で一番印象に残っているのは、やはりチャウワスケベニンゲンとの試合である。生まれて初めて見たボクシングの試合と言うこともあるが、イラケン選手が世界チャンピオンになったということもあるし、一番の要因は「スケベニンゲン」と言う名前のインパクトか。

あの試合からもう一年になるうとしていているのに未だに「スケベニンゲン」という名前に慣れないでいる。

「またボクシングの話ー？ 朝からいい加減にしてよお姉ちゃん」
結衣ちゃんが迷惑そうにしいちゃんを睨む。

「何よ、結衣。ボクシングを邪険に扱うなんて許さないわよ」
しいちゃんが箸を結衣ちゃんに箸を向ける。

「お姉ちゃんはいつもいつもいつもボクシングの話で周りが迷惑しているの気がつかないのかしら」

結衣ちゃんはしいちゃんのボクシング熱に辟易しているのだろう。お茶を飲みながら鋭く呟く。

「そうかな、周りの空気を読まずにキックボクシングの話をしてい
るよりはマシだと思うけど」

しいちゃんが油ののった鮭の切り身を切りながら不機嫌そうに反論する。

「お姉ちゃん、キックボクシングがくだらないとでも言いたいわけ
！？」

「結衣こそボクシングのこと馬鹿にしているのですよ」
二人の発言の勢いがどんどん上がっていく。

「ボクシングなんてパンチしか使えない格闘技のどこがいいのよ」
今の結衣ちゃんの発言。私でもちよつとムツと来たぞ。しいちゃ

んならなおさらだろう。

「分かっていないわね、両腕しか使わないで相手を倒すことに美学があるのでしょ」

「それに蹴りが加わるからもつと楽しくなるんじゃない。パンチだけなんて、あーつまらない」

結衣ちゃんのその言葉を聴いて、しいちゃんは激しくちやぶ台を叩いた。

「もう、怒った！ 結衣、表に出なさい！！」

「望むところよ！」

結衣ちゃんはお味噌汁を飲み干すと、勢いよく立ち上がった。

セミの声が鳴り響く私の家の庭にしいちゃんと結衣ちゃんは向かい合って立っている。その姿を見たペルが、散歩に連れて行ってくれるのかと勘違いしたのか、尻尾を振って二人の横を走り回る。

「勝負はいつも通り、私はパンチのみ、結衣は蹴りしか使わないこと、いいわね」

しいちゃんが両拳を固めて結衣ちゃんに告げる。

「お姉ちゃんが大学に出てから一度も勝負してないけど、その間私の蹴りがいかに上達したかお姉ちゃんに見せてあげるわ」

結衣ちゃんは右の膝頭をしいちゃんに向けて少し上げる。

「いつも通りって……、二人はこういう喧嘩をしょっちゅうしているの？」

私と真耶は朝ご飯を縁側に置いて食べながら庭にいる二人の様子を見ている。

「うーん、しょっちゅうってわけじゃないけど……、年に一度は必ずしていたかな」

「対戦成績は何勝何敗でどちらが勝っているの？」

沢庵をかじりながら真耶が二人に尋ねる。

「十戦……、いや十一戦全勝で私の勝ちかな？」

パンチはキックよりも強し、というわけか。

「今まではお姉ちゃんに負けてばかりだったけど、今日こそお姉ちゃんに勝つわよ！」

二人はそのままの姿勢でじつと対峙している。二人の間は二メートルくらいか、結衣ちゃんのキックも届かないし、当然しいちゃんのパンチも当たらない。どちらかが、相手に近付かなければ決着は付かないのだが、相手の攻撃を警戒しているのだろう。互いに動かない。

そのまま五分が経過し、私と真耶は朝ご飯を食べ終えてしまった。私が食後のお茶に口をつけた瞬間にしいちゃんが間合いを詰めてきた。

自分の間合いに入ったと思った結衣ちゃんがしいちゃんのわき腹に向かって右のミドルキックを放つ。キックにも構わずしいちゃんの体が素早く結衣ちゃんへと動く。

「そこまでっ！」

背後からお母さんの叫び声が聞こえる。その声を聞いてしいちゃんと結衣ちゃんの動きが止まった。

しいちゃんを狙った結衣ちゃんの右足は、いつの間にか右に曲がって私のほうを向いている。

しいちゃんとは言えば、結衣ちゃんの懐深くに入っていて左のボディーパンチが軽く結衣ちゃんの服に触れるか触れないかの辺りでその動きを止めた。

「朝ご飯の時間に喧嘩なんかしない！ もう勝負はついたんだからそこまでにしなさい」

お母さんはそう言って台所へと消えた。結衣ちゃんはがっくりと肩を落とす。

「お婆さんの言うとおり、私の負けだわ……」

「まだまだ精進が足りないわよ。結衣」

しいちゃんは結衣ちゃんから離れると、居間に戻るために一人玄関へと向かった。結衣ちゃんは暫く俯いていたが、頬を二回思いっきり両手で叩くと、しいちゃんの後を追った。

「ところで、一体何が起こったの……」

しいちゃんが勝つたらしいのは分かったが、その前にしいちゃんに向けられた結衣ちゃんの右のミドルはどうなったのだろう。

「お姉ちゃん、見えてなかったの？ 結衣ちゃんの蹴りを椎名先輩が肘で弾いて左のボディを一発撃ちにいったのよ」

私にはしいちゃんと結衣ちゃんの動きが早すぎて見えなかったのに、真耶は全て見えていたらしい。

「一発じゃなくて正確には二発ね」

再びお母さんの声。お母さんにも見えていたというのか。

「しいちゃんあの構え、右腕にも力を溜めていたわね。左のボディを当てた後で、右ボディとワンツーパンチを当てるつもりだったのよ」

ボクシングの試合を何度も見た私が見えていないのに、この二人はどうしてここまで見えているのだろう。

「真耶と、お母さんってさあ……、格闘技の試合とか見ているの？」

「いや、全然見ていないわよ」

二人は同時に答える。

ひよつとしたら目が細い人は物事が良く見えるのかもしれない。

居間に戻ってご飯を食べるのを再開するしいちゃんと結衣ちゃんを見ながら私はそんなことを思った。

それにしてもしいちゃんと結衣ちゃんってすごい姉妹だな。

第三十二話 日本最強の姉妹タッグ編

結衣ちゃんが実家のある米沢へ帰る日がきた。

私たちは東京駅に彼女を見送りに来ている。結衣ちゃんはここから山形新幹線に乗って、実家へと帰る。

「夏休みなんだから、もうちょっとゆっくりすればいいのに」

私は結衣ちゃんのお土産にと、うちで作っている和菓子の入った紙袋を渡した。

「いやー、受験生なのでゆっくりはしていただけないですよ。ここからが正念場です」

結衣ちゃんは紙袋を受け取りながら頭をかいた。

「まあ今の結衣の成績なら大丈夫だろうけど……。油断しちゃダメだからね」

しいちゃんが結衣ちゃんのわき腹をつつく。結衣ちゃんだから大丈夫であって、他の人ならちょっと痛いと思う強さだ。

「わかってるって、来年の春には絶対お姉ちゃんの後輩になるから」

「私と一緒に授業受けようねー」

真耶が結衣ちゃんの左手を握り上下に振る。二人は同い年ということもあり、この数日間ですっかり仲良しになった。

「そうだねー、希望する学部は一緒だから、授業は一緒だね」

結衣ちゃんは真耶の右腕がちぎれるんじゃないかと思うほど激しく上下に振った。しいちゃん曰く、彼女はあまり力の加減ができないらしい。

「ダンスに興味をもったらいつでもうちのサークルに来てね。結衣ちゃんの足さばきならきつと上手く踊れると思うから」

はるちゃんは早くも自分のサークルへと勧誘している。うちの大学には女子のキックボクシング部はないから、結衣ちゃんはきつと体を持て余す。と計算してのことだろう。

「ありがとうございます。考えておきます」

結衣ちゃんはちょっと社交辞令っぽく応えた。脈はあまり無いようにうたぞ、はるちゃん。

「そろそろ新幹線の時間だよ、結衣」

「あつ、ほんとだ。それじゃあみなさん、短い間でしたがお世話になりました」

結衣ちゃんは元気よく頭を下げると、新幹線の乗り場へ向かおうと私たちに背を向けたが……。

「あれ……」

私たちの視線の先には

「山形新幹線は米沢 福島間の大雨の影響で一時運転を見合わせています」

という文字が電光掲示板に赤々と表示されている。

「運転見合わせて帰れないってことー!？」

結衣ちゃんが赤いスポーツバックと土産の紙袋を思わず落とした。

「まあまあ、お昼ご飯でも食べていればきっと新幹線も動き出すって」

私たちは東京駅の中にあるイタリア料理のお店でお昼ご飯を食べることにした。

「こうなるんだったら、夜行バスで帰ればよかったかな……」

結衣ちゃんが不満げにカルボナーラをフォークで何度も巻きつける。フォークに巻かれた麺の玉がどんどん大きくなっていく。

「もう、夜行バスは渋滞で遅れる可能性があるから嫌だ、と言ったのは結衣じゃない」

ペペロンチーノを小さく巻きながらしいちゃんがたしなめる。

「それはそうだけど……、まさか大雨でストップするなんて……」

そう言いながら結衣ちゃんはカルボナーラを口に入れようとしたが、麺の玉があまりにも多すぎたので、フォークを逆に巻いて玉を小さくしていく。

「天気予報では東北地方は今朝から大雨って言っていたわよ」

はるちゃんがナポリタンを丁寧に巻いて食べる。残る私と真耶が食べているのはパスタではなく、二人ともエビドリアだ。

「それじゃあこのままずっとストップする可能性もあるってことですか」

結衣ちゃんがカルボナーラを再び何度も巻きながら悲鳴を上げる。

「まあ、乗車券をまだ買っていないことが不幸中の幸いなね。今日も東京にいたら？ 受験生だから一日が無駄に消費されるのは嫌だというのは分かるけど、天候による影響はしょうがないわよ。今日一日ぐらいゆつくりしなさいという気象予報士さんのお告げだわ」

そこは「気象予報士」じゃなくて、「神様」とか「お天道様」とか言い方があるでしょ、はるちゃん。

「とりあえずこれを食べ終わったら駅員の人に聞いてみます……」

そう呟いた結衣ちゃんだったが、お昼ご飯を食べ終えた私たちを待っていたのは、

「東北新幹線、山形新幹線、秋田新幹線、大雨により運転見合わせ」と、電光掲示板に表示された文字だった。

「これじゃあ今日は帰れないね。結衣、うちへ帰ろう」

「うん、そうする……」

結衣ちゃんは今日帰れないことにショックを受けている。

だからスポーツバックと私からのお土産が床に置きっぱなしになっていたことも、それを狙っている者がいることに気がつかなかったのだから。

私たちも結衣ちゃんを慰めることを考えていたので、それに気がつかなかった。

それは一瞬だった。黒い影が結衣ちゃんとその隣にいた真耶を突き飛ばして京葉線の乗り場へと走り去っていった。

「いたた……、何！？ 慌てん坊さん？」

真耶がのんきに立ち上がって辺りを見回す。

「京葉線の乗り場に行くには結構歩くからねー。急いでいたんじゃ

ない」

事実京葉線乗り場は新幹線の乗り場から歩いて五分から十分ぐら
いかかる。だから電車に乗り遅れないように急いでいたのだろうと、
私も思った。結衣ちゃんの悲鳴を聞くまでは。

「な……ない！ 私のバッグが……御徒先輩からもらったお土産も
無い！」

「結衣、落ち着いて。結衣が最後にバッグとお土産を見たのはいつ
？」

「ここまで持つて来たよ。ここで運行状況を見るために床に置いた
のが最後」

「と、言うことは誰かが持ち去ったってことね……」

はるちゃんが京葉線乗り場へつづく通路を見ながら呟く。なんか
ちよつと面白そうな顔をしているぞ。

「誰かが持ち去って……、まさか!？」

「そのまさかよかつちゃん、結衣ちゃんと真耶ちゃんにぶつかつた
学生服の男。彼が二つとも持って行ったに間違いはないわ。追うわよ」

黒い影と思ったのは学生服を着ていたからなのか……、と私は思
いながらはるちゃんの後を追った。そんな私の隣を二つの影が素早
く通り過ぎていく。それは……、

「し、しいちゃんに結衣ちゃん？ 早い、早いよ」

私の声に止まることなく、しいちゃんと結衣ちゃんは階段を駆け
下りていった。

「いた、あの男だ」

階段を駆け下りる私の耳に、結衣ちゃんの叫び声が聞こえる。ど
うやら犯人は、私たちから離れたことを確認すると安心して走るの
をやめたようだ。

階段を降りきって地下通路に入ると、もうしいちゃんが犯人と思
える男に追いつこうとしていた。結衣ちゃんはまだ犯人から数メー
トル離れている。このしいちゃんと結衣ちゃんとの差は身長差から

来るものなのか、日々の鍛錬の差から来ているものか分からない。

「その引つたくり、待ちなさい」

しかし、「待て」と言われて待つ愚かな泥棒なんて存在しない。

しいちゃんの言葉を無視して走るスピードを上げていく。

しいちゃんも負けじとスピードを上げる。京葉線への地下通路は直線なので、かなり離れている私からもその様子は見える。私は「動く歩道」を走る。機械の力を借りなければとてもしいちゃん（どころか結衣ちゃんも）追えないと思ったからだ。

一方はるちゃんは日ごろダンスで鍛えているので、普通の通路を走っている。

そのうちしいちゃんが犯人に追いついた。捕まえるかと思ったらなんとしいちゃんは犯人を追い抜いた。

驚いた犯人が、スピードを緩める。次の瞬間、犯人の体がビクンと大きく縦に揺れ、通路に仰向けに倒れた。倒れた犯人の向うにはしいちゃんが右拳を高々と突き上げている。どうやらしいちゃんは犯人を追い越して、走ってくる犯人に対して右アッパーというカウンターパンチを食らわしたらしい。

あのしいちゃんのパンチをカウンターで食らったのにも関わらず、犯人は体を震わせながら上体を起こした。それが彼の更なる不幸を呼んだ。

やっと犯人に追いついた結衣ちゃんが、彼の背中に強烈な右のキックをお見舞いしたのだ。走るスピードをそのまま載せたキック。

破壊力は相当なものだろう。

「げふっ！」

と声を上げた犯人は再び仰向けに倒れた。

「私たちの荷物をひったくろうなんて、まったくいい度胸しているわ」

やっと私はしいちゃんたちに追いついた。結衣ちゃんが犯人を見下ろして言い捨てる。犯人ははるちゃんの言うとおり学生服を着た男だった。まだ顔にあどけなさを感じる。高校生だろうか。

「この人、大丈夫なの……？」

しいちゃんの右アッパーをカウンターで受け、さらに背中に結衣ちゃんのキックを受けたのである。ひよっとしたら生死に関わるかもしれない。

「大丈夫だよ、かつちゃん。息はしているから。でも一応上体を起こして骨が折れているかいないか確認してみよう」

と、しいちゃんは軽々と犯人の上体を引っ張り上げた。彼はまだ気絶している。その背中を結衣ちゃんがなんども軽く叩いていく。しいちゃんは胸の辺りを軽くタツチする。

「うーん、どうやら骨は折れていないようだよ」

「そうだね。こっちも異常は感じなかったよ」

何を根拠に折れていないと判断したのか分からないけど、普段体を鍛えている二人の言うことだから、大丈夫なのだろう。

「あ、はるちゃん真耶ちゃん、ちようどいいところに来た。追いついたところで悪いんだけど警察の人呼んできてくれるかな」

「えー、また走るのー」

はるちゃんが不満げに口を尖らせる。

「ごめんね、はるちゃん。私たちは犯人がまた起き上がって逃げないように見張る役目があるから」

そう言っつて両手を合わせて可愛く「お願い」をするしいちゃん。

いやー、当分起き上がれないんじゃないのかなー、と私は犯人を見て思った。

そして私の思うとおり犯人は警察の人が来ても目を覚ますことは無く、救急車で病院へ運ばれることになった。検査の結果骨折したところはひとつもなく、ただの打撲ですんだようだ。

しいちゃんと結衣ちゃんは、警察の人に「ちよつとやりすぎたんじゃないの」と少し注意された。

ペコペコと警察の人に頭を下げる二人を見ながら、私はこの姉妹と友達で良かった、と胸を撫で下ろした。敵に回したらものすごく恐ろしいじゃない。

第三十三話 再戦、イラケン選手対スケベニンゲン

私としいちゃんとはるちゃんは今、後樂園ホールにいる。

ボクシングミドル級の世界チャンピオン、町田イラケン選手四度目の防衛戦を見に来たのだ。もちろん席はいつもの通り実況席の真裏である。これもイラケン選手というコネがあつてこそできるものだ。

はるちゃんはサークルの合宿から帰つて来たばかり。去年は予算が無くて、葉山の合宿所だったが今年は他のダンスサークルと合同で、高知県の海で合宿をしたのだという。

おかげではるちゃんの肌はきれいな小麦色になっている。

私としいちゃんは、去年はお手伝いで合宿に参加したけど、今年は文化祭実行委員会の仕事があり、ずっと大学に通っていた。

そのため私としいちゃんの肌は穢れのない（ごめん、言い過ぎた）白い肌である。

さて、イラケン選手の今宵の相手はタイ人のチャウワ・スケベニンゲンである。名前は

「スケベニンゲン」だけど、家族思いの気さくな人だ。昨年私とはるちゃんは彼の家族に遭遇し、彼の家族一人一人の写真を撮らされる目に遭っている。

「今回で二回目だけど、スケベニンゲンは強くなってるのかな」

はるちゃんが心配そうに青コーナーサイドースケベニンゲンの入場口を眺める。

「いやー、今年に入ってイラケン選手強いから大丈夫でしょ」

私は気楽に答える。

イラケン選手は昨年末最初の防衛戦は判定で辛くも勝利したけど、今年に入つての二戦は半分の六ラウンドもいかずにKO勝ちしている。圧勝と言つても過言ではない。

「でもね、スケベニンゲンは前のチャンピオンだから、そう簡単に

「いかないと思うんだ」

しいちゃんは冷静だ。イラケン選手の一番のファンだけど、強さの判定は公平に行きたいのだろう。

「青コーナーより、チャウワ・スケベニンゲン選手の入場です」

「あつ来た！」

青コーナーサイドをずっと見つめていたはるちゃんが叫んだ。

太鼓の軽快な音と、たくましそうなおじさんと、若い女性のうなるような歌声。あと時々聞こえるストローで作った笛のような音と何だかわからないけど頭に響くこれまたうなり声のような、ガラスに爪を引っ掻いたような音が聞こえてくる。(はるちゃんが言うにはテルミンという電子楽器らしい)

その曲の中で、四人のスケベニンゲンが一列になって現れた。

先頭から順にタブン・スケベニンゲン、オソラク・スケベニンゲン、チャウワ・スケベニンゲン、マジデ・スケベニンゲン。昨年と変わらぬ順番である。

そして私の予想通り、観客席には母親のソダタ・スケベニンゲンが祖父であるオレガ・スケベニンゲンの遺影を抱えて座っている。実況のアナウンサーはこの光景をよく笑えずに話せるものだと感心してしまう。私はなんとか笑うまいと必死に口を抑えた。

はるちゃんも自分の頬をつねって笑いをこらえている。二回目だから去年よりはインパクトは無いけど、おかしいことには変わりはない。

「もう、二人とも何がおかしいのよ。挑戦者に失礼でしょ」

真ん中に座るしいちゃんだけが真剣な表情でスケベニンゲン一家の隊列を見つめている。

「いや……分かってるんだけどさあ」

私も変わった名前を持っているので、名前について笑われるのはちょっと抵抗ある。だから人の名前について笑ってはいけないと、分かっているのだけど……。これは強烈過ぎるよ。

入場曲が鳴り止み、チャウワ・スケベニンゲンが、ロープをまたいでリングに入る。昨年はチャンピオンとしてリングに入ったが、今年には挑戦者だ。

「赤コーナーより、チャンピオン、町田イラケン選手の入場です」
リングアナウンサーの声とともに、町田イラケン選手の入場曲である「やんちゃ將軍江戸日記」のテーマ曲が流れてきた。昨年、スケベニンゲンとの試合前に、「やんちゃ將軍江戸日記」の主役である徳川吉宗とくがわ よしむねを演じ、そのために世間から「將軍」と呼ばれている大物俳優の町平健さんまちだたいけん直々に使用を許可された曲である。

チャンピオンベルトを高々と掲げるトレーナーの後に続いてイラケン選手がホールの中へと入る。相変わらず、背筋と腹筋が鍛えられていて綺麗である。時々谷中霊園でトレーナー姿の彼に会うけど、上半身裸の彼に会うのは試合のときしかない、もうこれで五回目だけど、なんだかちょっと照れてしまう。

ロープをくぐってイラケン選手がリングに入る。昨年は挑戦者だが今年にはチャンピオン。四度目の防衛戦、なんだかチャンピオンの風格って言うものが出ているな。と素人ながらに思う。

「一度対戦しているから相手の得意なところとか、苦手なところは互いに分かっていると思うわ。問題はこの一年間でどれだけ変わったか、と言うことよ」

しいちゃんしいちゃんがリングの二人を見つめて呟く。スケベニンゲンは知らないけど、イラケン選手はかなり強くなったと思うぞ。

双方のリングコール、審判の説明が終わり、いよいよ試合開始のゴングが鳴る瞬間が来た。ほぼ一年ぶりの対戦が今、始まる。

一ラウンド目は互いに相手の様子を見ているためか、あまりパンチを出さず、出しても軽いジャブだけで終わった。まあイラケン選手の試合はいつもこの状態から始まるから「もつと攻撃しろ！」なんて野次は入れないし思わない。

二ラウンド目に入ってイラケン選手が動き出した。左のジャブを

的確にスケベニンゲンに当て続けていく。そして時折入れる右ボディ。スケベニンゲンがボディに弱いことは前回の試合で証明されている。今回もそれを狙っているのだろうか。

第三ラウンド、第四ラウンドもこの状態が続き、イラケン選手はほぼノーダメージ、スケベニンゲンはイラケン選手の右ボディを十発ほど受ける結果となった。

第四ラウンド終了後に三人の審判からこれまでの採点の途中結果が発表される。結果はもちろんイラケン選手の優勢。三人とも四十対三十六でイラケン選手の勝ちと判定したのだ。

「二人とも、分かっているけどこれは途中結果だからね。まだ喜んじゃダメだよ」

しいちゃんが私とはるちゃんに釘を刺す。口だけではなく、私とはるちゃんの腕をがっしりと握り締めている。

しいちゃんは今年の試合で興奮した私たちに何度も何度も揺らされ、試合衆力直後に目眩を起こして倒れている。私の腕を掴むしいちゃんの力は今度はそんな目に遭わないぞ、と言う彼女の強い意志の表れであった。

第五ラウンド　スケベニンゲンがイラケン選手のボディパンチを明らかに嫌がり始めた。パンチを受けるたびに泣きそうな顔になるのである。それまで、両拳を頭に掲げて頭部への攻撃をガードしていたスケベニンゲンだが、その腕が徐々に下っている。頭部よりもボディのガードに重点を置いたのだろうか。そのために今まで拳で守られていたこめかみの辺りがノーガードになった。

イラケン選手はそれを狙っていたのだろうか。左のジャブをスケベニンゲンの左のこめかみ放った。スケベニンゲンの体が斜めに傾き、腕が下がる。

がら空きになった顔をイラケン選手の右ストレートが捕らえた。スケベニンゲンがよろめきながら後ろへ下がる。

イラケン選手は逃すまいと前に詰める。素早いパンチがスケベニ

ンゲンの顔面へと放たれる。早すぎて何発打っているのか私には見えない。私は心の中でなぜか「オラオラオラオラオラ！」と叫んでいた。

心の叫びを上げているうちに、スケベニンゲンが両膝をマットについでうつ伏せに倒れた。

「倒れたよ、スケベニンゲンが倒れたよ！」

しいちゃんが私とはるちゃんの腕をしっかりと掴みながら叫ぶ。と言うかしいちゃん、ずっと握りっぱなし。

カウントが八になってもスケベニンゲンは立ち上がるうとしない。カウント九、十……。試合終了のゴングがイラケン選手の勝利をホール中に伝えた。五ラウンド一分四十五秒。イラケン選手のKO勝ちだ。昨年まぶたを切って苦戦したのとは違ってイラケン選手の圧勝である。

「やった、やった。イラケン選手の勝ちだよ！」

はるちゃんがしいちゃんの肩を掴んで揺らそうとしたが……。

「すごい、やっぱりイラケン選手は最高だよー！」

と立ち上がって、私とはるちゃんのこめかみを軽く掴んだ。確かこれは「アイアンクロー」と言う技だ。徐々に力が強くなっているような気がする……。

イラケン選手が観客の声援に伝えて退場するまで、私とはるちゃんはいしいちゃんに抑え続けられることとなった。

「はい、それじゃあイラケン選手の控え室に行くよー」

しいちゃんが手を離して歩き出す。しかし私とはるちゃんはこめかみの痛さにしばらく動くことはできなかった。

第三十四話 はい、手品しまーす

イラケン選手の控え室の前は報道陣でひしめきあっていた。毎回のことだから別に驚かないけど、今回はいつにも増して多いような気がする。

「去年の再戦だからね。マスコミの注目がいつもより多いのも当然だよ」

しいちゃんが小さな体を思いつきり伸ばして控え室の中を覗こうとするが、背が小さすぎて見ることが出来ない。

「はるちゃん、中の様子見える？」

はるちゃんはちよつとつま先立ちになった後、つまらなさそうに口を尖らせた。

「黒い頭ばかりって感じ。イラケン選手の姿なんてさっぱり見えないわ」

背を伸ばすことを諦めたしいちゃんは今度は何度も飛び跳ねて中を覗きこむ。しいちゃんの脚力なら報道陣の背を簡単に越えられるのだが……。

「うーん、人、人、人ばかり。誰がイラケン選手だか分からないよ」

「これじゃあ今日挨拶するのは無理かもしれないね」

私もちよつと背を伸ばして中を見るけど、二人の言うとおり、黒い頭の人だらけ。さらには激しいカメラの光が部屋の中のおちこちから私の目へと突き刺さる。

「今日の対戦相手は……」

報道陣の質問の声が聞こえるけど、どんな内容なのかはよく聞き取れない。

「残念だけど、今日は帰ろうか。イラケン選手には明日ジムで会えばいいよ」

はるちゃんがあっさりと言った後で、出口のほうへと足を向けた。

明日ジムで会うって、はるちゃんの家はジムから遠いのに……ひよつとしてしいちゃんの家に泊まる気なのかな？

「……と言うわけで、しいちゃん今日は家に泊めてねー」

「うん、別に私は構わないよー」

ああ、やはりそのつもりだったか。

しいちゃんは笑顔で承諾する。

「よかつたらかつちゃんも泊まりにおいでよ。みんなで泊まったほうが楽しいよー」

「そうだね、お母さんに電話しておくよ」

ちよつと遅くなるけど晩ご飯は何にしようかと、話し合いながら私たちは後楽園ホールを出た。

「おーい、お前らも試合を見に来ていたのかー」

後楽園ホールから水道橋駅すいどうはしへ向かおうとホールの隣の黄色いビルの前を歩いていたところ、知っている声に呼び止められた。

「あ、タカビー。それに姉小路会長」

声の主はタカビーだった。なにやら焼き鳥らしきものを頬張っている。その後ろにいるのは姉小路会長。こちらが食べているのは……。

「そんなに覗き込むな、これは牛のモツ煮込みだ。とんかつではないぞ」

気がついたら私は会長にかなり迫っていたらしい。はるちゃんも私の隣で会長が持つているお椀の中身を覗きこんでいる。

「さつき『お前らも試合を見に来ていたのか』って聞いたけど、タカビーと会長もイラケン選手の試合を見ていたの？」

私が尋ねると、タカビーは焼き鳥の串をゴミ箱に放り投げて答えた。

「ああ、立見席だったかな。だけどさすが世界戦だ、立見でも料金が高いのなんのって」

「へー立見だったんだー」

はるちゃんは意地悪そうな笑みでタカビーと会長を眺める。

「なんだその優越感は、はる」

「いやー、そりゃあ優越感に浸りたくなるよ……ねえ二人とも」
はるちゃんは両隣の私たちに同意を求める。

「もう、はるちゃん失礼だよその言い方は」

しいちゃんが申し訳なさそうにタカビーと会長を見る。

「私たちはリング側の実況席の裏側で見ていたのよ」

「しかもタダで！」

私の回答にはるちゃんが勢いよく続ける。

「何をー？ お前らタダだとー？」

会長が驚きの声を上げて私たちを睨んだ。

「謝れ、この試合を見るために文化祭実行委員会の仕事の合間を縫って一生懸命アルバイトをした高見に謝れ！」

会長が言つとなんだか本当にタカビーに申し訳ないことをした気分になってしまう。

「会長の命令だけど、謝る訳にはいかないわよ！ 私たちとイラケン選手が仲良しだからできることだもん。謝ったらイラケン選手に失礼よ」

はるちゃんが大きくない胸を張って反撃する。はるちゃんの言い分はもつともだ。

「それに、私たちとイラケン選手の仲がいいから今年の文化祭イラケン選手は来てくれるんでしょ！ なおさら謝る必要ないじゃない。むしろ私たちに感謝すべきよ」

はるちゃんの氣勢に会長は割り箸を啜えて

「ううむ……そこまで仲がよいのなら仕方が無いが……」

会長がしぶしぶ納得する姿を見て、はるちゃんの顔がはじけた。

そして右手でガッツポーズを取る。

「やったー、初めて会長を言い負かしたわ！」

「はるちゃん、会長といつも言い争いをしていたの？」

そうだとしたら今までの対戦成績はどのくらいなのだろう……。

会長の圧勝なのだろうか？私が尋ねるとはるちゃんはやりと笑って、右手を腰に当てた。あ、何か嫌な予感する。

「そんなわけないじゃない！」

あ、やっぱりそう来たか。

「別にいつも言い争いしているわけじゃないけどさ、会長っていつも大人の意見を言っただけで周囲を納得させるじゃない。なんかそれが悔しくてさ、いつか言い負かしたいな」と思っただけ。

どうやらはるちゃんは会長に理不尽な不満を持っていたようだ。

「ところで俺のバイトの話はいいの？」

タカビーが二本目の焼き鳥を手を持ちながら小さな声で私たちの会話に割って入る。

「タカビーの話は置いて、会長さんはイラケン選手の試合を見るためにアルバイトはしなかったのですか？」

非情にもしいちゃんが話の流れを会長に向ける。かわいそうなタカビーは寂しそうに焼き鳥の一かけらを口にした。

「ああ、俺は一応アルバイトもしているけど、他にお金を稼ぐ方法があるから……」

「えっ！？まさか人様には言えないようなことを！」

私の頭の中で、ありえない儲け話を人のよさそうなサラリーマンに持ちかける会長や、事故に巻き込まれたと顔も知らぬお婆さんに電話をかける会長……と、次々に会長が悪事を働く姿が展開されていく。

「何を考えているかは知らないが、犯罪行為ではないぞ。ちよつとした手品のようなものだ」

「え？手品！？」

私の頭の中では、耳がいきなり大きくなったり、手品の合図に「にゃ！」と可愛く叫んだりする会長の姿が……。

「手品と言っても別に耳が大きくなったり、懐からアライグマが出てくるわけではないぞ」

あ、私の妄想が思いつきり否定された。

「手品と言つても、誰でもできる手品だよ。名付けて『九十秒で百円が一万円に変わる手品』」

「九十秒で百円が一万円に変わる手品!？」

私としいちゃんとはるちゃんが同時に叫んだ。しいちゃんがソプラノで、はるちゃんがアルトで、私とその真ん中ね。

「イラケン選手の試合が早く終わったので、今もその手品をやっている最中なんだ。君たちもよかったらやるかい？」

「はい、是非やりたいです！」

はるちゃんが元気よく右手を上げる。

「百円が一万円かー」

耳が大きくなるやつより難しそうだけど面白そうだな、と私は思った。

「会長が言っていた『手品』って競馬のことだったんですねー」

私たち五人は耳に赤鉛筆を差して競馬新聞を眺めるおじさんたちの集団の中にいる。

後楽園ホールの隣の黄色いビルは競馬の場外馬券販売所になっている。上の部分は土日に開催される中央競馬の場外馬券販売所だが、一階部分の一部は平日に開催される地方競馬おおいけいば 大井競馬場（けいまが聞いたら怒りそうだ）の場外馬券販売所になっているのだ。中央競馬は昼にしかやらないけど、大井競馬を初めとする一部の地方競馬は春から秋にかけて夜に競馬をしている。勤め終わりのサラリーマンを狙ったナイター競馬だ。

「この『マークシート』と言う紙に自分が来ると思う馬のゼッケン番号と賭ける金額を記入する。そしてあそこにある機械にお金とこの紙を入れれば馬券が出てきておしまい」

会長が淡々と馬券の買い方を私たちに教えてくれる。

「それで、予想が当たったら一万円がもらえるんですね、先生」

はるちゃんは早くも青いプラスチックで出来た鉛筆を取ってマークシートに書いている。

「必ず一万円がもらえるわけではない、賭けた金額や、その馬券の
人気によっても戻ってくる金額は大いに異なる。極端な話、百円が
二百円にしかならないこともあれば、百円が数百万と化けることも
ある」

会長が競馬新聞を睨みながら答える。

「人気のある馬券を買えば当たりやすいが、戻ってくる金はその分少
ない。逆に人気の無い馬券を買えば当たりにくいがあったときの戻っ
てくる金額は高い。そういうことだ」

何本目かの焼き鳥の串を加えながらタカビィはマークシートに自
分の予想を書き込む。

「私は未成年だから馬券は買わずにみんなを応援することにするよ」
しいちゃんが遠慮がちに呟く。馬券は未成年の人は買えないらし
い。ここにいるメンバーでしいちゃんが唯一の未成年者だ。

もうすぐ二十歳になるのもつたいないなあ、と思いつながら私は
マークシートに何を書こうかと迷った。私は馬券の種類の中でも一
番難しいとされる「三連単さんれんたん」という馬券を買おうとしている。レー
スの一着から三着になる馬を順番どおりに予想するという馬券だ。
一着と二着が逆だったらハズレ！ と言うなかなか厳しい馬券であ
る。

さて、今日が初めての競馬だけど、一体何を買えばいいのか分か
らない。適当に思いついた数字を書こうつと。

と、考えて私は今日のイラケン選手の試合を思い出した。イラケ
ン選手の今日の試合は五ラウンド一分四十五だから、一着が五番で、
二着が一番……。三着は四十五秒って、四十五頭も馬が走るわけじ
やないので、四は外して十五番！ 五 一 十五の三連単百円勝負
でどうつ？

百円玉とマークシートを機械に入れると一枚の馬券が出てきた。
生まれて初めて買う馬券。外れても捨てずに記念にとって置くこつ
と。

第三十五話 いろいろ怖い

「さて、馬券を買ったけどこの後はどうすればいいの？」

「あとは黙ってレースを見る。まあモツ煮込みでも食べながらレースを待とう」

私たちの前には会長が買ってきた牛のモツ煮込みが並べられていた。ちようどお腹が空いていたのでありがたくいただく。

「モツ美味しいー」

笑顔のはるちゃんがテンポよくモツを口へと運んでいく。

「牛蒡や大根にだしがしつかりと染み込んでいて美味しい」

料理好きのしいちゃんは味をしつかりみんなに伝えながらモツ煮込みを味わう。

こんな美味しいものどうして今まで食べてこなかったのだろうと考えながら私はテレビの画面を見つめる。「締切り一分前」という文字が画面いっぱいに表示されている。その文字が画面から消えると、目の覚めるような激しいベルの音が辺りに鳴り響いた。

「ただ今、大井競馬第十二レースの発売を締め切りました。ご投票ありがとうございました」

ちよつと年を感じる女性の声が聞こえるとタカビーはモツ煮込みのお椀を置いて身構えた。

「よし、いよいよ最終レースの発走だ」

どうやら私の買った馬券のレースが始まるらしい。トランペットの軽快な音が流れる中、レースに出走する馬が次々と青いゲートの中へ入っていく。

「十二番の馬來い、十二番！」

どうやらはるちゃんは十二番の馬券を買っているようだ。

「十二番か、一番人気だな。俺も買っていることだし。来るんじゃないか」

「やったー、会長と一緒にだー」

一番人気、会長と同じ馬券。と聞いてはるちゃんはもう馬券が当たった気であるようだ。早くも会長とハイタッチをしている。

私の買った馬券は確か……、五 一 十五の三連単だったな。画面を通じて見ると私の買った三頭の馬は別段様子がおかしいわけでも絶好調なわけでもない。（まあ初めて馬券を買った私の意見だから当てにならないけどね）タカビーや会長もこの馬券について何も意見を言わなかったので、人気のある馬券なのかそうではないのかも分からない。

やがてブザーの音とともにゲートが開き、十六頭の馬達が一斉にゲートを飛び出した。私の買っている五番の馬が先頭を走っている。「おい、みんな。私の買っている馬が先頭を走っているよー」

「スタートで先頭を走っているからってそのままゴールするとは限らないだろ」

タカビーが冷静に私に突っ込みを入れる。

「五番の馬はいつも逃げては最後の直線で抜かされるからな。今日もたぶん最初だけだろ」

タカビーは五番の馬についていろいろと知っているようだ。いつも最後で負けるなんて馬券を買った私にとっては聞きたくない情報だ。

「ずるいぞ、タカビー。私に教えないなんて」

悔しいので私はタカビーの右足を軽く蹴った。

「おいおい、お前に恨まれる覚えなんて俺には無いぞ」

勝ちそうな馬を教えなかっただけで充分恨みの対象だ、と私は心の中で毒づく。

「二人とも、最後の直線に入ったぞー」

会長の言葉に私とタカビーは視線をテレビの画面へと戻す。なんだか胸がわくわくしてきたぞ。

まだ五番の馬が先頭を走っている。後ろから彼を抜かそうという馬はまだ現れない。

「差せー！」

「そのまま、そのままー！」

前から後ろからそして左右からおじさんたちの絶叫が聞こえる。

「十二番来なさい、十二番！」

「十二来い来い、十二来い来い！」

気がつけばはるちゃんも会長も画面に向かって叫んでいる。

残り二百メートルになっても先頭は変わらない。このまま五番の馬が勝つの……！！？

「五番、そのまま！ 後はもう誰も来ないでー！」

残り百メートルはまだ先頭は変わらない！

「十二番、来てよお願いだから！！！」

「ダメー！ そのままがいいのー！！！」

五番、五番、五番……！！ 叫んでいるうちに五番の馬がゴールを駆け抜けていった。

「やったー！ 五番来た。ごばーん！」

私の買った馬が一着になった！ 私は馬券を誇らしげにみんなに見せる。

「何よー、かつちゃんの買った馬券は三連単でしょー。例え五番が一着だとしても二着と三着の馬が買った馬じゃなかったら当たり前じゃないんだからー」

「そうだぞ、一着の馬だけで当たりと判断するのは早計だ」

はるちゃんは悔しさを滲ませながら、会長は冷静に私の喜びに水を差す。そうだった、私の馬券は三着まで当らないと意味が無いんだった。

「二着は一番。三着は十五番だよ」

不意にそれまで黙ってレースを見ていたしいちゃんが呟いた。

「えっ、しいちゃん本当！？」

「ほんとだよ。ほら、電光掲示板にも出ているでしょ」

しいちゃんがテレビの画面を指差す。レースの着順を知らせる掲示板には左から（一着から）順番に「五・一・十五」と表示されている。（四着と五着も表示されているけどそんなのか関係ない）

「五・一・十五ってこれって当たりってことじゃない!？」

私は再び自分の馬券を誇らしげにみんなに見せる。感情に当たった興奮が含まれているのか、ちよつと手が震えている。

「分かった、分かった。分かったからあまりその馬券を見せるな」

タカビーが馬券を持つ私の手を両手で包み込む。

「なんでよ、当たったんだから自慢して当然じゃないの」

分かってないな、とタカビーはため息をついて呟いた。

「その馬券、高くつくぞ」

高くつく? それってお金がたくさんもらえるってこと?

「あ、当たった人が貰える金額が出たみたい」

しいちゃんの言葉に私はテレビの画面に視線を移す。周囲からため息と驚愕と罵倒の声が聞こえる。

えーと、私の買った馬券は三連単だから一番下か……。六十二万八千円と……。

「えっ! 六十二万!？」

私は驚いて自分の馬券とテレビ画面を見比べる。「三連単 五

一 十五」間違いない。私の買った馬券が当たり、六十二万円が私の財布の中に入ることになる。

「どうしよう! 六十二万円なんて、財布の中に入りきれないよ!」

「大声を出すな! そういう問題じゃないだろ」

タカビーが必死に私の口を抑える。そして私の耳元で小さく叫ぶ。「この状況で六十二万当たったなんて叫んでみる、盗みを考える奴がいるかもしれないじゃないか」

確かに周りは自分の馬券が外れたことに悔しがっているおじさん（一部若い男女）ばかりだ。この中で私一人だけ「六十二万!」なんて叫んだら暴動になっちゃう?

「お金は受け取ったらすぐにバツクの中へ隠せ。取りあえずその馬券を金に換えよう」

会長が私の手を取って換金所へと連れて行く。

「ずるーい、かっちゃんだけいい思いしてー」

「はるちゃん、静かについて言っているでしょ」

「馬券が当たったとかそういう問題じゃないのよ！」

「じゃあどういふ問題なのよ」

背後から聞こえるしいちちゃんとはるちゃんの様子取りが耳に入るだけで通り過ぎていく。私は今すぐドキドキしているのだ。会長に手を握られているからではない。これから六十二万と言う大金（大学生の私から見たらほんとに大金よ！）を手に入れるのだから。

会長の手助けもあって私は六十二万の大金をバックの中に隠すことができた。というか、私は手が震えていたので何もできずに、ほとんど会長にやってもらった。

「会長の家ってやっぱりブルジョワ……」

「金持ちじゃない、ただのサラリーマンだ」

「だって、これだけのお金を目の前にしてどうしてそうしてきばきと冷静に対処できるのさ、私なんか金額聞いただけで全身が震えているって言うのに」

気がついたら手だけではなく、足も歯もガタガタ言っているんだから。

「会長になればサークルの予算とか、部の予算とかでそのくらいの金額はしょっちゅう目にするんだよ」

あー、なるほど。やっぱり選ばれし人は違うなあ……。

「そんなことより、私これからどうしたらいいの？ 無事に家に帰れるの！？」

そうよ、お金が手に入ったとしても帰り道の電車でバックごと盗まれるかもしれないじゃない、バックだけじゃなくて私ごと……。そう考えると、もうここから動きたくない。

「ええい、落ち着け。そういう態度が余計に怪しまれるんだ。冷静にいつもどおり帰ればいいんだ」

「そうだよ、いつも通りのかつちゃんであればいいんだよ。もし、変なことする人がいたら私がただじゃおかないんだから」

しいちゃんが私の前で誇らしげに両腕を構える。確かにしいちゃ

んならボディーガードとしては充分だ。

「椎名さんもそう言っているんだ。いつもどおりの態度で帰れ。なんだったら日暮里駅まで俺と高見も着いていくぞ」

「私も着いていくもーん」

はるちゃんが右手を真つ直ぐ上に突き上げる。

「私の華麗なハイキックをすりの人にお見舞いしてやるんだから」

「いやいや、はるちゃん電車の中でハイキックなんてできないって、電車の中ではるちゃんのハイキックも見たい気もするけど……、現実的に無理でしょ。」

「それだよ、かつちゃん。それがいつものかつちゃんだよ」

しいちゃんが笑顔で私の肩を叩いた。ちよつと痛い。

「要するにかつちゃんが突っ込むようなことを家に着くまでに言い続ければいいんだな」

タカビーが右手を前に出すと、頭を持ち上げた蛇のような構えを見せて

「がちよー……」

「ダメー、そこから先は言っちゃダメー！」

いろいろ権利とか問題があるから！ これまで元ネタをやるわりと包みながら、隠しながら出してきたギャグが台無しじゃない。そんなにはつきりと言ってはダメ。

「まあ大金に怯えておどおどしているよりはこっちのほうがマシだろ」

と言うわけで私はしいちゃんの家に着くまで延々とここでは出せないギャグの数々にいちいち突っ込みを入れつづけたのであった。

なんかいろいろんな意味で疲れたな。怯えながら帰ったほうがマシだったかもしれない。

しかしこの災難はまだまだ続くのであった。

第三十六話 六十二万の行方は

イラケン選手の試合の翌日、私としいちゃんとはるちゃんは大大学の食堂でお昼ご飯を食べていた。八月ももう末、といっても窓から差し込む太陽の光の強さはまだまだ元気だ。

「ところでかつちゃん、六十万の使い道は決まった？」

はるちゃんが口をニヤニヤさせながら私に尋ねる。

「ちよつと、はるちゃん。お金の話はしないでよ」

昨夜私はイラケン選手の試合を見た後、偶然会ったタカビーと姉小路会長の勧めで大井競馬の馬券を百円購入した。その馬券が当たったのだが、もらえるお金がなんと六十二万円という大学生にとっては大金だったのだ。

タカビーと会長としいちゃんに守られながらその夜はしいちゃんの家にお泊りし、明け方これまたしいちゃんに守られながら家へと戻り私の部屋にある大きなタンスの一番下の隅っこにしまいこんだという始末。……ってお金の隠し場所を話しちゃいけないじゃないか。

その後しいちゃんとはるちゃんと一緒にイラケン選手がいるジムへ昨日の試合のお礼（毎回試合のチケットはイラケン選手からタダで貰っているのだ）を言いに行ったのだけど、頭の半分はお金のことでいっぱいでまともに話ができなかったと思う。

そして文化祭の準備のために大学に来たわけなのだが、六十二万の大金……、どうしよう。

「とりあえず……、貯金しようと思う」

「あーあ、ありきたりな答え、どこか旅行に行くとか何か美味しいものを食べるとかないのー？」

はるちゃんは口を尖らせて呟く。

「だって、旅行と言ったって文化祭の準備はこれから忙しくなるし……、そんな暇は無いよ」

「まあ銀行に預けるのが一番安全かもね」

しいちゃんが手作りのエビフライをお箸でつまみながら答える。

彼女は夏休み中でもお昼は手作りだ。

「そんなときこそ、我が文化祭実行委員会に寄付ですよ」

突然、亜由美が緑のトレーにラーメンをのせて現れた。

「よりよい文化祭を作るためにご協力をお願いします」

「ち、ちよつと待った。亜由美！」

頭を下げる亜由美を私は手で制した。

「いくら私が文化祭実行委員だからって、寄付ってことはないんじゃない？」

亜由美は分かっているいな、とばかりにため息をつきながら割り箸を割った。

「今から二千年前、紀元一世紀の話です」

割れた片方の割り箸をラーメン丼の淵に立たせて先をゆらゆらと揺らす。

「時のローマ皇帝はローマ経済の活性化のために元老院議員にこう言ったそうです」

あ、立てている割り箸がローマ皇帝ね。すると中のラーメンは元老院議員か。ずいぶん熱そうだな。今の議員さんたちもこのくらいの熱気を持って……、いやいや亜由美の話を聞こう。

亜由美はローマ皇帝をまっすぐに立たせると、私を見て叫んだ。

「『ローマ市民の物はローマ市民のもの、文化祭実行委員の物は文化祭実行委員のもの』文化祭実行委員の一人であるかつちゃんのお金は、文化祭実行委員みんなのお金なのです！」

「もうっ、亜由美。ローマ皇帝がそんなこと言うわけがないでしょうしいちゃんの突っ込みにも亜由美はめげない。

「ちなみに『俺のものは俺のものお前のものは俺のもの』と言ったローマ皇帝は、元老院より『皇帝失格』の決議を受けたといわれています」

あー、そんな暴れん坊で自己中なまるで雑貨屋の長男のような皇

帝は皇帝失格だな。

「そんなことを言われるより、はるかにましじゃないですか。だから文化祭実行委員会に寄付をするんです」

うーん、確かに「俺のもの」にされるよりは「文化祭実行委員のもの」にされたほうがましだな……って

「あ、亜由美。なんだか結論がおかしいよ！ 私の六十万とローマ皇帝とはなんの関係もないし、寄付する理由もないでしょ」

というか「俺のもの」の「俺」って誰のことよ。

「六十万も当ったんですか……」

亜由美が目を丸くして私を見つめる。しまった、どうやら墓穴を掘ったようだ。

「そんなことより亜由美はどうして私がお金を持っていることを知ったのよ!？」

私が尋ねると亜由美はラーメンをすすりながら淡々と答える。

「タカビーから先ほど聞きました。かつちゃんが昨日競馬でだいぶ儲かったって」

タカビーめ、余計なことを……。昨日馬券売り場では「お金のことを話すな」と言っていたのに、自分から話すとは何事だ。

「使い道が無いのならもつと有意義なことに使ったほうがお金も喜ぶと思いませんか？ タンス預金じゃ日本経済は潤いませんよ」

亜由美の言葉に私はお味噌汁を噴き出しそうになった。事実私の六十万円は現在タンスの中にしまっただけであるからだ。

「もーう、亜由美。いい加減にしなさい！ かつちゃんのお金はかつちゃんのものなの、いくらかつちゃんが文化祭実行委員だからって文化祭のために使わなきゃいけないというきまりはないでしょ」

しいちゃんが語尾を強めて亜由美を咎める。「もーう」を言っているからまだ本気で怒っているわけじゃないけど。

「寄付するんだったら、私のダンスサークルに寄付してよ。私も先輩も一生懸命アルバイトしてお金を稼いでいるんだから!」

はるちゃんがパスタを巻いたフォークを掲げて身を乗り出した。

「ちょっとはるちゃん、ソースが跳ねるじゃない！」

「ダンス大会が成功するために是非とも私たちのサークルに寄付をはるちゃんはフォークを置いて右手を差し出すと、「お願いします！」と頭を下げた。

「文化祭実行委員に寄付してください。お願いします！」

亜由美も負けじと立ち上がると右手を差し出して頭を下げる。

差し出された二人の右手。私は寄付をしてもいいと思った人の右手を握るルールになっている。すでに私の答えは決まっていた。

「ごめんなさい」

ちょうど食べ終えたカツカレーの皿を持ちながら私は席を立った。誰が寄付なんてするもんか。私のものは私のものよ！

「どうして亜由美がついてくるのー」

お昼ご飯も終わってせっかくサークルに行くはるちゃんからは逃げられたのに亜由美はまだ私の後をつけてくる。

「どうしてって、同じ文化祭実行委員なんだから歩く方向が一緒なのは当然じゃないですか」

「かつちゃんも心配しすぎだよー。誰も本気で寄付してほしいなんて思っていないから」

たぶんしいちゃんの言う通りなんだろうけどね。それでも心配に思えるのは私のほうの性根が悪くなっているのだろうか。

と、自問自答を繰り返しているうちに前から明るい笑顔の明石先輩が突っ込んできた。

「かつちゃん、競馬で儲かったんだってー！」

明石先輩はスピードを緩めることなく私に抱きついて頬をすり寄せた。

「これで着ぐるみバイト生活からおさらばできるわー」

はつきりと言葉にはいないが、サークルにお金を寄付しろと言う意図が見え見えである。

「明石先輩……、着ぐるみのバイトをしているんですか？」

しいちゃんが尋ねると明石先輩はしいちゃんの頭を左腕に抱き寄せた。

「そうなのよー、この暑い季節着ぐるみなんてもう大変よー」

「そりゃあそうでしょうね、あんな黒いもの被っているんですから余計暑いですよ」

うん？ 亜由美は明石先輩がどんなアルバイトをしているのか知っ
っているのか？

「こらー、亜由美。子どもの夢を壊すようなことをいうもんじゃありません」

明石先輩の魔の手が私を離れて亜由美に襲い掛かる。

「う、うわっ。明石先輩!？」

「あーあ、せめて亜由美の胸の半分くらい私の胸もあつたらな」

明石先輩が亜由美にセクハラをしている隙に逃げようと私はゆっ
くりとしいちゃんを連れて二人から離れたが……。

「こらっ、かつちゃん。逃げるな!」

明石先輩に襟を掴まれる。

「こら、真奈美。かつちゃんからお金をせびろうなんて卑しい真似
はしない」

たまたま廊下を通りかかった浅野先輩が明石先輩を責める。

「だってー、ダンス大会の資金が入るチャンスなんですよー」

明石先輩が私に起こった昨夜の出来事を話す。

「だからって、部員じゃないかつちゃんからお金を貰うことは無い
でしょ。いくら六十万手に入ったからって……」

浅野先輩は一瞬視線を私へ向けてすぐに明石先輩へと戻した。や
はり六十万は魅力的な金額のようだ。

「で、でも……、文化祭のために使われなかったらかつちゃんのお
金がムダに使われる可能性があるんですよ」

「ムダ!？」

浅野先輩の顔が険しくなった。

「そう、浅野先輩の大嫌いなムダ、ムダ」

「ムダ使いー！」

わー、浅野先輩が壊れたー。白目むいているし。前に私のストレス発散のためにカラオケに行ったときに「ムダ使い」を叱る歌を歌っていたけど、浅野先輩本人もムダ使いが嫌いなんだな……。

浅野先輩は私を見るなり両肩を抑えて叫んだ。

「いい、かつちゃん。何に使うのかはあなたの自由だけど、ムダ使いは絶対にしちゃいけないからね！」

「え……はい、分かりました」

ムダ使いなんてしたら、浅野先輩から電気アンマをやられてしまう。それだけは勘弁だ。

「はー、今日はいろいろ大変な一日だったなー」

文化祭実行委員の打ち合わせも終わった帰り道、私は夕日を背に浴びながらため息をついた。昨日は大金を持っているために疲れたけど、今日は持つていなくても疲れた。

「そうだね、みんなかつちゃんにお金ちょうだい、って言うてくるからね。でもみんな本気じゃないから大丈夫だよ」

「そりゃそうだね」

みんな本気だったら私はこうやって団子坂を下って家へと向かっていないはずだ。

「ところでかつちゃん、もうすぐ私の誕生日だよね」

「ああ、そうだね。あと半月だね」

しいちゃんの誕生日は九月十三日、あと二週間だ。そろそろ何かお祝いの準備をしないと。

「それでね、今年は去年より豪華な誕生日にしてくれたら嬉しいなーと思うんだ。かつちゃん、競馬でお金がいっぱい入ったことだし

明るく可愛い笑顔を見せるしいちゃんを見て、私は紀元前一世紀当時共和制であったローマを帝政に導こうとしてその途上で暗殺されたローマ第一の英雄の最後の言葉を思い出していた。

ブルータ……じゃなくて、しいちゃんよ、お前もかー！

「嘘だよ、かつちゃん。びっくりしたー？」

しいちゃんが笑いながら私の肩を叩く。かなり痛い。

「びっくりしたも何も今のしいちゃんの言葉が一番ダメージだったよー」

安心した後が一番信頼している友達に言われたんだからたまったものではない。私はその場に力なく腰を落とした。

「ち、ちよつとかつちゃん？ 腰が抜けちゃった」

「しいちゃんに言われたら冗談でも抜けるものは抜けるわよー」

腰に力が入らないのを見ると本当に腰が抜けたようだ。

「かつちゃん、ごめん！ お詫びに『御団子』で好きなもの頼んでいいから、許して」

「え、ほんと！？ 許す許す」

チーズケーキを奢ってもらえる嬉しさに私の腰は治り、勢いよく立ち上がることができた。

よーし、最低二個は食べるぞ！

翌日。私の六十二万は無事に私の銀行預金に加わりましたとさ。

第三十七話 我輩は……

九月も半ばに入り夏休みも終わろうとしているころ、私たちが作る文化祭も一つの「終わり」を迎えようとしていた。

「締切をもう少し延ばして欲しいって声があるんだけどー」

「無理無理、パンフレット用の記事を書いてもらって印刷に出すこと考えたらずばすなんて無理」

私のお願いをけーまは軽く手を振って断った。

「企画の締切が九月二十日というのは前から決まっていたことじゃないか。いまさら変更されたらこっちのほうがいっぱいいっぱいになるわ。文化祭が近付けば俺たちは看板も造らなければならぬし、パンフレットは早いうちに完成させたいから無理！」

けーまの言うことはもつともだ。私はすぐごと原稿用紙とインクまみれの教室を退散した。

「どうだったー、締切の話は」

秋の光が差し込むテラスでしいちゃんはカフェオレを片手に私を迎える。

「けーまに断られたー。やっぱり当初の予定で行くしかないねー」

「まあ決まっていたことですし、仕方が無いですね。校内に企画募集の締切が迫る旨のチラシを貼って生徒達に呼びかけますか」

亜由美が緑茶の缶を右手で投げる。缶は綺麗な半円の弧を描いて

「空き缶専用」のゴミ箱へと入る。

「あと一週間かー……」

今日は九月十三日。締め切りの二十日まであと一週間だ。うん？

九月十三日って……。

「今日はしいちゃんの誕生日だー！ しいちゃんおめでとー！」

私はしいちゃんの頭を思いっきり撫で回す。

「覚えていてくれたんだね、ありがとー」

去年は私の家で誕生日パーティーをしたけど、今年は何も準備していない。それどころか今日であることすら忘れるところだった。危ない危ない。

「週末みんなで誕生日パーティーをやるよ。もちろん私の家で」
それまでに誕生日プレゼントを買わないと、と私は心の中で冷や汗をかいた。

しいちゃんの誕生日パーティーも無事終わり九月二十日。文化祭企画募集の締切日だ。

私としいちゃんと亜由美の三人は教室を一つ借りて滑り込みで企画を持ってくるサークルや団体の代表者と面接を行う。今日でダメだったらそのサークルや団体は文化祭に企画者として参加できないということになる。うーん、シビア。

「締切まであと三時間ですが、一人も来ませんねー」

待ちくたびれた亜由美が鉛筆をテーブルの上に何度も転がす。そのうち消しゴムをすぐろくのコマに見立てたのか、消しゴムはテーブルの上を進み、隣のしいちゃんの前でパタリと倒れた。

「誰も来ないけど、今日は締切日だから一応時間まで待っていないと……」

しいちゃんが倒れた消しゴムを左手で転がしていく。ホントに誰も来ないのなら帰りたくないな。

そんなとき、激しい足音が私たちの教室に迫ってきた。

「誰か来たみたいね」

「あと三時間もあるから、そんなに急がなくてもいいのに……」

扉が勢いよく開かれ、上下紺色のジャージ姿の女子学生が息を切らせながら現れた。途中で激しい風にも遭ったのだろうか、首筋まで伸びている髪が乱れている。そう言えば明治の歌人、与謝野晶子の歌集に「みだれ髪」というのがあったな。でも今の彼女は「みだれ髪」どころか「爆発」だけだ。

「あ……、あの……、ええと……女子スケバブです！」

スケバブ？ 「スケバ部」かな。いったい何をする部なんだろう。室町時代に農民がうさ晴らしのために始めたとされる格闘技でもするのだろうか。

「女子スケバブの方ですね。真ん中にある席に座ってください」

しいちゃんに促されて女子学生は席にゆっくりと座り、大きく息を吐いた。髪のことには気づいていないらしく、手をかけて直しもしない。

「女子スケバブ部長の今泉いまいずみ智美さとみです。よろしくお願ひします」

「ところで、『女子スケバブ』っていったい何をする部活なんですか？」

亜由美が尋ねると、今泉さんは不思議そうに首を傾げた。

「えーと、名前の通り。バスケットボールをする部活なんですけど

……」

「それってバスケ部じゃん！」

うちの大学の運動部はどこその業界のように逆さまに言うことが流行っているのだろうか。「『スケバ』終ったら『やーしゅ』行こうよー」みたいな。

「ええ、だから『女子バスケ部の今泉』って言っていたじゃないですか」

ああ、そうか。慌てていたために「バスケ部」を「スケバブ」と言い間違えたんだな。

「そうですか。『女子バスケ部』ですか……」

亜由美が訂正するも今泉さんは自分が言い間違いをしたことに気がついていないらしい。

「ええ、『女子バスケ部』ですよ」

と明るい顔で微笑んだ。

「それで、『女子バスケ部』は今回どのような企画を提案するのですか」

「ええとですね……実は先週まで締切があることに気がつきません

で、だから一週間で考えて……、あつても一週間で考えたからって
適当な企画じゃなくてちゃんとした全うな企画なんですよ」

今泉さんは自分で墓穴を掘って自分でそれを一生懸命埋めるよう
な人だな。

「今回ですなー、我が『女子バスケット部』が考えた企画はー、今流行
りの『冥土喫茶』！ じゃない、『メイド喫茶』です」

今泉さんは最初の「めいどきつさ」を手で払ってもう一度「めい
どきつさ」と言う。全く同じに聞こえたのだが、きつと彼女の中で
何か間違えたのだろう。

「店員の格好はすでに決まっていますよ。浩子^{こほり}ー、入ってきて
もいいよー」

今泉さんの声を聞いて廊下から浩子さんが入って来た。その姿に
私は驚いてシャープペンシルをテーブルに落とした。

「こ……これは……！」

全身白と黒を基調とした、白いフリル付きメイド服なのだが、問
題が三つある。一つは首に首輪と鈴がついていること。二つ目はシ
ョートヘアの髪に猫耳をつけていること。そして三つ目これが最大
の問題なのだが、お腹の部分に半円状のポケットをつけていること。
これで全身が青だったら「ねずみに耳をかじられる前のロボット」
じゃないか。

「お帰りニヤさいませ、ご主人さニヤ」

浩子さんはちよつと恥らいながら両手を猫のように丸めて前に出
す。

「普段はジャージヤユニフォームを着ている私たち女子バスケットのメ
ンバーが全員猫耳メイドになろう、ということですよ」

今泉さんは立ち上がり、浩子さんの首の鈴を撫でる。

「ちなみにこの首の鈴を撫でると……」

「ゴロゴロゴロゴロ……」

浩子さんは目を瞑って気持ちよさそうな声を出す。猫は首を撫で
られると喜ぶもんな。

ずっと撫で続けていると……。

「くかー」

「寝ます」

「えっ！ 寝るの!?!」

事実浩子さんは目を瞑って立ったまま安らかな寝息を立てている。それって、店員さんの設定と言うか、浩子さん個人の特技ではなくて？

「鈴の意味は分かりました。それではお腹のポケットの意味を聞きましょうか」

半ば呆れながらしいちゃんが今泉さんに尋ねる。

「ああ、このポケットですか。やっぱり『バスケット部』だからバスケットらしいことをしたいなーと思っちゃって」

まだ寝ている浩子さんのポケットを思いっきり広げてその中身を見せた。中に入っていたのは。ピンポン玉サイズのバスケットボールが五個入っている。

「なるほど、そのポケットにフリースローをしてもらおうと言うわけですね」

亜由美の発言に今泉さんは笑顔で頷きながらボールを取り出した。「ピンポン玉に色を塗ってバスケットボールにしたんです。よかつたらチャレンジしてみますか？」

入ったボールの数によっていろいろサービスしてくれるらしい。

「亜由美、挑戦してみなよ、きつと全部入るって」

一週間前五メートル離れていたゴミ箱へ空き缶を見事に入れた亜由美だ。彼女ならきつとやってくれる。

「確かに投げるのは得意ですけど、こういう小さいボールは……」

そう言いながらも亜由美は今泉さんからボールを受け取ると目が真剣になった。右手にボールをつまんで狙いを定める。亜由美と浩子さん（まだ寝ている）との距離は約二メートル。

「えいつ」

亜由美の投げたボールは一週間前と同じく綺麗な半円の弧を描い

て浩子さんのポケットに吸い込まれていった。

ボールの感触をお腹に感じたのか、突然浩子さんが目覚めて

「ニャー！」

と、叫んだ。

「わっ、いきなり起きた」

私が驚くと、今泉さんはなんでもないような顔をして。

「このようにボールが入ると、私たち店員からきつとお客さんが萌えるであろうセリフが飛び出します」

ちなみに私は「ニャー」と聞いても萌えなかったけどね。

二つ目のボールが浩子さんのポケットに入る。

「ニャ、ニヤント！」

あ、二回目だから一応セリフを変えてみたんだ。

三投目は一旦お腹に当たったものの、そのままポケットに転がり落ちた。

「凄いニャー」

なんか丸い物を落として消すゲームのコンビネーションを聞いているみたいだ。

四投目、これも何ら問題なくポケットに入る。

「ニャニャニャ、ご主人ニャマはバスケの達人ニャ」

五投目が入ったらパーフェクトである。一体どんな驚きの言葉が出てくるのだろうか。と思っている側から亜由美の五投目がポケットに入った。

「ネコナリー！」

え……、今までとキャラがだいぶ違うような……。浩子さんは猫の形をした手を前に突き出している。

「ところで、全部入ったら何か景品とかもらえるんですか？」

亜由美が訪ねると、二人は私たちを無視して小声で話をしはじめた。ひよっとして何も考えていなかったのだろうか……。

「わ、私たちの手作りチョコをプレゼントします！」

「なんか今決めたような感じがするのですが……」

しいちゃんが突っ込むと二人は同時に首を横に振って。

「そんなこと、ない、ない」

と同時に叫んだ。今泉さんがソプラノで、浩子さんがアルトだ。

女子バスケット部の「メイド喫茶」は、手作りチョコをちゃんと作って、てくることを条件に私たちは承認した。

その後はまた暇な時間が続き、文化祭の企画案の締切を迎えた。

第三十八話 紙飛行機、飛んで

文化祭の企画募集も締切を過ぎ、本番まであと一月半、いよいよ準備に忙しくなると思っていた昨今。私としいちちゃんと亜由美はA四の画用紙に黒いマジックで絵を描き続けている。

何を書いているのかと言えば、文化祭当日に大学の正門に建てる門のデザインを書いているのだ。実行委員自ら設計し、材料を集め組み立てるというまさに全てが手作りの門である。

「テーマが『東京とともに六十年』だから、『まさに東京』と思えるものを書いてくれ」

けーまがマジックを持つ手を動かしながら私たちを見る。本来門の作成はけーま率いる広報チームが担当するはずだったんだけど、文化祭の玄関は重要だろうということで、イベント企画チームの私たち三人もお手伝いに入っているのだ。

「『まさに東京』か……」

私は黒いマジックを何度も空中へ投げては手のひらで受け止める。五月の東都大学の文化祭でみんなに知られてしまったことだが、私は絵を描くのが苦手なのだ。だからそんな私がどうして門のデザインを書くことになったのか、未だに納得がいかない。

かといって何も書かないわけにはいかないのです、渋々「東京」と聞いて思いつくものをいろいろ頭の中に浮かべるうちに私はある建物に行き当たった。すぐさま黒いマジックを動かして画用紙に線を引き続ける。

「おー、やっとかつちゃんが本気を出したみたいね」
右隣のしいちゃんが驚きの声を上げた。

しかし、頭の中でははつきりと思いついたものでもそれを実際に絵に表すとすると上手くはいかないものだ。この絵の肝となる大きな円も描き始めと終わりの位置がずれてしまい、まるで「F-1」^{エラソン}のコースのシケインカーブのような線を描くことで、なんとか円と

しての体裁を保つことができた。

その円の中にはあちこちで交差する斜線。本物はこの斜線によって規則正しい正方形になるはずだけど、私の絵は長方形になったり、ひし形なったり台形になったりと……、いろんな四角形が円の中に入っている。

これ以上描くと訳がわからなくなるので、円の下を支える長方形を描いて

「できた」

と画用紙をみんなが見えるように向けた。

「……そ、それは『鮑あわじのステーキ』か？」

けーまが目を輝かせて尋ねる。鮑あわじが好きなのだろうか。

「違うでしょう、これは角切りにしたマンゴーですよ」

亜由美がそっけなく答える。ううむ、二人には私が何を描いたのかわからないようだ。

「もう、二人ともどっちも『東京』と関係ないものじゃない」

「それじゃあしいちゃんにはかつちゃんあの絵が何を描いたものかわかるというの？」

亜由美の質問にしいちゃんはちよつと戸惑いの表情を浮かべながら私の絵を見つめていたが、やがて……

「は、ハンバーグ？」

と、首を傾げた。

「惜しい、ハンバーグじゃなくてステーキ。この下の四角いのは、熱々の鉄板ね」

私は誇らしげに答える。この絵が東京ドームだなんて言っても誰も信じてくれないだろう。

「食べ物じゃなくて東京に関するものを書いてくれよー」

けーまがちよつと腹立たし気に私注意する。いや、一応東京に関するものを書いたんだよ。みんなが分かってくれないだけで。

「大人は分かってくれない」とは言わないけど、ちよつとショックだったぞ。

「しいちゃんはいつたい何を描いたのよ」

私より数段絵が上手いしいちゃんならば、きっといいものが描けているはずだ。いいもの描けていないと許さないぞ。

「私は……、あんまり自信が無いんだけど……」

しいちゃんが描いた絵は右側に東京タワー、左側に東京都庁。そして中心部には「雷門」かみなりもんの提灯がぶら下がっていて、まさに「東京尽くし」である。描かれている線はどれ一つとして無駄な線が無い。「うーん、さすがはしいちゃんだ。今回のテーマが余すところ無く入っているよ」

料理と絵と体力においてしいちゃんを越えることはきつと無いだろう、と私は心の中でため息をつく。

「これだけ今回のテーマが入ってれば、しいちゃんの家で決まりですね」

亜由美は自分の画用紙を伏せてしいちゃんの絵を羨ましそうに見る。

「そんな……、まだ決まりっていうわけじゃないよ」

しいちゃんは顔を赤くさせながら亜由美の右肩を軽く何度も叩く。

「いや……、もう決まりでしょ、これで充分って」

亜由美がちよつと顔をゆがめながら応える。「軽く叩く」と言うけれど、亜由美にとっては痛いパンチに違いない。

「ところで亜由美はどんな絵を描いたのよ。しいちゃんの絵ばかり褒めていないで、自分の書いた絵を見せてよ」

私がしいちゃんの右手を止めながら亜由美に絵を見せることを促す。

「そ、そんな……私の絵はいいですよ。しいちゃんの絵だけでもう充分でしょう」

そう言いながら亜由美は自分の画用紙を両腕で隠す仕草を見せた。さっきの羨ましそうな表情といい、もしかして彼女は……。

「亜由美、隠さないで絵を見せなさい」

私だけへたくそな絵を見せるなんて不公平だ。

「そうだぞ、亜由美。いろんな案の中から決めていくんだから、亜由美の絵もその一つだぞ」

しかしけーまは私の絵を候補としてあげることはいらないだろう。なんていったって私の絵は「東京ドーム」じゃなくて「ステーキ」なのだから。

「いえいえ、私の絵なんてしいちゃんに比べたらそんな……」

「遠慮しないでいいんだよ、亜由美」

しいちゃんは亜由美が絵が下手だという仮説を立てていないようだ。

「そうよ、亜由美。お姉さんの言うことは聞きなさい、ってご両親にも言われているでしょ」

「『お姉さん』って誕生日が違うだけで、みんな同じ年じゃないですか」

ちっ、ばれたか。亜由美の誕生日は来月。けーまも含めたこの四人の中では一番遅い。

そのうち亜由美が画用紙をくしゃくしゃに折りたたみ始めた。

「ここで『私の絵』として人様に見せるよりは、『作者不明の絵』として他の人に見せたほうがマシです」

亜由美は見事に画用紙で紙飛行機を完成させた。後ろの窓へと駆け寄り、私たちが一歩でも近付こうならすぐに外へと飛ばす姿勢を見せている。

「分かった、分かったから。もう見せなくていいから、その紙飛行機を飛ばすのはやめよう、ね、ね」

本気で嫌がっている人の絵を無理やり見ようだなんて、私はそんなに酷い人間ではない。

しかし私の説得にも関わらず、亜由美は画用紙でできた紙飛行機を飛ばしてしまった。ただ行き先は外ではなくて教室の中へ、亜由美の絵もとい紙飛行機はゆらゆらと揺れながら教室のゴミ箱へと吸い込まれていった。

「亜由美……、誰にでも欠点と言うのはあるんだよ。そんなにコンプレックスを感じることもなんてないんだから」

亜由美が絵が下手だという仮説（と言うか事実だ）にやっと気づいたらしいちゃんが慰めの言葉を描ける。

「かつちゃんを見てみなよ、去年は自分の名前を物すごく嫌っていたのに、今では自ら笑いのネタにしようと言う勢いなんだから」

いやいやしいちゃん、嫌いじゃないがそこまでの気持ちはまだ持てていないぞ。

「それとプラスして『絵が下手だ』と言う欠点も今こうしてネタにしているじゃない」

絵が下手なのはネタにするためじゃないですよ。本当に下手なんですよ。

「無理です、私にはかつちゃんのような芸人根性はありません！」
だから私には芸人根性は無いってば。

「えーと、盛り上がっているところ悪いんだけど……」

けーまが大きく手を広げて私たちの会話を止めた。

「しいちゃんの絵にもう一つか二つ東京に関するアイテムをつけて完成させようと思うんだけど」

つまり、もう一度私たちに絵を描けってことですか。

「私はもう描きませんよ」

亜由美はだらしなく机の上に上体を倒す。

「うーん、もう一つか……、考えてみるよ」

そう言いながらしいちゃんは早くもマジックを動かす。

一方の私はと言うと、これは描かないといけない流れだよな、と頭の中に再び東京に関するものを思い浮かべていく。

やがて東京の名物となっている一人の人物に思いついた。線を描くために手にしたのはマジックではなくて鉛筆。マジックではこの人は描けない。

すらすらと線が進み、私の頭の中の思い通りの人物像が画用紙へ

と描かれていく。さっきの東京ドームとは大違いだ。きつと私に大いに関わりのある人物だからだろうか。

「よし、出来た！」

先に絵を描き始めたしいちゃんよりも早く私は絵を描き終えた。今度はきつとみんな分かってくれる、と自信満々に絵をみんなへと見せる。

「ち、ちよつとかつちゃん上手すぎ！」

「どうしてその人だけそんなに上手く描けるんだ」

「確かに東京にもいますけど、どちらかというと鹿児島のような……」

私が描いたのは幕末明治初期の日本にその名をとどろかせる西郷隆盛たかもりさんである。私のご先祖様が西郷さんのおかげで今の家に和菓子屋を開業できたこと、討幕派の人間にもかかわらず、うちの家族からは神様のように扱われていることはすでに話したと思う。

「これは、門のデザインと言うより胸像にして門から入る人を迎える形にしたいな……」

そして入ってきたお客さんにパイを投げつけられるのだろう、と私はパイまみれになった西郷さんの胸像を思い浮かべた。

「だけど……、今から胸像を作るなんて時間もお金も物すごくかかるでしょう、ここは無難に門のデザインの一部にしたほうが……」

亜由美の言うことはもつともだ。胸像なんて一体どれくらいのお金がかかるんだ。

私の西郷さんは、しいちゃんの描いた門の右側、東京タワーの下に位置することになった。一方の左側は西郷さんに関連する人物として、勝海舟かつかいしゅうさんを東京都庁の下に描くことになった。

これで正門のデザインが完成した。作るのは他の人のまかせ……
られるのかな？

第三十九話 しいちゃん、風邪をひく

「二ヶ月も授業受けていないとき、そのまま受けなくてもいいかな、って気になるよね」

長かった夏休みが終わり、後期の授業に突入！ まだまだ汗ばむ陽気の中を久しぶりに大学へ向かう学生もいれば、授業の有無は関係ねえ、といつものように大学へ通う学生もいる。文化祭実行委員である私としいちゃん、そしてダンスサークルに入っているはるちはんは後者の方だ。

しかしそれでも夏休みが終わったという寂しさと儂さは感じるらしい。先ほどのセリフは私が食堂でカツカレーを食べながらぼつりと呟いたものだ。

「そうだね、毎日大学に来ているんだからいまさら授業を受けなくても、って感じになるね」

おお、同士よ、君もか。彼女はカルボナーラソースがたっぷりついたフォークを振り回しながら私に賛同する。ちよつと迷惑な同士だ。

「まあ一日ぐらい夏休みの気分で過ごすのもいいんじゃないですかね」

おお、またここにもう一人の同士が現れた。亜由美はチャーシューで麺を器用に挟んで口へと運ぶ。

同じ志を持つ三人が集まったのだから、「生まれた日は違えども、死ぬ日は一緒」の誓いでもたてたくなるね。誰か桃の花でも持ってきてくれないかな。

今日は軌道修正をしてくれるしいちゃんはいない。このまま本当に授業をサボろうかな、と思っただけのところへ。

「おまえら、学生の本分は勉強だろう、授業が始まったんだから出席しろ」

ハンバーグ定食をトレーに載せた姉小路会長がはるちゃんの向かいの席に座った。

「会長さん、今日はとんかつ定食売り切れていましたね」

「ああ、そうだがそれがどうした」

会長はいぶかしげに私を見ながら箸でハンバーグを半分に切る。

「いや、会長さんでもとんかつ定食が食べられない日もあるんだな……、って」

いつも私が食堂に来る頃には売り切れている「とんかつ定食」。

私はこの大学に入ってから一度も食べたことが無い。ところが会長は当たり前のようにいつもそれを食べている。だから会長がとんかつ定食以外の物を食べている日はなんとなく嬉しいのだ。

「ところで今日は一人足りないようだが……」

会長が私たちを見回しながらハンバーグをさらに半分に切っている。

「しいちゃんは今日は風邪でお休みなんですよ」

亜由美が箸を横に寝かせて答える。寝込んだしいちゃんでも表しているのだろうか。

「そうか、あの元気な子が風邪とは意外だな……」

会長が驚きの目を私たちに見せる。

私たちの中で一番健康そうないちゃんが風邪をひくとは一番の友達を自認する私でも意外であった。

今朝、携帯電話の向うから苦しそうに咳をしながら、風邪のために休むことをしいちゃんから告げられたときは「なんで!？」という声を危うく出しそうになったほどだ。だってあのしいちゃんが風邪をひいたんだよ。

「そうなんですよ、どんな敵でもポッコポッコにやつつけちゃうしいちゃんが風邪で倒れたんですよ。腰につけてたケーブルでも抜けたのか、って感じですよ」

いやいやはるちゃん、しいちゃんの腰には最初からケーブルなんてついていないから。ケーブル外れちゃったら三分後には止まっちゃう

やうの、それとも暴走しちゃうのかい？

「そうですね、例えば世界が核の炎に包まれようとも一人だけ生き残っていそがないちゃんか風邪で倒れるなんて……」

うーん、亜由美。いくらいいちゃんのパンチが強いからと言って、彼女の胸には七つ星の形をした傷跡なんてないぞ。……ってみんないいちゃんにどんなイメージを抱いているんだか。

それじゃあ突っ込んでいる私はどうか？ っていうとそりゃあ私の中のいいちゃんは可愛いもんですよ。フリル付のピンクのエプロンを着て、お味噌汁に入れるためのねぎを刻んで、ついでに料理の邪魔をする者も切り刻んで……、私のほうがひどいな。

「なるほど、注意する椎名さんがいないから、みんなで授業をサボろうってわけだな」

会長が話を元へ戻す。そうだった、私たち授業に出るのが気だるいんだった。

「いやー、何を言っているんですかー。授業をサボるなんて不良みたいなこと考えているわけ無いじゃないですかー」

あ、同士はるちゃん一人脱落。どうもはるちゃんは会長の前ではいい子でいたいらしい。

「そうですね、誰も授業をサボるなんて言っていないません。確かにかつちゃんは『出たくない』とは言っていましたか」

……脱落どころか裏切られちゃったよ。

「ちよつと、二人も『授業出たくない』って言っていたじゃない、私一人だけ悪者扱いしないでよ！」

ここにいいちゃんがいたら私を庇ってくれるのに……、ああいいちゃん。どうして今日はいいないの？

「まあ誰がなんと言おうが関係ない。授業に出るか出ないか、問題はそこにある」

「出るに決まっているじゃないですか、当然」

私一人悪者なんて悔しいっただらありゃしない。今日は絶対授業に出てやる、出る必要の無い授業にも出るんだから！

「……と言うわけで、本当に出る必要の無い授業に出たんですね」

亜由美が呆れた表情を浮かべて私を見上げる。今日は実行委員の仕事もサークルの練習も無いので、授業が終わったら三人でしいちゃんの家にお見舞いに行こうと決めていたのだが、私が余計に授業を受けたせいで、はるちゃんと亜由美をいつも私たちが集まる喫茶店で待たせることになってしまったのだ。

「だって……、二人とも私がサボリの張本人みたいな言い方するんだもん、悔しいじゃない。これでおあいこってことでいいじゃない」「まあ……、サボリの罪をかつちゃん一人に被せたのはちよつと悪いなって思いますけど、だからって……」

亜由美がすっかり冷えたコーヒーを飲む。

「そうだよ、かつちゃん置いて二人で行こうかとそろそろ考えていたところなんだから」

はるちゃんには反省の色は無いらしい。まあ待たせた私が一番悪いんだけど。

「分かった、本当に待たせて悪かったって、しいちゃんの晩ご飯の材料代は私が出すから許して」

「やったー、今日はかつちゃんのおごりだー！」

はるちゃんが右拳を勢いよく突き上げる。

「ちよつと、はるちゃんにおごるって言っていないでしょ、風邪で寝込んでいるしいちゃんのための晩ご飯なんだから」

「だけど、流れるにみんなで晩ご飯、って展開になるんでしょうね」

う……、亜由美の言う可能性も否定できない。

「まあそうなったらそうならでいいよ、この中で私が一番お金持っているんだし」

そう、私は生まれて初めての競馬で六十二万という万馬券を的中させたのだ。

「さすがはかつちゃん、太っ腹。お金はこういう時のために使わなきゃー」

はるちゃんがそう言うとなんだかそんな気分になってくるな。

「おーい、今日はしいちゃんはいないのー？」

しいちゃんの家へ向かおうと喫茶店を出たところで私たちは後ろから明石先輩に抱きつかれた。

「し、しいちゃんは……、今日は風邪でお休みなんですよ」

亜由美が苦しそうに答える。明石先輩の腕がちょうど亜由美の首に絡まっているのだ。しいちゃん曰く首がきまっている状態ってやつ？

「ええっ！ 京の都で七十五人の侍をなで斬りにしたと言う伝説を持つしいちゃんが風邪！？」

明石先輩……、一体いつの時代の伝説ですか。しいちゃんの武器は両拳から放たれるパンチにあつて、二本の刀じゃないですよ。

「そんな伝説は持っていませんが、とにかくしいちゃんが風邪をひいたので、これからお見舞いに行くところなのです」

「私も行く！ 今日バイトもサークルもないし！」

明石先輩が怪しげな笑みを浮かべながら右手を上げた。風邪をひいて体の自由があまり利かないであろうしいちゃんに何かをする気なのだろうか。

まあとりあえず四人でしいちゃんのお見舞いに行きましょうか。

第四十話 しいちゃん、風邪をひく(二)

しいちゃんが風邪をひいたので、お見舞い兼夕食を作りに行こう(ついでに一緒に食べよう)。という事で、はるちゃんと亜由美と明石先輩を連れて私は谷中の商店街で買い物を買ませた。

「さーて、買い物も終わったことだし、しいちゃんの家に行くよー」
ビニール袋を片手に四人でしいちゃんの家に向かう。しいちゃんの家は谷中の商店街のすぐ側にある。

しいちゃんの部屋の前に立ち、呼び鈴を鳴らす。中からしいちゃんの小さな「はい」と言う声が聞こえてきた。

扉が中から少し開くやいなや明石先輩が勢いよく扉を開けて

「しいちゃんーん」

と、飛び込んでいった。きつとしいちゃんに抱きつく気なのだろう。しかし、

「う、うわあああああつー！」

という明石先輩の悲鳴が聞こえてきた。

「明石先輩、どうしたんですか？」

明石先輩の後を追ってしいちゃんの家に入ると、中には力なく座り込む明石先輩と、空ろな目で包丁を持つしいちゃんが立っていた。

「も、もう少しで刺さるところだった……」

「明石先輩……、いきなり抱きついちゃ危ないですよ……」

しいちゃんの視線が明石先輩に定まらない。熱のせいだろうか。

危うく明石先輩は、しいちゃんに抱きつこうとしたがためにしいちゃんが持つ包丁に刺されるところだったのだ。明石先輩の防衛本能がとつさのところ働き、それを避けることができた。しかし本当に危ないところだった。

「しいちゃん……包丁なんか持っていて一体どうしたの？」

自分の体が弱っているときに誰かが訪れたので、もしもの時にと用意したのだろうか。

「うーん、そろそろ晩ご飯の時間だから、ご飯を作ろうと思って…」

そう言いながらしいちゃんは私たちを部屋の中へ案内した。部屋に入って左側にキッチンがある。

「しいちゃん、今日は風邪をひいているんだから寝ていなきゃダメでしょ」

はるちゃんがしいちゃんから包丁を取り上げようと、しいちゃんに近づく。

「うーん、でもご飯が無いから自分で作らないと……お……？」

突然、しいちゃんのはるちゃんの方へ倒れた。手にした包丁ははるちゃんの足へと突き刺さる！

「うわー！ はるちゃん！！」

私は両手で目を覆いながら悲鳴を上げた。手の向うには包丁の刺さったはるちゃんの右足があるはずだ。

「あ……、危なかった……」

はるちゃんのぐったりとした声が聞こえてくる。

「かつちゃん、大丈夫ですよ。よく見てください」

亜由美に促されておそろおそろ両手をどかし目を開ける。しいちゃんが手にしていた包丁は、はるちゃんの右足、親指と人差し指の間の床に刺さっていた。昔中学校か小学校で男の子が指の間をシャープペンシルで素早く突き刺していく遊びをしていたと思うけど、まさにそんな感じで指の間に包丁が刺さっていたのだ。

「しいちゃん……、危険だよ。危険すぎるよ」

私は力なく座り込んだ。酔っ払ったしいちゃんは危険だが、熱があるしいちゃんも同じく危険だ。

「みんな、そんなに怖がること無いのに……、私が風邪をひいたとき友達とかよくお見舞いに来たけど、誰も怪我をした人なんていなかったんだよー」

怪我をした人はいなくても、はるちゃんや明石先輩のように、危うく病院送りになるところだった人は何人もいるだろう、と私は思

った。

「しいちゃん、今日は大人しく寝ていてください。晩ご飯は私たちが作りますから」

亜由美が床に刺さった包丁をゆっくりと抜く。その瞬間、はるちゃんが口から空気が抜けた風船のように揺れながら床に座り込んだ。「かつちゃん……、私もうダンスできないかと思った……」

はるちゃんは目を潤ませながら呟いた。この時期に足を怪我したら、一月半後の文化祭にダンスを踊ることはほぼ無理であろう。いや……本当に洒落にならないな。

「うーん、みんながそう言うから大人しく寝ることにするよ」

よろめきながらしいちゃんはベッドまで歩き、布団も被らずそのまま倒れこんでしまった。

「さてと、しいちゃんがおとなしくなったところで晩ご飯を作ろう」「ところで何を作るかは決まっていますのですか」

亜由美の問いに私はしばらくビニール袋の中を覗いて考えたけど

「何も考えていません!」

と、開き直すことにした。

「ちよつとー、何も考えないで買い物してたのー?」

はるちゃんの指摘はもつともだが、私はひるまない。

「そういうはるちゃんはどうかなのよ。というか、誰か晩ご飯のメニューを考えていた人いるの?」

「……」

全員無言。誰も何を作るかは考えていなかったのだ。

「ほらー、私だけのせいじゃないでしょー」

私は誇らしげにみんなを見る。って自慢する事じゃないんだけど。「私は明石先輩やはるちゃんとは違いますよ。ちゃんと考えていました。だけど、あれがこうなって、それがあれで……」

「わけの分からないことを言うな!」

亜由美はまるで宿題はしてきたけど家に忘れた、という小学生の

言い訳をしている。

「はいはい、誰が悪いだの責任の擦り合いは終わり。材料は買ったんだから、それで何を作るかこれから考えようよ」

明石先輩が私と亜由美の間に割って入り、ビニール袋の中の食料を次々に出していく。私たちが買って来たものは、豚肉、卵、豆腐、えのきたけ、春菊、春雨そして鱈の切り身。

「これ……どう考えても鍋を作ろうとして買った材料だね」

明石先輩があきれ気味に私の顔を見る。外はちよつと風が涼しくなってきたとはいえ、未だ蝉の鳴き声が聞こえてくるというのに……。

「えーと元気が出て、みんなで食べるのだから鍋が一番いいんじゃないのかな」

はるちゃんが明石先輩の意見にそのままのつかかる。

「まあ季節はズレですが、みんなで鍋を食べるといのもいいんじゃないですかね」

確かにみんなの言うとおりだ。鍋はなんとなく食べて元気が出るような気がするし、みんなで食べて後片付けも楽だし。

「まあ材料と相談した結果として、これから鍋を作りましょう！」

と、亜由美が早々と結論を出して、キッチンへと一番乗りを果たしたが……。

「う、うわあああつ！」

突如激しい悲鳴。先ほどの悲鳴の原因となつたしいちゃんはずつドの上で寝ている。(ちなみに布団は私たちがかけた)今度は一体何が亜由美を襲つたというのだろうか。

「亜由美、どうした!？」

私とはるちゃんと、明石先輩は同時にキッチンへの扉へと駆け込む。三人が三人同時に入ろうとするのだから、互いに押し合いへしあいキッチンへと入ることができない。

「な……なんかの足! 足、足、足!!!」

亜由美の指差す先には濃い緑色の物体が四つほどまな板の上に置

いてあった。緑色の物体は先のほうが割れていて爪のようなものも生えている気がする。亜由美の言うとおり足なのだろうか。

「足だとしたら……、一体何の足だろう……」

はるちゃんと明石先輩を押しつけて私は何とかキッチンへと入ることができた。まじまじと緑色の物体を見る。見れば見るほど何かの足に思えてくる。

「ち、ちよつと、足ってそんなグロテスクなものしいちゃん食べようとしたの!？」

はるちゃんは足が苦手なのか（まあ大抵の人はいきなりこれがあったら驚くだろうな）しいちゃんがいる部屋のほうへと逃げてしまった。

「しいちゃんが京の都でなで斬りにした、侍の足じゃない、きつと」

明石先輩、まだそれを引つ張りますか。彼女は足が平気なのか、私の肩越しに足を眺める。

「侍の足は置いといて……、これは『スッポン』の足じゃないの」「ス、スッポン!？」

スッポンとは亀の仲間で、食べると精力がつくとされる動物である。特に生き血は効果があるらしく、テレビとかでよく嫌そうにそれを飲む芸能人を見ていたけど……、生き血じゃないにしてもスッポンそのものを生で見ようとは思っても見なかった。

「しいちゃんはスッポン料理を作ろうとしていたのね」

コンロの上にはしいちゃんが用意したのであるう土鍋が置かれていた。

風邪に蝕まれた自らの体を癒すため、スッポンを使うとは、さすがしいちゃんというかなんというか……。

「ここはしいちゃんの気持ちを含んで、スッポン鍋にしましょう」

「嫌です、私あんな足なんて食べたくありません!！」

明石先輩の提案に亜由美が半べそで拒絶する。

「大丈夫よ、亜由美。スッポンの足は出汁に使うだけだから。鍋が出来たら足は捨てるから食べる必要なんてないよ」

「そ、それならいいんですけど……」

「ところで、明石先輩。スッポンっておいしいんですか……」

いくら体にいいからと言ってまずかつたら台無しだ。「もう一杯」なんて苦い顔して言っている場合ではない。

「私も食べたこと無いから分からないよ。だけど料理好きのしいちゃんが好きなんだからおいしんじゃない」

と、明石先輩は根拠の無い自信を見せながら、鍋に火をかけた。

こうして私は生まれて初めてスッポン鍋を食べることになったのだが、味は明石先輩の言うとおり美味しかった。そして、スッポンの威力はすさまじく、しいちゃんは風邪を治してすっかりいつものしいちゃんとして学校に来たそうだ。

なぜ「来たそうだ」って表現をしているかって。それは私がしいちゃんに風邪を伝染されたからである（まあスッポンのおかげか一日で治ったけどね）。

第四十一話 雪子さん、再び

脳が揺れるくらいの激しいベルの音が鳴り響く。眠りの世界から引きずり出された私はその音源を手探りで探し力強くそれを叩く。音が止まるのを確認すると、私は再び眠りの世界へと入る。

しかし、目覚まし時計が止まればそれを待っていたかのように「真知ちゃん、起きなさい」

と、お母さんの声が部屋に響くのであった。

しょうがないので上体を起こし、壁にかけられているカレンダーを見る。子猫の絵だらけのカレンダーを見つめて思わず呟く。

「あと一ヶ月か……」

今日は十月一日。文化祭まであと一ヶ月。

「文化祭まであと一ヶ月ですよ！」

秋の少し寂しげな日差しが入る食堂で、亜由美が醤油ラーメンをすすりながら私としいちゃんに檄を入れる。

「我々文化祭実行委員会は最後まで気を抜かず全力投球で残りの一ヶ月間を走りきるので！」

ラーメン丼の淵を一本の割り箸が何度も廻る。たぶんこの割り箸は私たち実行委員を表しているのだろうけど、そんな暑そうな所は走りたくないわ。

「そうだね、あと一ヶ月だね」

しいちゃんがお手製の玉子焼きを箸に刺して応える。

「『あと一ヶ月』なのか、『もう一ヶ月』なのか……」

私はスプーンでとんかつを切りながら呟く。同じ「一ヶ月」でも後者の方が切羽詰った感じがするな。果たして私たちはどっちのほうなのだろう。

「あと一ヶ月を思い切ってやるのみでしょう！ 私はこの一ヶ月ずっと踊り続けるわよ」

はるちゃんがナポリタンのケチャップがたっぷりついたフォークを振り回して叫ぶ。はるちゃんは実行委員じゃないけど文化祭でダンスをするからね。それにしてもフォークを振り回す癖はやめてほしいな。

「はるちゃんはダンスに専念するとして、私たちイベント企画チームが残り一ヶ月でやるべき事をここにまとめてみました」

亜由美が差し出したプリントには「一ヶ月でやるべきことリスト」と書かれてあった。

「まだまだ足りない部分があるとは思いますが、これだけは最低限やったほうがいいと私が思ったことを書いてみました」

亜由美の醤油ラーメンが少しのびている。そろそろ食べきらないともつたいたいことになるぞ。

「えーと、まずは『芸能人のスケジュール確認』ね……」

しいちゃんがエビフライの尻尾を丁寧に弁当箱の中へ置く。

「イラケン選手を初め大学に呼ぶ芸能人のスケジュール確認は必要です。確認したら『実は他の仕事と被っていました』ってことになったり、仕事で怪我をして来られなくなったりとする場合があるので、直前まで気が抜けないのです」

「ドタキャンするかもしれないからね」

はるちゃんが力強くフォークでテーブルを叩く。ケチャップのついたベークンが一切れテーブルに落ちた。

そういえば聞いたことあるな、仕事をダブルブッキングしてヘリコプターで移動した狂言役者とか、文化祭当日にいきなり「旅に出たくなった」と言う理由で本当に旅に出ってしまった大物司会者の話とか。

まあイラケン選手はそんなことはしないと思うけど、三組のお笑い芸人さんは注意しておかなくちゃね。

「それで次は……、『パンフレットの広告主を探す』」

しいちゃんが手作りのコロッケを箸で割る。

「ほんとはけーまが担当する仕事なんですけどね。まだまだ広告主、

つまりスポンサーが足りないらしくて、もし時間があれば私たちも
お手伝いしようかと思ひまして」

「大学の近所じゃないけど、私がアルバイトしている『御団子』の
オーナーに頼んでみようか？」

「ええ、お願いします」

しいちゃんのアルバイト先は大学から歩いて十分のところにある。

「御団子」くらい離れていても大丈夫ということは……。

「スポンサーって文京区ぶんきょう内じゃなくても大丈夫だったけ？」

もし大丈夫だったら……。

「ええ、東京二十三区内ならどこでも大丈夫です」

亜由美が割り箸を真っ直ぐ私に向ける。小さい青ねぎが私の頬に
付く。

「それならさ……、うちの店も出してもらえないかな。荒川区あらかわだけ
」

私の実家は和菓子屋を経営しているのはみんな知っていることだ。
スポンサーとして文化祭に貢献できる上に、文化祭の参加者に対し
て宣伝も出来る。まさに一石二鳥だ。

「それじゃあ、『御団子』とかつちゃんの店をスポンサーに加える
つてことで交渉してみましよう」

いよつしゃ、さつそくお祖父ちゃんに報告しなくちゃ。

「そして次は……『マスコミ対策』ね。芸能人やイラケン選手を呼
ぶのだから、マスコミ関係者が入ってくる可能性があるわね。これ
は取材の要請が来たら受けるか受けなかったことでしょ？」

「そうです、それを話し合う必要がありますね。ダメならダメ、受
け入れるなら受け入れるとはっきり線を引かないといけません」

亜由美が割り箸をテーブルの上に置く。たぶん「その線」を表し
ているんだろうな。

「えーと、次は何？ 『ミス文京大学』の優勝賞品を探す、もしく
は作る？」

「一昨年の文化祭で『雪子さん』とともに行方不明となった。優勝

トロフィーを探すか、新しいのを発注するのです。あと副賞を何にするか考えないと……」

「雪子さん」とは、一昨年の文化祭、『ミス文京大学コンテスト』に颯爽と現れ、優勝賞品を手にするやそのまま行方不明となった謎の美女「雪子さん」のことである。

雪子さんとともに代々「ミス文京大学」へ受け継がれていた優勝トロフィー（毎年トロフィーはコンテストの一番初めに前年の「ミス文京大学」が返還する決まりになっていたそうだ。「ミス文京大学」が四年生だったらいっただいどうするんだらう……）も行方不明となってしまうたのである。

「探すって言っても……、まず『雪子さん』を見つけないといけないんじゃないの」

しいちゃんがもつともなことを言う。優勝トロフィーを見つけるにはそれを持っているであろう「雪子さん」を探すのが一番の近道だ。

「といっても、雪子さんって一昨年の文化祭から一度も大学に来ていないんですよ？ なんでも幽霊じゃないかって噂もあるじゃない。幽霊と一緒に優勝トロフィーも『どろん！』しちゃったんじゃないの？」

はるちゃんが両手を垂れ下げながら恨めしそうに私たちを見つめる。しかし「どろん！」って古い言葉だなあ。

「まあ優勝トロフィーをどうするかは置いておくとして、まずは副賞の賞品を考えようよ」

しいちゃんがお弁当の蓋を閉じて「ごちそうさま」のポーズを取る。

「ええと……『雪子さん』の回が『ビール樽』で、去年が南紀白浜温泉の『温泉宿泊券』ですね」

おお、「ビール樽」から「温泉宿泊券」っていきなりレベルアップしているな。

「一応予算と照らし合わせてみた結果、関東近辺なら温泉宿泊券を

賞品とすることも可能ですね」

うーん、去年とのバランスを考えるとそれもいいんだけど……。テーマが『東京とともに六十年』だから、東京に関する賞品がいいよね」

そうそう、しいちゃんの言うとおりだ。東京がテーマだから東京に拘らないと。あ、「東京」と名乗っているけど実際の所在地が東京じゃないところは対象外にしないとね。

「ここはベターなところで、『東京タワーホテル』の宿泊券にすればいいんじゃない」

「東京タワーホテル」とは、明治時代日本で最初に出来たホテルだ。完成当初は「大日本ホテル」と呼ばれていたのだが、昭和に入り近くに東京タワーが完成したのと同時に名前を今の「東京タワーホテル」に改めたのである。

「はるちゃん、それいいね。予算の許せる範囲で最高の部屋を取るうよ」

しいちゃんがはるちゃんの左肩を叩く。はるちゃん、ちょっと痛そうだ。

「それじゃあ副賞は『東京タワーホテル宿泊券』という案を明日のイベント企画チームの会議に提出しますね」

ここで決まったからと言って正式に採用されるわけではない。イベント企画チームの総意があって初めて副賞が正式に採用される。でもここで決まったことはほとんど正式に採用されているんだけどね。

「と、そして『雪子さん』に話が戻るわけね」

はるちゃんが目を輝かせながら身を乗り出す。

「話が戻るといつてもどうする？ 『雪子さん』を探すが、新しくトロフィーを作るか決めなきゃならないんですよ」

亜由美がプリントを片手にかすかにうなり声を上げる。

「うーん……製作所の話では、トロフィーは早いもので半月あれば

できるとのことでした。それを考えて『雪子さん』の搜索は今日を入れて一週間で限度つてところですね……」

「一週間もあるんだからやれるだけのことはやるつよ、みんなはるちゃんがんばるんだかやる気だ。よつほど「雪子さん」に会いたいのだらう。」

「案外校舎で『雪子さんを探しています』と呼びかけたら、誰か知っている人が出てくるかもしれないね」

しいちゃんもなんだか楽しそうだ。
「そうだね、私もちよつとその『雪子さん』に会いたいなつて思うし、探してみようか」

「それじゃあ一週間と期限を定めて『雪子さん搜索大作戦』を決行しますか」

「大作戦」つて……、亜由美も結構ノリノリじゃないか。

この私たちの会話を「雪子さん」はきつと聞いていたのだらう。
なぜなら翌日、文化祭実行委員の部屋に「ミス文京大学」の優勝トロフィーと一枚の紙がぽつんと床の上に置かれていたのだ。

紙には「優勝トロフィーお返しいたします 雪子」と綺麗な文字で書かれていた。やはり「雪子さん」は実在したのだ。

。 だけど返すなら直接会つて返してもらいたかつたな、「雪子さん」

第四十二話 部屋に泊まる

「はぁー、やっと終わったー」

私は木製の机の上に頬をついて目を閉じた。時刻は午後十一時。今まで文化祭実行委員の打合せをしていたのだ。

今日は天候が悪かった場合の対応について話し合った。文化祭は十一月一日から三日間 土・日・祝（文化の日）に開かれる。その間ずっと晴れていたら今日話している事は無駄になってしまうけど、「備えあれば憂い無し」何が起きても混乱無く対応するのが文化祭実行委員の仕事なのだ。

「かつちゃん、そんなところで寝ていると風邪をひくよ」

しいちゃんが優しく私の背中を揺るので、私は顔を上げて周りを見回すと、部屋の中には私としいちゃんと亜由美だけ。タカビーとかわちゃんとケーまはさっさと帰ってしまったようだ。

「なんかもう帰るの面倒に思えてきた……。バスはもうないでしょ」私は再び机に頬をつける。明日は午前八時からイベント企画チームの打ち合わせがある。バスはないので、歩いて帰って朝早く起きてまたここに来るのがなんだかめんどくさい。

「そんなこと言われてもな……。ここで寝るわけにもいかないし……」

しいちゃんの言うとおりでこの部屋には寝るための布団や毛布、ベッドの類は無い。椅子の上に体を乗つけて寝るなんて、体が痛くなりそうだ。

「私は家が二人より遠いので、ここに泊まれるなら大歓迎なんですけどね」

亜由美の家はここから電車で三十分ほどかかるらしい。

「そうだ！ 一つだけ泊まれる場所があった」

私はそう叫ぶとしいちゃんと亜由美の手を取って「文化祭室」を出た。

「というわけで、私たちの部室に泊まりたいと言う訳ね」

幸いなことに私が泊まるうと考えている部屋の住人はいた。

「はい、是非ともダンスサークルの部室で一泊させていただきたいと……」

私たち三人は、浅野先輩と明石先輩、はるちゃんに丁寧に頭を下げた。

「うーん、私たちも入れて六人ならなんとか入れるかな？」

浅野先輩が炬燵を部屋の隅へ避けてちよつと考える。八畳くらいあるこの部室ならなんとかなりそうだ。

「まあうちの部室に泊まりたいというならそれなりのことをしてもらわないと困りますね、浅野先輩」

明石先輩が明るい笑顔で私たちを見回す。それなりのこと……、ええ今日なら思いつきり抱きついてもいいですよ。明石先輩。

「それじゃあ『豚殿念』のトンかつを三人におごってもらいましょうか。あそこはまだ空いているし、かつちゃんたちも晩ご飯まだみたいですし」

はるちゃんが目を輝かせながら二人の先輩を見る。

「そうね、宿泊代わりにとんかつをおごってもらいましょうか」

「はい、とんかつでもヒレカツでも構いません」

私たち三人は再びダンスサークルの三人に頭を下げる。でもほんとにヒレカツ頼まれたら困るけどね。あそこのヒレカツは千円以上するんだから。

こうしてはるちゃんのダンスサークルの部室へのお泊りが決まった。

「ダンスの調子はどんな感じですか」

熱々のとんかつを箸で刻みながら私は浅野先輩に尋ねる。

「順調だよー、他のサークルのメンバーとの息も合っているし、あとは本番に向けて練習を積み重ねるのみね」

「あ、でもプログラムとパンフレットの作成をしなくちゃいけないですよ」

豚汁を冷ましながら明石先輩が付け足す。

「呼び込み方法とか、広報活動についても考えなくちゃいけないですし……」

最初にかけて量が充分じゃなかったのか、はるちゃんはキャベツにソースを再びかける。

「その辺りは出番の少ない私が考えるから、あなたたちは二人だけのパートについて考えなさい」

「えっ、明石先輩とはるちゃんが二人だけで踊るんですか？ すごい」

しいちゃんは驚きのあまり箸につまんでいたイカリングを一つ皿の上に転がしてしまった。

この文京大学にある八つの女子ダンスサークルが合同でダンスを披露する中で、二人だけのパートが組まれるのはすごいことだ。最初に言い出した者の特権と言うことだろうか。

「私と遙は大丈夫ですよー。もう、ほんとにラブラブって感じで……」

明石先輩は左隣にいるはるちゃんの右肩を掴んで頬をすり寄せる。「そ、そうですね……ラブラブですね……」

はるちゃんはちよっと迷惑そうに伝える。明石先輩が頬をすりすりしているので、せっかく箸でつまんだキスフライをなかなか口に持っていけない。

私はその様子を眺めながら、とんかつを口の中に入れる。熱い肉汁が私の舌に垂れる。

「あふっ、あふっ、あふっ」

熱い息を吐きながら湯飲みを取って中に入っている飲み物を口に入れるけど、それがまた熱いお茶だった！

「んー、んんーっ！」

噴出すのをこらえながら私は熱いお茶を飲み込む。食道を熱い液

体が流れるのがはつきりと感じられる。舌の口の上の部分がちょっと火傷しちゃったぞ。

「もう……何をやっているんですか」

亜由美が呆れた顔をしながらメンチカツを箸で細かく刻んでいく。刻まれたメンチカツからは湯気と肉汁が溢れ出ている。肉汁が出ているのはちよつともつたいないな。その肉汁が美味しいのに。

「まあ何を踊るかは本番までのお楽しみつてことで、三人とももちろん見に来てくれるんでしょ」

明石先輩が明るい笑顔を私たちに向ける。

「ええ……、その時間帯は私たち主催の企画が無いので、大丈夫だと思っんですが……」

何か起きたときに動かなければいけないのが文化祭実行委員なので、下手したらどこかで待機つてことになるかもしれない。

「見に来てくれないと、三人とも『一日中抱きつきの刑』だからね！」

三人に「一日中抱きつき」って明石先輩は三日三晩抱きつき行為をし続けるのだろうか……。私たちより明石先輩のほうが罰ゲームのような。あ、でも明石先輩のことだからそんなの平気なのかもしれない。

「ええ、是非とも見に行きますので安心してください」

亜由美が思いつきり作った笑顔を明石先輩に向けた。

晩ご飯を食べ終えて私たち六人は大学へと戻った。辺りはすっかり暗くなっており、僅かに四号館のサークルの部室二つほど明かりが付いているだけだ。二号館にも明かりが僅かながら付いている部屋がある。教授が寝泊りでもしているのだろうか。

「大学に泊まるのは初めてだなー。なんだかわくわくするね、かつちゃん」

「しいちゃんが可愛らしい笑顔を私に見せる。」

「わくわくするの？ 私と一緒に泊まるのがわくわくするの？ し

「いちゃんったらもう可愛いんだから」

明石先輩は一旦しいちゃんの前に出て、頭を思いつきり撫でる。しいちゃんに後ろから抱き着こうものなら返り討ちに遭いかねないから警戒しているのだろう。それに、明石先輩はなぜかしいちゃんのボデイブローに過剰に警戒しているしね。

「大学にお泊りするととなると洗顔フォームとか歯ブラシとか必要だけど、それは持ってきている？」

「大丈夫です、浅野先輩。そういうのはいつもバッグに入れていまずから」

私は自信満々にバツクから青い歯ブラシを取り出す。

「そう、歯ブラシだけは貸すわけにはいかないからね」

一本の歯ブラシをみんなで使うのはちょっと想像するだけでも嫌だな……。

「さーて、みんなこれから大学に泊まるわけだけど、泊まるからには覚悟してもらいたいことがあるわよ」

明石先輩がいつもの笑顔にさらに楽しさを加えて私としいちゃんと亜由美を見つめる。

「えーと、朝になったら部屋の掃除をすることですか」

部屋に泊まる条件として部屋の掃除をするということはすでに明石先輩から聞いている。

「いや、別にそれはしなくていいよ。お泊り代として今日の晩ご飯おごってもらったから」

「それじゃあ何を覚悟するんです？」

「学校、夜と言えば決まっているじゃない……」

学校、夜？ 一体何があるんだ？

第四十三話 部屋に泊まるう(二)

それは今から約六十年前、これから私たちがお泊りする予定の四号館は東京の下町の一部だったそうだ。

その下町の一角に母一人兄妹二人の家族が暮らしていた。当時は戦後の食糧難、父親を戦争で失った家族は三人で寝る間を惜しんで働き、それで得たお金で僅かばかりの米とさつま芋を手に入れていたという。

そんな真夏のある日、母親は日ごろの疲れが溜まっていたのだろう。灼熱の太陽の光の下道端で倒れ、還らぬ人となってしまった。

兄妹は母親がいなくなつた後も気丈に振る舞い、小さな痩せ細つた体で小さな手で働き続けた。しかし、母親を失つた子どもの得る収入なんてほんの僅かだ。自然に食べるものも少なくなつていく

そして母親が死んでから半年後。町の人は家の中で変わり果てた兄妹の姿を発見する。妹は骨と皮だけとなった腕に空になったドロップの缶を抱えていた。

「それから三十年経つてその町はこの大学の一部になつただけで、それ以来この四号館には夜な夜なその兄妹の姿が……」

「いやー！ やめてー！」

亜由美が悲鳴を上げながら耳を塞ぐ。

……というわけで、三人とも今夜は気をつけるのよ」

明石先輩がいつもの明るい笑顔を浮かべながらお茶をすすする。

「明石先輩、どうしてそんな話をするんですか、これからシャワーを浴びに行くところなのに！」

私が右手に持っている石鹸がケースの中でカタカタ震えている。

シャワー室はこの四号館の地下一階の南の端。私たちのいるダンスサークルの部屋は三階の北の端にある。つまりシャワーを浴びるために暗い階段と廊下を歩き続けなければならないということだ。

「いや、シャワーを浴びに行くときだからこそ、気をつけて欲しいなあと思っただけさ」

「明石先輩はそんな話をして怖くはならないんですか？」

「しいちゃんは目を潤ませながら明石先輩に迫る。」

「私はねー、靈感が強いからそういうもの見慣れちゃっているんだよ。あつ……」

明石先輩の笑みが突然消え、亜由美の背後を見つめる。

「え！ なに、なにになになに!？」

亜由美が怯えながら後ろを振り向く。私も見るけど何もいない。

でも明石先輩には見えている……？

「今見ても遅いよ、通り過ぎちゃったから」

通り過ぎちゃったって、ここはお化けの通り道ですかー？

「すごく速かったよ。あれはきつと世界記録だね」

世界記録って、お化けの世界選手権でも開催されているんですか？ 「お化けに生まれて良かったー！」と喜ばばいいんですか!？」

「浅野先輩とはるちゃんはどつなのよ！ 怖くは無いの!？」

私は二人を見て声を震わせながら叫ぶ。いつもこんな人と一緒にいたら迷惑だろう。

「最初は怖かったけど、もう慣れちゃったから。私は実際に見たことないし」

浅野先輩は平然と答える。

「私は靈感全く無いみたいね。時々明石先輩の見る光景はきつと楽しいんだろつなー、って羨ましくなる」

はるちゃんはいたずらっぽい笑顔で明石先輩を見つめる。この二人はほんとに平気らしい。

「ま、この大学に泊まるときの諸注意を述べたところでシャワーを浴びに行きましょうか」

明石先輩、全然注意事項じゃないですから。

六人でシャワーを浴びに行くと、部室に誰もいなくなってしまう。

いくら誰もいない大学といつても物騒な世の中なので、誰かは部屋に残ろう、と私たちは二つのグループに分かれてシャワーを浴びる事になった。厳正なじゃんけんでは選ばれた結果、私はしいちゃんと明石先輩と先発隊としてシャワー室へ向かう。

「私も靈感は無いので、お化けが出ても見ることには無いんでしょねー」

私は今までの経験を元に自分を勇気付けた。今まで見たこと無いんだもん、今日も見ることにはない……はず。

「その考えは甘いよ、かつちゃん」

明石先輩のいつもの笑みが突然私の目の前に現れた。私の肩が激しく揺れる。

「靈感が強い人が一緒にいるとその他の人の靈感も若干レベルアップすると言われているのよ。つまり私と一緒にいるから、今日はかつちゃんは初めて……」

「明石先輩、それ以上続けしないで下さい！」

しいちゃんが目に涙を浮かべながらファイティングポーズをとる。その先を言ったら本気で殴るつもりなのだろう。

「う、うん……悪かった。それ以上は言わないよしいちゃん」

明石先輩は顔を引きつらせながらしいちゃんをなだめる。見たことも無い、居るか居ないかも分からないお化けより、現実に私の目の前に居るしいちゃんのほうが怖いかもしれない。

そんなことを考えると少しは怖さが和らいだ……。いや、やっぱり怖い。さっきの明石先輩の発言が怖い。どうして私はこの人と一緒にシャワーを浴びることになってしまったのだろうか。

「って二人とも危ない！」

突然明石先輩が私としいちゃんに抱きついて壁に押さえつけた。

「ど、どうしたんですか明石先輩？」

また何か見えたのだろうか、それともただ抱きついてきたただけなのだろうか。

「い、いやあ、しいちゃんめがけて『やり』がね、飛んできたから

さ……」

「『やり』つて『やり投げ』の『やり』ですか？」

しいちゃんが明石先輩の腕の中で尋ねる。

「そう、『やり投げ』の『やり』。あ、審判の人が集まってきた。

えーと、記録は……」

「明石先輩、さっさとシャワー室に行きましょう」

私は明石先輩とともにしいちゃんのものすごい力に二階へと引つ張られていった。

「ところで明石先輩、さっきの『やり投げ』の記録は何メートルだったんですか？」

しいちゃんに聞こえないように（聞かれたら怒られそうだからね）

明石先輩の耳元で囁いた。

「ああ……かつちゃんの吐息にぞくぞくする……」

明石先輩が恍惚の表情を浮かべる。

「最後のほうはしいちゃんの声にかき消されちゃったけど、八十メートルは越えていたようね」

ちなみに生きている人間の「やり投げ」世界記録は男子が九十八メートル四十八センチ。女子が七十一メートル七十センチだ。

明石先輩がまた何か発見しないかとビクビクしながら私たちはなんとかシャワー室へたどり着いた。

シャワー室に入って十分後、私は廊下でしいちゃんと明石先輩が出てくるのを待っていた。一人でシャワーを浴びるのが怖くてさっさと済ませたのだ。だって、目を閉じて頭を洗っていると後ろから誰かに襲われそうな気がするじゃない。

でも廊下に立っても怖いのは一緒だと気づいたときは遅かった。

私は暗い廊下に一人で立ってしいちゃんと明石先輩を待たねばいけないのだから。二人とも何をのんびりしているのだろ……。

「怖い」と思っていたら、ますます「怖く」なってしまうので、私ははるちゃんのように楽しい想像をしようと考えた。

お化けが走り幅跳びをしたり、八人で百メートル走をしたり……。
おお、なんだか楽しくなってきたぞ。ハンマーを空高く投げ、気合
を込めて叫ぶ選手の口から飛び出す放送禁止用語……。なんだかエ
ロくなってきたぞ。

そんな想像をしていたせいだろうか。突然、私の耳に「おーい」
という男の声が聞こえてきた。

声のするほうを向くと、人影が二つ、「おーい」と声を上げなが
ら私に近付いてくる。つ、ついにお化けが出たー！！

いやいや、落ち着こう。はるちゃんのように楽しい想像をしてこ
の場は凌ごうじゃないか。相手は声を出しながら近付いてきている。
声を出して相手に近付くスポーツ……。私の脳裏に一つの競技が閃
いた。すかさず

「カバティ、カバティ、カバティ」

と叫ぶ。これで向うは私を「カバティをしているお化け」と認識
し、襲ってくることはないだろう（お化けが人を襲うのかと言う問
題はおいておく）。

声の主はどんどん近付いてきているが、私は怯まない。

「カバティ、カバティ、カバティ」

「何を訳の分からないことをしているんだ、かつちゃんよ」

「カバティ、カバティ……ってカバティ、じゃなくてタカビーと会
長さんじゃない。二人こそなんでこの時間にここにいるのよ」

声の主はジャージ姿のタカビーと姉小路会長だった。そう、人間
だったのだ。

「なんでって、姉小路と文化祭について話していたら終電の時間過
ぎたんで、今日は生徒会室に泊まるうか、ってことになってな」

「生徒会室はこういふときのためにいくつか布団を用意しているの
だ」

私たち以外にも泊まっている人がいることを知り、私は少し心強
くなった。

「しかし、かつちゃんたちが泊まっているということはあの叫び声

はかつちゃんたちのせいということか？」

は、叫び声って何？

「時々聞こえてきたんだよ。『うおおっ！』って女性のうなり声とかな、姉小路」

「あとなんか拍手も聞こえてきたな。陸上の棒高跳びの前に選手が観客に求めるやつ」

生徒会室は四階の真ん中にあるが、例えダンスサークルの部室からそんな声や拍手をしても生徒会室の二人に聞こえるわけがない。

「ち、ちよつと待って！ 私たちがそんなことするわけないじゃない。タカビーたちがここにいて今初めて知ったんだし」

「え……」

「それじゃあ誰が……」

え……えーと、お化けの世界選手権は、ここ文京大学にて開催中でーす。

第四十四話 カウントダウン

文化祭まであと十日。

「今日も終ったー」

私は机の上に頬をついた。時刻は今日も午後十一時を回っている。

「バスはもう無くなっちゃったけど歩いて帰ろうか」

しいちゃんが帰り支度をしながら笑顔で私に言う。

「そうだね、ここには泊まりたくないし」

一週間前この大学に泊まったとき、ちよつとした幽霊騒ぎがあった。以来私たちはどんな時間であつても家に帰るようにしている。

「しかし亜由美も大変だねえ。三日連続でしいちゃんの家にお泊りだなんて」

私は机に頬をついたまま亜由美を見た。私たちは歩いて帰られる距離にあるけど、亜由美はちよつと遠いところに家がある。そのためしいちゃんの家には毎晩のようにお邪魔しているのだ。

「ええ、でも着替えはちゃんと用意しているので大丈夫ですよ」

亜由美は大きく膨らんだスポーツバツクを私に見せた。

「しいちゃん、大丈夫？ 寝ている途中で暴れたりしない？」

夢の中で何かと闘つたりしていないだろうか。

「もーう、かつちゃん。私の家に泊まったことあるから分かるでしょ。そんなことしているわけじゃないじゃない」

ま、たしかにそうなんだけどさ。毎日安全とは限らないじゃない。

「そういえば昨日、やけに腕を振り回していましたね……」

「え、嘘？ 私そんなことしたの？」

しいちゃんが驚きの目を亜由美に向ける。本人はどうやら覚えていないようだ。

「そのあと『あいつらはどこいった？』なんて言うてくるし……」。

『あいつら』って一体だれなんですか？」

しいちゃん……夢の中では口調も乱暴になるのね。

「まあ今日はしいちゃんに襲われないように気をつけないとね、亜由美」

シャッターが閉じられた店の並ぶ商店街を歩きながら私は亜由美を心配した。

「はい、お腹にクッションを入れて万が一のために備えようと思いません」

しいちゃんはボディへのパンチが得意だからな。顔だと目立つからボディに打つことを選んでいたのでろう。

「もう、だからそんなことはしないって。今まで私が酔っ払ったり寝ぼけていたりしたときに怪我をさせた人なんていないんだから」
「だけど寸止めまでいった人は何人もいるのだろう。」

目の前の信号が赤になっている。しかし左右を見ても車が来る様子はない。私はそのまま横断歩道を渡ろうとしたが

「かつちゃん」

と、しいちゃんに袖を引っ張られた。

「どうしたのしいちゃん」

私はしいちゃんのほうを振り向く。しいちゃんは「右、右」を指さす。

しいちゃんに促されてその方向を振り向くと自転車にまたがるお巡りさんが一人。見た目の年はイラケン選手と同じくらいだろうか。私はお巡りさんの前で堂々と信号無視をしようとするところだったのだ。危ない危ない。

「そ、そうだね。信号無視はいけないよね」

私はお巡りさんに聞こえるようにわざと大きな声で話して二歩後ろへ下がる。

「あ、別に渡つてもいいよ」

意外なことにお巡りさんが信号無視を推奨してきた。

「え！？ いいんですか？」

亜由美が驚きの声を上げる。

「別に車が来る様子もないし。夜も遅いし、こういう場合は交通マナーよりも早く家に帰ることが優先されるから」

と、お巡りさんは自ら横断歩道を渡り始めた。私たちもそれに続く。

「どうもすみません、ありがとうございます」

そんなに長くない横断歩道を渡り終えた後で私たちはお巡りさんに頭を下げる。

「もう遅い時間だから、気をつけて帰ってね」

お巡りさんはそう言つと、右の細い道へと自転車を漕いで行った。私たちはこのまますすぐ歩いて団子坂を下る。

お巡りさんが私たちから離れていくのを確認したのだろうか。私たちの目の前に三人の男が立ちはだかった。三人とも私たちより背が高く、髪は茶色に染めている。

「えーと、何か用でしょうか」

亜由美が言葉は穏やかながらも目が激しく睨みを効かせている。

「いやー、ちよつと俺たちと遊ばない？」

真ん中のサングラスをかけた男が口元を厭らしくにやかせながら私たちに声をかける。やはりナンパか。しかもタチが悪い。

「ここだと遊ぶところないからさ、俺たちの車に乗って上野とか銀座とか、よかつたら新宿でもいいよ」

右側のがつちりとした体格の男が親指で示すその先には青色のライトバン。八人くらいは乗れるだろうか。

「遊ぶわけないでしょ、私たちはこれから帰るところなんだから邪魔しないです！」

私は大声で否定した。自転車で走り去つたお巡りさんにこの声が届いて欲しい。

「そうです、私たちは帰るところなんです。邪魔なのでどいてくれませんか」

しいちゃんが口調は穏やかだがはつきりと否定の意思を示した。

「まあそんなこと言わないでさ、俺たちと遊ぼうよ」

真ん中の男がしいちゃんの肩を掴もうとしたその時、

「ガッ……」

その男が腹を抱えて蹲った。しかも口から食べたものを出している。見えなかつたけど、しいちゃんのボディパンチが炸裂したのだらう。

「おい、どうした……」

左側の頭がツンツンとした男が真ん中の男を気遣おうとしたが…

…。

「ゲハッ」

腹を抱えて吐いた男の上に倒れこんだ。

「て、てめえ……！」

右側の男が自らの腕力に物言わせようとなぜか私に右拳を振り下ろそうとしたけど……。

「ゲハッ」

男は右手を構えたままの姿勢で仰向けに倒れた。

「おい、一体どうした？」

お巡りさんが自転車を漕いで駆けつけたときには全てが終わっていた。お巡りさんが目にしたのは三人の男が気を失って倒れている姿。「悪質なナンパが私たちに乱暴しようとしたので、正当防衛をしました」

しいちゃんは淡々とした口調で答える。

「正当防衛って……、君がやったのか？」

お巡りさんがしいちゃんに尋ねる。

「ええ」

しいちゃんは笑顔で応えた。三人の男を殴った後で笑顔になるしいちゃん……ちよつと怖いぞ。

「君たち二人も襲われそうになつたんだね」

お巡りさんは戸惑いながら私と亜由美に尋ねる。

「ええ、その通りです」

私なんか殴られそうになつたんだから。

「そうか、それなら正当防衛が通用するか……」

と、お巡りさんは無線で何かを呼び出した。やってきたのはパトカーではなくて救急車。三人の男は気を失ったまま救急車で団子坂を下っていった。

そして私たちはお巡りさんのいる交番で「ちょっとやり過ぎたんじゃないのか」と少々の小言を言われて、パトカーで帰宅。

遅い時間パトカーで帰ってきた私を見た家族の驚きようといったら……面白かったな。

第四十四話 カウントダウン(後書き)

今回ちょっと短めになってしまいました。

第四十五話 カウントダウン(二)

文化祭まであと八日。

「今日も遅くまでお疲れ様です」

私はしいちゃんと亜由美に頭を下げた。遅くまで頑張ったのは私も含めてだけだ。

今日は屋台を出す団体の人たちに注意事項を説明し、正門の作成のお手伝いをし、「ミス文京大学コンテスト」のパンフレットの仕上げ作業と……。大変な一日だったな。

「『ミス文京大学』のパンフレットは明日私が業者に直接届けます。完成は……三日後ですね」

亜由美がパンフレットの原稿をプリンタから取り出しページを丁寧に揃える。

「そういえば、文化祭のパンフレットも明日入稿だったね」

私の脳裏に夜遅くまでコピー機やPC相手に闘っていたけーまの姿が浮かんだ。

「けーまもここ数日は家に帰れなくてかわちゃんの家に泊まっていたからね」

しいちゃんが何気なく呟く。

けーまの彼女であるかわちゃんの家はここから歩いて十五分の干石にある。彼女の家に泊まったということは……。

「しいちゃん、何気に危ない発言しないでよ」

「えー？ 彼氏が彼女の家に泊まるのは普通のことでしょう？」

しいちゃんは帰り支度をしながら首を傾げる。

「そう、だから泊まるってことは普通……」

「はい、ストップ!!」

亜由美の右手が私の口を塞いだ。

「かつちゃん、それ以上は言わないことです。そんなことを考えている部分を文化祭のために使ってください」

まあ確かに切羽詰った時期だけどさ……。もう今日の仕事は終わって帰る時間でしょ。と、私は立ち上がって亜由美の右手から解放された。

「ところで亜由美は『ほにやらら』とか『ふにやらら』とかしたの？」

「は？ 『ほにやらら』、『ふにやらら』ってなんですか」

ああ、そうか亜由美は知らないんだったな。

「もうう、かつちゃんそんな厭らしい話しないでよ……」

しいちゃんが顔を赤くさせながら私に抗議する。しいちゃんは去年から聞いているから「ほにやらら」「ふにやらら」の意味を理解している。

「いやー、女同士だしさー息抜きにぶつちやけた話をしながら帰ろうかと思って……」

私はバックを右肩にかけて部屋の出口へと向かう。

「なるほど……。先ほどかつちゃんが想像していたことが『ほにやらら』と『ふにやらら』という言葉に集約されるわけですね」

亜由美がバックを左肩にかけて立ち上がる。さすが亜由美、理解が早いこと。

「その件についてですがしいちゃんには既に言っているのかつちゃんにだけ言わないのは不公平ですね。答えましょう」

「え！？ しいちゃんには話しているの？」

亜由美の意外な回答に私は驚いてしいちゃんを見た。しいちゃんはまだ顔が真っ赤だ。

「そりゃ毎日お泊りしていたらそのうちそんな話になるよ……」

しいちゃんは真っ赤な顔のまますたと部屋を出てしまった。

私と亜由美がそれに続く。

「ところで、亜由美。私の質問の回答は？」

階段を下りながら私は亜由美にもう一度質問を投げかける。

「ああ、その件ですか……」

亜由美は上を見ながら頭の中で回答を整理する。上を見ながら階

段を降りるなんてよく足を踏み外さないな、と私は感心しながら亜由美を眺めた。(そういう私もよく階段を踏み外さないな)

「今まで彼氏になった人は二人です。その二人とも『アリ・アリ』でした。これで納得ですか」

「アリ・アリ」って「ほにゃらら」と「ふにゃらら」が両方あったってことね。なんかアイスコーヒーを頼むときのような回答だな
「では」

と、階段を降りきった亜由美が私の目の前に姿勢正しく立った。

「かつちゃんの話も聞きましょうか」

「えー、私も話すの……」

私は亜由美をかわして質問から逃れる。

「私だけ恥ずかしい話をさせて自分が話さないというのは無礼の極みと言うものですよ」

亜由美が私の右隣にぴったりとくっつく。

「そうね……、亜由美の言うとおりだね……」

と、言うわけで私は白山（おかくん）の町を歩きながら過去に付き合ったことのある唯一の彼氏の話をした。えーと確か名前は小田林（おだはやし）だったかな
「酷い話ですね……、かつちゃんの体を散々弄んだ拳句、『名前が変だから別れよう』だなんて……」

亜由美は本当に酷いと思っているのだろう。目が怒っている。

「こらー、亜由美。『弄んだ』なんてこと言わない。私が惨めになっちゃうじゃない……」

私は左手で亜由美の頭を軽く小突く。

「すいません、ついその男が許せなくなっ……」

「かつちゃんの彼氏のこととはここまでにしようよ。かつちゃんやっとそのシヨックから立ち直れたのだから……」

しいちゃんが私と亜由美の間に割って入った。

過去の彼氏のごが整理できたのは、私の名前に対するコンプレックスが克服できたからである。それと同時に私が「御徒真知」になった真の理由としいちゃんの実家に対するコンプレックスを知る

ことができ、私としいちゃん（それとはるちゃん）の仲はますます深くなった。

気がつけばあれからもう一年が経っている。
「そう言えばそんなことがショックだったこともあったね、しいちゃん」

私はしいちゃんの頭を優しく撫でた。

文化祭まであと四日。

「パンフレットができましたよー」

亜由美がどこから借りて来たのか、台車に出来上がったばかりのパンフレットを持ってきた。

「こうして見ると五百部って結構な数だね」

一冊一冊は薄いものだけど塵も積もればなんとやらだ。（でもこのパンフレットは決して塵じゃないからね！）

「あと、けーまから文化祭のパンフレットを何冊か譲ってもらいました」

亜由美が机の上に置いた文化祭のパンフレットは、私たちが作った「ミス文京大学コンテスト」のそれよりも数倍厚い（しかも表紙はカラーだよ！）ものだった。

「けーまもよく頑張ったよね……。これで一安心ってところかな」

私は表紙から数ページを適当にめくっていくと、偶然にもうちの広告に行き当たった。でかでかと「御徒和菓子店おかちわがしてん」と書かれているその広告を見て、私は照れ臭くなり冊子を閉じる。自分で頼んだこととはいえ、こうして形になったものを見ると恥ずかしいものだ。

「でもまだ門は完成していませんから、まだ彼の仕事は終わっていませんよ」

亜由美はそう言いながら私の前にパンフレットの山を積み出した。「それに、パンフレットが正確に印刷されているか確認する仕事が残っています。もちろん私たちが作ったパンフレットもこれから確認をしないと」

「嘘！？ これ全部見るの」

五百部もあるパンフレットを三人で確認するの？

「もちろん、他のイベント企画のメンバーを呼びますけど、全員が集まるとは限らないので、一人当たり二十部から三十部は覚悟したほうがいいでしょうね」

それだけでも大変な数だが、事実私はこれから二十五冊のパンフレットの確認作業に映らなければならなかったのであった。そのため今日の帰りの時間も午後十時を過ぎてしまった。

文化祭まで残りは三日。その三日間もこんな調子になるのかな…

…？

第四十六話 カウントダウン(三)

文化祭まであと二日。

「用意していた服の替えが無くなってしまいました……」

醤油ラーメンをテーブルに置いた亜由美が寂しそうに呟く。二二日数日亜由美は家に帰らずしいちゃんの家にお泊りしている。

「今まで着た服はちゃんと洗濯しているからそれを着ればいいよ」

「本当は私の服が着られればいいんだけど……」と、しいちゃんは亜由美を見上げた。亜由美は私と同じくらいの背の高さだから、しいちゃんの服のサイズには合わない。

「よかつたら私が服貸そうか」

私はカツカレーのカツを一つスプーンで切る。そのついでに今日亜由美は私の家にお泊りすればいいのだ。

「え、いいんですか？」

「いいよ」。ついでに今日は私の家にお泊りすればいいし。家族には私が連絡しておくから」

しいちゃんもずっと亜由美と一緒にだったからね。たまには一人でいたいときもあるでしょ。

「ただ一つ問題が……」

亜由美が心配そうな表情を私に見せる。

「うん、どうした？ 私に遠慮することは無いよ」

半年近く一緒に文化祭を作った仲間だ。今更何を遠慮することがあるのだろうか。

「いえ、この胸が服に合うかどうか……」

確かに亜由美の胸は私のそれより大きい……亜由美、何をやってる。

「乳を寄せるな！」

「いや、こつやって自らの胸の大きさを強調しようと思ひまして……」

……

亜由美には恥じらいの気持ちと言つのが無いのか？ 明石先輩に
ほぼ毎日セクハラされている影響なのか？

「もう亜由美、昼間からそんな恥ずかしいことしないでよ……」
しいちゃんが手作りのエビフライを箸でつまんだ。

今日も十時過ぎに家に到着。この時間家族はほとんど寝ている（
和菓子屋は朝が早いからね）ので、起こさないように静かに家に入
る。

「おい真知、その子は一体誰だ」

トイレのために起きたのだろうかお爺ちゃんが亜由美を見て私に
声をかける。

「電話で言つたでしょ、今日泊まる私の友達だよ」

「そうか、その子の実家は一体どこだ？」

恒例のお爺ちゃんの質問だ。いつもではなくたまに出てくるから
油断がならない。

「え、えつと三重県みえです……」

「三重だと!？」

お爺ちゃんの眉間が険しくなる。

「それは津つのほうかね、桑名くわなのほうかね」

「え、ええと……、桑名のほうです」

その答えを聞いた途端、お爺ちゃんの顔がにこやかになった。

「そうか、桑名か。最後まで良く頑張ってくれたよ」

お爺ちゃんは亜由美の両手を取って握手をすると、機嫌よく自室
へと戻って行った。

「今のは……、一体なんですか？」

亜由美がお爺ちゃんの背中を見ながら少々怯え気味に尋ねる。

「たぶん私の勘だけど、『津』って答えたら家を追い出されていた
かもしれないよ」

それが当たっていたのを知つたのは翌朝のことだ。

いつものことながらお爺ちゃんの話は長いので、私が要点をまと

めると、幕末から明治にかけて行われた戊辰戦争ぼしんのおり、津の城主だった藤堂家ふじどうけは当初幕府側だが、いきなり新政府軍に寝返り、敗走するかつての仲間に対して大砲を浴びせたというのだ。

一方桑名はというと殿様自ら最前線に立つて戦い最後まで幕府側についたという。

亜由美が「津」と答えていたら、「この裏切り者が！」と追い出されていたことだろう。

「まあとりあえず私の家にも入れたし、私の服も着られてよかったね、亜由美」

「ええ、でも一つ問題が……」

「うん、サイズは大丈夫だと思うんだけど……」

身長は私と同じくらいだからね。色が気に入らないのだろうか。

「胸が、少々きついと思うんです……」

「乳を寄せるな！」

さて、翌朝と言うことは文化祭まであと一日、つまり明日ということである。

「うわー、大きな門だねー」

大学に着いた私たちを迎えたのは、以前私たちがデザインした文化祭用の正門だ。右側に西郷さんこと西郷隆盛、左側に勝海舟がしつかりと描かれている。上手いな、一体誰が書いたんだろう。

「この下の二人はダーリンがみんな描いたんだよ」

かわちゃんが誇らしげに二人を指し示す。けーま絵が上手いな。

私と亜由美に絵を描かせる必要がなかったんじゃないのか？

「ダーリンかわいそうにこの絵を描くために二日も大学に泊まって……」

かわちゃんがめそめそと袖で目の辺りを押さえる。

「そうですか……、折角の『ほにやら』や『ふにやら……むじっ』」

亜由美の口をしいちゃんが精一杯背伸びして抑えた。

「『ほにやら』って一体何？」

「あ、かわちゃん、気にしなくていいから」

「あ……うん、分かった」

かわちゃんはちよつと納得の行かない顔で応えた。

「ところでかわちゃん、良かったね。文化祭の開催期間中は秋晴れだつて朝の天気予報で言っていたよ」

「そうだね、話し合っていた内容が無駄になつちやうのはちよつと残念な気がするけど……」

かわちゃんたちのチームは万が一文化祭の日に荒天になつた場合の対応について話し合いを何度もしていたのだが、天気予報が正しければその対応もしなくて済みそうだ。当然、私たちやみんなが考えた企画や屋台に対しても都合がいいわけで。

門をくぐつて坂を上ると五号館が見える。その前の広場には各サークルや団体が企画した屋台が立ち並んでいる。

「コンロちゃんと火がつくー?」

「材料のジャガイモはちゃんと確保できたんだろうなー」

あちこちの屋台から確認の声が聞こえてくる。

中庭には「ミス文京大学コンテスト」などメインイベントに使う舞台が設置されていた。

「舞台はあと照明の確認だけですな」

「それは今夜みんなでやろうね」

今日は文化祭の準備期間として授業は全て休講である。そのため私たちは一日中最後の準備に追われた。

「えー、これまで文化祭の準備お疲れ様でした」

午後十時三階の二百人くらいが入れる教室でタカビーは文化祭実行委員全員を集めた。

「しかし、これで終わりじゃない。明日から、いや今からが本番だ。準備がちゃんとできていたとしても本番に問題があったら台無しだ。本番中実行委員は自分たちが関わる企画はもちろん、他の企画に対しても配慮を怠らないこと」

「また、文化祭が終つても俺たちの仕事は終わりじゃない、文化祭

の後片付け、報告も俺たちの仕事だ、それらが全て終わって、家に帰るまでが文化祭だ」

みんな一斉に「はい！」と声を揃える。

「おい、なんだみんな！ さっきのは笑うところだぞ」

タカビーが慌てた声を上げた。

あー、きつと「家に帰るまでが文化祭」って所で突っ込みが欲しかったのだろう。というかこのタイミングでは分かりにくい笑いだぞ。

タカビーの「分かりにくい笑い」が出たところでいよいよ文化祭
！！

第四十七話 開会宣言

午前八時 。 昨日できたばかりの正門をくぐって文化祭室へと向かう。

「じゃがいもちゃんと茹でたかー」

「くしの数ちゃんと足りているー？」

あちこちの屋台から準備に追われる学生達の声。

「今日から始まるからみんな必死だねー」

「もーう、何言ってるのかっちゃん、私たちもこれからが大変なんですよ」

しいちゃんが私の右袖を引っ張る。

「そうだね、私たちもこれから本番だった」

呑気そうに屋台の周りを駆け回る学生達を眺めている場合ではない。

「今日は初日だから、オープニングイベントと、『ミス文京大学コンテスト』の候補者紹介が私たちの主な仕事よ」

「ここ一週間、私たちの仕事は司会を務めるイベントのリハーサルが大半だったからな。何を言うかは台本を見なくても分かっている。(まあそれが当たり前なんだろうけど)」

「そうだね、文化祭のスタートは私としいちゃんが仕切るんだから！」

意気揚々と私はしいちゃんを連れて四号館の階段を駆け上った。

それから二時間後 。 中庭に造られたメインステージの右袖に私としいちゃん、そして亜由美とタカビートの姿があった。

「いよいよ本番なんですね……」

いつもは淡々と言う亜由美の声に緊張が混じっている。

「最初の最初、開催宣言をかつちゃんとしいちゃんが言うんだからな、失敗するなよ」

タカビーがプレッシャーとも励ましとも区別がつかないことを言う。

「時間ですよー」

イベント企画チームの高尾君の声が聞こえる。私としいちゃんはマイクを片手に勢いよくステージへと飛び出した。ただでさえ狭いののにステージのせいでさらに半分くらいの広さになってしまった中庭に予想以上のお客さんがいた。

まだ（正確には）文化祭スタートしていないのにこの客の入りはなんだろう。ただどこで緊張するわけには行かないのだ。

「どうもー司会の御徒真知でーす」

「同じく司会の椎名真智でーす」

私としいちゃんは心の中で「せーの」と息を合わせる。視界の片隅にしいちゃんの視線を合わせるアイコンタクトも忘れない。

「二人合わせて『タウンガールズ』でーす！」

「御徒真知（御徒町）」と「椎名真智（椎名町）」両方とも町の名前だから「タウンガールズ」かつて私が夢で見たユニットだ。

正直スベるかと思うけど、お客さんからは拍手と喝采、反応は上々だ。私たちのネタが面白かったのか、それとも文化祭の開始にテンションが高まっているのかどちらかなのかは分からないけど……。

「さーて、しいちゃん。いよいよ文化祭がスタートしますねー」

これから漫才でも始めるかのような台詞を私はしいちゃんに言う。

「そうですねー、今日から三日間。文京大学はお祭り、お祭りフィバーですよ」

しいちゃんが台本以上のノリのいい反応を見せる。

「その文化祭の開会宣言を私たちがするわけですよー」

「ええ、もの凄く光栄なことですね、かつちゃん」

と、ここまでノリノリでお送りしていますが、特にボケとかネタとか用意していません。すいません。

だから互いを見ていた私たちは視線をお客さんのほうへと戻し、

「それでは『東京とともに六十年』文京大学文化祭スタートです！
私たちが宣言をするといきなりステージの後ろから耳を劈くような爆発音が三発も！

……つてよくよく考えてみたらここで花火が上がるんだった。リハーサルでは実際に花火なんて上げてないから初めて聞くけど、すごい音だな。

「文化祭はいろんなイベントがあるんですね。しいちゃん」
花火の音に怯えた心を奮い立たせながら、私はしいちゃんに話しかける。

「そうですね、初日の今日は『ミス文京大学コンテスト』、明日二日目は『ハンドレッドマン』からお笑い芸人が続々登場。そして最終日の三日目はボクシング世界チャンピオン町田イラケン選手の公開スパーリング。『ミス文京大学コンテスト結果発表』とイベントが盛りだくさん」

「もちろん、文化祭に参加してくれる団体、グループが独自に用意している企画も毎日開催されます」

私は背中に隠していたパンフレットを取り出した。

「詳しくは入り口やインフォメーションで配られるパンフレットをご覧ください」

と、ここで再び私としいちゃんのハモリ。いつものことながら私が入ルトでいいちゃんかソプラノ。

「それではみなさん、文京大学文化祭をお楽しみくださいーい」

拍手と歓声の中、私たちはそそくさとステージの袖へと戻る。

「いやー、ウケてよかったー」

「一昨日かっちゃんから『タウングールズ』の話が出たときは、ほんとにウケルのかとハラハラしましたが、やってみるものですね」

亜由美の声に安堵の気持ち混じっている。

「いやー、ただ文化祭スタートでテンションが高くなっているだけで、ネタ自体はあんまり聞いていなかったんじゃないの？」

う……、私が懸念していることをタカビーがするどく指摘した。
「二人は夕方の『ミス文京大学コンテスト』まで仕事がありませんので、ゆっくりしてください」

本当は各団体・サークルが企画しているイベントや屋台が滞りなく進行しているかの巡回、また何か問題が起きたときの対応のために待機していないといけないのだけど、それは他のイベント企画メンバーにお任せだ。司会者の仕事をしているものの特権と言っべきか。夕方までは普通の参加者として文化祭を楽しんでもいいわけがある。

文化祭実行委員の一員として心のどこかに各イベントをチェックする気持ちを持たなければ。

「打ち合わせもあるので、四時には文化祭実行委員本部へ戻ってきてくださいね」

文化祭の開催期間は二百人規模の教室の一つを本部として借りてそこに文化祭実行委員が交代で常時待機している。

「分かったー、それまではゆっくりさせてもらうよー」

「何かあったら本部に駆けつけるから連絡頂戴ね」

ステージの袖を出ると、中庭ではたくさんのお客さんと屋台の店員がたくさん行きかっていた。

「唐揚げいかがですかー」

「クリームシチューが三百円です」

「ワッフルいかがですかー。チョコレート、生クリームといろいろトッピングできますよー」

宣伝の勢いは、東都大学のそれと大差ない。東都大学は通路が広がったけど、うちの大学はそれが狭い（タダでさえ狭いの）にステージや屋台でさらに狭くなっている！（からもう人と声が凝縮されているという感じだ。

「まずはどこに行きましょうか。しいちゃん」

「はるちゃんのサークルがやっている屋台に行こうよ」

「ダンスイベントがあるのに屋台を出すって、かなり気合入ってい

るよね」

文化祭に参加する団体・サークルは多いけど、複数の企画をやるのは少ない。

「まあ屋台や出店は毎年出していたから。今年もやるっ、ってことなんじゃないのかな」

と言うわけでまずははるちゃんがいるであろう屋台へ向かうことにした。……けど

「しいちゃん、人が多すぎてなかなか前に進めないよー」

「始まったばかりで人が多いんじゃないのかな。少し時間を置いたら落ち着くかも……」

少し時間を経たらと言っけど、そしたら時間はお昼時だ、もっと混むかもしれない。

「まあお昼にはちょっと早いからねー、しばらく他のところぶらぶらしようか」

しいちゃんがパンフレットのページを適当なところで開く。

「とりあえず、この目の前にある一号館に入ってみる？」

「そうだね、まずはここから入ろうか」

行きかう人をよけつつ避けつつ私たちは一号館へと入った。

第四十七話 開会宣言（後書き）

お待たせいたしました、いよいよ文化祭がスタートです。

第四十八話 いろいろ企画を回ってみよう

お昼ご飯までまだ一時間ほどある。

というわけで私としいちゃんは一号館をぶらぶらすることに決めた。ぶらぶらすると言っても、この大学の「もやもや」しているところを探すわけではないからね。

「さてと、まずはどこへ行きましょうか」

私は実行委員でありながら、パンフレットを持っていないのでしいちゃんが頼りだ。

「うーん、とりあえず鉄道倶楽部行ってみようか」

「え、なんで鉄道!?!」

他にもいろんな企画があるのに。

「だってかつちゃん鉄道好きでしょ」

しいちゃんは不思議そうに私を眺める。私が鉄道好きだと思っていたのだろうか。

「違うわよ、私は全然鉄道に興味が無いって」

キハとかモハとかそんなの全然知らないってば。

「まあとりあえず行ってみようよ。確か電車からの車窓風景を酒飲みながら楽しむ企画だったよね」

ああ、そういえば面接のときに言っていたな、そんなぬるい感じの企画。

「『酒を飲む』って、私たちはこの後仕事あるからお酒飲めないよ。特にしいちゃんはお酒を飲んだら危険だ。」

「分かっているって、お酒は飲まないから行ってみようよ」

しいちゃんは私の肩を軽く叩くとパンフレットを片手に階段を上っていった。

「毎度おなじみ鉄道倶楽部です」

いや、だから私たちにとってはおなじみじゃないから……。教室

に入った私としいちゃんを迎えたのは、鉄道倶楽部の部長さん。確か林田さんはやしだと言ったかな。

彼に案内されて入り口のカーテンをめくると……。うわーっ、大画面のプラズマテレビだー！

おそらく畳一畳分はあるだろうと思われる画面には雪景色が流れ続けている。その前には莫塵もくじんが惹かれていて男性が八人円陣を組んで座り、その円の中央に日本酒、ウイスキー、そしておつまみの類が置かれている。一応申し訳程度に教室の端に鉄道模型が置かれているとはいえ、これはほんとにただの酒飲みの会だ。

「お、鉄子てつこが二人も来たぞ」

カップ酒を右手に持った男の人が私たちを見て驚きの声を上げる。鉄子てつこって「鉄道ファンの女性」の総称なのだって。（後で林田部長から聞いた）

「いいえ別に私たち鉄道が好きなのわけではありません」

「えー、かつちゃん違うのー？」

どう見積もってもここにいる人たちに比べたら私の鉄道知識なんて月とスッポンよ。

「この人たちは文化祭実行委員の人だから、見回りに来たんだろ」林田部長は私としいちゃんの顔を覚えていたようだ。まああの面接以外でも文化祭の準備のために会う機会は何回かあったからね。

「えーと、小さいほうが『しいなまち』さんで、背の高いほうが『おかちまち』さんだ」

酒飲み達から「おお」との歓声上がる。

「西武池袋線と山手線じゃないか」

さすが鉄道ファン。「椎名町」駅の存在もご存知のようで。

「お、俺山手線のDVD持ってきている」

ウイスキーのロックを片手に持っている酔っ払いがバックから緑色（山手線カラーだろう）のDVDを取り出した。

「機器に入れて再生ボタンを押す」

「上野ー、上野です。宇都宮線、高崎線、常磐線、地下鉄銀座線、地下鉄日比谷線はお乗換えです」

上野駅のホームに電車が滑り込むと酒飲み達から歓声の声。

「あの向かいの京浜東北線は最新のE233系だろう」

「ああ、TVがついているやつな」

「あの乗り込むと新しい教科書のような臭いが『ぷーん』とするやつな」

すっかり置いていかれた私としいちゃんは後ろで会話の様子を眺める。

「かつちゃん、入っていかないの？」

しいちゃんが小声で私の左肘を突く。

「だからしいちゃん、私は鉄道オタクじゃないって」

あの人たちが話していることすっかり分からないもん。それに以前林田部長に「素人が」と鼻で笑われたし。

そうこうしているうちに画面の山手線の車両は上野駅を出発。しばらく並行する京浜東北線の青い車両がずっと画面の中央を支配したけど、再びコンクリート製のホームが飛び込んできた。

酒飲み達から三度の歓声。

「御徒町だ！」

「御徒町駅だ！」

「おおー、御徒町」

酒飲み達はそれぞれの声を上げながら私のほうをちらりと見る。

そしてスタンディングオベーション。とりあえず私は両手を上げて。

「い……いえーい」

と彼らに応える。

「おおー、ほんとだ御徒町だ」

「ちよつと、しいちゃんまで喜ばないでよ」

正直自分の名前でごんなに喜ばれたのは生まれて初めてだ。

「この駅の北口にある十円饅頭は美味しいな」

「いや、新潟米の鳥おこわだろう」

会話が御徒町駅そのものからその周囲のグルメの話題になっている。当然私としいちゃんも付いていけないわけ……。
というか山手線のDVDがあるのに、どうして西武池袋線のがなかったんだろう。

「さて、次はどこへ行きますか」

鉄道倶楽部の部屋を出た私たちは次の場所を探す。

「ここは一階だからそのまま体育館まで降りてみようか。最終日はイラケン選手の公開スパーリングで見られない企画があるから」

体育館か……。確か男子バスケット部が使用許可を得ていたな。ほんとは三日間とも使いたかっただろうに、最終日は私たちの企画で使用できないなんてちょっと申し訳ない。

という訳でちよつとした謝罪と見回りの意味も込めて体育館を訪問。確かここでは「ダンクコンテスト」を企画していたな。

体育館に入った私たちの目の前を背の高い男性が飛んでいく。バスケットボールを右手にかがけ、そのジャンプの軌道はバスケットゴールに一直線に吸い込まれていく。男性は空中で体をひねらせてゴールに対して後ろ向きになり、再び体をひねらせて正面に対する。要は空中で体を一回りさせたわけだ。

そして激しい音を立ててボールがバスケットゴールに叩きつけられた。男性はそのまたゴールに右手でぶら下がっている。ゴールもげないか？

「さあ、今のダンクシュートの得点は一体何点でしょう！」

バスケット部員らしい審判の方々が点数の書いたプラカードを上げていく。

「十点十点十点十点九点十点十点九点十点。合計で九十八てーん！」

モノマネ番組なみの滑舌のよさで点数が読み上げられていく。百点満点中九十八点ってかなり高い点数だぞ。

「合計得点が九十五点を越えたので、バスケット部から駄菓子をプレゼ

ンター」

「この辺りは縁日のほのぼのとし感じがする。」

「あ、成瀬部長だ」
なるせ

企画の準備のために何度も見ていた顔を発見するらしいちゃんは

「おーい」と声をかけた。

「あ……これは実行委員の方々」

成瀬部長はぺこりと頭を下げる。実行委員の私たちと企画者の関係ってなんか中央省庁のお役人と地方のお役人の関係みたいだな。

このまま美味しい店に接待してもらったり、大学卒業後の就職先を用意してもらえたりしないだろうか。

「このダンクコンテストって女の子の複数参加もありなんですよねー」

「ええ、力だけではなく頭を使うことも得点の基準に置いていますから」

「じゃあ私たち参加します」

あっさりらしいちゃんは参加費として三百円を成瀬部長の右手に置いた。ええーっ、しいちゃん。私たちって私も入るの？ 何か作

戦考えていたっけ？

「大丈夫だよ、かつちゃん。私の言うとおりにしていれば」

しいちゃんの身体能力の高さは私はたびたび目にしているのでここは信じることにしますか。

バスケットゴールから十メートル離れたところで私はしいちゃんの指示に従い、腰を浮かせて座る。

「じゃあ私がしいちゃんの肩に乗るから、しっかりと支えてね」

と、しいちゃんは私の右肩からゆっくりと足を乗つけた。肩にしいちゃんの体重を感じる。しいちゃんは背は小さいので一見体重は軽いように思えるが、服の下に隠されたその体は鍛えられた筋肉に包まれているため、決して見た目より軽いわけではない。

正直な話、ちょっと私がつっかりと支えられるか自信がないのだが、私はしいちゃんの足首をがっしりと掴んだ。もう絶対離さない

ぞ。例え目の前で私が好きな鳥の唐揚げが揚げられようとも、石攻めに遭おうとも離すものか。

「はいかつちゃん立ち上がったー」

しいちゃんの足首をしつかりと掴みながら、そしてちよつとよるめきながら立ち上がる。その時私はある重大な事実気がついた。

「ねえしいちゃん、向きが逆じゃないの？」

そう、しいちゃんはバスケットゴールに背を向けて私の肩の上に立っていたのである。

「大丈夫だよ、これも計画通りだから」

計画通りか……。 「計画通り」と聞いて私は一冊のノートで新世界の神になろうと企んだ大学生の歪んだ顔を思い出した。

「はい、かつちゃん。ゆつくりとゴールに向かって歩いてー」

私は恐る恐る右足を前に出す。

「それじゃあ今週の『タウンガールズロボット』スタート！」

私としいちゃんが合体したからロボットということなのだろうか。しかも二人の名前を取って「タウンガールズロボット」ね。それにしても「今週の」って私は「羊、羊」と言いながら前に歩かなければいけないの。そしておだてられた豚が木に登るって言うの？

「えーと……、羊、羊……」

足を前に出すたびに私は「羊」の言葉を呟きながらバスケットゴールへとゆつくりと歩き出した。

しばらく歩いたところで。

「はいかつちゃん、足首離してー」

しいちゃんの言葉に従い、私は素早く彼女の足首から手を離す。

次の瞬間、私の肩が軽くなった。

そして私の目の前にはバスケットゴールに向かって空中を舞うしいちゃんの姿が。しいちゃんは両手でボールを持ち、体をひねらせてゴールの正面に体を向ける（要するに空中で体を百八中度回転させたのだ）。

しいちゃんはそのままバスケットボールをゴールに両手で叩き付

けた。そのまま両手でぶら下がって「ふう」と、可愛い声を漏らす。「さあ、今の二人のダンクシュートの得点は一体何点？」

司会者の声と共に点数が書かれたプラカードが上げられる。

「十点十点十点十点十点十点十点十点十点。合計で百点満点！」

えーっ、満点っていくら女性ってことを見ても甘すぎないか！。

それとも「タウンガールズロボット」の動きが面白かったから？

「百点を取った二人には賞品として、我が男子バスケット部が製作したバスケのユニフォームをプレゼント!!！」

もらったバスケのユニフォームはちゃんと私たちの体系に合わせてものだった。

しかし、このバスケのユニフォーム一体いつ着るといふのだろう。ためにこれを着た状態でタカビーか姉小路会長捕まえて「お帰りなさいませ、ご主人様（もしくは先輩）」と言ってみようかな。

一体どんな顔をして驚くことやら。

第四十九話 ルネサンスの惨劇（前書き）

今回、タイトルにありますようにちょっと過激で残酷な表現があります。かなり柔らかく書いたつもりですが、ご注意ください。

第四十九話 ルネサンスの惨劇

体育館を出るともう時間は十二時、ちょうどお昼の時間だ。

「それじゃあしいちゃん、はるちゃんのサークルがやっている屋台に行こうか」

「はるちゃんのところはオムソバを作っているね」

オムソバならお腹一杯になれそうだ。

「よし、行くぞ……って相変わらず人がいっぱいだなー」

「ドーナツ今なら五個で二百円ですよー」

「焼き鳥いかがつすかー、三本で百えーん」

ただでさえ狭い大学の中庭や外の通路に屋台がひしめき合っているのだからさらに狭く感じるのなんの。

「しょうがないよ、お昼時だもん」

これじゃあ時間を避けるためにあちこち回った意味が無いじゃない。

それでも空腹には負けてしまう。しょうがなく人ごみを掻き分けながら。はるちゃんたちがいるであろう屋台へと向かう。はるちゃんの屋台は中庭の通路の一番奥、いつも私たちが三時にお茶を飲む喫茶店の目の前にある。

人ごみを掻き分けること一分。目の前に「オムソバ」と書かれた屋台を発見。

「はるちゃん、オムソバ食べに来たよー……ってあれ？」

笑顔で店の前に立ったのはいいが、屋台にいたのははるちゃんでも明石先輩でもなく浅野先輩と数人の女子学生だった。

「はるちゃんと明石先輩はいない時間帯なんですか？」

しいちゃんが小さい背を伸ばして浅野先輩に尋ねると

「遙と真奈美は屋台に出ないよー。二人はダンスの特訓があるから」
「特訓ってそんなに大変なダンスなんですか？」

二人で小さな輪に入ったり、頭の上に火のついた蠟燭をつけて踊

つたり……、なんかダンスと言うよりマジックショーだな、こりゃ。「前にも言ったけど、二人は特別に二人だけのダンスタイムがあるからねー。しかもイベントのトリを務めるから。そりゃ大変なプレッシャーだと思うよー」

焼き蕎麦を炒めながら浅野先輩は呑気そうに答える。二人ならやってくれるという安心感があるのだろうか。

「うーん、時間があつたらその二人のダンスだけでもいいから見に行きたいなー」

「かつちゃん、プログラム見ていないの？ ダンスの時間は私たちの出番はないよ」

ということとは、裏方の仕事があればはるちゃんたちのダンスイベントを最初から最後まで見られるというわけだ。

「まあ二人は実行委員の仕事があるから全部は見られないと思うけど、時間が空いたら見に気なよ。うちのイベントは途中入場も退場も可能だから」

焼き蕎麦が薄い膜のような玉子焼きに包まれ、それを鉄へらで大きく二つに分け、それぞれ紙皿に載せていく。これらの作業を話しながらするなんて、浅野先輩は器用だな。

「はい、オムソバ二人前お待ち！」

「わーい、いただきまーす」

浅野先輩が差し出したオムソバと割り箸を私たちはゆっくりと受け取る。

湯気が立ち上る卵の膜を箸で切り、焼き蕎麦に包んで口に入れる。浅野先輩が自信満々に作っただけあってオムソバの味は美味しいのなんのつて。

「おいしー、これだけ美味しければかなり売れるんじゃないですか？」

「まだ店開いてから三時間も経っていないけどお客さんが多くて嬉しい悲鳴を上げたいくらいよ」

「すいませーん、オムソバ二つ」

「はい、いらつしゃいませ」

他のお客さんが来たので、私としいちゃんは割り箸を啜えながら浅野先輩の屋台を後にした。

お昼ご飯のオムソバを食べた後でもまだ私たちの出番まで時間がある。そこで私としいちゃんはもう一度一号館をぶらぶらすることに。

「次はどこにいこうかね」

「そうだねー、少ないお金で時間がかかるところがいいなー」

しいちゃんの金銭感覚が主婦なみになっている。

パンフレットを見ながら二階にあがり、エレベータホールを通ると目の前に「中世の館」と書かれた看板が。

「……しいちゃん、これって『ルネサンス！』って言って入るべきなのかな」

「いや……、そこは『ボンジュール！』でしょ。かつちゃん」

挨拶（？）の言葉は違えど、この教室に入るという点では暗黙のうちに意見が一致した。

扉を開けて中へと入る。

「ルネサンス！」

「ボンジュール！」

自説を曲げない私たち。

中は真つ暗で奥の様子が分からない。というか、黒いカーテンで目の前が遮られており、ダンボール製の看板が天井から下げられていてそこには「順路」と書かれている。その看板が指し示す方向を見ると、何か不気味な感じのする暗い道が。これってもしかして……。

「しいちゃん、これは……いわゆる……」

「お化け屋敷というやつだね。どうしよう……、怖いな……」

私はお化けと言うのが苦手なのは既に話したと思う。当然、お化け屋敷も苦手なのだが、しいちゃんの怯えようはそれ以上だ。

「えーと、それじゃあ引き返しますか」

「そうだね、帰ろう」

と、入ってきた扉を開けて帰ろうとしたのだが、誰かが外側から扉を押さえているのか開かない。

『お化け屋敷の道は一本道。引き返すのは許されないことでルネサ
ーンス』

とどこからか声が聞こえてきた。どうやら私たちの様子を監視しているらしい。しかし、それにしても強引な語尾だな……。

「しょうがない、前に進むか」

「そうだね、かつちゃん。進むにあたってお願いがあるんだけど…

…」

しいちゃんは少しもじもじした様子で私を見る。

「うん、しいちゃんどうした？」

「私が前を歩くから、しいちゃんは私の後ろろびったりとくつついて歩いてくれない？ そして私の両腕をがっちり押さえて欲しいの」

「こ……こんな感じでいいのかな」

私は小さなしいちゃんの背中にびったりと張り付き、しいちゃんの手を掴む。

「そう、その感じで歩こう。私怖くてお化け殴っちゃうかもしれないから、その用心」

しいちゃん曰く、過去に当時付き合っていた彼氏とお化け屋敷に入ったとき、怖さのあまり出てきたお化け全てを殴り倒してしまい、そのうえ彼女を止めようとした彼氏まで殴ってしまったということだ。お化け屋敷の人は私たちを帰したほうがよかったのじゃないのか？

「しいちゃんの腕を完全に押さえられる自信はないけど……。頑張ってみるよ」

しいちゃんの動きに合わせて私はお化け屋敷の中へと入った。

『まずは「魔女狩りのコーナー」でルネサーンス、中世は怪しげな

予言や行いをするものを「魔女」とみなし、裁判や拷問に掛けて最終的に処刑したのでルネサンス」

「魔女狩りのコーナー」と言うけど展示しているものは何もなく、相変わらず真つ暗な空間が続いている。そして中世のお化け屋敷なのに、日本のお化けが出てきそうな太鼓の音が流れている。そして気の抜けるナレーションの語尾。

『魔女として処刑された有名人といえば、「ジャンヌ・ダルク!」』
その瞬間、天井から棒に縛られた女性が振ってきた。

「キヤー! いやー」

早くもしいちゃんがその物体を殴ろうと手を動かす。

「しいちゃん、落ち着いてよ。これは人形だよ」

私もお化けは怖いけど今はしいちゃんのほうが怖い。しいちゃんは吊るされたその物体をしばらく眺めていた

「ほんとだ、人形だね」

と、涙目の笑顔を私に見せた。

その後もこのような感じでお化け屋敷は続いた。気の抜けるナレーション、お化けを殴ろうとするしいちゃん、それを力いっぱい抑える私。時々しいちゃんは

「キヤー! いやー! うわーっ! わーっ!」

とお化けに向かって叫ぶことも

「しいちゃん、いくらなんでも叫びすぎだよ」

「いや……殴る代わりに思いつきり叫べば殴らなくてもすむかなって……」

私はしいちゃんのことばかり気にしてお化けどころではなかった。やがて出口と書かれたダンボール製の看板と、赤いカーテンが私たちの目の前に現れた。このカーテンをめくったら、お化け屋敷は終わりと言つことだ。

「あー、やっと出口だよ。しいちゃん」

「そうだね、一回も殴らずにすんでよかったよ」

一度だけ、骸骨の鼻先で寸止めしたけど。あの骸骨は学生さん

がやっていたから、直撃していたら鼻血どころではなかっただろう。
「それじゃあ、しいちゃん出るよ」

わたしはしいちゃんの両腕から手を離すと、赤いカーテンをめくった。差し込んだ光が眩しい。

『ルネサンス！ よくぞここまでたどりつきました。ルネサンスの時代になって人間は宗教に縛られない自由な学問や思想を持つという運動が起こったのでルネサンス』

そこは今までの真つ暗な世界とは違った明るい世界　　というかただの教室の風景だった。

「やっとゴールだけであっけない感じだね」

「うん……、お化け屋敷もそうだけど、この出口は手抜きって感じかな」

私たちの冷静な評価にもめげずにナレーションは続く。

『新たな学問と思想　、人間はいろいろなることに興味を持つようになったのでルネサンス』

『例えば人間の体の構造とか……』

その瞬間、天井から何かが降ってきた。

「いやーっ！」

しいちゃんがすかさずその物体を殴る。

ゴールに到達していた安心感から私はしいちゃんの腕を自由にしていた。油断していたのだ。その油断があんなことになるなんて。

私の目の前に倒れているのは人、いや「人間だったモノ」だった。全裸であるそのモノの腹はやぶれ、「その中に入っていたモノ」を辺り一面撒き散らしている。

頭は半分が壊れていてその中身　　私たちが物事を考えたりするのに使う臓器　　がその近くに転がっている。

目は大きく見開かれまるで断末魔の瞬間を目に焼き付けているようだ。

しいちゃんはとんでもないことをしてしまった。しいちゃんのパンチがこの男性であったヒト（表情や髪型からそう推察される）を壊してしまったのだ。

ヒトハコンナニカンタンニコワレルノダロウカ？

私の頬を一筋の涙が落ちていった。

「もうかつちゃん、ボーツとしていないで手伝ってよー」

しいちゃんが私の肩を揺らす。私は我に帰って

「手伝うって、一体何をすればいいのよー」

と、涙声で応えた。

「これを元に戻すのよ」

「無理だよ……、しいちゃん。死んだ人はもう元には戻れないよ……」

私たちは天才無免許医師でも魔法使いでもない、ただの人間だ。

「何言ってるのかつちゃん、よく見なさいよ」

と、しいちゃんは臓器の一部を私に見せつける。

「よく見なさいって、これは内臓でしょ」

「そう、内臓の模型よ」

モケイ？ もけい……。模型……。そうか、これは人体模型だ。

「なーんだ、人体模型か……。よかった……」

私の目から安堵の涙が零れ落ちた。私の大切な友達は殺人者にならずにすんだのだ。

「かつちゃん、何泣いているのよー」

「だって……。しいちゃんがとうとう人を殺しちゃったと思って……」

しいちゃんが持つ内臓を触りながら私は泣きじゃくる。

「もう、人間がそんなに簡単に壊れるわけ無いでしょ。私のパンチでこんなになるならイラケン選手がパンチしたらもう粉々だよ」

私は、イラケン選手が殴った場合を想像して、背筋が寒くなった。

「ひぐらし」の泣く村でもそんな粉々な死体はなかったであろう。
「とりあえずかつちゃん、これを元に戻すよ。中の人は出てこないから、私たち二人が片付けることになるね」

「うん、そうだね。片付けて中の人に謝ろう」

人体は結構複雑で元に戻すのにかなりの時間がかかった。自然にその間は

「あーっ怖かった、やっと出口だよー」

と、安心してカーテンを開いたお客さんに対して

「ルネサンス」

「ぎゃーっ!!」

と、最後のお化けになってしまったのは言うまでもない。

第五十話 ミス文京大学コンテスト開始

人体模型を復活させて中世の館を出た私たちは文化祭室へと向かった。

そろそろ私としいちゃんの次の仕事が始まるうとしている。

「あ、来ました。時間通りですね」

亜由美とタカビーが先に文化祭室に来ていた。早速プログラムを私たちに渡す。

「次は『ミス文京大学コンテスト』です。文化祭の定番の企画ですが、それだけに毎回オリジナルティが求められている。企画です」「まあ、その辺は『タウンガールズ』の絶妙のボケとツッコミでなんとかしてくれ」

あのー、タカビー。私たちは別に漫才コンビじゃないんだけど……。だから年末の一千万目指して精進しているわけじゃないし。というかどっちがボケでどっちがツッコミよ。

「でも今日は紹介だけであとはほとんど参加者にお任せってところじゃないの？」

しいちゃんが首を傾げる。この「ミス文京大学コンテスト参加者紹介」のあとお客さんの投票が開始され、最終日最も多く票を集めた女子学生が「ミス文京大学」に選ばれる、というわけだ。

そのためこの紹介コーナーではアピール時間を設け、参加者自身が考えた独自のアピールをするのだ。つまり私たちより参加者任せの部分が多い。

「確かに参加者に任せる時間が多いけど、それをつつがなく進行させるのは司会者の役目だろう」

「確かに最近のバラエティ番組では司会者の能力が問われるところがありますね」

今日の亜由美とタカビーはやけに意見が合う。この二人に司会を任せてもいいんじゃないか？ とちょっと思ってしまうが、そんな

ことをしたら私としいちゃんは何も仕事をしないことになってしま
うので自重しようつと。

「それじゃあそろそろステージのほうへ行きましようか」
パンフレットを一通り目にした私は四人を部屋の外へと促した。

ステージでは学生や周囲に住んでいる人が参加の「漫才コンテス
ト」が行われている。参加者の年齢は小学生から七十五歳の夫婦ま
でと幅広い。今ちょうど最高齢の老夫婦漫才タイムである。二人と
も小刻みに震えながらマイクに向かって精一杯の声を上げる。

「いやーお祖父さん、十一月に入ってめつきり涼しくなりましたね
ー」

「そうじゃのー、十一月でこれだけ涼しいんだから、一月、三月、
五月、八月となったらどれだけ涼しくなるんじゃのー？」

「うわーお爺ちゃん、それは定番のボケの逆をやっているだけじゃ
ない？」

「なんでやねん。八月は暑いやんけ」

それまで標準語を話していたお婆さんがツツコミになっていきな
り滑らかな関西弁に変わった。そしてそれまでの動きとは思えない
ほどの素早さと強さでお爺さんの胸に手の甲を叩きつける。

「うぐつ、げほつ」

当然、激しい胸への衝撃にお爺ちゃんは咳き込むわけで……。

「何咳こんでんねん、お前。漫才のプロちゃんか？ 一緒に漫才
グランプリで一千万取るう、って言ったのお前ちゃんか？」

胸を押さえて苦しむお爺ちゃんにお婆ちゃんは労わりの声をかけ
ることなくさらに厳しい言葉を浴びせる。このお婆ちゃん、鬼嫁だ
な。お客さんもお爺ちゃんのことか心配なのかくすりともしない。

「ほら、お前が苦しんでいるからみんなが心配して笑えんやんか。
お前もプロなら客の一人や二人くらい笑わせてみい」

パンフレットによると、二人は漫才師ではなく駄菓子屋を経営、
と書かれている。

お爺ちゃんは暫く胸を押さえていたが、やがて蹲り激しく体を震わせた後

「げーんき満々元気つき！」

と、いきなり立ち上がりて叫んだ。突然のお爺ちゃんの豹変に私としいちゃんを含めて、観ているお客さんも啞然としている。さっきの咳き込みは演技だったのだろうか？ それともプロ（ほんとはプロじゃないけど）の根性を見せたってこと？

「どうも、ありがとうございましたー」

このお爺ちゃんの渾身のギャグをオチと見たのか二人は頭を下げてステージを去っていった。結局この漫才で笑った人は一人もいなかった。お婆ちゃん、一千万の道は厳しいぞ。

「さ……さあ、これで全ての漫才が終了しました。お客さんのみなさん、この中で一番面白いと思っただ漫才コンビをお配りした紙に書いて投票してください」

司会の高尾君が戸惑いながら、進行を続ける。さっきの二人が大トリだったのか。物すごくやりにくいな！

と、私は高尾君に同情の念を感じたのだが、それが決して他人事ではないことを私は後で感じるのであった。

投票が終わり、優勝したのは大学三年生で同じ学部、同じゼミで結成したコンビだった。

「やったー！」

「年末は歌合戦出場を目指します！」

「なんでじゃ！そこは一千万だろ！」

「『ベルモントユニバース』のお二方、おめでとございます！」

さあ『漫才コンテスト』の次は『ミス文京大学コンテスト』の開会式です

いよいよ私たちの出番だ。私はステージが誰もいなくなったのを確認すると、しいちゃんの手を引っ張ってステージへと駆け上がった。

「どうもー、本日二度目の登場『タウンガールズ』です」
この文化祭で「タウンガールズ」という名前をものにしてやるんだから！

「ここからは『ミス文京大学コンテスト開会式』のコーナーです」
「本日より三日間『ミス文京大学』を目指して八人の女子学生の熱い選挙戦が繰り広げられます。どこかの大国の選挙戦より熱いものにしましょうねー！」

一応大学生なので、ある程度時事ネタを取り入れないと。
「まずは今年の『ミス文京大学』肝属玲奈さんきもつきれいなより優勝トロフィーの返還です」

しいちゃん言葉に私は姿勢を正す。私がトロフィーを受け取る役だからだ。ステージの反対側からトロフィーを抱えた肝属さんがゆっくりと歩いてくる。さすがは今年の「ミス文京大学」目元はくつきり鼻立ちもすつきりしている。明石先輩が見ていたら、ステージに飛び込んで抱きついてしまうことだろう。

しかし、それにしても肝属さんには気の毒なことをしてしまった。優勝トロフィーの返還と言っても、肝属さんはこのトロフィーを手にしたのはほんの数分前だからだ。なぜなら前にも話したけど、優勝トロフィーは二年前「ミス文京大学」である「雪子さん」とともに謎の失踪を遂げ、そして文化祭の一ヶ月前に突然戻ってきたのだ。つまり肝属さんは去年このトロフィーを貰っていないのである。

「今年の『ミス文京大学』の名の下に、この優勝トロフィーを返還いたします」

肝属さんははっきりとした口調で言う。トロフィーを私へと差し出した。

「肝属さん、一年間お疲れ様でした」

結構な重量のあるトロフィーを抱えて私は頭を下げる。肝属さんは私に、そしてお客さんに一礼すると、ゆっくりとした足取りでステージを後にした。

「肝属さん、どうもありがとうございました。それでは今年の『ミ

ス文京大学コンテスト』候補者の登場です」

しいちゃんの声に促されて候補者の八人がステージに現れる。その中には私と高尾君がスカウトした石川ヘレン先輩と、女子スケバ
ブ……じゃなかった、女子バスケ部の浩子さんの姿もある。

浩子さんはメイド喫茶の最中出てきたのであろう、メイド姿のま
まだ。

「それでは各候補者のアピールタイムです。まずはエントリーナン
バー一番、石川ヘレンさん」

背の高い石川先輩がしゃんとした歩き方でステージの中央へ立つ。
「Hello everybody（こんにちは、みなさん）」

日本とアメリカのハーフである石川先輩は突然流暢な英語を話し
始めた。

英語を話しながら頭を触り、胸・腰・そしてお尻と……。どうや
ら自らの身長とスリーサイズをアピールしているようだ。

お客さんの表情を見ると、英語なのでチンパンカンパンな表情の
人もいれば、うんうんと頷いている方もいる。両極端だ。

「Thank you for hearing the st
ory of me who doesn't consider
it（私の話を聞いてくれてありがとうございます）。私に投票
お願いします」

と終始英語のスピーチだった石川先輩が最後の最後で日本語を話
して頭を下げると、お客さんからは一斉に歓声と拍手が。みんなほ
んとに英語分かっていただけなのか？ 私は半分くらいしか分からなかつ
たぞ。

そして私は聞き逃さなかった。お客さんの声の中に「ヘレン最
高やー！」という石川先輩の彼氏さんの声を。

「石川さん、ありがとうございました。続きましてエントリーナン
バー二番、澤田浩子さん」

浩子さんの苗字って「澤田」って言うんだ……。と思いつながら私
は石川先輩に変わってステージの中央へ立つ浩子さんを眺めた。

「女子バスケット部三年、澤田浩子だニヤ」

浩子さんは語尾に「ニヤ」をつけて話し始めた。メイド喫茶のキアラが抜け切れていないのだろうか、それとも最初からこの口調で話し、こういうものの支持層からの票を狙っているのだろうか。

浩子さんはアピールタイムの間ずっと語尾に「ニヤ」をつけて話し、

「みんな、浩子に投票してくれると嬉しいニヤ。それと私のいるメイド喫茶に遊びに来てくれるともっと嬉しいニヤ。一号館の三五号教室でやっているニヤ」

と、最後に抜け目なく自分の出店の宣伝もした。

「浩子ちゃん萌えー」

「店にも遊びに行くよー」

浩子さんのアピールはその「萌え」が好きな人たちの支持を早くも獲得したようだ。

こんな調子で参加者のアピールタイムは続いたのだが、最後の一人になって事件は起こった。

「それでは候補者もいよいよ最後の一人になりました。エントリーナンバー八番、きぬさか絹坂衣さん」

しいちゃんに呼ばれて出てきたのはそれまでの人とは違い背の小さい女の子だった。背はしいちゃんと同じくらいだろうか、髪は短く目は少々垂れ目。背の小さい人が好みの人の支持を狙っているのだろうか。

しかし、彼女が狙っていたのはそんなお客さんの支持ではなかった。彼女はステージの中央に立つなりとんでもないことを叫び始めたのだ。

「せんぱーい、私は先輩の事を愛してまーす。先輩も私に愛の言葉をかけてくださーい」

おいおい絹坂さん、これは「ミス文京大学コンテスト」であって、「合コンパーティー」ではないぞ？ 自分の好きな人ではなく、見ているお客さん全員にアピールしなくちゃ。

「先輩」と呼ばれた方はこのお客さんの中にはいないのだろうか、反応は無い。絹坂さんは構わず叫び続ける。

「せんぱーい、いないのですかー？ 彼女である私がステージにいるのですよー、当然観ている筈ですよー。返事をしないのなら、名前で呼びますよー、『さえが……』」

「ええい、公衆の面前でその名前を呼ぶなと言っのが分からないのか！ しかも一体何を言い出すんじゃないこの糞馬鹿がー！！」

突然、お客さんの後ろのほうから機嫌の悪そうな叫び声が、先輩いたんじゃない。しかし彼女に対してなんて酷い罵声だろう。

「おおーっと、ここで絹坂さんから突然の愛の告白だーっ」

事態を收拾しようと思ったしいちゃんが、ワンテンポ遅れた返しを叫ぶ。

「そして、絹坂さんの愛する先輩の登場だー」

あ、やっと追いついた。私もしいちゃんを助けなきゃ。

「出たー、先輩だーっ！ 告白された先輩だーっ！」

私としいちゃんの声にお客さんの視線が「先輩」に注がれる。

「ええい！ 見るな見るな！ 見世物ではないぞ」

残念ながら先輩、あなたは充分見世物になってしまったのです。

「せんぱーい、やっぱりいたんですねー？ 愛していますー！ 結婚してくださいーい！」

絹坂さんは満面の笑みを浮かべて先輩に叫ぶ。

「さあ、『先輩』は絹坂さんのプロポーズにどう答えるのか？」

もうどうでもいいや、という感じでしいちゃんは絹坂さんの叫びに応える。

お客さんの視線の中、「先輩」は不機嫌そうに真っ赤な顔で小さく頷いた。

「え、それはOKってことですかー？ もっとはつきりとした形で答えてくれないと困りますー！」

私は少々苛立ちながらも先輩に叫んだ。だってそうだろうこれは「ミス文京大学コンテスト」なのだ。それなのに一人の女の子の告

白の場に使われるなんて、進行がめちゃくちゃである。こうなったら盛り上がった形でなんとか決着をつけてもらわないと司会者として納得がいかない。

ところが先輩は私の問いかけに応えるところか何か愚痴を言い始めた。

「そもそも、何で、あいつはこんなところで結婚のプロポーズなんぞすんだ？ 普通、そーいうのは男からするもんだろ。それに俺たちはまだ大学生であって結婚には経済的自立や親戚への説明などが必要であり……」

「えーと、そう言った現実的な諸事情はおいといてください。今ここで、絹坂さんのプロポーズにOKするかどうか問われているのです」

現実的な問題？ そんなの関係ないわよ。私としてはこの場をどうやって盛り上げる形で決着付けるかでいっぱいいっぱいなんだから。

「そつだ！ 何をやっているんだ俺は？ これはミスコンだぞ！？ 公開告白ショーじゃないぞ！ 俺と絹の馬鹿馬鹿しい茶番なんぞ放っておいてミスコンを続ける！ 司会者は事態を收拾しろ！ スタッフは絹を取り押さえるよ！」

だからそうしたいけど、それがもうできないからこうやっているんでしょ。絹坂さんもそれを分かっているようで（というかそうなることを最初から目論んでいたのだろう）

「先輩。往生際が悪いですよー。私がここまでやってしまったからには、もう中途半端に幕を下ろすわけにはいかないじゃないですかー。そして、お客さんが望んでいるのは勿論、ハッピーエンドですよ？」

「ええと、そういうわけで『ミス文京大学コンテスト』の途中ですが、公開告白ショーになりましたー」

もういいや、ここは一旦公開告白ショーにしてしまおう。「先輩」の周りには一緒に見ている友達がいるらしく、なにかとはやしたて

ているようだ。

「ぐ、ぐぬぬぬう……。おのれ……。貴様ら、覚えていろよ……。」
と恨み節を言う先輩。いつのまにか一番後ろにいるはずの先輩の
前の人だかりは消え、自然にステージへの道ができています。

「う、ううー！ ああーっ！ もう、分かった！ 分かった！ も
う結婚だろうがなんだろうがしてやる！ これで文句あるまい！
思う存分見世物にしるー！」

「な、なんと先輩から結婚宣言が飛び出しましたー！」

ああ、良かった。なんとかこれで決着が付いたようだ。絹坂さん
はステージを飛び降り、「先輩」への道を一直線に駆け抜けて「先
輩」に抱きついた。

「えーと、これで全ての候補者のアピールタイムは終了しました。
最後の絹坂さんはご結婚されるということで失格となり、絹坂さん
を除く七人の中から『ミス文京大学』が決定します。みなさん、是
非投票してくださいねー」

絹坂さんには悪いが「開会式」をめちゃくちゃにしたので「失格」
である。まあ「先輩」から「プロポーズOK」の言葉を貰った彼女
のことだ。そんなこと痛くも痒くもないんだらうけど。

第五十話 ミス文京大学コンテスト開始（後書き）

五十回記念というわけではないのですが、番外編でコラボレーションを組み、時々話の中で登場していた雑草生産者様のキャラ「絹坂衣」と「先輩」を本編に登場させてみました。

この二人が何者か？ を知りたい方は雑草生産者さんの「厄病女神シリーズ」をご覧ください。

雑草生産者さん、三度のご協力ありがとうございました。

第五十一話 一日目と二日目の間

しいちゃんの殺人(?) 事件や、「ミス文京大学コンテスト」での告白騒動もあつたけど、一日目はなんとか無事に終わりを迎えようとしている。

「クリームシチュー残り僅か、一杯百五十円でーす」

「焼き鳥今なら五本百円でーす!」

今日作つた分をなんとか売り切ろうとしているのか、各屋台で一斉に値下げが始まっている。それを目当てにお客さんも屋台へと群がる。はるちゃんのサークルの屋台も同じような状況だろう。

その光景を傍目に見ながら私としいちゃんは文化祭室に入った。

「どうもお疲れ様でした!。『ミス文京大学』ではとんだハプニングがありましたね、なんとか乗り切れましたね」

亜由美が先に入って私達を出迎えてくれた。どこかの屋台で買ったのか、鳥の唐揚げやポトフライ、焼き蕎麦が数人分机の上に置かれている。これが私達の今日の晩ご飯なのだろう。その証拠に夕カビーがすでに唐揚げを頼張っている。

「まあハプニングというのはイベントに付き物だ。普通ならどうしようかと戸惑うところだが、よくぞいい具合に乗り切ってくれた」

あれはねー、ああいう風にしないとどうにも收拾がつかなかったからねー。

「そうそう、その『ミス文京大学コンテスト』、早くも票が集まっているんですよ」

「ミス文京大学コンテスト」は文化祭が開催される三日の間にお客さんが「この人が『ミス文京大学』にふさわしい」と思う人を記名して投票する仕組みになっている。どこかの国みたいに投票する人の名前の下に穴を開けるパンチカード方式にすると誰に投票したか分からなくなって裁判沙汰になってしまうからね、それは防がないと。

「投票の締め切りと結果発表までの間は一時間しかないので、すばやい開票作業が求められますね」

私としいちゃんは司会だからその作業には参加しないでいいけど、最悪お手伝いすることになりそうだな。

「あと当選した人にあげるだるまを用意しておかないと」

ほら、片方だけ目が描かれているやつ。

「もうう、かつちゃん。ほんとの選挙じゃないんだから……」

しいちゃんが呆れた声を上げる。

「今から発注しても到底明後日に間に合いませんよ」

亜由美は冷静に現実を語る。

「いつそ自分の瞼に目を描いたらどうだ」

タカビーは私に徳川十三代将軍の三人目の奥さんになれ、と言う。冗談のつもりで言ったのだが、三者三様のひどいツツコミを私にくれる。

「疲れたー。あ、みんなそろっているー」

かわちゃんとけーまが汗だくになって部屋に入ってきた。二人は総務係として文化祭で出たゴミの処分を中心に仕事していたのだ。

「二人ともお疲れ様、どうだった？ ゴミは」

しいちゃんが素早く紙コップにウーロン茶を注いで二人に差し出す。

「いやー、もう割り箸とか紙皿とか多いこと多いこと……」

ウーロン茶を受け取ったかわちゃんは一気にそれを飲み干す。

「あまりにも多すぎるから最終日に呼ぶ予定だったリサイクル業者を呼んで今日の分だけでも引き取ってもらったよ」

けーまも一気にウーロン茶を飲み干したが、冷たくしてあるウーロン茶に頭痛が走ったようだ。こめかみを押さえていかにも痛そうな表情を浮かべる。

「まあリサイクルに持っていったからいいけど、もしあれが全部リサイクルできなくてゴミとして処分されるとしたらとんでもない資源の無駄遣いだわ。まさにムダ、ムダ、ムダ使いー！！」

かわちゃんが突然白目をむいて叫びだす。どうやら浅野先輩が乗り移ったようだ。

「まあ、今日のゴミの量を考えると明日と明後日は今日以上の量になるだろうな」

まあ三連休だからね、お客さんが多く来るだろうな。

「それじゃあ明日も朝九時に集合ということで、晚ご飯食い終えた奴から解散！」

そう言い終えるとタカビーはさっさと部屋を出て行ってしまった。私達が入ってきたとき既に唐揚げを頬張っていたからな。一人で先に食べ終えてしまったのだろう。

「私は家にご飯があるからいいや」

私はこのメンバーで唯一の実家暮らしだから、食事の心配はしなくていい。

「私も一応作ってきたからな。いくつかお持ち帰りして帰ろう、亜由美」

用意していたのか偶然なのか、しいちゃんがタツパをバックから取り出して唐揚げとポテトフライを幾つかつまんだ。亜由美はここ数日しいちゃんや私の家にお泊りしている。着替えの服が無くなったので、それを取りにやっと昨夜一週間ぶりの帰宅を果たしている。

四号館から出て中庭のステージの前に出ると、何者かが私の体にぶつかってきた。

「うわー、かつちゃんだー！ 会いたかったよー！！」

ぶつかってきたのは明石先輩だ。今までずっとダンスの練習をしていたのだろうか、ちよつと汗臭い。

「明石先輩……、練習お疲れ様です」

「三人に会うのは久しぶりだね」

はるちゃんが明石先輩の肩越しに笑顔を見せる。そういえば、私としいちゃんと亜由美は文化祭の仕事、はるちゃんと明石先輩はダンスの練習でここ数日会う機会が無かったな。

「せっかく久しぶりに会ったんだから、『豚殿念』へとんかつ食べに行こうよー」

明石先輩が私に頼ずりをする。なぜか明石先輩は私と亜由美には抱きつくけど、しいちゃんには抱きつかない。しいちゃんに殴られるのを異常に怖がっているようだ。

「せっかくのお誘いですが、家にご飯を用意しているので……」

私としいちゃんが同時に同じことを言う。いつものことながら私が入ルトでしいちゃんがソプラノ。

「えー、せっかく会えたと言うのにつれない返事ー！」

はるちゃんが不満げに口を尖らせる。

「それじゃあしいちゃんの家に行って晩ご飯を食べよう！ それなら文句無いでしょ」

明石先輩が私に抱きついたまま、しいちゃんに顔を近づける。

「そうですね、先輩。最近ずっと学校に泊まりつきりだったし、たまには他の人の家に泊まるのもいいでしょう」「

図々しくはるちゃんが合いの手を入れる。

「えー、みんなしいちゃんの家泊まるなんて私だけ仲間はずれみたいじゃない」

「それだつたらかつちゃんもしいちゃんの家に来ればいいじゃない。ついでにかつちゃんの家の晩ご飯も持ってきて」

はるちゃんがさらに図々しいしかし私にはちよつとありがたい提案してくれた。

「しいちゃんが『いい』と言ってくれるなら私は構わないよ?」

以前にも晩ご飯を持ってしいちゃんの家にお泊りしたことはあるからね。

「よーし、それじゃあ荷物部室から持ってくるから三人はちよつとここで待っていて」

はるちゃんと明石先輩は楽しそうに四号館の階段を駆け上がった。いった。

私としいちゃんと亜由美は疲れた表情、明日も頑張るぞというよ

うな気合の入った表情、それぞれの表情を出して家路へとつく学生達を眺めながら二人を待った。

十分ほどしてはるちゃんと明石先輩が四号館の階段を駆け下りてきた。バックを持っているので、足取りはさつきより少々遅い。

「それじゃあしいちゃんの家にレッツゴー」

明石先輩がいつもの笑みを浮かべながら右手を元気よく突き上げた。

こうして私達五人はしいちゃんの家にお泊りすることになった。

晩ご飯はタカビーが用意してくれた唐揚げとポテトフライ。そしてしいちゃんが作っていたカレーライス。そして私の家から持ってきた鯖の味噌煮。うーん統一感が無いような気がするけどまあいいか。

明日も頑張ろうっと。

第五十二話 即興で漫才

午前八時五十分、私としいちゃんと亜由美、そしてはるちゃんと明石先輩の五人で文化祭の正門をくぐる。昨日と変わらず屋台では今日の売上げ分を作るための仕込み作業で忙しい。

「それじゃあ私達は練習があるので」

と、はるちゃんと明石先輩は四号館の地下へと降りていった。この下にはレスリング部用の小さな体育館がある。そこで二人は練習しているのだろう。

「じゃあまた、今夜」

しいちゃんが大きく手を振る。はるちゃんと明石先輩は今夜もしいちゃんの家にお泊りすることになったのだ。亜由美はほぼ毎日泊まっているし昨夜は私も入れて五人、五人で一つの部屋に寝るのは少々狭く感じた。

「さて、今日は『お笑いショー』以外は私達の出演はないね」

「そうだね、ステージ上の企画も他のイベント企画班の人たちがやってくれるし」

「今日二人はお客さんとして企画を楽しめそうですね」

「お笑いショーは」芸人さんを紹介さえすればあとは芸人さんが時間内にネタを披露してくれるので楽なものだ。

「それじゃあしいちゃん、今のうちにどこ回るか決めようか」

私はパンフレットを開いてしいちゃんに見せる。

「そうだね、昨日いけなかった女子バスケット部のメイドカフェに行ってみようか」

しいちゃんもすっかり「お笑いショー」後の楽しみを考えている。猫耳をつけて語尾に「にゃ」をつけるのが今時のメイドのスタイルなのかは分からないけど……。

「澤田さんの他にもいろんな格好をしたメイドさんがいるかもしれないよ」

メイドじゃなくて巫女さんの格好をする子がいるかもしれない、血のついた鉈を持った女子生徒もいるかもしれない。しかしこの私たちの楽しみは文長ホールに着いたときに大きく崩れてしまう。

「芸人さんがまだ来ない!？」

文長ホールの楽屋で私としいちゃんは高尾君よりとんでもない知らせを聞いたのであった。まさかあの大物司会者のように突然旅に出たくなってしまったのだろうか。

「ここへ来る途中の道路が事故のため渋滞して十分ほど遅れるそうです」

渋滞か……、そこまでは考えていなかった……。

「ほんとに十分で到着するのですか」

亜由美が高尾君を問い詰める。

「い、いえ自分は車に乗っていないのでほんとに着けるかどうか……」

高尾君が至極最もな、そしておかしな答えをする。車に乗っていたらここで私たちと話してはいまい。

「とりあえず芸人さんたちが来るまでなんとか場をつなげなくてはいけませんね」

亜由美がため息をつく。幸いお客さんはまだホールには入っていない。開場時間をずらして間を持たせるといって作戦もできるけど……。

「芸人さんがまだ来ないんだって?」

話を聞いたのかタカビーが楽屋にやってきた。

「そうなんです、事故で……」

亜由美が事情をタカビーに話す。

「……開場時間をずらして間を持たす方法もあるが、もう一つの作戦を考えないといけないな」

タカビーが私としいちゃんの顔を見てにやついた。

「もう一つの作戦って？」

十五分後、本来ならこの文長ホールのステージに立っている芸人さんがやつと楽屋入りした。着いたからといってすぐにステージに立てるわけではない、楽屋での準備時間がある。

開場時間をずらすのもお客さんから不満の声が出ているので、限界に近い。しょうがないのでお客さんを会場に入れて、芸人さんが出てくるまでの間に。

「どうもー、かつちゃんですー」

「おはようございまーす、しいちゃんですー」

「二人合わせて『タウンガールズ』ですー！」

いつものことながら私がアルトでしいちゃんがソプラノ。そう、私としいちゃんが「タウンガールズ」としてこの場をつなぐことになったのだ。

「えーと、本来ならば『お笑いショー』として三組の芸人さんが、ここでお笑いを披露してくれるはずなんですが、諸事情でやっといさつき楽屋入りしまして今準備をしているところです」

とりあえず、お客さんになぜ私たちが出てきたかを説明しないとブライディングが起こりそうだ。それどころか帰る人もいるかもしれない。

「そこでその間、この大学で一番仲のいいコンビである私たちが話をすることとなりました。まあ前説のようなものだと思って気楽に聞いてください」

そう前説、しいちゃんなかなかいい言葉のチョイスをしてくれたな。

「そんなー、一番仲のいいコンビだ何て言いすぎだよー。しいちゃん」

「何言っているのよー、私たちが一番仲いいに決まっているじゃない」

「じゃあお客さんの前で、その証拠を見せてよ」

「いいわよ、じゃあ私が何か言うから、そこから連想される言葉を一緒に言ってみようよ」

「分かった、しいちゃんじゃあ言ってみて」

「よし、じゃあいくよかつちゃん。『しかく』。『しかく』で連想する言葉を言ってみて」

「分かった。『しかく』ね、行くよー」

「せーの」

「弁当箱！」

危険物取扱者！
きけんぶつとりあつかいしや

「ちよつとー、しいちゃん何よ？ 危険物取扱者ってー」

「危険物取扱者は重要な資格よー、『ニトログリセリン』とかすごい危ないものを扱う人なんだからー」

「そうじゃなくて、『しかく』って言ったら普通『四角形のもの』を想像するでしょー」

「何言っているのよーかつちゃん、私たちは大学生でしょー。これからの将来に必要な『資格』を考えなくちゃいけないじゃない」

「いやー、それでも『危険物取扱者』はないわー」

「いーえ、『危険物取扱者』はこれから大人気の資格になるわよ、事実私の部屋の隣の人は爆弾作っているんだから。是非『危険物取扱者』の資格を勧めないと」

「資格を勧める前に警察呼びなさいよ！ 危ないじゃない」

「何言っているのよかつちゃん、危ないからこそ必要な『危険物取扱者』の資格でしょう？」

「分かりました、分かりました、私が悪かったよしいちゃん。危なくない程度に『危険物取扱者』の資格を勧めなさいよ。次は私がテーマを言うから合わせてよね」

「分かった。今度は合わせてよね、かつちゃん」

「それはこっちのセリフよ。それじゃあ『しかく』と来たから次は『さんかく』！ 『さんかく』でいこう」

「よし、それじゃあ一緒にいくよ」

「おにぎり！」

「ジェンダーフリー！」

「横文字ー！？　しいちゃん横文字ー！？」

「何をおどろいているのよ、かつちゃん？　『さんかく』と言ったから『ジェンダーフリー』に決まっているじゃない。というか私たちが女性よ、『ジェンダーフリー』について無関心なんて言わせないわよ」

「とりあえず、『ジェンダーフリー』がどう『さんかく』と結びつくのか教えてよ」

「もう、しょうがないわね……、いい？　戦後になって女性の社会的地位は戦前のそれより高くなってきたの。二十一世紀になった今こそ男女が共同で社会に『参画』^{さんかく}する体制を整えないと……」

「出たー、ここを出た。『さんかく』が」

「かつちゃん、私たちは大学生よ。『おにぎり』なんて小学生みたいなこと言っていないで、もう少し社会について考えなさい！」

「分かりました、私が悪うございました。もう少し大学生としての自覚を持ちたいと思います。それじゃあまた私がテーマを言っね。

これが最後だからね、ちゃんと合わせようね」

「そうね、最後くらいちゃんと合わせないと」

「それじゃあ『しかく』『さんかく』と来たから次は『まる』！」

『まる』よ！」

「『まる』ね……。かつちゃんちゃんと合わせてよ……」

「分かった、ちゃんと大学生らしい答えをするから」

「せーのー！」

「句点！」

「ボール！」

「しいちゃんー！！　なにー！？　『ボール』ってー」

「かつちゃん、『まるいもの』と言ったら『ボール』に決まっているじゃない……。かつちゃんこそ何よ、句点だなんて難しいこと言

って」

「句点は文章の最後につく丸（。）でしょー？ 私たち大学生でしかも文学部なんだからー。こういう答え普通出てくるでしょー」

「もーう、かつちゃん。大学生だからってそんな普段から難しいこと考えていちゃやってられないわよ。たまには遊び心を持たないと」

「もうしいちゃんとはやってられない！」

「どうもありがとうございますー」

お客さんのそこそこある拍手の中ステージを退場する私としいちゃん。ステージの袖では私たちが待ち焦がれていた一組の芸人さんの姿が。

「お疲れさん、よく場を持たせてくれた」

と、私としいちゃんの肩を叩いてステージへ向かっていった。お客さんからは大爆笑の嵐。ステージ上ではいっぱいいっぱいになっ
ていたので、お客さんの反応は分からなかったけど、たぶん私たちのとは違うものであったろう。

やっぱりプロと素人は違うな、と私は感心しながらステージの上の二人を眺めた。

第五十三話 目指せ、パーフェクト

芸人さんがステージに上がるまでの間を即興の漫才で繋ぎ、私たちの今日の仕事は終了。あとはお客として文化祭を楽しむだけだ。

(一応企画の監視って役もあるけど)

「それじゃあしいちゃん、最初に言ったとおり」

「女子バスケット部のメイド喫茶に行ってみましょうか」

と、パンフレット片手に一号館の三〇五号教室へ向かう。

「さすがメイド喫茶と名のつただけあつて混んでいるねー」

三〇五号室の前に着いた私としいちゃんが見たのはお客さんの行列。お客さんはいかにも秋葉原にいそうな人もいれば、仕事をサボったサラリーマンだろうかスーツ姿の人とさまざま。そして動物の耳をつけたメイド服姿の女子バスケット部員が「メイド喫茶最後尾」との看板を掲げて立っている。お腹につけた半円状のポケットも面接のときに見たとおりだ。

「えーと、待ち時間はどのくらいでしょう……」

私が尋ねるとそのメイドさんは

「だいたい三十分ぐらいかかるワン」

と、語尾に犬の鳴き声をつけて答えた。

浩子さんは猫キャラで、彼女は犬キャラ。どうやらメイドの他に付いている属性には様々なものがあるらしい。

「どうするしいちゃん、三十分ぐらいかかるってよ」

私は犬のメイドさんに聞こえないようにしいちゃんに呟く。

「うーん、三十分他のところへ行った所で入れるわけじゃないし…」

…

三十分後には待ち時間が倍になっているかもしれないしね。

「それじゃあ並ぼうか」

「うん、その方がいいと思うよ」

こうして私たちは行列の一番後ろに並ぶことになった。

「店に入るまでの三十分間何してよかったかねー」

こういうとき携帯ゲーム機とか持っていたらいいちゃんと一緒に狩りに出かけたりできるんだらうけど、あいにく私たちはそういうものは持っていない。自然と持っているパンフレットをペラペラめくって

「この次はどこ行こうか？」

「そうね、これなんか面白そうじゃない？」

と文化祭の話になるのであった。

お店の回転が速かったのか、予定より十分ほど早く私たちはメイド喫茶に入ることができた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

中にいるメイドさんたちが口々に私たちを出迎える。お嬢様って……、私たちはそんなご大層な身分じゃないんだけど、これがメイド喫茶の流儀というものだろうか。

「お帰りなさいませなのニヤ。私澤田浩子がお嬢様たちを席へ案内するニヤ」

猫耳をつけたメイド姿の浩子さんが私としいちゃんを空いている席へと案内する。席は窓際で、窓の外では学生達で結成したロックバンドの演奏を見るお客さんや屋台の間を行き来するお客さんの姿が見える。

「メニューが決まったら私たちを呼んでくださいなのニヤ」

浩子さんはメニューを私たちに渡すとバックヤードへと姿を消した。

「ふんふん、いろんなメニューがあるね……」

メニューには「愛しの」「とか、「胸キュン」「とか、萌え要素というのだろうか、そういう形容詞がついた後に「ハンバーグ」や「オムレツ」と言った食べ物の名前が付いている。

「それじゃあ『大好き！ バスケツトボールおにぎり』を頼もうかな」

「私は『ニヤンニヤンオムライス』を注文しようつと」

兎耳をつけたメイド服の店員さんをよんで、決めたメニューを告げる。「おにぎり」は二個注文した。

「分かりましたピョン。『おにぎり』は二つで五百円、オムライスは四百円になるピョン」

レジとか食券販売機と言うものはないので、このタイミングでお金を払うことになる。ちょうど小銭があったので、私たちはお釣りなしで支払う。

「ありがとうございますピョン。メニューが到着するまで暫くお待ちするピョン」

メニューが来るまで私としいちゃんは窓の向うのロックバンドの演奏を眺めていた。三階だから音は小さくても一応ここまで聞こえる。

その反対側つまり店側からは店員さんの語尾に動物の鳴き声をつけた言葉とお客さんの会話のやりとりが聞こえてくる。

「それじゃあ『愛しのハンバーグ』をください」

「分かりましたミイ」

「『ミイ』って何の動物の鳴き声だろうね、しいちゃん」

「うーん、その辺りは適当にイメージなんじゃない」

「ミイ」と泣いた店員さんの頭に付いている耳を見たけどいまいちどついう動物なのか分からない。

「『ミーアキャット』じゃないのかな？」

しいちゃんが耳を見てぽつりと呟く。

待つこと十分。私としいちゃんの前に注文したメニューが到着した。

「お待たせいたしましたニヤ。『大好き！ バスケッボールおにぎり』と『ニヤンニヤンオムライス』なのニヤ」

「大好き！ バスケッボールおにぎり」はチキンライスを丸い形に握ったおにぎり、「ニヤンニヤンオムライス」は卵の部分にトマトケチャップで猫の絵が描かれている。中身はきつとチキンライ

すだ。

「ところで、浩子さん」

「うん、何か御用かニャお嬢様」

「その首に付いている鈴を撫でてもよいですか？」

さつきから首に付いている鈴を触ってみたかったんだよねー。面接のときは寝てしまったけど、今回はどうなるか見てみたい。

「いいですニャ。どうぞですニャ」

浩子さんは中腰になって私の目の前に鈴を差し出す。

「チャラチャラチャラ……」

「ゴロゴロゴロ……」

鈴の鳴る音と、浩子さんの声が聞こえる。そして……

「くかー」

「わっ、本当に寝た」

浩子さんは中腰の姿勢のまま面接のときのように寝てしまったのだ。バスケットで足腰を鍛えているのか、よく中腰のまま寝ていられるな。

「こらー、浩子寝るんじゃないワン」

寝ている浩子さんに気がついた部長の今泉さんが浩子さんの頭を叩く。

「ニャ？ ニャニャニャ！？ 私は一体どうしていたのニャ」

目覚めた浩子さんは中腰のまま辺りを見回す。どうやら意識は本当に飛んでいたようだ。

「いやー、浩子さんは本当に寝てしまっんですねー」

寝るまでの時間はきつと猫型ロボットに頼りっぱなしの眼鏡少年といい勝負になるんじゃないだろうか。

「そうなんですワン。この前は試合中に寝てしまって、パスするために回したボールが顔に直撃してしまっただワン」

それって特技と言うより病気のレベルなんじゃないのか……？

「浩子の無礼はともかくとして、ご注文をされたお客様にはフリースローのサービスがあるワン。浩子、お願いね」

と、今泉さんは茶色い卓球のボールが十個入った器を私たちの机に置いた。

確か全部入ると手作りチョコレートが貰えるんだったよな。

「ちなみに昨日と今日で全部入れたお客さんはいないニヤ」

つまり私たちが始めてのお客さんになるかもしれない……？ と、気合を入れて投げてみたものの

「ニヤー、二個しか入らなかったのニヤ。残念ですニヤ」

私の記録、二個。私敗れる、まあでもチョコレートといういい夢は見られたな。「あばよ」と言つてこの場を去りたい気分だ。

「それじゃあ私がやってみるよ」

しいちゃんが卓球のボールを右手につまんで構える。ボールが右手から放たれるとそれは浩子さんのポケットに吸い込まれていった。

「ニヤー」

まずは一個目。

「ニヤ、ニヤニヤニヤ！」

二個目。ここまでは私の記録。

しいちゃんはいとも簡単に三個目を入れる。

「ニヤ、ニヤントー！」

そして、四個目。これもまた浩子さんのポケットの中に

「すごいですニヤ、お嬢様はバスケの達人ですニヤ」

浩子さんは後ろを向いて。

「五番テーブルのお嬢様チョコレートリーチですニヤー」

と、叫んだ。店の中から「おお」と歓声上がる。

「お嬢様頑張るだワン」

「頑張つてピョン」

「頑張るだミィ」

いつの間にか私としいちゃんのテーブルの周りにメイド服姿の店員さんが集まってきた。今までパーフェクトを達成したお客さんはいない。初めて出るかもしれないパーフェクトにみんな期待しているのだろう。

五個目のボールをしいちゃんは取り出した。小さく息を吐いて視線をポケットに注いで集中。

十秒間の静寂の後しいちゃんは右手を動かした。ボールは鮮やかな放物線を描いて浩子さんのポケットの中に吸い込まれていった。

「猫ナリー！！」

浩子さんは猫のように丸めた手を前に突き出した。そして

「チョコレートがゲットナリー！」

腰を横に一回転。

「おめでとうございますワン。初めてのパーフェクト達成ですワン」
今泉さんがポケットから福引でよく使われるベルを取り出して鳴らした。

「おめでとうだピョン」

「おめでとうですミィ」

しいちゃんは浩子さんの手作りチョコレートを手に入れた！ 二人の恋愛度が二十アップした。(たぶん)

あ、「大好き！ バスケットボールおにぎり」は普通に美味しかったです。

第五十四話 二日目と三日目の間

二日目もいろいろあったけど、なんとか無事に終了することができた。文化祭も明日を残すのみだ。昨日と同じくしいちゃんは屋台から買った食糧をタッパに詰めてお持ち帰りをしている。

「いやー、文化祭もとうとう残り一日かー」

シャッターが閉まった店の並ぶ商店街を歩きながら私は叫んだ。夜の冷たい空気が口の中に入る。もうすぐ冬だ。

「あと一日だからって油断しちゃダメだよ。最後まで気を抜かないでしゃんとしないと」

右隣を歩くしいちゃんが私を見上げて注意する。

「最終日は二人にやってもらう仕事が多いですからね」

亜由美がパンフレットを開く。

えーと、まずはイラケン選手の公開スパーリングの司会と「ミス文京大学コンテスト」の結果発表。そしてラストを飾る閉会式の司会……。

「その合間に私たちのダンスを見に来てくれるんでしょ」

はるちゃんが後ろから抱き着いてきた。今日もしいちゃんの家。私としいちゃん。はるちゃん。亜由美。そして明石先輩の五人でお泊りだ。私はしいちゃんの家の近くに家があるから泊まる必要は無いんだけど、なんか寂しいじゃない。

「そうだね、はるちゃんのダンスのとき私としいちゃんの仕事は無いからね」

「私と明石先輩の華麗なダンスをみんなに早く見てもらいたいわ。はるちゃんが楽しそうに声を上げる。」

「ところではるちゃんと明石先輩は二人で何を踊るの？」

しいちゃんが私に抱きついたままのはるちゃんを見上げる。

「んふふー、それは内緒よ、しいちゃん」

明石先輩が後ろから抱き着いてきた。もっともその対象はしいち

やんじゃなくて亜由美だ。しいちゃんの後ろから襲い掛かるうものなら何をされるか分かったもんじゃない。まあ後ろに立つただけで殴ってこないところは超A級スナイパーと比べてマシなところだけど、「うわあああつ、明石先輩いきなり何をするんですか！」

まさか自分が抱き疲れると思わなかった亜由美が悲鳴を上げる。その悲鳴を聞いてしまったのだから。自転車に乗ったお巡りさんがやってきてしまった。

「どうしました、何かありました」

お巡りさんはいかにも真面目そうな人だ。本当に何かあったのか心配そうな顔をしている。

「えーと、後ろから……」

セクハラされた、と亜由美が言いそうなところを私が必死に

「いえ、なんでも無いです。ただじゃれているだけです」

と、否定する。

「そうですか、夜も遅いんで気をつけて帰ってください」

お巡りさんは心底ほっとしたような表情を浮かべて白山駅方面へと去っていった。はくさん

「もう、亜由美明石先輩に後ろから抱きつかれたぐらいで大げさな声上げないでよ」

しいちゃんがお巡りさんの後姿を眺めながら亜由美に抗議する。

「だって、どう考えても私に抱きつく場面と違うでしょう……」

亜由美は明石先輩に頼ずりされながら必死の弁解をする。

「亜由美の気持ちも分かるけどさ、一番明石先輩の影響を受けているんですよ。いまさら大声を上げることないじゃん」

亜由美は影響を受けすぎて私に抱きつくぐらいまでしているからな。大声を上げるなど何をいまさらという感じだ。

「いやー、そんな私でも不意を疲れたら驚きますよ。驚いて胸の鼓動が……」

そう言いながら亜由美は胸に手を当てるがその手の動きがどうもいやらしい。

「乳を寄せるな！」

自分の胸のデカさをアピールするなんて胸の無い人にとっての嫌がらせだ。

「亜由美ー、その手の動きは私に対する嫌がらせえー？」

五人の中で一番胸の無い人　明石先輩　が亜由美を締め付ける。

「ち、ちよつと明石先輩、痛いっ、痛いって！」

亜由美が胸を寄せながらもだえる。なんとも厭らしい光景だ。先ほどのお巡りさんが来たら何事だと思っだろう。

団子坂下^{だんござかした}の交差点で一旦しいちゃんたちと別れた私は家へと帰る。家に用意されている夕食をしいちゃんの家へ持っていくためだ。

「ただいまー」

「あ、お姉ちゃんお帰りなさい」

靴を脱いだ私をパジャマ姿の真耶が出迎える。既に食事を終えたのか歯ブラシを口に咥えている。

「お姉ちゃんによも椎名さんのいへにお泊り？」

歯磨きしながら話しているから言葉は変だけど、大方意味は通じる。「お姉ちゃん今日も椎名さんの家にお泊り？」だろう。

「うん、そーだよ」

私は真耶を避けながら居間へと歩く。ちゃぶ台にはお茶碗とお椀の代わりに一つの鍋が蓋を閉めた状態で置かれていた。お母さんは私が今日も泊まることを予想していたのだろう。台所から皿と皿がぶつかる音が聞こえる。

「おかあさーん、この鍋を持っていってもいいのー？」

私は台所に向かって叫んだ。

「いいわよー、今日は麻婆豆腐だから辛さが合わない人がいるかもしれないけどねー」

台所からお母さんの声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ、うちの麻婆豆腐が辛いと思う人なんていないから」

まあ一般の基準で言ったら甘口だろう。

「んふふふ」

台所からお母さんが顔を覗かせて私の顔を見ると笑顔になった。

「お母さん、何笑っているの」

「いや、真知ちゃん顔、いきいきしているなーと思って」

エプロンで手を拭きながらお母さんは目を細める。(もともと目はものすごく細いけどね)

「ええー、そうかなー」

私は自分の頬を抑える。そんな顔しているのかな？

「一年のときは新しい生活と新しい友達が出来て嬉しそうな顔していたけど、今年はそれとは違う、何か楽しいことをやるうとしてい顔になっているわ」

「一年も二年も顔は一緒だよ」

そう簡単に顔って変わるものだろうか。

「いや、違うわね。楽しいだけじゃない、何か責任感を持っている顔になっているわ。文化祭、を作ろうとしている気持ちがあるさえているんでしょ」

「そうかな……」

私は自分の頬をつねってみる。

文化祭を作ると決めたのは四月の中ごろ、それから授業と文化祭の準備をずっと両立させてきた。

時にはタカビーと言い争いになり、同じメンバーの仕事の出来にイライラしたこともあったけど、楽しいこともあった。

夏休みなんか休みなのには毎日大学に通っていた。そんな文化祭も本番を向かえあと一日で終わろうとしている。なんだかちょっと複雑な気持ちだ。やっと終わる、というほっとした気持ちもあれば、もう少し続けていたいという気持ちもある。気持ちってなんて贅沢なんだろう。

複雑な気持ちのまま着替えと麻婆豆腐の鍋を持ってしいちゃんの

家に向かう。チャイムを鳴らすとドアを開けたのはしいちゃんではなく、はるちゃんの声だった。

「あ、かつちゃんちようどよかった。ちょっと大変なことになってるのよ」

はるちゃんが鍋を持っている私の手を引つ張る。

「え、何？ どうしたの」

鍋を落とさないように気をつけながらしいちゃんの家に入る。お風呂場からシャワーの音が聞こえる。誰かシャワーを浴びているのだろう。

しいちゃんの部屋に入ると中にはしいちゃんの下着が床一面に散らばっていた。

「明石先輩や亜由美がしいちゃんの弱点を見つけようとししいちゃんがシャワーに行っている間にこんな風にしてしまったの」

「いやー、しいちゃんのお宝モノを見つければしいちゃんにも抱きつけるかなーと思って」

明石先輩が悪びれもせずに頭を掻く。

「早くしいちゃんが戻る前に片付けないと、大変なことになるわ。

かつちゃん、片付けるの手伝って」

こうして私たちはしいちゃんが戻ってくるまで床一面に散らばっていた下着の類をタンスに戻すのに大童になった。おかげでさっきまでの複雑な気持ちはふっとんでしまった。

第五十五話 決意の門くぐり

文化祭もいよいよ最終日、私としいちゃん、はるちゃん、亜由美そして明石先輩の五人は朝日を浴びながら西郷隆盛と勝海舟が迎える門をくぐった。

この門をくぐるのももう五度目だ。次にこの門を出るときはたぶん文化祭が終わったとき。

中庭ではるちゃんと明石先輩と別れて三人で文化祭室へ向かう。

「文化祭も今日で最後か……」

この部屋に入るのもあと何回かしかないのだろう、と思うとため息が出てしまう。

「かつちゃん、これからつてときにいきなりため息なんてよくないよ」

と、しいちゃんに注意されてしまった。

「かつちゃんは朝からなんか様子がおかしいですね」

亜由美は私の心の変化に気づいていたようだ。

「いやー……ねえ……。文化祭ももうすぐ終わりだと思うと寂しいというかなんというか……」

昨夜しいちゃんの部屋で下着を片付けるといふ騒ぎのために中断された「複雑な気持ち」がまた私の中で蘇っている。

「そう考える気持ちも分かるけど、文化祭はまだ終わっていないんだから。文化祭中は文化祭に真剣にならないと」

しいちゃんはそう言いながら一枚のプリントを私に差し出した。

「うん、これは……」

今日イラケン選手の公開スパーリングが行われる体育館の見取り図だ。プリントの真ん中にはスパーリングを行うリングが。これは昨夜イベント企画チームの男子とボクシング部の男子、そして男子バスケット部を総動員してボクシング部の部室から移動したものである。まあ女子である私たちはその頃すでにしいちゃんの家に行った

けどね。あ、でも電話で状況は聞いていたよ。一応責任者としての役割は果たしたつもり。

「移動は男子にまかせっきりでしたが、イベント企画の責任者として最後の確認をする必要があります」

「そうだね、イラケン選手たちが来るまでまだ時間があるから見ておこつ」

イラケン選手が大学に来るのは三日目のスタートと同じ午前十時、あと一時間半はある。

体育館ではボクシング部の方々がリングやサイドロープの点検を熱心に行っていた。彼らにしてみれば世界チャンピオンと僅かな時間とはいえ練習ができるのである、そりゃあ気合も入るだろう。

「みなさん、お疲れ様です。リングの具合はどうですか」

亜由美がリングの周りを歩きながら（おそらく位置を確認しているのだろう）リングにいる部員に話しかける。

「はい、何度も確認しましたが、どこも異常はありません」

青のロープを手にした部員がはきはきとした声で答える。

「リングはちゃんと移動できたみたいだね」

プリントに書かれたリングと目の前にある本物のリングを見比べる。特におかしな点はなさそう。

「次はイラケン選手たちの楽屋の支度ね」

楽屋は体育館に一番近い空き教室を使うことになっている。私はしいちゃんの後を追った。亜由美はボクシング部員とリングのことについて話しているので置いていく。

「支度と言ってもただ余計な机をどかすだけなんだけどね……」

楽屋となる教室に着くなりしいちゃんは目の前にある机をてきぱきとたたみ、そして教室の端に積んでいく。

私も負けじと手伝うものの、私が一つの机をたたむ間にしいちゃんは二つと片付けてしまう。結果私が片付けた机はたったの一つ。しいちゃんは余計な椅子も積んだ机の隣へと追いやり残されたのは

一つの机と三つの折りたたみ椅子。

「イラケン選手と喜久蔵さんと、ジムの会長さんの分ね」

私はプリントを片手にこの大学に来る人物を確認する。

木久蔵さんとは、イラケン選手の後輩で日本ミドル級チャンピオンの腹打喜久蔵はらうちきくぞうさんのことである。実家はラーメン屋さんだそうだ。「そうだよ、私たちの大学で世界チャンピオンと日本チャンピオンがスパリングするんだよ！ もうすぐ始まるのになんだか信じられない気分だよ」

イラケン選手の大ファンであるしいちゃんは、憧れの視線を一つの椅子に向けた。まるでそこにイラケン選手が座っているかのようだ。

一方の私はというと、たまに（一週間か半月に一回の間隔で）ペルの散歩をするときに谷中霊園でイラケン選手に会っては最近起こったことを話している。憧れの存在と言うよりはたまに会う話友達って感覚だ。最近はお互い忙しくて会っていないけど、夏はいろいろストレスがたまつて愚痴とか言っていたりしたな。

だからしいちゃんの反応に私は新鮮さを感じてしまう。実際に知り合いになつて私ほどの頻度でなくても時々会っていれば自然と慣れるというものだろう、と思うのだがしいちゃんは未だにイラケン選手を憧れの対象として見ている。

「飲み物とか何か用意したほうがいいかな……。かつちゃん、近くコンビニで何か買ってきて。そうね……。糖分の無いお茶を」

「オツケー、しいちゃん。無難に日本茶を買ってくるよ」

しいちゃんの命を受けて私は体育館を出て階段を駆け上がり屋台が並ぶ中庭へと出た。

「もうスタートから値下げしちゃう？」

「まだじゃがいも二箱あるぞー」

「えーと、今までの売り上げから考えると塩味は昼過ぎに無くなりそう！ 塩だれ追加する！？」

文化祭も最終日と言うこともあり、どの屋台も気合が前の二日と違う。そして売れた屋台と売れ残った屋台の違いも出ている。

そんな慌しい屋台を抜けて正門へと続く坂を下る。そして西郷隆盛と勝海舟の描かれた門を抜けて校外へ……。

あれ？ まだ三日目スタートしていないのにもうこの門をくぐってしまった。ひょっとしたら今日はこの門何度もくぐることになるんじゃないのか？

そんな予感をしながら歩道を南に向かう。歩いて数十メートルのところはくさんうえに白山上の交差点への坂があつて、その中腹に目当てのスーパーはある。

しいちゃんには「コンビニ」って言われたけど、スーパーのほうが安いからね。最近何かと物価が上がっていることだし少しでも安いほうを選ばないと。

近くの大学が文化祭をやっているのです、そこのお客さんを目当てにしているのだろうか。スーパー内には「大安売り！」「今日の特価品」と書かれたポップがあちこち見られる。

私はそれらに紹介されている商品の中から日本茶の二リットル入りペットボトルを二本買ひ物カゴの中に入れる。コンビニエンスストアで買うのと六十円の差だ。

日本茶をスーパーの袋に入れて、大学へと戻る。もちろん、西郷隆盛と勝海舟の門をくぐって入る。これで七度目。

「しいちゃん、日本茶買って来たよー」

楽屋に戻った私はどこからか持ってきたのか白いテーブルクロスを机に敷くしいちゃんにスーパーの袋を渡す。

「おー、ありがとうかつちゃん早かったね」

しいちゃんは日本茶を袋から取り出して机の上に置くと首を傾げた。

「かつちゃん、紙コップは買って来た？」

「え、あれ？ 文化祭室に無かつたっけ」

確か文化祭室にあったはずだ。昨日も私はそれを何個も使った。

「文化祭室のコップはちょうど切らしています。今のタイミングで買ってきたほうがいいですね」

体育館の方から亜由美が楽屋へと入ってきた。

「かつちゃん、悪いけど紙コップ買ってきてもらえないかな……」
しいちゃんは申し訳なさそうに私を見上げる。

「分かった。買ってくる」

私は敬礼の姿勢を取ると再びスーパーへと向かった。もちろんあの門をくぐって大学を出る。これで通算八回目。そして紙コップを買って戻って九回目。

「しいちゃん、紙コップ買ってきたよー」

「かつちゃん悪いんだけど……」

「えー、またー？」

こうして私は大学とスーパーの間をあと二往復することになってしまった。近くだからいいけど、郊外の大学だったらきつと大変だろうな。

第五十六話 世界チャンピオンと日本チャンピオン

午前十時、文京大学五号館地下駐車場に一台の青いミニワゴン車が到着した。

その様子を見た私としいちゃんはワゴン車へと駆け寄る。

やがてワゴン車の後部ドアが開き、中から青のフードコートを着た男性が降りてきた。

「イラケン選手、文京大学へようこそいらっしゃいました」

私はその男性に頭を下げる。相手はボクシングミドル級世界チャンピオン、町田イラケン選手だ。

「お迎えありがとう、二人の『まち』さん」

イラケン選手は私としいちゃんを見つめて微笑む。

「い、いいえ。こちらこそあ、ありがとうございます」

しいちゃんは顔を真っ赤にして頭を下げた。

「それじゃあイラケン選手。楽屋まで案内しますのでついて来てください」

地下駐車場のある五号館と楽屋となる一号館の教室へは地下の通路でつながっている。地上にあるのは屋台やお客がひしめく中庭。

ここを世界チャンピオンと日本チャンピオンが通ろうものなら大混乱になるだろう。

しかし、幸いなことに地下の通路には人は私たちイベント企画の関係者しかいない。この通路へと下りる階段には「関係者以外立ち入り禁止」と張り紙を貼ってある。

「え、えーとここを左です」

地図を見ながらしいちゃんが先頭を歩く。地下の通路はあちこちの建物へとつながっているし、その上普段私たちはこの地下通路を歩かないから（車を使う教授たちは歩いているんだらうけど）まるで迷路だ。しかも五号館と一号館は離れているので、ちよっと時間がかかる。

「しいちゃん、そっちへ行くと二号館の図書館に行っちゃうよ」

慣れない道とイラケン選手に会える感動も相まってなしいちゃん間違えた。

「そ、そうだった、左じゃなくて右です。どうもすいません」

と、しいちゃんは右手で頭を小さく叩いて謝る。今イラケン選手と共に案内されている喜久蔵さんがよくやるポーズだ。

地下の迷路を歩くこと五分。幸いモンスターに遭遇することもなく（なんかRPGゲームのダンジョンに迷い込んだ気分になってしまった）楽屋に到着。

「イラケン選手と喜久蔵さんは試合に向けて減量中とのことなので、お茶を用意しました。どうぞ自由に飲んでください」

私がイラケン選手、喜久蔵さん、ジムの会長さんを席につかせると同時にしいちゃんが紙コップにお茶を注ぐ。

「ありがたい、減量中はなるべく汗を出すために水分は必要だからね」

イラケン選手がしいちゃんに微笑むと、注がれるお茶がちよっと乱れた。

もつとも試合が間近になると水分を取ることすら控えるらしい。水も体に入ってしまったえば体重を増やす材料となってしまうからだ。減量は大変だ。

減量と言えば、昔減量に耐え切れないボクサーが夜密かに屋台のラーメンを食べていたところを同僚に発見されて殴られるって漫画があつたな。その同僚はボクシングに熱中するあまり、最後は真っ白に燃え尽きてしまったのだけど。おっと、余計な思考がすぎた。

「どうもすいません」

喜久蔵さんはいつものポーズでお茶を受け取る。

「それじゃ、私体育館の様子見てくるから、しいちゃんは三人の相手よろしくね」

「え、か、かつちゃん。一人にしないでよー」

しいちゃんの願いを背にして私は楽屋を出る。しいちゃんいつま

でもドキマギしないでこれを機会にイラケン選手に慣れておきなさい。

「うわー、すごい人数だなー」

体育館を覗いた私は思わず言葉を漏らした。三日目が始まってまだ十五分しかたっていないのに、体育館は人、人、人で埋め尽くされている。その一角にはカメラやマイクを構えたマスコミの人たち。この人たちは事前に私たちから許可を得ている。その中に坊主頭の三人組がいることを私は見逃さなかった。

「そりゃあ世界チャンピオンと日本チャンピオンが出るんですもん、お客さんはいっぱい来ますよ」

亜由美が人ごみを掻き分けながら私のところへとやってきた。こめかみの辺りにうつすらと汗をかいているのが分かる。

「まあこの文化祭のメインディッシュと言っても過言ではないですよ」

誇らしげに頷く亜由美。言いたいことはわかるが、メインディッシュだと料理の話になるぞ？

「人が多いのは分かるけど、イラケン選手たちリングまで無事に歩けるかな」

「その点は大丈夫です。しっかり通路は広めに確保してありますから。お客さんが手を伸ばしてもイラケン選手たちに触れることはありません」

だからさらに人が多いように感じるんだろうな。

「こっちの準備は整っているんで、かつちゃんは楽屋に行つてそのことを伝えて来て下さい。私はリングでマイクのテストを行いますから」

イラケン選手と喜久蔵さんをリングに呼ぶときは試合のようにリング上から呼び出すことになっている。

「オッケー、それじゃあ楽屋に戻るから。マイクのテストよろしくね」

楽屋に戻った私が見たのは、ぎこちなく動くしいちゃんの姿と困ったような笑顔を見せるイラケン選手だった。しいちゃんは私を見るなり抱き付いてきた。

「かつちゃん、よかったー。来てくれたんだねー」

「しいちゃん、イラケン選手とちゃんとお話できた？」

私はしいちゃんの頭をよしよしと撫でる。

「えーというろできたよー。ボディパンチのこととか、相手のジヤブにどう対抗するかとか……」

おー、緊張していたわりには結構話せていたってことね。

「リングの準備は整いましたので、イラケン選手、喜久蔵さん、お願いします」

「よし、それじゃあ行こうか、椎名さん」

イラケン選手がまだ私に抱きついていているしいちゃんの肩を叩くとしいちゃんが小さく跳ねた。

「は、はい行きましょう」

「私はリングアナの役割があるので、先に行かせてもらいます」

「えー、また私一人なのー？」

しいちゃんの上ずった声を背に私はリングへと走る。

リングの中央に立って私はマイクを持つ。イラケン選手の試合でリングを外側から見てきた私だが、リングの中に入るのはこれが初めてだ。青いロープの向こう側に大勢のお客さんの姿。なんだかイラケン選手と同じ視線に立てたような気がした。

「みなさん、本日はお忙しい中、『文京大学文化祭ボクシングスペシャル』にお集まりいただきありがとうございます。これより選手入場です」

私がかいっぱい叫ぶと、リングの外からは大きな歓声と、フラッシュの光が私に向かって飛んできた。私を写しても何の得にもならないと思うけどな。

「まずはボクシングミドル級日本チャンピオン、腹打喜久蔵選手の入場です」

体育館中にちよつと気の抜ける音楽が流れる。喜久蔵さんの入場曲は、毎週日曜の夕方に放送される大喜利番組のテーマ曲だ。

テーマ曲が流れる中、体育館の入り口から黄色いトランクスを履いた喜久蔵さんが現れた。

「喜久蔵ー！」

「チャンピオン！」

「ラーメン屋ー！」

お客さんから様々な掛け声。最後の「ラーメン屋」は喜久蔵さんの実家がラーメン屋であることを知っているよつぱどコアな人だな。喜久蔵さんは掛け声の一つ一つに「どうもすいません」と頭を下げながら歩く。しかしそれでもちやんと時間は計っているらしく、喜久蔵さんがリングの中央でガッツポーズをとった瞬間に、曲の締めを飾る。「パフッ！」の音が流れた。

「つづきましてボクシングミドル級世界チャンピオン町田イラケン選手の入場です」

体育館中に「やんちゃ將軍江戸日記」のテーマ曲が流れる。昨年、イラケン選手が世界チャンピオンとなったチャウワ・スケベニンゲン戦の直前に、「やんちゃ將軍江戸日記」の主人公「徳川吉宗」役を演じる俳優の町平健まちはたいけんさんから直々に許可を得たものだ。

今日のイラケン選手はそれを意識しているのだろう。灰色地のトランクスの左側には日の丸。右側には徳川家の家紋である葵の紋所が縫われている。

「イラケンー！」

「將軍様ー！」

「ありがたやー！」

お客さんからの掛け声に右手を上げて答えるイラケン選手。最後のありがたやはいまいち分からない。イラケン選手を聖なるお兄さんと勘違いしているのだろうか。

リングへと上がるイラケン選手を見て、今日も鍛えているなとは思った。

「まずはお二人にウォーミングアップとして、我が文京大学ボクシング部から選抜いた精鋭六人と二分間一ラウンドのスパarringsを交互に行ってもらいます」

イラケン選手と喜久蔵さんのスパarringsの前にボクシング部の選手とスパarringsを行ってもらう。時間は通常のスパarringsより一分短い二分。イラケン選手と喜久蔵さんは交代でボクシング部の選手と対戦することになる。

またスパarringsは安全のため双方に頭部を守るヘルメットというものを付ける。パンチに対するクッションの役目を果たすのだ。そしてグローブも試合で使うものよりダメージを受けにくいものになっている。

まずは喜久蔵さんがリングに残った。ボクシング部の選手が緊張しながらリング状へ上がる。喜久蔵さんと比べたらボクシング部の選手はひよろひよろだ。これがプロとアマチュアの差なのだろうか。私はマイクを持って引込んだ。入れ違いに黒と白の縦じまのシャツを着たボクシング部員がリングに入る。レフェリーの人だ。

「ファイト！」

掛け声と共にゴングが鳴り響いた。周囲から「頑張れー！」との声援が飛び出す。

日本チャンピオンとのスパarringsである。緊張しているのかボクシング部員は情けないことに動きがぎこちない。喜久蔵さんが両手を前に構えて近付くとボクシング部員は怯えたように後ろへ下がる。もう、せつかくのチャンスなんだから、もっとファイトしなさいよ！

やっとボクシング部員が右のストレートを放った。まるで恐ろしいものを突き放すかのように。喜久蔵さんは首の動きだけでそれを交わした。

喜久蔵さんはお返しにと左のジャブを放つ。これはボクシング部

員の右のグローブにガードされる。上手くガードできたのか、それとも喜久蔵さんが上手く当てたのか……。

最初のボクシング部員は終始そんな感じで貴重な二分間を費やしてしまった。もったいないなあ。もっと拳を交えないと。

次はイラケン選手の番である。さすがは世界チャンピオン、リングに立っているだけで観客の掛け声の勢いが違う。喜久蔵さんのそれと比べたら二倍……三倍ほど差があるかもしれない。

対戦相手のボクシング部員は何もパンチは出すものの全て交わされ最後の三十秒は防戦一方となってしまう。やはりプロとアマチュアとの差はこうも違うものなのか。

あとの四人も終始こんな感じでそれぞれの二分間を使い切ってしまった。我が文京大学ボクシング部は大丈夫なのだろうか？ ちょっと心配になったぞ。

最後のスパーリングが終わったのを確認した私はマイクを持ってリング上に上がる。

「イラケン選手、喜久蔵選手、そしてボクシング部員のみなさん、どうもお疲れ様でした。ここでボクシング部の方に対戦した感想を伺いたいと思います」

と、私は先ほど戦いを終えたばかりの部員さんにマイクを向けた。「い、いやー、思った以上に世界チャンピオンの気迫というかプレッシャーが辛くて……、何も出来ませんでした。どうもすみません」と、お客さんに向かって頭を下げた。

時間の都合で全員には聞けなかったけど、後の二人も同じような感想を述べていた。実際にリングに立って世界チャンピオンと日本チャンピオンの貫禄を見せつけられたのだ。

この二人のチャンピオンがこの後このリングで対戦を行う。一体どうなるのだろうか、私の胸は高鳴っていた。

第五十七話 世界チャンピオンと日本チャンピオン（二）

「それではこれより本日のメインイベント、世界ミドル級チャンピオン町田イラケン選手と、日本ミドル級チャンピオン腹打喜久蔵選手との公開スパarringを開始いたします」

リング側の実況席にいる私のアナウンスが終ると体育館中に歓声とフラッシュが走り抜けた。ここに集まっているお客さんとマスクミはみんなこのスパarringを見に来たのだ。

「先ほどのボクシング部員のスパarringとは違い三分三ラウンド三ノックダウン制でお送りします」

うちのボクシング部員とのスパarringは力量の差があったから二分に短縮したけど、今度はプロ同士の対戦だから、通常のルールで行う。でも安全のために頭部を守るヘットギアはつけるし、グローブも練習用だ。

しいちゃんがマイク片手にリングの階段を上ってロープをくぐる力を入れすぎたのか、ロープははち切れんばかりに上下に伸びる。その間をくぐってしいちゃんはリングの中央に立つ。

リングの両端にはすでに二人の選手が控えている。しいちゃんはマイクを自分の口元に運んで小さく息を吸うとめいっばい叫んだ。

「青コーナー、十五戦十四勝八KO、日本ミドル級チャンピオン腹打、喜久蔵――！」

「喜久蔵――！」

「ラーメン屋――！」

しいちゃんに呼ばれると喜久蔵さんはいつもの右手を頭につけて「どうもすいません」と周囲に挨拶する。

「赤コーナー、二十二戦二十二勝十四KO、世界ミドル級チャンピオン、町田イラケン――！」

「將軍――！」

「將軍様――！！！」

「ありがたやー！」

また、どこからから「ありがたや」の声。なんとなくうちのお婆ちゃんの声に似ているのは気のせいだろうか。

イラケン選手は右手を高らかと掲げて周囲に挨拶する。

「レフェリーは文京大学ボクシング部主将、かしたのぶあき門田信明君」

私の紹介が終ると、門田主将は緊張の面持ちで頭を下げる。世界チャンピオンと日本チャンピオンのスパarringsに立ち会うんだ。そりゃあ緊張するだろう。

私が門田主将の紹介をしている間にしいちゃんはリングを降り、私と亜由美のいる実況席に戻ってきた。

「いやー、リングアナなんて生まれて初めてだから緊張しちゃったよー」

しいちゃんは頬がちよつと赤くなっている。

リング上では門田主将が二人とルールの確認をしている。もう何度もイラケン選手の試合で見た光景だ。

ルールの確認が終って、二人がそれぞれのコーナーへと戻る。門田主将と私の目が合った。それが合図だ私はマイクを握ると叫んだ。「ラーウンドワン！」

亜由美がゴングを思い切り叩く。

その音とともに歓声が体育館中に鳴り響き、カメラのフラッシュが走る。その中央では二人のチャンピオンがグローブを合わせた。

同じジムに所属しているだけあって互いの得意技は既に知っている。イラケン選手の得意技はまずはボディブローを放ち相手のガードを腹部に向けさせたところを頭部へのラッシュ。逆に喜久蔵さんは時々頭部にジャブを当てて、後はひらすらボディ。左右の連打で何人もの対戦相手をうつ伏せに倒してきた。

だから二人ともボディは打たせまいと右ひじをわき腹に当ててガードしている。二人の距離が徐々に近付き、まずはイラケン選手が左のジャブを一発。これは喜久蔵さんのグローブに吸収される。左手を伸ばしたまま、右拳を喜久蔵さんのボディへ。これは喜久蔵さ

んの右腕にガードされる。それでも喜久蔵さんの顔は痛そうな表情を浮かべている。

「練習用と言つてもイラケン選手のパンチ力は相当なものだからね」
しいちゃんが小声で私に囁く。そりゃあ世界チャンピオンのパンチだからな。

喜久蔵さんも負けじと、左のジャブを返してすかさずイラケン選手のボディヘワンツーパンチを放つ。しかしこれはイラケン選手に三つとも避けられてしまった。最後のパンチを避けると同時に左のジャブを喜久蔵さんの顔に当てる。

一ラウンド目は終始このような感じで三分間が過ぎていった。喜久蔵さんのパンチはほとんどかわされている。

「これが世界チャンピオンと日本チャンピオンの差なの……」
イラケン選手の試合とともに喜久蔵さんの試合も見ている（イラケン選手がメインイベントなら、喜久蔵さんの試合はその前に行われている）私からしてみれば喜久蔵さんは決して弱い選手ではない。事実日本チャンピオンの座を三度防衛しているのだから日本では相当のレベルであろう。

しかし、あくまでも「日本では」であって、世界の舞台に立つたとき、これほどの差が出てしまうのだ。

「なんだラーメン屋、ちよつとはいいいところ見せるやー！」
観客からの野次が飛ぶ。喜久蔵さんはいつもの挨拶をその野次の方向に向ける。

二ラウンド目、その野次に燃えたのか、俄然喜久蔵さんの動きが変わった。

頭部への左のジャブから左右のボディへの連打。喜久蔵さんの十番だ。イラケン選手も時々パンチを受けるようになった。しかし、喜久蔵さんの攻撃が終つたら彼の顔にしっかりとパンチを当てるなど抜け目が無い。

二ラウンド目は喜久蔵さん優勢で終った。

「いいぞー、ラーメン屋ー」

先ほどの野次のお客さんも満足気だ。彼は喜久蔵さんのファンなのだろうか。

しかし、この二ラウンド目は観客を盛り上げさせるためのイラケン選手のサービスだったことを私たちは思い知る。

三ラウンド目、イラケン選手のスピードがそれまでのラウンドよりも倍以上の動きとなった。喜久蔵さんに近付くやボディブローを三連打。ボディを嫌がる喜久蔵さんの顎に左アッパー。喜久蔵さんの体が上に伸びる。

喜久蔵さんが反撃しようとパンチを伸ばすもイラケン選手はそこにはおらず、代わりに右のストレートをもらう。

その動きをカメラのフラッシュが捉える。その中のどれかは明日のスポーツ紙の紙面を飾ることになるのだろう。

「イラケン選手……、今まで手加減していたのかな……」

私の呟きにしいちゃんが答える。

「イラケン選手と喜久蔵さんのスパリングだから、一方的にイラケン選手が勝っていたら喜久蔵さんの練習にならないでしょ」

なるほど、二ラウンドは喜久蔵さんの練習タイムで今はイラケン選手の練習タイムってことね。

面白いほどにイラケン選手のパンチが喜久蔵さんの顔やボディに当たる。しかし、喜久蔵さんはそのたびに両足に力を入れて倒れない。スパリングとはいえマスコミやお客さんに無様な姿は見せたくないのだろう。

しかしイラケン選手の攻撃は容赦がない。踏みとどまった喜久蔵さんのボディに右のストレート、そして右手を伸ばしたまま左のフックを喜久蔵さんの顔へ。捻じ曲がった喜久蔵さんの顎に右のアッパー。ついにこらえ切れずに喜久蔵さんが膝をついた。

「ダウン！」

門田主将がカウントを取る。喜久蔵さんは膝を何度も叩いてよるめきながらもカウント八で立ち上がった。

その後は喜久蔵さんは倒れなかったものの終始イラケン選手のパ

ンチに圧倒されることとなった。

亜由美が終了のゴングを鳴らす。お客さんからの大きな拍手と歓声、そしてマスコミのフラッシュがリングの二人を包んだ。

「二人ともお疲れ様でしたー」

しいちゃんがマイクを持ってリングの中央に上る。ここからはインタビュータイムだ。

「お二人とも、今日のスパリングはどうでしたか？」

まずは喜久蔵さんが答える。

「いやー、やっぱりイラケン先輩は強いっすよ。倒れまいと思ったけど、一回倒れちゃった。どうもすいません」

続いてしいちゃんはイラケン選手にマイクを向ける。

「喜久蔵のボディもなかなかのものでしたよ。気を抜いていたらかなりまずかったかもしれぬ」

そう言いながらイラケン選手はわき腹をさすった。

「今日は我が文京大学のボクシング部とも練習しましたが、お二人から見て、我がボクシング部の実力はどうでした」

喜久蔵さんがリング側に控える部員をちらつと見て答える。

「動きは悪くないですね、もっと鍛えていつかプロのリングで対戦するのを楽しみにしたいです」

「うーん、でもちよつとガードがみんな甘かったかなあ……。パンチの練習だけではなく、防御の練習も力を入れたほうがバランスは良くなると思うよ」

イラケン選手はプロの目で見た回答をしてくれた。

「それではここからはマスコミのみなさんから質問を頂きたいと思えます。質問はボクシングのことに限り、プライベートな質問はしないようお願いします」

よくワイドショーで見のお決まりのセリフだ。ここで「好きな人はいいますか？」と聞かれてもみんな困っちゃうからね。

マスコミの方もその辺をわきまえてか、ボクシングに関する質問が幾つか交わされた。ただ、一人を覗いては。

「えーと、それでは次の方を最後の質問とさせていただきます」

と、しいちゃんと言うや否や坊主頭の三人組が一斉に手を上げた。

「え、えーと、そちらの坊主頭の方、代表してお一人だけ質問をお願いします」

「ありがとうございます。毎朝放送の『日曜にちようジャポン！』ですが「やはりあの番組だったか。芸能人やスポーツ選手の会見場に現れてはおかしの質問をする番組である。」

「イラケン選手は今年の夏スケベニンゲンと対戦しましたが、次は何ニンゲンと対戦したいですか？」

イラケン選手はその質問を聞いて困ったような笑みを見せた。それでも律儀に答える。

「えーと、次は透明人間と対戦したいですね……、これで充分ですか？」

坊主頭の三人組は頭を下げた。

「ありがとうございます。それではうちの番組にひと……」

「えー、それでは質問のほうこれで終了とさせていただきます」

坊主頭の言葉を私は遮った。イラケン選手を「日曜ジャポンメンバー」に入れてなるものか。

こうして我が文京大学文化祭メインイベントの一つ「町田イラケン公開スパーリング」が無事終了した。

第五十八話 私を月まで連れてって

「イラケン選手、喜久蔵さん。今日はどうもお疲れ様でした」
楽屋に戻った二人のボクサーに私としいちゃんは丁寧に頭を下げた。

「おかげで文化祭、大成功ですよ」

私が言うといラケン選手は首を横に振った。

「いや、俺達の出番はここまでだけど、文化祭はまだ午後もあるじゃないか」

そうでした。文化祭はまだ続くんです。私は右手でげんこつを作って軽く頭を叩いた。

イラケン選手はフードコートを身にまとうと

「それじゃあまた駐車場まで案内してもらいましょうかと、立ち上がった。

イラケン選手を見送った後、私としいちゃんは楽屋へと戻って後片付けを始めた。

「お茶結構買ったけどあんまり飲んでもらえなかったね」

今朝私が何度もスーパを往復してお茶を買ったのだがその努力はむくわれなかったようだ。うーんちょっと悔しいな。

「まあ二人とも減量中だからね、水分も控えようと考えているのかもしれない」

しいちゃんは部屋の端に寄せたテーブルを開きながら答える。私はイラケン選手のちょっとこけた頬を思い出した。

「ところで亜由美は何をやっているの？」

そういえば亜由美の姿が見えない。

「ボクシングの部員さんと体育館の後片付けをやっているはずだよ」
また部員さんとリングについて熱く語っているのだろうか。

「まあ楽屋の片付けは女の子二人でできるからね」

私は折りたたまれた椅子を開いてしいちゃんが開いたテーブルにセツトする。

十分もせずに楽屋は元の教室へと戻った。ゴミ袋を持ちながら私たちは忘れ物・落し物がないか確認をする。

「よし、これで部屋の中には何も無いね」

「それじゃあ体育館のほうに向かおうか、かつちゃん」

と、部屋を出たところで亜由美と出くわした。

「片付けお疲れ様です。体育館のほうはもう終りましたよ」

「えっ、もう終わったの!？」

この教室の十倍以上ある広さの体育館に置かれたリングと椅子が全て片付けられたって信じられない速さだ。

「全部が終わったわけではないです。とりあえず今日できる分は終わったということで、続きは明日やりますので二人ともご協力お願いします」

そうだったー、文化祭は今日で終わりだけど、後片付けがまだあるんだった。お客さんなら今日で終わりだけど、運営する私たちにしてみればまだまだ仕事は続くのだ。

「とりあえず、ゴミを持って一旦文化祭室へ行こう」

燃えないゴミが入った袋をちよつと上げて、私はしいちゃんと亜由美に告げた。

文化祭室ではテーブルの上にシチューやら唐揚げやらクレープなどが置かれている。今日のお昼ご飯のつもりだろう。

「『ミス文京大学』の投票は進んでいるのかな？」

すっかり冷めているシチューを味わいながら私は呟く。それにすかさず亜由美が答えた。

「思ったより票が入っているみたいです。投票箱がいっぱいになったところもあるとか」

時間は午後零時、投票の締め切りまであと四時間だ。

「まあそれだけ票が入っているって事は盛り上がっているってこと

だね。主催者の側としては嬉しいことだよ」

「その代わり開票作業は大変だけどね」

う……、しいちゃん嫌なこと言うな。しかし今回の「ミス文京大
学コンテスト」は某超大国と違ってパンチカード方式ではなく記名
方式だから開票結果に不満を持たれて裁判沙汰に持ち込まれること
はないのである。

シチューを食べて、唐揚げを食べて、お茶を飲んでまったりとし
ているとあつと言う間に時間は過ぎていく。

「しいちゃん、今何時ー？」

机に顔を伏せながら私はしいちゃんに尋ねる。

「えーとね、今ちょうど一時かな？」

「はるちゃんたちのダンスショーって何時からだっけ」

「十二時からですね」

亜由美が淡々と答える。

「ちよつ、十二時つてことは……」

すでにダンスショーは始まっていてそれから一時間が経過してい
る。ひよつとしたら終わっているかもしれない。

「やばいよしいちゃん、亜由美。文長ホールに行かないと」

ダンスショーを見逃したことがバレたらはるちゃんと明石先輩に
何をされるか分かったものじゃない。私は空になったシチューの容
器を机の上に置いたまま文化祭室を飛び出した。

「ええと、今からでも入れますか」

五号館地下二階の文長ホールに駆け足でたどり着いた私たちは息
も絶え絶えに受付の方に尋ねる。

「ええ、今からでも入れますが……」

その言葉を聞いた私はしいちゃんと亜由美の手を引っ張って文長
ホールのドアを開けた。

中は超満員で立見の人も何人かいる。そして音楽がかかっておら
ず一面水を打ったような静けさ。舞台には幕が降ろされている。ひ

よつとしてもう終っちゃった？

「もう終っちゃったのかな？」

しいちゃんは不安げにささやく。

「終わったのならお客さんが出るはずですが、まだ座っているところを見ると終ってないのでしょよう」

観客席の一番先まで歩いて空いている席が無いことを確認すると、私たちは通路に座り込んだ。舞台を右端から見ることになる。

亜由美が答えた直後にホーム上にアナウンスの音が響き渡る。

「それでは最後の演目です。今回のダンスショーの主催である明石真奈美、伊井国遙によるデュエットで『Fly Me To The Moon』
フライミートゥザムーン

ああ、良かった二人のダンスが見られて、私はほつと胸を撫で下ろした。舞台の幕が上がるとそこには黒のモーニングを着た男装のはるちゃんと、ピンクのショーガールの衣装を身に纏った明石先輩の姿があつた。その裏には大きな満月が吊り下げられている。

曲が始まると二人は静かに互いの体を抱き寄せた。互いの頬を撫であう。まるで口づけしそなくらいだ。

手を繋いだ二人は時にはくつつき、時には離れてそれぞれの動きを見せる。静かだが、力強さを感じさせる動き。

はるちゃんが明石先輩の腰を抱き寄せると、明石先輩は九十度に体を折れ曲げて手を伸ばし、観客に妖しげな笑顔を見せた。曲自体はそんなに厭らしいものではないのだが、明石先輩の動きにはセクシーさを感じられる。

凜々しい男装のはるちゃんの動きとセクシーな明石先輩の動きが私たちの目を釘付けにする。

そして曲が最後に近づくと、はるちゃんは舞台の中央に、明石先輩は舞台の端立ちをはるちゃんめがけて走り出した。

はるちゃんが両手を水をすくうような仕草で明石先輩に差し出すと明石先輩の右足はその上に乗った。

瞬間はるちゃんの両手が高く上がる。その勢いで明石先輩の体は

高く空中へと跳ね上がり吊るされた満月の上で一回転した。まさに「Fly Me To The Moon」。

明石先輩は両手を綺麗にそろえて体操選手のように静かに舞台上に着地した。その姿を見た観客からは拍手と喝采が沸き起こった。私たちもその中の一人だった。

そして元気のいいポップミュージックが流れると、舞台の袖から様々な衣装を身に纏ったダンスサークルのメンバーが飛び出した。中には女子高生の姿をしたり、野球選手の姿をしたり、浅野先輩に至ってはシスターの格好。一体何を踊ったのか気になるけど、私たちは見ていないので分からない。うーん、残念。

「みなさん、本日は私たちのショーを見てくださってありがとうございます」

明石先輩がマイクを片手に舞台のお客さんに向かって叫ぶ。

はるちゃんや明石先輩、浅野先輩の顔にはやり遂げたという表情が見えた。

私たちもいずれ三人のような顔をするのだろうか、それにはまだ時間が残っているのであった。

第五十九話 そろそろフィナーレ

はるちゃんたちのダンスが終わり、私としいちゃんと亜由美は楽屋へと向かった。

「はるちゃん、明石先輩お疲れ様ー」

楽屋の扉を開けると真っ先に私に向かってぶつかってきた人物。明石先輩だ。

「うわーい、かつちゃんだ。かつちゃんだー」

抱きつかれた私の目の前に開かれた明石先輩の胸元。しかし残念なことに明石先輩は胸が小さいのでセクシーさは感じられない。だけどほんのりと汗のにおいを感じる。

「三人ともダンスを見てきてくれたんだー」

明石先輩の肩越しにはるちゃんの姿。赤いＴシャツが汗でびっしより濡れている。

「仕事があつて最後のしか見られなかったけど二人ともすごい踊りだったよ」

私の脳裏には満月に照らされながら空中を一回転した明石先輩の姿が浮かんでいる。あれだけの高さを飛べるなんてよほどの練習をつんだのだろう。

「あー、あの最後の私たちの踊りね。すごいやらしかったでしょう」

明石先輩が体をくねらせそして胸を押し付ける。しかし何度も言うけど気の毒なことにその胸にポリウムは感じられないのでそんなに息苦しくは無い。

「お客さんがいなくなったら本当にはるちゃんにキスしようと思っていたんだから」

女子高生アンド女子大生好きの明石先輩なら本当にやりかねない。「練習では実際何度もされたんだけど……。あたしのファーストキスが……」

はるちゃんが口を押さえて悲しげな表情を見せる。ああ、実際にやってしまったんだな。

明石先輩は私から離れるとはるちゃんに歩み寄り、あごをつかんで大丈夫だって、女の子同士ならノーカウントだから」とキスをした。

「え、え、ええっ!!」

私だけではなく、楽屋にいる他の方からも驚きの声が出る。浅野先輩だけでもう慣れてしまったのかやれやれと半ば呆れた表情を見せている。

「ぶはあっ、というわけで私明石真奈美と伊井国遥は本日結婚します」

唇を離れた明石先輩ははるちゃんの右肩を抱いて楽屋中に宣言した。

「ち、ちよつと明石先輩？」

「あの二人きりの練習を重ねて私たちの恋は芽生えたのよ」

戸惑うはるちゃん、暴走する明石先輩。誰か止めないと

「はいストップ、そこまでー」

浅野先輩が明石先輩の顔を抑えてはるちゃんから引き離れた。

「真奈美何やっているの、本番が終わって気持ちが高揚しているからっていくらなんでもやりすぎよ」

そうだよな、明石先輩たちは一仕事終えたんだもんな、テンションが高くなって当然だ。

「でもせんぱーい、遥が本当に頑張ったから今日のダンスがあったわけで、そのお礼に明石の苗字を……」

はるちゃんが明石先輩に嫁入りする設定なのか。

「わかったから、それは後で話しましょう」

浅野先輩の指に力が入る。

「あ、浅野先輩、痛い痛いって」

手足をジタバタさせる明石先輩は置いて私たちははるちゃんへ歩み寄る。

「今日のはるちゃんほんとにかっこよかったよ」

「そう、あ……ありがとう」

手を腰に当てていつものポーズを見せてはいるものの、照れているのか顔が少し赤くなっている。

「ほんとだよー、明石先輩じゃないけど私も結婚したいなーって思っちゃった」

「しいちゃんまで……そんなこと言わないでよ」

しいちゃんとはるちゃんが結婚したら絶対はるちゃんが夫でしいちゃんが奥さんだろうな。

「私も、はるちゃんの麗しき男装の姿に胸が……」

「亜由美、乳を寄せるな!」

私は亜由美の手を掴む。

「私たちのダンスは終わったけど、あとはかっちゃんたちだね。あと数時間しかないけど頑張って!」

はるちゃんが右こぶしを勢いよく突き出した。

「うん、最後まで頑張るよ!」

私としいちゃんとはるちゃん、亜由美は互いに右のこぶしを合わせた。

ここ一号館のとある教室では「ミス文京大学コンテスト」の開票作業が行われている。

開票作業は私としいちゃんと亜由美が中心にイベント企画チームのメンバーが責任を持って行っている。

文化祭が開催された三日間はすべて晴天だったこともありお客さんの入りは多く自然と「ミス文京大学」への投票数も多くなっている。

その中からまず無効票を除き、残った有効票で誰に何票入ったか振り分ける。それらの作業は全部手作業だ。

「……」

私は無効票の一つを見つけたため息をつく。

『唐揚げが美味しかったです』

これは感想を書くアンケートじゃないって。

『うちのポチが行方不明になってしまいました』

町内の問題は大学に持ち込まず町内で解決してください。

『川 憲伸』

野球選手？ オールスターゲームのファン投票じゃないんだから。

『小 純一郎』

……。本当の選挙になってしまった……。この元総理大臣は神奈川の人で東京じゃないでしょう。

ふざけて書いているのかそれとも本気で書いているのか分からない無効票を次々と除いていく。私が担当する票のうち四分の一が無効票になってしまった。

「多くの票が集まったのはいいけどこんなに無効票がたんじゃ、意味が無いわ」

私は無効票が積まれたテーブルを見てまたため息をついた。

「まあ本当の選挙にもこういった無効票が結構出ていると聞きますし、これはしょうがないんじゃないですか」

亜由美が無効票の山をさらに高くしていく。

「それはそうだけどさ……。企画した側としてはみんな関心がないのかなーと思って」

「この国の国民の性癖なんじゃないですかね」

亜由美が突然社会風刺をしだした。亜由美は時々スケールのかいことを言うな。

票の集計が終わり「ミス文京大学」が誰になるか決定した。これからその結果を中庭のステージでお客さんに伝えることになる。

「よし、それじゃあ結果発表といくかいちゃん」

結果の紙を持った私にしいちゃんが笑顔で答える。

「そうだね、この結果発表が終わったらいよいよファイナルだね」「しいちゃんのその言葉にステージへ向かおうとした私の足が止まった。」

そうか、文化祭ももうすぐ終わりか……。
時刻は午後五時半を過ぎたところ。文化祭の終了まであと一時間
を切っている。

最終話 二年目の御徒町

中庭に出ると各サークルの屋台に明暗がはつきりと出ていた。すでに今日の分を全て売りつくして後片付けしているところがあれば、未だ売れ残りが多く。

「焼き鳥十本百五十円」

と、採算の取れない価格で販売しているところもある。もうここまで来たら採算を取るより目の前の具材を片付けたい一心なのだろう。

「ワツフル今なら二枚五十円ですよー！」

そんな売り子の悲鳴を耳にしながら私としいちゃん、亜由美はステージの袖に向かう。三日間にわたって開かれていた文化祭がいよいよ終わろうとしているのだ。

「いよいよ文化祭モラストですね」

亜由美が私の後ろから声をかける。

「文化祭を閉めるのはお二人ですからビシッと決めてくださいよ」

「分かっているって亜由美。私たちタウンガールズに任せなさい」

私は亜由美の方を向いて右の親指を立てる。

ステージ上ではデスメタルバンドのボーカルが大きな叫び声を上げている。顔は真っ白で両目から血の涙を表しているのか赤黒い筋がひかれている。メイクするのにかかなりの時間がかかっただろうな。袖からバンドの曲を聞きながら私の脳裏に今までの出来事が浮かび上がってきた。

文化祭実行委員に参加するって決めたときのこと

メンバー募集で声を囁らしたこと

メンバーのやる気の無さに不満を漏らしてタカビーに怒られたこと

銭湯に現れた謎の黒カビと謎の正義のヒロイン

自らのサークルの企画を個性豊かにプレゼンしたサークルの方々

直前になって連泊したしいちゃんの家の天井

一部関係ないのも混じっているような気がするけど、それらの集大成である文化祭が終わろうとしている。

「かつちゃん、かつちゃん」

しいちゃんに左肩を叩かれて私は我にかえる。

「バンドの演奏終わったよ」

ステージでは演奏を終えたボーカリストが放送禁止用語（具体的にはとてもじゃないが言えたものじゃない）を叫びながら私たちの袖へと歩いている。そのボーカリストは、お客さんの視界から自分の姿が見えなくなったと確信すると

「あ、どうもお疲れ様でしたー」

と、いきなり低姿勢になり頭を私たちスタッフの一人ひとりに頭を下げた。舞台上に立つと性格が豹変するんだな。

「あと卑猥な言葉いっぱい叫んでくださいねでした」

謝るくらいなら最初から叫ばないでほしいな。

その間にステージでは楽器が片付けられてエンディングへの準備が始まっている。「ミス文京大学いよいよ決定！」の看板がステージ上に掲げられる。

そしてステージに並ぶ「ミス文京大学」候補者の方々。全ての準備は整った。

「それじゃあ行くよ、かつちゃん」

「よし、行こうかしいちゃん」

「私は袖で応援していますよー」

ステージの上に立つと初日よりもお客さんの入りは多く感じられる。その雰囲気になんか負けまいと私は大声を張り上げた。

「どうもー、かつちゃんでーす」

「しいちやんでーす」

「二人合わせてタウングールズでーす」

この「タウングールズ」を三日間で何度叫んだことだろうか。毎度のことながらしいちやんがソプラノで私がアルトである。

「まー、この通り三日間にわたり文化祭やっていたわけですが、みなさん参加してどうでしたかー？」

別に何か回答を期待しているわけじゃないけどマイクをお客さんのほうに向けてみる。ところどころから「楽しかったー」「サイコーです」の声。うん、なかなかいい反応だ。

「えー、『東京とともに六十年』というテーマで開催されたこの文化祭もいよいよ最後のときが迫ってきました」

ところどころから「えー」「うそー？」と声が聞こえる。反応いいな。

「最後を飾るのはもちろんこの企画。『ミス文京大学コンテスト』の結果発表です」

しいちやんが声を張り上げると大きな拍手と歓声がステージを囲んだ。

「この三日間で最も投票の多かった候補者が『ミス文京大学』に選ばれます。それでは、いよいよ発表です」

ステージの両端にあるスピーカーから恒例のドラムロールが流れる。照明が候補者それぞれを流れるように照らしていく。

ドラムの音が止まり、ステージが闇に包まれる。

「発表します！」

照明の光が私に真っ直ぐに照らされる。

「今年の『ミス文京大学』は……。エントリーナンバー二番、澤田浩子さんです！ おめでとーございまーす！」

女子バスケット部員澤田浩子さんにスポットが当たる。

「え、私？ わたしなのニヤ？」

メイド喫茶の格好のまままでステージに来た浩子さんが猫言葉を使

いながらステージの中央へと歩く。その間に私の手に優勝トロフィーが渡る。

「『ミス文京大学』の澤田浩子さんには優勝トロフィーと、副賞として『東京タワーホテル』のペア宿泊券が送られます」

トロフィーが私から浩子さんに移った瞬間、ステージの両端から大きな爆発音が轟いた。

大声を上げたいところだけど、司会なのでここで慌てるわけにはいかない。

やがて空から金色の紙ふぶきが降ってきた。さっきの爆発はこれだったのか。

「みなさん、『ミス文京大学』が決定したところで、今年の文京大学文化祭は終了です」

しいちゃんの口の中に紙ふぶきが一枚入るのを私は見逃さなかった。

「みなさん、三日間お疲れ様でしたー」

私の叫び声とともに二度目の爆発音。ステージや中庭に金銀の紙ふぶきが舞う。そのきらめきを私はお客さんに手を振りながらしばし眺めた。

袖に戻ると亜由美やタカビー、かわちゃんとけーまが私としいちゃんを迎えていた。

「お疲れ様、みんな」

私が微笑むとみんなそれぞれの笑顔で「お疲れ」と言いあう。かわちゃんに至っては目にうっすらと涙を浮かべている。

「まだ後片付けがあるけど、文化祭はこれでひとまず終わりだ」

タカビーがそう言うのと両隣にいる亜由美とかわちゃんの肩に手をかけた。

「はい、みんな肩組んで、円陣作るぞー」

「やっぱり締めと言えばこれですね」

私たち七人は互いに肩を組み一つの円になる。

「文京大学ぶんかさーい」

タカビーが大声をあげ、私たちがそれに続いて大きく叫んだ。

「お疲れ様でしたー!!!」

こうして私たちの文化祭が終わった。

「そして集合場所はここですか」

それから三週間後。文化祭の後片付けも全て終わり、私としていちゃんは上野駅から南へ歩いて数分の有名デパートの前に立っていた。これから実行委員のみんなとはるちゃん、明石先輩、浅野先輩の十人で米沢にあるしいちゃんの実家へお泊りに行く。集合場所は上野駅うえのに決まっているのになぜか私としいちゃんとはるちゃんは先にここに集合することになった。そう、一年前と同じ場所に。

「まあ、かつちゃんと言ったらここじゃない。名前に対するコンプレックスも無くなったことだし、堂々と行けるでしょ」

しいちゃんが私を見上げて微笑むと、上野駅方面からはるちゃんが右手を大きく振りながら歩いてきた。

「おまたせー、ちよつと遅れちゃったね」

「大丈夫だよ、そんなに待っていないから」

しいちゃんがるちゃんの肩を軽く叩く。

「それじゃあ例の駅へと向かいますか」

一年前はしいちゃんとはるちゃんに強引に引きずられて行った駅へ今年が私が二人を導く。

御徒町駅おかちまちは何の変哲も無い普通の山手線やまのてと京浜東北線の駅だ。ホームの様子もそこから見る風景も一年前とほとんど変わっていない。しかしかつちゃんたちが文化祭を作るって聞いたときはほんとに驚いたよ」

はるちゃんが電光掲示板を眺めながら頭の後ろに手を組む。

「そうだね、できたらいいなとは思っていたけどね、かつちゃん」

「そうだよ、私なんて最初は作るうとすら思っていなかったんだか

「ら

「それじゃあ、来年も作って見る!？」

「はるちゃんがいいたずらっ子の笑みで私としいちゃんを見た。

「えー、来年も……?」

「そうだなー……?」

まんざらでもない雰囲気をかもし出す私たちの横を緑のラインが入った電車が入ってきた。

「おえとご購入ありがとうございます!。御徒町ー御徒町です。都営大とえいお江戸線はお乗換えです。」

最終話 二年目の御徒町（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。

御徒真知さんの大学生活二年目の物語はこれにて終了です。

気がつけば一年と一ヶ月と大河ドラマより長い連載となっていました。

前作とは違い更新のペースを週一日曜日と決めて書いていましたが、後半は何度それを破ろうと思ったことがありません。

しかし、こうして途切れることなく書き続けられてのも読んでいただいている読者様がいたからのことだと思います。本当にありがとうございます。

また別の作品でお会いできたらと思います。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2507c/>

御徒町フィーバー2ndStation

2010年10月8日12時03分発行